日本語速記法の成り立ちと類型
～過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究～（二）

兼子次生[1], 菅原登[2], 下谷政弘[3]

第二編　日本における速記方式の成立と発展

Ⅰ 日本語速記法の草創期　～複画派の流れ～

１．はじめに

フランス国会速記者のナバール Albert Navarre は, 世界の速記事情を調べた「ステノグラフィ」 Stenographie 1909 年版に, ハースフェルト Dr. Hersfeld の情報として「日本の速記方式書の筆者, 清澤與十は, 大学南校教授の源（田鎖は源姓を名乗っていた）綱紀が 1879 年に速記を紹介した」と書いている。また,「最初の速記教本は, 黒岩大と日置益（黒岩と日置による方式名を以下, 黒岩式と呼ぶ）が 1883 年 7 月に出版したが, その速記法は成功しなかった」と, マインバーク Meinberg の話を伝えている。これが日本の速記が世界に紹介された記事の最も古い時期のものであった。

日本で速記法が登場する社会環境として, 明治 14 年の政変が, 田鎖, 黒岩両式の開発競争の引き金役を果たした。国費 1, 400 万円を投じた北海道開拓使（長官黒田清隆）の資産を無利息, 30 年賦, 金額 39 万円で関西貿易商会（代表五代友厚）へ払い下げる案件が, 天皇の勅裁を得て決定したと, 新聞にスクープされた。事態収拾をはかった参議, 伊藤博文が, 直ちに大隈重信参議を政府から追放し, 1890 年に帝国議会を開設する詔勅を得て事態をおさめようとした。

欧米先進国への仲間入りを目指した日本は議会制を採り入れることが課題の一つであったが, 降って湧いた国会開設の決定であった。しかし欧米の議会を見るに, 発言記録の作成が課題であり, 10 年ほど前から日本語速記法の開発に取り組んでいた田鎖には朗報であった。彼の試みは, 黒岩ら英語力を備えたジャーナリストに, 当時知られていた。黒岩はのちに外交官となる日置益と組んで訳補を担当し, 校訂を神田乃武とする執筆体制を整えて, リンズレー式の教本からの翻案版を出版する計画を申請していたが, 1882 年 9 月 16 日版権免許がおりた。田鎖は第一回の講習会を 10 月 28 日に開く旨の記事を時事新報に投稿し, 黒岩式本免許報道の 3 日後に掲載された。

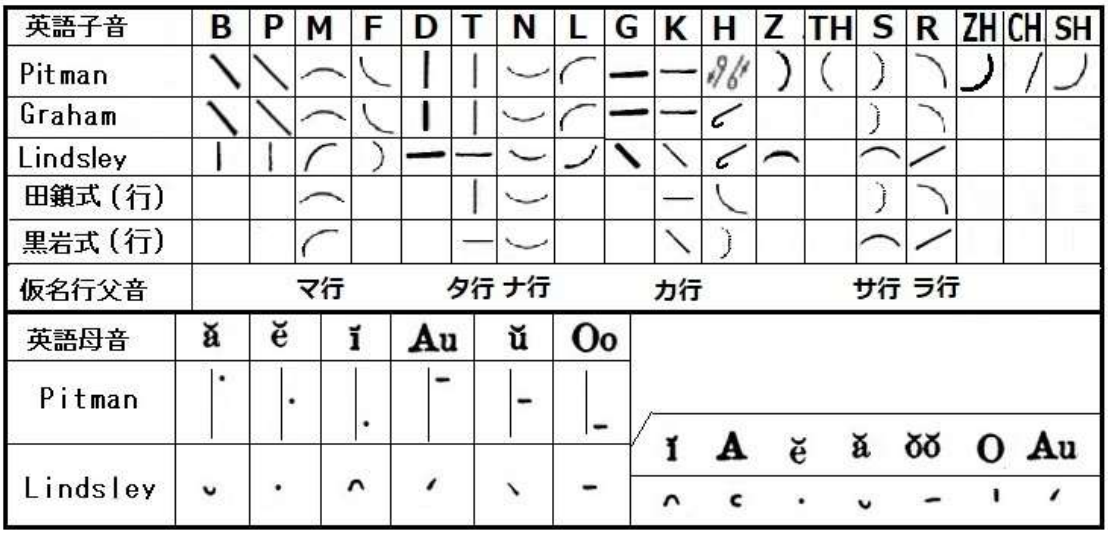
黒岩らの「傍聴筆記新法」は翌 1883 年 7 月に出版された。その２か月前の 5 月 5 日には, 田鎖の第 1 回講習会の卒業証書授与式が行われた。一年半ほどたった 1884 年 12 月, 田鎖が指導した符号（田鎖式初版）に近い内容の速記教本「傍聴筆記新法獨學全」が清澤與十によって上市された。ただ, 清澤は第 1 回講習会の受講名簿に名前がなく, 田鎖との関係が不明である。田鎖が関わる最初の単行本は丸山平次郎に口述して編集された 1885 年 5 月の「日本傍聴筆記法」であった。冒頭の記事の文脈から, 清澤がハースフェルトに会って, 田鎖の功績を話したと受け取れる。ただ, 1879 年に田鎖が速記を完成したのは事実ではなく, 10 年

がかりで開発する途中の情報を取り上げたことになる。

日本語の速記法は,田鎖式が若林玵蔵,林茂淳ら,優れた教え子に恵まれて実使用が推進されたのに比し,黒岩式は出版したにとどまり,実用化に至らなかった。これが,速記の成立を田鎖式,初の速記書出版を黒岩式とする理由の一つである。しかし，初期の速記理論は両式とも未完成であった。

本稿では日本語を対象として考案,改良された速記方式を取り上げ,伝来した速記文化が多様化しながら日本語へ適用される経過をみていくことにする。手書き速記法は符号式がまず実用化され,学びやすさを求めて文字の一部を用いる文字式へと広がっていった。符号式速記理論は,最初に受け入れられた幾何派方式が基礎符号を子音と母音の組み合わせる複画式として成立し,次いで，ア列，オ列で一画の線条で音節を表す基礎符号が登場する折衷式へと展開し,さらに一音節一画の単画式へと発達した。一方，遅れながらカタカナ,ひらがなの一部を用いる仮名速記が速記大衆化を進めてきたという歴史的な経過にほぼ沿ってこれから論を進めたい。

２.田鎖式の講習会と黒岩らの速記書出版



【注】リンズレー式母音 ˘ ă,in ask,at. . ĕ, in ebb. ^ ĭ, in it ;y in duty.
˘ ă, in ask, at. ˋ ŭ in us, fur hut. – ŏŏ,oo; in foot, u in full. · ĕ, in ebb.

図2-1　初期日本語速記法と母式の影響　兼子次生作成

田鎖が第１回傍聴筆記法講習会において使用した資料が残されていないため,受講した林茂淳が第 1 回講習会時の符号として「速記術大要全」1885.4.15 に残した符号を田鎖式初版の基礎符号とする武部良明説をとることにする。

図 2-1 では,英文速記法の基礎符号を上側の英語子音欄に書いた符号で示し,日本語速記法の各行の基礎符号は仮名行父音欄にある各行の画線に母音符号を連綴して生成することを示している。ここでは,ピットマン式は 1855 年版,グレイアム式は 1858 年版を用いている。田鎖式初版,黒岩式ともに,カ行を［K］,サ行を［S］,タ行を［T］,ナ行を［N］,ハ行を［F］,マ行を［M］,ラ行を［R］からそれぞれ生成している。図表では，簡便に見るため,日本語速記法の比較に用いられる 44 基礎符号を取り上げた。

西来路秀男によれば，手書き速記法には符号式,文字式があり,符号式速記法で用いる表音記号は符号と呼ぶ。また,文字式には文字由来の基礎符号があるが,符号式とともに基礎符号と呼ぶことにする。速記符号は創案者 Author のオリジナリティをほぼ忠実に反映すると見て,可能な限り方式書に掲載された筆跡をスキャンして用いることを原則とする。

田鎖式初版では,これら基礎符号を「記号」と呼び,総数は単記号 45,単記号に 1 点加えた複記号 140,合計 185 を設けて,これらを音種によって清音 50,濁音 20,拗音 70,鼻音 5,半濁音 5,濁拗音 25,鼻拗音 5,半濁拗音 5 に分類している。符号の大きさについて，田鎖式初版は清澤版によると，母音は 5 ミリ，父音は 10～12 ミリとされる。

図 2-2 に見るように，黒岩式では,母音の「アイウエオ」に短体記号を配当し,父音の「クスツヌフムユルウ」に長体符号を配当して「正音記号」を 46 個つくり,ほかに「変音

図 2-2　田鎖式初版と黒岩式の基礎符号比較表　兼子次生作成

記号」と名づけて,濁音 20,清拗音 10,濁拗音 16,半濁拗音 3,半濁音 5 の記号を定めている。黒岩版では符号の大きさを母音は父音の五分の一，1.5 ミリ程度，父音は 4.8 ミリ程とすると書いている。

速記の書き取りでは,発話音声を聞きながら,基礎符号を連ねて単語,文節,定型句,文節,文を綴っていく。その筆記法は英文速記を参考にして,日本語に適するように工夫したが,図 2－3 に,林は初歩的なレベルの筆記法を比較して残している。

田鎖はグレイアム式英文速記法の体系を参照して音節文字を基盤とする日本語への適用を試みたが,基礎符号の生成法とその連綴に苦慮した。結局は英文速記の音素を単位とす

る表音主義を採用し,幾何派の限られたストローク(線分符号)とサイン(フック,短線)を日本語へ配分して,一期の複画派が成熟していくことになる。視覚記号資源の配分において田鎖式,黒岩式ともに子音にストロークを充て,母音にサインを用いる戦略を立てた。仮名に対応する音節符号を生成するために「ストローク＋サインの構成原則」を定め,子音に母音を従属する形式でつくるようにした。これは黒岩式も半円,短線を用いていた点で共通性があるが,田鎖は父音と呼ぶア列では母音サインなしとし,子音と呼ぶ残りの行ではイ列に小円を充て,ウ,エ,オ3列には異方向の短線を続けてつくり出した。

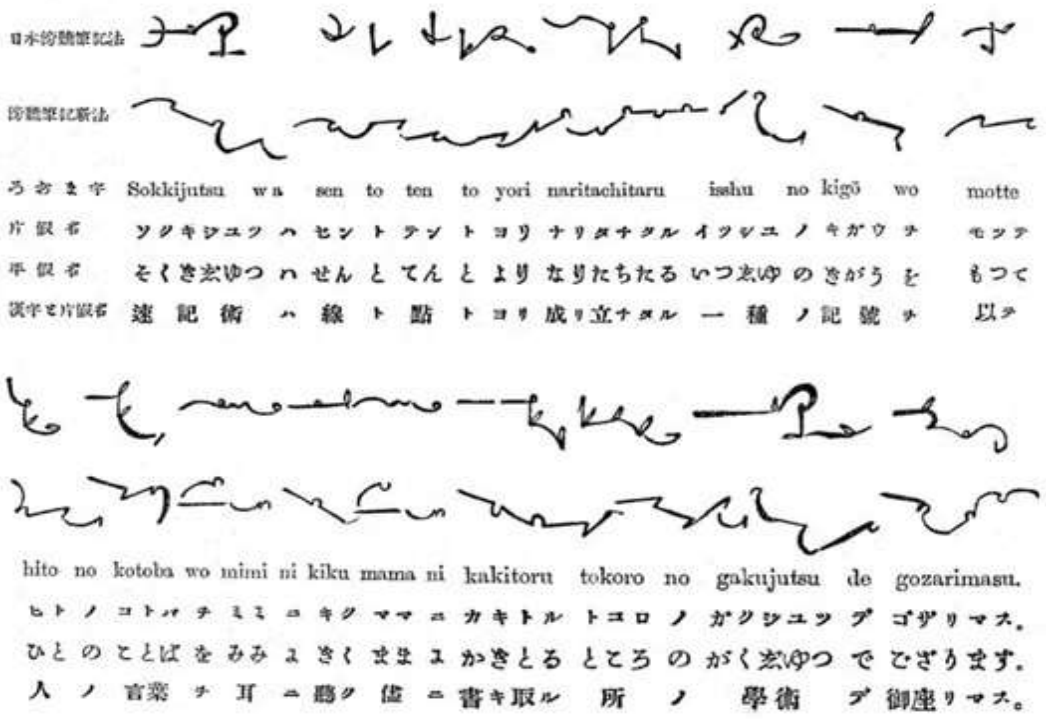


図 2-3 田鎖式初版と黒岩式の比較文例 「速記術大要」林茂淳 1885.4.15 p8-9

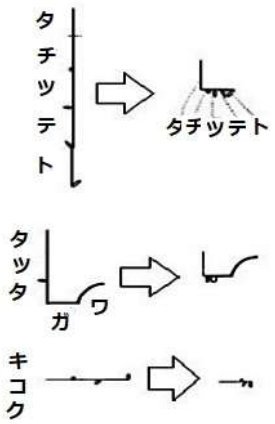


図2-4 同行縮字法の萌芽

図 2-2 に示した田鎖式初版の符号は独立形で,言葉を筆記する際には続け書きするとし,その際,直線の母音部分はひも書きする連綴形とした。一方,黒岩式はリンズレー式のように母音を半円で続け書きとした。田鎖が日本語を音どおり綴るときの符号の崩れ,速書性の点で効果を挙げることが実証され,結果として英文速記の綴り方は日本語の筆記には適さなかった。

林は,両式の筆記符号を速記術大要全の 8～10 ページに紹介している。ただ,符号について, 林の論評はない。

黒岩式と丸山版の速記理論を比較すると,黒岩式がほぼ基礎

符号について述べるだけにとどまるのに対して,丸山版は日本語の特性を分析して緻密な符号の組み立てているほか,符号体系の理論において加点法を挙げるなど音声と記号両面にわたり進んだ研究を行っている。

図 2-4 のように, 速記符号の研究面で,1885 年の丸山版は「畳呼」という名称で同行縮記法を挙げている。/カキクケコ/という文字列の場合,ア行畳字と称してカ行の短線にひも書きの母音をつける工夫である。また,加点助詞,動詞加点法を説明して,速記文法面で研究のあとが見られ,品詞を対象にして,名詞,形容詞,副詞の詞尾のテーマで言葉の尾音の省画をねらった筆記法を設けるなど,田鎖は日本語の特性を解析して談話発話をとらえるための符号研究を進めていた。

３．速記書,清澤版と丸山版の比較

冒頭のハースフェルトの文に清澤の名を挙げたが,田鎖系で最も早く現れたと見られるのは清澤版であった。しかし,清澤と田鎖の関係が不詳のため,その検証が残されている。

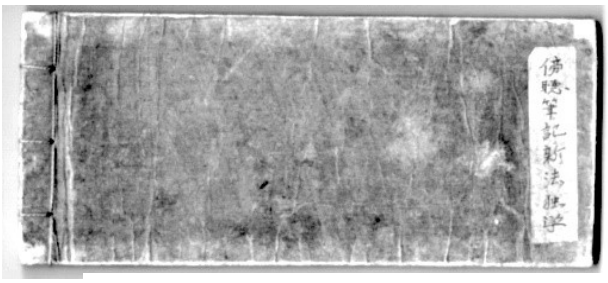


図 2-5　清澤版「傍聽筆記新法獨學全」表紙

田鎖口述と書かれて 1885 年に出版された丸山版と,清澤版を取り上げて,類似点,相違点を比較しながら,田鎖初版と清澤版の関係をうかがいたい。

清澤著「傍聽筆記新法獨學全」(図 2-5)は,1884 年 2 月出版された。序,凡例は日本語の書字習慣と逆の左起右進縦書きで,横書きの本文は左起右進である。装丁は伝統的な和本綴じで,横長のポケッタブルなサイズであった。

一方,丸山著「ことば乃寫眞法」(図 2-6)は 1885 年 11 月に発行され,しゃれたネーミングと装丁を施して,カラフルな表紙デザインの書籍であった。書字方向は伝統的な日本の書籍のように縦書きで,当時海賊版が出てよく売れたと伝えられている。書中には源綱紀氏改良新法,大阪森玉林堂蔵版,英学独習会,駸々堂本店発兌所と表記されている。

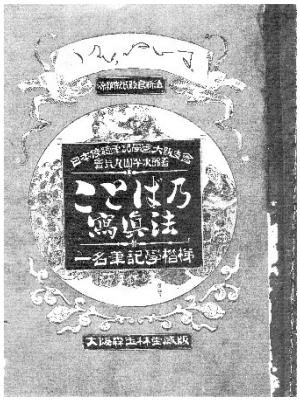


図 2-6　丸山版「ことば乃寫眞法」表紙

清澤版の構成を見ると,符号源素,正音変音両符号,綴符法,略字法,数字を用いる事,句読法,長音を用ゆる事,同音連用の事,反音を用いる事,逼音を用ゆる事,綴符,後詞を用ゆる事,代名詞を用ゆる事,イロハ別け略符となっている。

丸山版では,記号の組織及び詳解,記号の綴り方,長く呼ぶ音の書き方,反て呼ぶ音の書き方,詰て呼ぶ音の書き方,畳て呼ぶ音の書き方及び用い方,詞尾の略記,語格の略記（てにをは）,数字の略記,略語,略文記号,加点法（語格及働詞）,節譜,句読法,感詞の

標, 記号連綴の例という構成になっている。

清澤版の基礎符号は, 日本語の旧仮名遣いを前提にして, 正円幾何派の符号を割り出す源素から, 母音, 父音, 両者から生成した子音と呼ぶ音節符号合計 130 種の説明がある。ただ, ○印を付したヤ行の［イ］, ［ヰ］, ワ行の［イ］, ［于］, ［ヱ］, ［ヲ］の基礎符号は, 実際には用いないと書いている。

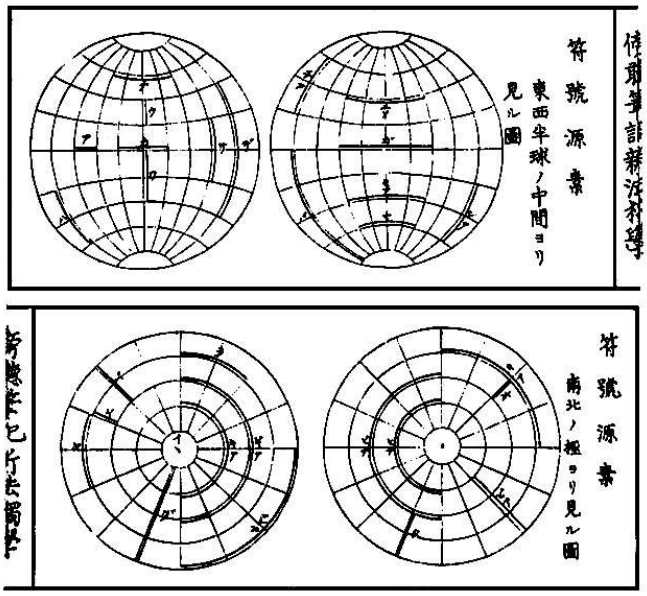


図2-7 幾何派の符号生成源図例

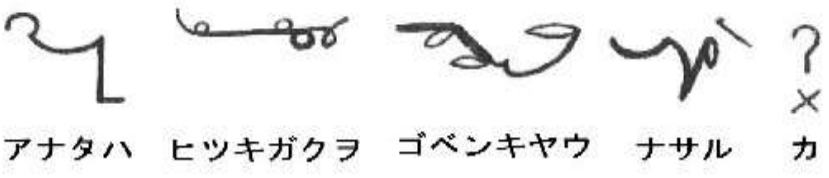
丸山版では, 田鎖がグレイアム式にならって生成した基礎符号を計 205 とし, 第一表に単音(清音, 濁音, 半濁音 75), 複音(清濁拗短音 70), 第二表に単音（拗短清音 20）, 複音(特殊な拗短音, 40)を挙げている。ほかに, ［ラ］, ［リ］, ［ル］音に, 3 種の基礎符号を追加している。

それらのうち, 長音の表記法で, 清澤版は母音記号の書線を長くして示すとし, この扱い方は丸山版でも同様で, 偶然と言えない近似である。

/ン/の撥音, /ッ/の促音の 3 種の表記法を説明している点でも似ている。撥音については, 清澤版は逼音と呼び符号尾部に点を打って示すのに対して, 丸山版は詰呼の名称で前字の中央部に後字の頭を交差させる方法をとる点で異なる。

清澤版は撥音について反音と呼び, 現代方式にも用いられる符号末尾を右上方向へはねる方法をとるのに比して, 丸山版では同名ながら「ナ」の符号を短くしたものを用いている点が異なるが, その後の多くの方式で右上方向へのはねが主流であることを考慮すると, 丸山版で一時的に試行された可能性がある。

両書に印刷された基礎符号は, 清澤版が独立体で, 一方丸山版は連綴体であるが, 図で見る限り同種の書体を用いている。両書の相違点は, 母音の［ア］, ［イ］とタ行, ヤ行, ワ行の 3 行, さらに母音［ウ］については丸山版が水平短線を追加している点である。



符号群の切り方が実経験によって合理的に変化した

図 2-8 文節単位の筆記が早期から工夫された（丸山版「ことば乃寫眞法」62.p.）

ただ,林が書いたように,田鎖はよく基礎符号を変更したことを考えると,近似が多く,両式は田鎖式系であると断定できる。

単音節,複音節,言い回しを繰り返すことを畳音と呼ぶが,日本語速記法では必ずその扱い方を定めている。清澤版,丸山版とも類似の略し方を用意している。

日本語速記法においては,基礎符号を比較する際に五十音表の 44 音を用いるので,それに従って一画で書ける符号が占める比率（単画化率）を見ると,両式とも 31%であった。

最初の速記では基礎符号を用いて,言葉を全音書きとめる基礎符号全記法であった。表現を換えれば,速記は表音主義に基づいて,仮名文字で書かれるようなものである。しかし,他人の発言をべた書きしたものを,音,言葉,文章の句切りを判断して読み解くことは,文字で扱う以上に難しい。反面,発言を速記符号で区切りなしで続け書きすることは不可能で,分かち書きが原則である。表音記号の速記符号をどのように書いて,どのように読むかに

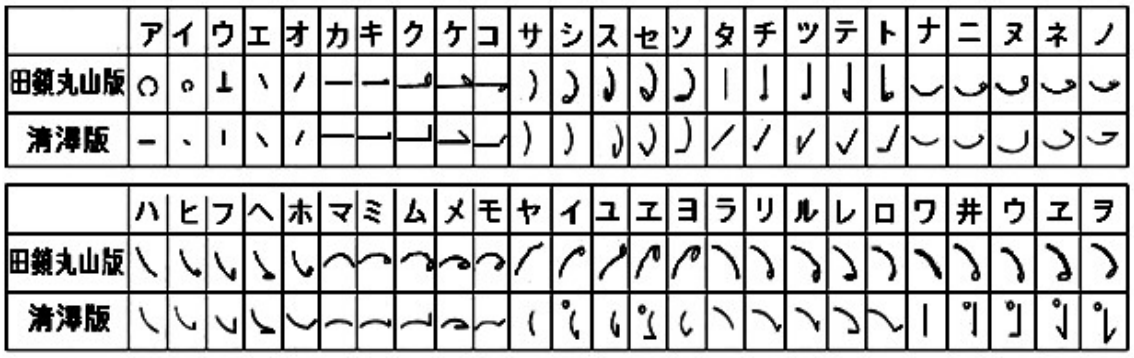


図 2-9　丸山版と清澤版の基礎符号　兼子次生作成

ついて黒岩や田鎖,若林,林らは研究した。

高速型の手書き速記では,筆記中にペン先が紙面から離れて次の符号の書き出しへ空中を移動する搬送線は一画をむだに費やすので,離筆の不利といって嫌われる。可能な限り一文を続けて筆記できることが望ましい。実用的なレベルについては,適度の音節数で,むだなく,書きやすい文字列の長さは,文節単位か,決まり文句の定型のものになりそうであ

る。また,縦下方向へ続く線,右下,左下,右上へ続く線分符号はズリと言って避ける必要があった。

英文速記では秘書型の用途のために句読点などの記述記号が用意されたので,清澤版でも句読法を設けた。発言の冒頭を示す印,一句,一語のまとまりを示す印,段落が変更される印を設けて,文の切れ目がわかるように配慮した。丸山版でも句読法があり,ほかにアクセント,プロミネンスなどを示す節譜,笑声などの感詞を設け,節譜では「上」「神」「紙」,「箸」「橋」「端」の違いを加点,ダッシュ,切線などで表記する例が図 2-10 のように示されていた。これらはのちに新聞社の電話速記でさらに厳しく整備され,一方国会など高速度記録型の用途では微妙な箇所以外では施されないものとなった。

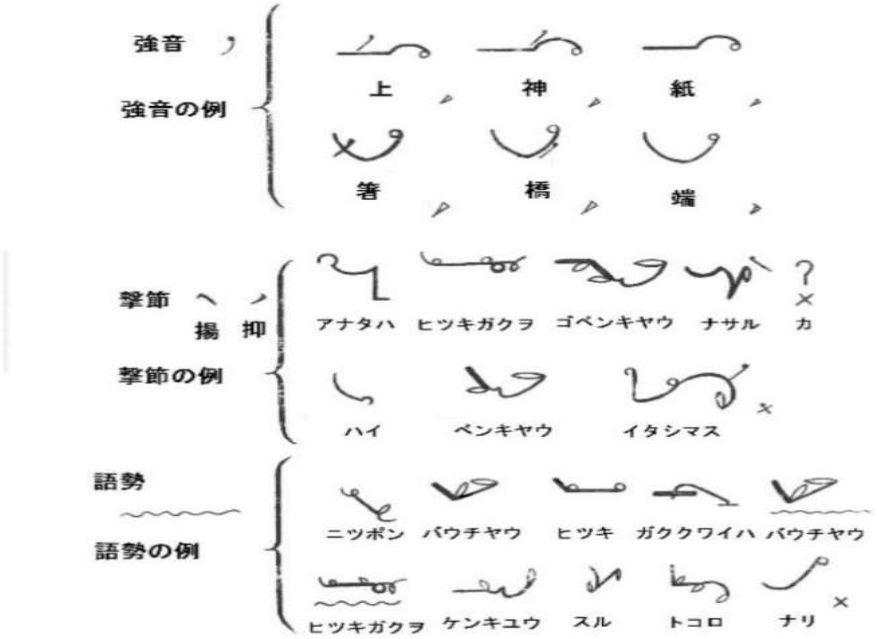


図 2-10　べた文を読みやすく区切る工夫例
「ことば乃寫眞法」1885.11.13 丸山平次郎 62p.

高速化を図るためには,速記符号群をなるべく大きな単位でまとめることが有利であるとする考え方もあり,衆議院式では運用論の中に単群原則をあげて,関連する言葉は「がある」「ことであります」「せんとするものであります」のような単位で能率を上げるために一群として筆記する符号へと発展していった。

速記符号を分かち書きする原則をとれば,文節の終わりに付く助詞や助動詞,動詞の活用形,形容詞などを簡単な符号にできる可能性が生まれる。

清澤版では後詞が現れ,［に］［と］［て］［も］が基礎符号より簡単な符号に改められた。丸山版では一音助詞が 12,二音助詞が 28,合わせて 40 がつくられ,名詞の詞尾として［さ］［み］［げ］を用意し,「高さ」「高み」「高げ」のように運用させた。形容詞の詞尾として 6

種,副詞の詞尾として3種が設けられている。

ところで，こうした簡略化方法の中で,言葉の音数全部に対応しながら一部の頻出音をより簡単なサイン符号に置き換えて筆記する手法を縮記法と呼んだ。その場合,別の符号で代用させて複数の音を表す方法を特定符号化や略記法と呼び,さらに音や言葉を省いて高速化を図る方法を省記法と呼んでいる。縮記法で表音的に速記する全記法の場合は,音が省かれていないので,第三者反訳の可能性が高く,省記法や略記法で速記した場合,判読できない場合がふえる。ただ，簡略化法の呼称は方式，年代，個人によって異なっている。

一般に速記研究者は,音と符号の両面で筆記負担を減ずる工夫を行う。ＣＶ単位（Consonant + Vowel）の音節符号においてＣを省いてＶだけを書く方法や,同じＶを持つ複音節ではＶを共有させる,つまり1個のＶを前後のＣで読ませる方法を考案している。こうしてＣを共有する単語の省画のために,同行縮字法への初期的な発想が見られる。

このような進化過程から見ると,清澤版は,速記が完成されない時期に,啓発効果を担った書籍であったと断定できる。日本語の速記法としてひらめいた着想を解説し,田鎖の人工文字体系の仕組みを紹介するにとどまり,実際に使用するには十分でない。

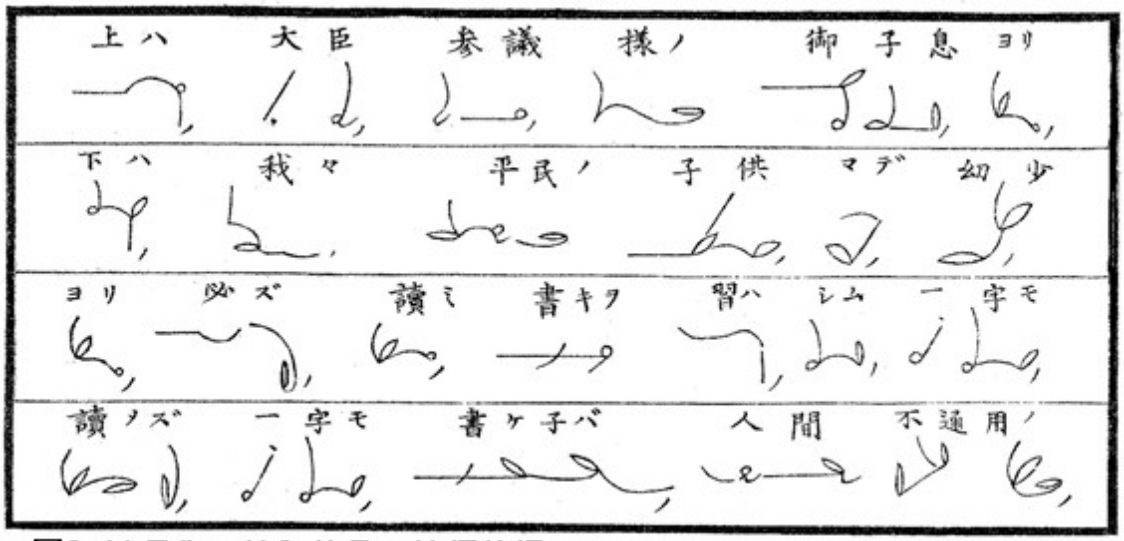


図2-11 早期の速記符号の連綴状況「傍聴筆記新法獨學」清澤與十1884.2,p.8

例えば図2-11の連綴文例の清澤版の中で速記符号は「大臣」,「ご子息より」,「幼少より」,「読めず」,「不通用の」,「人物となるべし」が分かち書きされているので,読み返す際に区切りが適切でなくて正しく読めないリスクのある。

速記符号の綴りは,言葉,意味,文法的に適切に分かち書きされることが必要で,かつ与えられる速度条件に合わせて筆記できる画数,書きやすさ,判読しやすい符号を筆記できるように符号体系を編成することが求められる。清澤版は 1 つの符号群としてなめらかに綴るための便法を用意するまでには熟していない。

一方,丸山版についても,口述者は速記講習会を開いて3年経って,その間の研究に進歩があり,日本語の特質を分析していることが加点法などにうかがえる。また,実用に供するた

めに,頻出語の略語を用意し,学習者の便を図っている。加点法の着想はのちの同行縮字法へつながるものであり,また述部の活用に対する規則的対応の工夫が行われている。

速記の運用では理論研究とフィールド体験での知見が相まって進められるものであり,この役割を若林玵蔵,林茂淳らが果たしたことが,若林の速記符号から理解できる。

４.速記の概念の成立

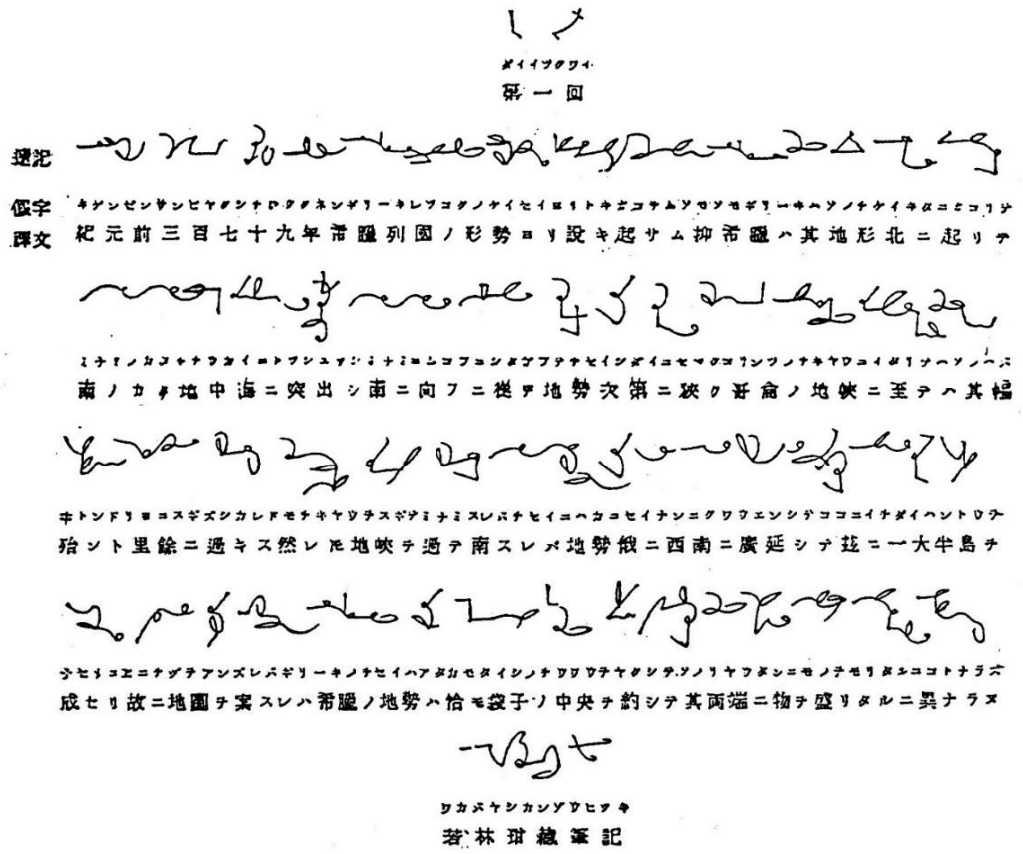


図 2-12 現存する最古の速記符号：矢野文雄口述，若林玵蔵速記「経国美談後編」

日本では速記と言えば手書き速記を意味してきた。その手書き速記にはイギリスの幾何派,ドイツの草書派,さらにアメリカではスピードライティングのようなラテン文字の筆記体を主に用いる文字式があった。速記をイギリスでは Shorthand と呼び,ドイツではそれにならって Kurzschrift と呼べるが Graphic shorthand とも呼んでむしろこのほうが通りがよい。後者は,「筆跡の」や「文字記号の」という筆記体派のイメージである。

それに比して,日本では速記術の記号や文字という呼び方が行われ,文字,記号,符号が用いられてきた。しかし,速記理論が進歩するにつれ,仮名文字を用いる速記は文字式速記という概念でまとめられ,文字として扱われない記号や符号を用いる速記は符号式速記と呼ばれてきた。これらを全体として手書き速記と呼ぶ。また,方式書には速記文字と表記す

る場合があるが,本稿では原則として速記符号という用語を使用することにする。

西来路は,高速度逐語型速記は符号式で初めて可能となるという信念を持ち,「符号」は記号より狭い一定社会に限り用いられるもので,記音行為(符号化)から最終目的である反訳行為（文字化）へ移る過程の媒介をする中間物(メディアム)であって,それ自身が最終目的である文字とは本質的に異なるものである,と説明している。一方,記号は文字,音声を含めて意味を持つもの全体を示すことがある反面で,狭い領域を示す用法があり,二極性を備えている。

一方,情報科学では信号列を短縮する技術として符号化 coding という術語がある。表音式から始まり一意性を前提とする符号化が電子機械速記法の速記符号において発達しており,冗長度を利用してデータ量を節減する目的において,coding は解読 decoding と対になって,手書き速記,機械速記共通の技術として重要である。

手書き速記方式の数は幾つあるかは,正確にわからないが,1950 年ごろの状況は田鎖式初版が生まれてから 80 数種があり,そのうち国会速記者など記録型の専門職を育てているのは,7,8 種にすぎないとする意見がある[#1]。これから,速記方式史をまとめる際に,主要と思われる方式,あるいは太平洋戦争後の主要方式の発達を見ることにしたい。

５．田鎖家本流の符号改変

1890 年の国会開設に備えて日本で初めて講習された速記法は,田鎖式初版であった。しかし,講習中に指導する速記符号が変更されることがあり,また使用された資料が残されていないため,正確にその速記理論を再現することはできない。受講した林が 3 年後の 1885 年 4 月 15 日に出版した「速記術大要」に掲載された速記符号と,最初の速記啓蒙書として上市された黒岩,日置訳補,神田校訂の「議事演説討論傍聴筆記新法」とを対比する形で明らかにされた基礎符号と文例が速記発表当時を知り得る資料である。

田鎖綱紀が基礎符号,速記文法,速記略字をどのような体系として整えたかについては,武部良明の研究があるので,それを用いて理解していきたい。[#2] 田鎖は大学南校在学中の 1870 年に雑誌で初めてピットマン式を見たもののその後深く研究もしなかった。1872 年になりカーライル Robert G.Carlyle から与えられたグレイアム式の方式書で初歩を学び,日本語への翻案研究を始めた。グレイアム式は J.G.Graham が名乗った方式だが,基本的にはピットマン式系であったから,ピットマンに置き換えて読むことができる。

田鎖は初め,日本語に適応する記号をつくろうと試みて壁に当たった。図 2-13 で論を進めたい。そこで,グレイアム式を参考にして音を表す基礎符号と略字をつくってW案の研究を始めた。最初のWa 案では 60 余りの符号をつくって,母音は加点母音を用いた。ところが,英文速記をそのまま日本語へ移植することが難しいことがわかると,略語主義に方向転換し,Ｗｂ案として 3,600 語の符号をつくり,さらに 90,000 語の符号に膨れ上がったWc案を編集した。

不幸にも,自宅が火災に遭ってＷｃ案の資料を焼失して略語戦略が挫折した。そこで,最初のＷａ案に戻って再び表音主義のＣａ案を立案し,1882 年に 100 余りの単音符号,200 余の複音符号とピットマン流の加点母音法を用いる改良案のＣｂ案を考案した。さらに,父音符号の追加,母音の連綴化を図る 2,3 の改良を施した改良Ｃｃ案をまとめた。このころが,1882 年末から翌年春までの最初の講習会の符号体系であったと武部は見る。

腹案 明治5年 我邦音語に通用す可きの記号を製せんとす
Wa案　Graham氏の翻案、60有余の記号(加点母音)〔焼失〕
Wb案　Wa案に3,600有余の語を加う〔焼失〕
Wc案　Wa案に9万余の語を収集す〔焼失〕
Ca案　Wa案に略、同じ〔田鎖式へ進む〕
Cb案 明治15年 100有余の単音記号、200有余の複音記号(加点母音)
Cc案　Cb案中2,3の改良（父音符号の増加、母音符号の連綴化）
Ta式　Cb案中連綴母音の連綴法を成就（母音符号を結ぶ）

図 2-13 田鎖式初版成案に至る過程　武部良明　「速記概説」1948.5.3

ところで,一旦Ｃｂ案に戻ると,田鎖は,今度は連綴母音を袋結びとして書く方法(Ｔａ式)を着想して書きやすさと学びやすさを高めようと図った。このＴ版以降を武部は田鎖式と呼ぶ。

その延長線上に翌 1883 年 8 月,大いに改良を加えて（Ｔｂ式）,つまり単記号 48,複記号 152,加点法（名詞の格働詞）及び時限を定めた。改良研究は続いて,1884 年末には増補を図るとともに,拗音符号(Ｔｃ式)を採用した。1886 年には,さらに大きな改良を行って,淡線符号だけとする「大日本記音学」（Ｔｄ式)をまとめ,1889 年に入ると,「早書学」（Ｔｅ式)を著した経過について武部は,1943 年国会の速記学研究会で口頭報告した。

このような過程で,改良は続いていった。田鎖綱紀は,終生速記研究の人であった。

６．田鎖三代の基礎符号の足跡

田鎖式は,綱紀,一,源一の 3 代が改良を続けた。基礎符号は,綱紀が何度も変更したが,二代目,三代目になると,日本語の規範方式として速記理論体系の完成を目指した。

初版は,ピットマン系グレイアム式の基礎アルファベットを参照した。その影響を［K］⇒［カ］,［S］⇒［サ］,［T］⇒［タ］,［N］⇒［ナ］,［F］⇒［ハ］,［M］⇒［マ］,［R］⇒［ラ］の行に見る。

初期の日本語速記方式においては基礎音を,母音　Vowel とア列父音　“A” Column Syllabic Consonant,その他の母音列の子音 Syllable の 3 種類に分けた。図 2－14 のように, 父音と呼ぶア列の基礎符号は一画の線条とし,父音と母音(ア行を除く)が結合してで

きる音節である子音 Syllable には父音の尾部に［イ列］，［ウ列］，［エ列］，［オ列］の母音を表す小型の直,曲線をつけた。撥音は反音,促音は逼音などと呼ばれ,基礎符号の中には収められていない。

図 2-14 音節符号の生成法 田鎖式初版

一は,「1941 年に六十年式を刊行した」と，1950 年発行の「最新田鎖式日本速記法詳釈」に記している。３代目，源一はその後六十年式には一切触れず,「明治 23 年，大正 2 年と，綱紀自身の改革方式の出版，それを継いで田鎖一（綱紀の長男）が五十一年式（昭和 7 年）六十七年式（昭和 23 年）と新しく改革方式を出版して現在に至っております」と書いている。1953 年（昭和 28 年）12 月 1 日発行「日本の速記」誌 12 月号収録の協会史料委員会編「速記関係書目」には，田鎖一,「六十年式日本速記法」Ａ４・56 頁，同人方,昭 16-8 とあり，1941 年 8 月の六十年式の私家版発行と推定できる。ただ，源一は六十年式と六十七年式はあまり違わないとしており，本稿では確認できる六十七年式を取り上げる。

速記符号を組織するためには,田鎖六十七年式の場合,0,30,60,90,120,150 度の 6 通りの角度を用い,大形 10 ミリ,中形 5 ミリ,小形 4 ミリの 3 種の線分を与えている。

また速記符号の書き順に,「逆字」という書き方を設けて「平らに速く書き綴るために用いる」と,一は定義し,その説明を左から書くべき線を右から書いたり,上から書くべき線を下から書くための書法とする。若林が 1883 年,矢野に依頼されて速記した経国美談の符号には,「然れども」( )の字末の助詞「も」に右から左へ進む逆字が見られるので,綱紀が始めた書き方が一にも継承されていたことになる。

この書法は西来路「衆議院式標準速記法原理」に，原則通りに素材符号を連綴すると非常に書きにくい形になるとき,その部分を逆に書くことによって運筆上の困難さをなくす書き方として，図 2-15 の「名古屋」の例を挙げており,田鎖系の理論が継承されている。

図 2-15　衆議院単画符号における逆記法

一方,母音には父音の 3 分の 1 から 2 分の 1 程度の大きさの単線か半円を用い,父音は単線,そして子音は単独形で示す原則の田鎖式初版の場合,○イ形構造の［キ］，［シ］，［チ］，［ニ］は符号末から左上への短線を加え,○ウ形の［ク］，［ス］，［ヌ］，［フ］，［ム］，［ユ］，［ル］は直角に上がる短線を加え，［ツ］だけは短線を左横へ向かわせる形で生成している。

速記の基礎符号を表音的に綴るとき,(1)それ自体を独立して書く場合と,(2)その後ろに

母音や音節を伴う場合,(3) さらには音素,音節の後ろに付く場合と３種類の接続方法を持っている。速記符号は仮名文字のように音どおりに言葉を綴る方法が行われるが,句読点,段落を改める点は十分に考えられなかった。

しかし,仮名文字と同じように幾何図形の速記符号を続け書きすると,場合により符号が変形してしまうため,符号に一種の書き癖を加える工夫が課題であった。また,仮名のように切れ目なしで符号を続け書きすることは書きにくく,読みにくいことが課題であった。

綱紀は,音節単位の速記符号がほかの母音や音節符号を伴う場合には,符号尾部の短線をひものように結んで書く連綴体を考えついた。これは綱紀の独創的な工夫である。実際に速くなると続け書きできない黒岩式に比べて,連綴母音と,そのひも書きがリズミカルで書き崩れを防ぐ運筆をもたらすことになり,田鎖式が成功するポイントであった。

それとともに,日本語では慣れない分かち書きを英語の速記符号を参考にして取り入れることが大切な課題であった。

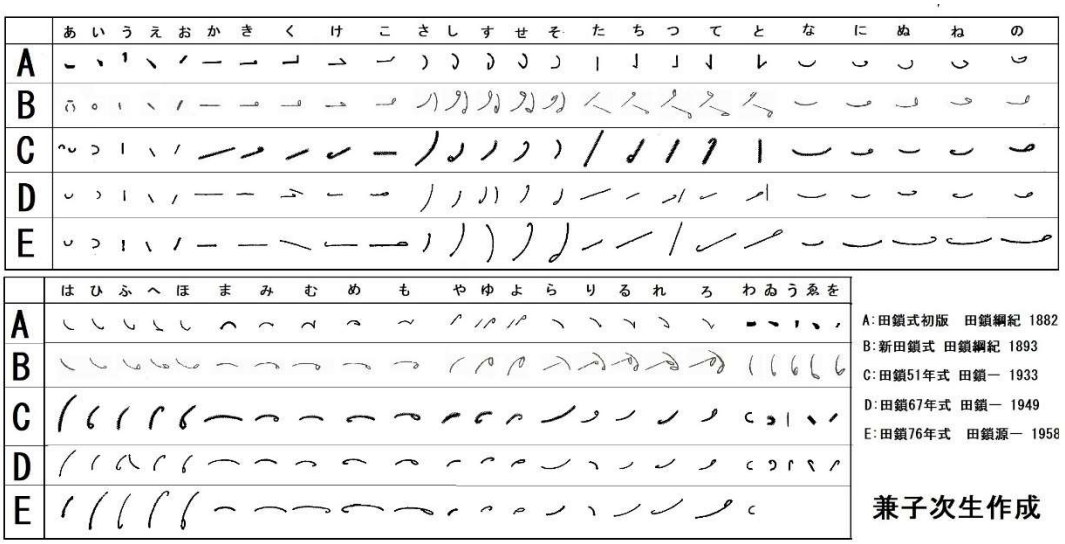


図2－16 田鎖式3代基礎符号変遷表(田鎖綱紀、一、源一)

田鎖式における基礎符号の線分配当は,グレイアム式における音声と符号の対応関係にならっており,ナ行,マ行で安定している。図 2－16 に見るように, 綱紀から一に世代交代する際にサ行,タ行,ハ行,ラ行が変更され,また線長を３種にふやした。源一は,一と同じ方向性を示したが,符号の尾部に付く２種類の楕円の一方を,半円を巻き込む形に変更して連綴をよりしやすく改善した。

田鎖式の 1 版から 6 版における単画化率の推移を,基礎符号 44 符号のうちの何パーセントを占めるかに限定して見ると,綱紀の初版(1882)は 31%(14 符号),大日本早書学邦語速記術版の新田鎖式 (1892) は 31%(14 符号),一の五十一年式(1933)は 54%(24 符号),六十七年式(1949)は 61%(27 符号),源一の七十六年式(1958)は 56%(25 符号)であった。国会では同画倍音のため省画を至上目標に高速度化を追い続けたのに対して,汎用型の民間需要に対

して在野の田鎖式は折衷派で普遍化する道をとり，単画化へは進まなかった。

今日に伝わる「経国美談後編」巻末の田鎖式の速記符号は,第１回の講習会を受けたのち若林が使用する中で工夫した，現存最古の速記符号である。規範理論体系の高度化を追う綱紀と実践使用を目指した若林で,違った方向性が生じることになった。西来路は,速記は技術 Technology と技能 Technique の２つの柱があるとするが,知識としての速記法の技術体系を田鎖が研究し,その技術を使いこなすスキルを若林が完成したことになる。

図 2-12 の若林の文例から経国美談後編における速記理論の使用実態を見ると,速記の助詞(の,は,に,りては,ど,ども,ば,して,を,ず等)が単語に続け書きされている。また,音声への対応では促音,畳音,長音の筆記法が使用されている。ただ,数字が速記符号で書かれて筆記時間がかかるため,速度を稼ぐ上で課題であった。

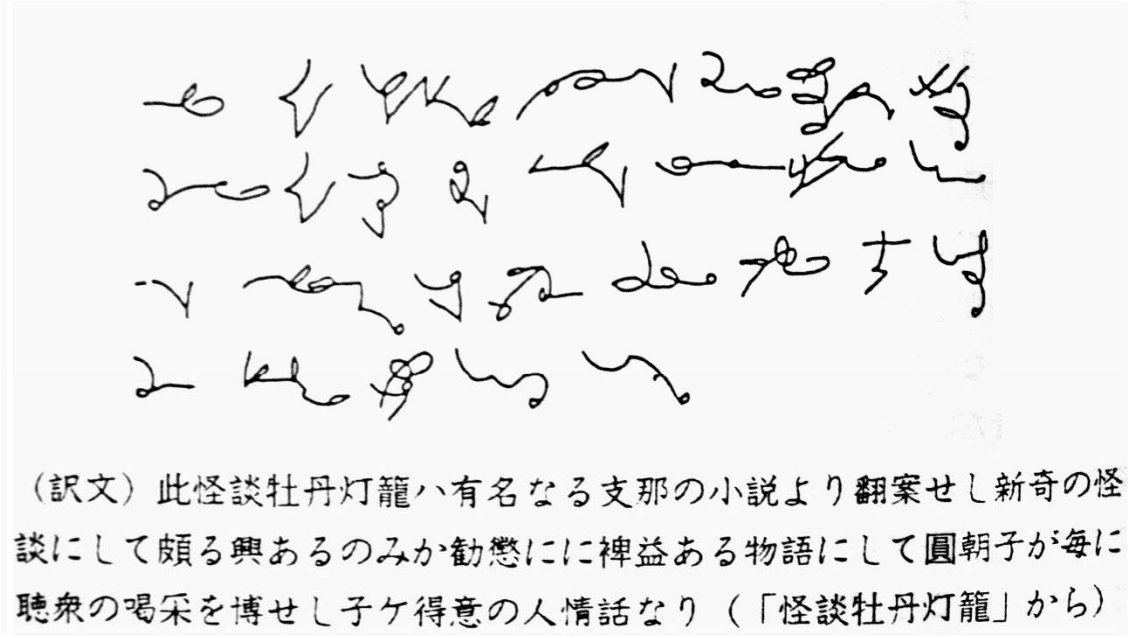


図 2-17 三遊亭圓朝「怪談牡丹燈籠」に掲載された若林玵蔵の速記符号

一方，1884 年夏,若林が酒井昇造と協力して速記した三遊亭圓朝演述「怪談牡丹灯籠」の速記符号も残されている。図 2-17 の若林の速記符号には「有名なる」,「すこぶる」,「興ある」,「ある」における字末の「る」は，ひも結びを閉じずに直線の基礎符号を用いている点,「なり」も同様に基礎符号の［リ］を書いている点が,実用の運筆を求めた試みとしてうかがえる。さらに,「圓朝子」,「聴衆の」,「翻案せし」,「人情噺」に見られる複雑な複数円の使用は拗音や講談や落語を筆記する場合を意識して用意していた可能性もうかがえる。

のちの国会での田鎖式の利用や速記者の内部養成は,高速度で発言ありのままに書きとめるために田鎖式の符号研究が進められた。一方,田鎖家の速記普及活動は在野の速記者

養成に向かい，東京で集中化が進む雑誌，文芸出版分野の速記者を育成する流れをたどった。つまり図 2－18 にある松本清張の口述速記者，福岡隆のように，読ませる速記作品を目標とした，編集センスを備えた速記の反訳技術の方向へ進んでいった。

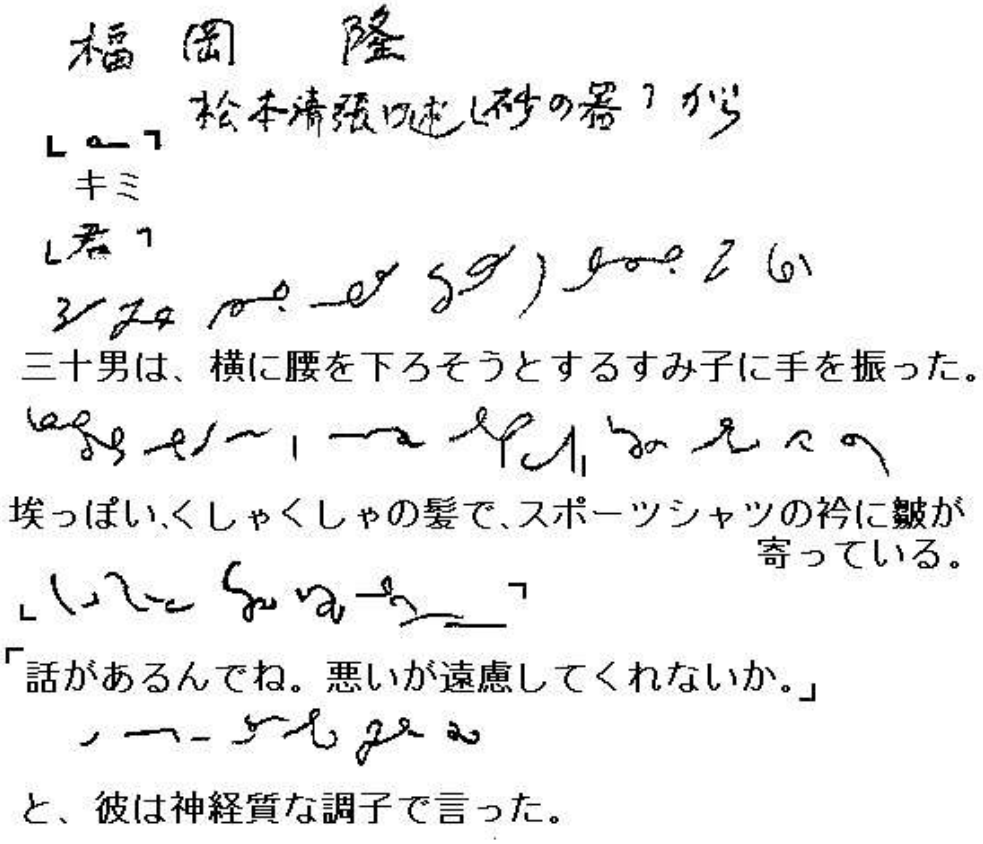
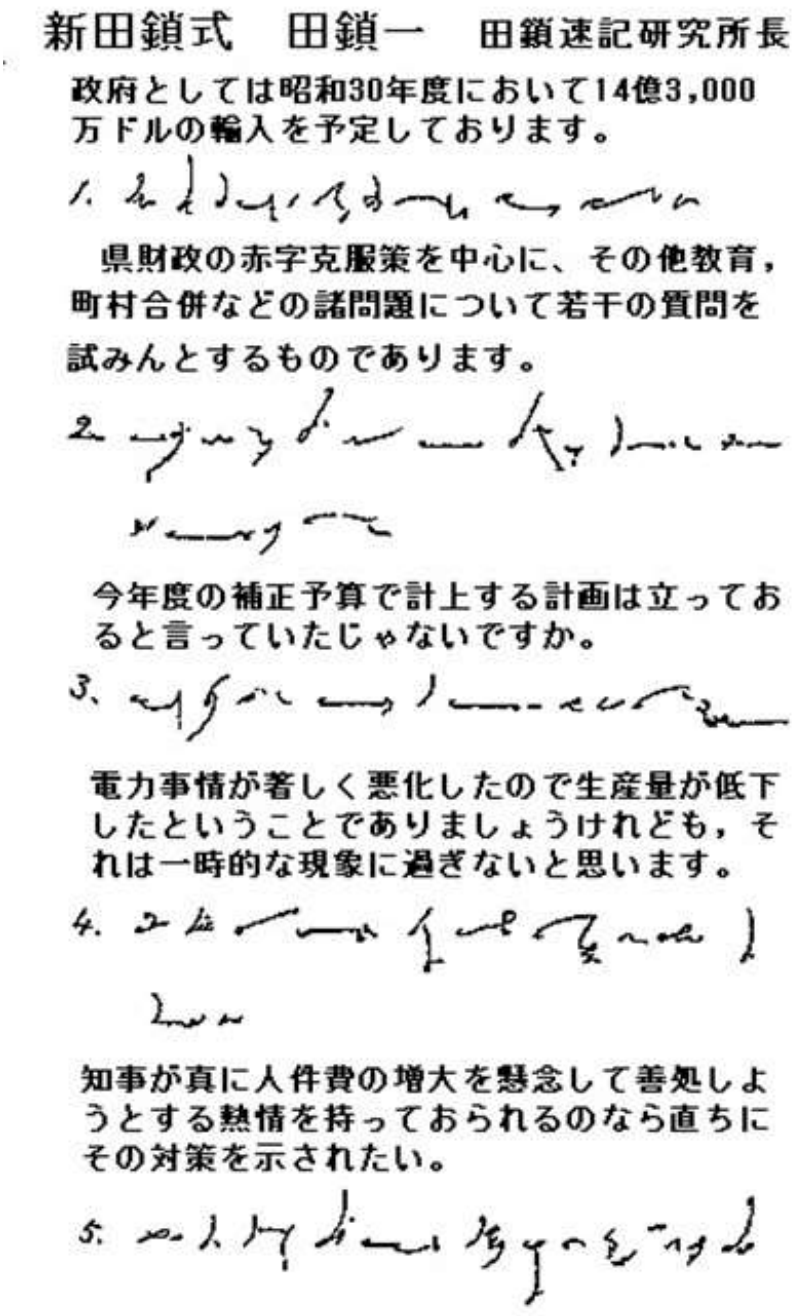


図2-18 福岡隆（新田鎖）の速記文例
（松本清張「砂の器」口述速記）

綱紀の理論研究を継承して，一は，日本語速記法の規範方式としての理論体系の完成を目指し，「最新田鎖式日本速記法」（1950）において，方式の全体にわたり原則，法則を体系的に解説することにつとめた。すなわち速記字組織において符号線形の基準，大小，角度に続いて，左起右進横書きの書記方向にも及び，(1)前の音字の書き終わりから次の書き始めを続ける，(2)単語ごとに綴りを改める，(3)聞こえた音の通りに書く，(4)速記文は左から右へ書き進める，(5)鈍角接合を避けるために作角効果のある逆字を使うことがある――と基本を説明している。

また，(1)拗音はその行の基礎音字に 30 度の角度変化を与えた線形を用いること，(2)同行の拗音字は同一の線形による，(3)ア列は大形（1 センチ）とし，(4)ウ列は字首を小さく曲げる（小マルカギ），（5） オ列は字尾を小楕円で結ぶ，(6)エ列は字首及び字尾を小さく曲げる

――を原則とする符号生成法を定義している。このほか, 濁音, 長音, 撥音, 促音と, 基礎音の表音符号の構成を説明している。


新田鎖式　田鎖一　田鎖速記研究所長

政府としては昭和30年度において14億3,000万ドルの輸入を予定しております。

1.

県財政の赤字克服策を中心に、その他教育，町村合併などの諸問題について若干の質問を試みんとするものであります。

2.

今年度の補正予算で計上する計画は立っておると言っていたじゃないですか。

3.

電力事情が著しく悪化したので生産量が低下したということでありましょうけれども，それは一時的な現象に過ぎないと思います。

4.

知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

5.

図2-19 田鎖一の符号文例

鳥取県速記士会報2月号 1955.2.8. p17

次に, 一は, 縮記法において, 言葉を音字のまま書き綴る第一の段階, 時に応じて短縮の記法を用いる第二の段階, さらに場合によって部分的に筆記を省略する第三の省略的段階の

速記理論へと三段階に分けて，田鎖式日本速記法の理論体系を組み立てた。

これらの速記文法に加え,略字表を掲げて略字の大小の法則の効用として「簡単な線は余り多くないのに,言葉は数限りなくある。そこで,簡単な線形はできるだけ倹約して使わなければならぬ。大中小の別を立てればこれを三種の言葉に充てることができる」とし,さらに多様性を持たせるために筆記位置を上位（上段）と下位(下段)とする略法を説明している。

現に発せられる音声を合理的に視覚記号で固定する速記文法の中で,各方式で設定されているものに助字,助詞などがある。一は「助字には助動詞,助詞,または接尾語をこれに充てる」と定義し,速記符号は助字を連綴した単位つまり文節ごとに筆記するとしている。第 1 類助字は語格,連続,命令,制限,疑問,指定,使役,受け身,打ち消し,推量,希望,形容,名詞,配当(体言,用言について「ずっと」,「ごとに」の配当の意味を表す)の 14 種を助字として符号を設定している。

また,第二類助字は,助動詞の過去,未来及び連続と尊敬助動詞として過去,未来,連続,尊敬の符号を設定している。続いて第三類助字として可能形,命令形,進行形の特殊な形を用意するなど,細部に及ぶ速記法の理論体系をまとめた。

一は，縮記を縮字と呼んで，縮字法においては,「同行縮字は同じ行の子音字が連続する場合にその第 2 音を短縮する手法である」と定義し,(1)同行縮字には①第二音が第 1 音と同行の単音，一音節の平音である場合,②第二音が第一音と同行の拗音で平音である場合，③第二音が第一音と同行の単音長音である場合，④第二音が第一音と同行の単音・長音である場合,⑤同行の音節が連続して第二音が撥音などの場合，⑥同行の音節が連続する場合など――の書き方の規則を定めた。そうして一音縮字と 4 種の二音縮字を設定した。一音縮字のサイン化（従属型微小記号化）対象には /イ/,/カ/,/ク/,/シ/,/シン/，/メ/,/メー/,/リ/,/ル/の音があり，中根式における字音語用のインツクキ法と同様の対象である。一方，早稲田式における二音文字に相当する二音縮字において，第一種に 20 種 49,第二種に 17 種 17 個，第三種に 11 種，44 個，さらに第四種に字音語熟語を形成する 12 種最短線を設定して,頻出音を簡単な符号とした。

源一によると，この 67 年式は一と共同執筆したとし，縮字法として(1)同行縮字，(2)一音縮字，(3)二音縮字の 3 種に分け，(2)は/イ/,/カ/,/ク/,/シ/,/シン/,/メ/,/メー/,/リ/,/ル/の音を対象とし,頻度が高い/イ/音には小円,/カ/音は中円,/ク/音には黒点を充てた。音節が連続する二音縮字は字音語に多く現れるので四種に分けて，符号の第一種は［カイ］,［カク］,［カツ］等 49 個，第二種は第二音が一通りしか変化しない［キャク］,［キョク］,［ジツ］等 17 個，第三種はカとスが他音と前後する［カカ］,［サカ］,［カタ］,［タス］,［ラス］等 44 個，第四種は第二音を/カ/とする［ケッカ］,［シュッカ］,［ヒャッカ］,［リョッカ］等の 12 個に最短線を設定した。

源一は複画,折衷,単画へと,基礎符号が一画化へ進む中で,速記の五十音表(44)のうち 25 符号を単画化することで十分な実用性を得たとして,折衷派路線を貫いた。しかし,速記理

論体系は一が達成した領域にとどまり,むしろ広く普及を目指すために簡易化が進められた。例えば六十七年式の第三種二音縮字 11 種と,第三種二音縮字 11 種は除かれた。

略字では，品詞に応じて符号の大きさ，位置を決め，符号の形を構成音によって符号の胴体となる主形と，符号頭部と符号尾部に分けて決定すると説明した。符号の大きさでは 1 センチの大型を名詞，動詞，形容詞に使用し，2.5 ミリの小型は副詞，接続詞と決め，書記位置では上位は上 5 ミリに書き，詞，副詞，下位はそのままの線上で名詞，動詞，代名詞，接続詞に適用する。規範とされる速記符号はピットマン式系の小型のものであった。

速記符号の形を定義する「形状」理論では，胴体（主形）が（1）母音で始まるものはそのままか，次に現れる子音符号の行に与えられた線形（思う，失う，選ぶ等）を用い，（2）子音で始まるものはその子音の線形（掛かる，産業，話す等）を用いることと決めた。

符号の綴り方を見ると，字首は（1）母音で始まる場合，/ア/の場合頭部に大円（例［明らか］,［新しい］），/イ/の場合小円（例［今］,［著しい］），/ウ/，/エ/，/オ/の場合，それらの母音をつける（例［失う］,［選ぶ］,［思う］）――とし，（2）子音で始まるものは，各行同一の線形が基礎になっているので,/ア/,/イ/,/ウ/,/エ/,/オ/の各列に分けて,①ア列の子音の場合，字首に特別な形はつけない（例［掛かる］,［話す］），②イ列の子音の場合頭部に小円をつける（例［君］,［示す］,［人］），③ウ,エ列の子音の場合，頭部を小さく曲げる（例［少し］,［生産］），黒点（［組合］,［願う］），④オ列の子音の場合，頭部を曲げる（例［答う］,［望む］）こととした。

尾部つまり字尾は字首ほど厳格に区別せず，頻度の高い/キ/・/クム/，/シイ/，/シ・ス/，/ル/で終わるものだけを規定し他は自由にする。（1）語尾が/キ/・/ク/・/ム/の場合，黒点（例［新しき］,［全く］,［望む］），（2）/シイ/の場合，小円（例［新しい］,［著しい］），（3）/シ/・/ス/で終わる場合，わなで結ぶ（例［著し］,［示す］），（4）/ル/で終わる場合，カギ型をつける（例［掛かる］,［承る］,［考える］）.

そのほか，一般略語約 800 を決めた。従語的な助詞，助動詞，接尾語は小形を原則とし，4 種に分けて，（1）第 1 類（助詞，助動詞，接尾語）: 助詞，語格助字，接続助字，命令助字，制限助字，疑問感嘆助字。助動詞，指定助字，使役助字，受身助字，打消助字，推量助字，希望助字，接尾語，形容助字，名詞助字，配当助字（2）第二類（時及び尊敬の助動詞）尊敬助字（3）第三類（特殊形，助動詞）可能形，命令形，進行形，（4）第四類（助詞，助動詞，動詞等の複合形）合成助字――と，性質及び組織の仕方から 22 種に分類した。助字の原形は約 450 種指定した。原形の変化を助字第二類尊厳助字の場合で見ると，動詞［思う］に続いて，［マス］,［マスル］,［マシテ］,［マセン］,［マセヌ］,［マシタ］,［マシタラ］,［マシタロウ］,［マセナンダ］,［マセナンダラ］,［マセナンダロウ］,［マショウ］,［マスマイ］,［マシタッタ］,［マシタウタラ］,［マシタッタロウ］,［マセナンダッタ］,［マセナンダッタラ］,［マセナンダッタロウ］が接続されて多様である点を解説した。

六十七年式ではほかに，畳句略記法（肯定畳句，反語畳句記法），数字，数詞字記法，

さらに標識として文章標，校正標，情景標を整えた。

前著に続いて田鎖式七十六年式は源一がまとめ 1958 年 4 月に発行された。源一は 1959 年 11 月に「速記の完全独習」，さらに 1981 年に「速記 6 カ月コース」を発行し，速記講座を開いて後進の育成に当たっていたが，田鎖式本流は 1996 年 2 月 25 日の源一の死をもって，速記理論研究と普及活動を終えた。

７．国会における速記方式研究

日本で速記誕生時，国会の速記録を作成することが，速記理論研究の第一の使命とされた。

「我が国の国会は，明治 23 年の第 1 回帝国議会以来，完全な速記録を備えております。日本語に対する速記術が誕生して以来，わずか 10 年足らずして議事記録に速記法を採用したことは世界の議会史上例を見ないことであります。議事録の作成に当たる者は，言うまでもなく速記者です。本会議あるいは委員会が開かれる場合には，いかにそれが難しい内容を持つ会議であろうとも，またいかにそれが輻輳しても，正確な記録をとり，議院の要請に迅速に応えることが速記者に課せられた大きな責務であります。議事録を作成するに当たっては，優秀な速記者が必要であり，事務局としては他からこれを容易に求め得ないだけに，みずからの責任において絶えず養成しなければなりません。衆議院速記者養成所はこのような趣旨，目的をもって設立されて以来，80 年間にわたって，その使命を果たしてきております。」（衆議院速記者養成所八十年史序，谷福丸事務総長）このような高邁な使命を感じて国会速記者は活動してきた。

田鎖式と言っても，「未完成の速記法は，創始者田鎖綱紀の発表になるものそのままの符号だけを指していうのではない。創案者自身が幾度か改訂を加えているし，またこれを習得した者においてもおのおの自己の好むところに従って更改を企てるから，基礎符号においてその配分線が垂直に，あるいは斜めに，また符号を構成する母音符が上に，下に，種々その形を異にするものであっても，それらは総括してこれを田鎖式と称しているのである」と西来路は書き残している。

田鎖の講習会を終えて符号の改良と後進の育成に当たった者は，若林，酒井，林，新井田次郎らであった。第一議会からのち，速記技能の研究では，日常の業務上で用いた書き方，略語などを収集して速記者グループの中で共有する体制をとったり，符号を管理する担当を決めたりするなど，さまざまな活動が行われてきた。初期には速記者の供給源は限られていたので，国会は採用試験を行って主に若林門下や酒井門下の後進の中から，速記体制を整えた。しかし，民間市場において報道関係に電話速記が採用されて，速記人材の需給関係が逼迫してくると，国会内部で速記者を養成，確保する必要が出てきた。そうして 1918 年 5 月 15 日，貴族院と衆議院に養成機関がそれぞれ設けられ，現場から教授者を選んで貴族院速記練習所，衆議院速記者養成所の内部養成が始まった。教授たちによって複画の田鎖式から，次第に折衷，そして単画への進化を目指して両機関の活動が行われることとなった。

８．衆議院式標準速記法の完成

図 2-20 ある時期における国会速記者の方式系統の実態

衆議院においては若林門下が主になって方式改良と後進育成を担った。画期的なことに,教授者が異動で交代しても,指導する符号を一定させる原則をとった。そうすることによって,符号改良の成果を維持,前進させることができると判断したからである。

育成の任には,若林が育てた佃與次郎,友野茂三郎,尾張捨吉郎,荒浪市平らが当たってきた。彼らの中で,佃は長谷川篤,森田章三,鈴木庄平らを,友野は西来路,野口芳夫,手嶋史雄らを,尾張は水野為三郎を,さらに荒浪は水野春之助を育てた。

教授陣の中で,友野は自分の符号を教えずに,その当時衆議院速記課内で最も進歩した符号を用いていた長谷川の符号を指導したこと,また長谷川の高弟の石川隆一は自分の符号を教えずに,1939 年の 23 期生から,友野の弟子である西来路が考案した単画符号を制式符号として指導したことが発展につながった。

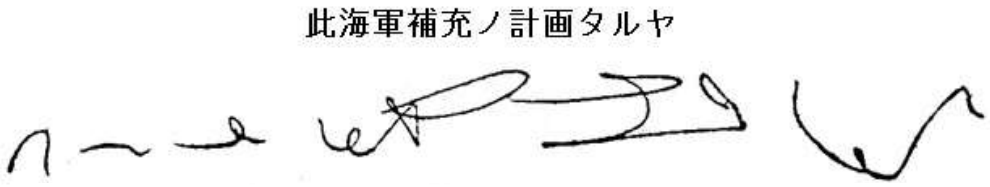
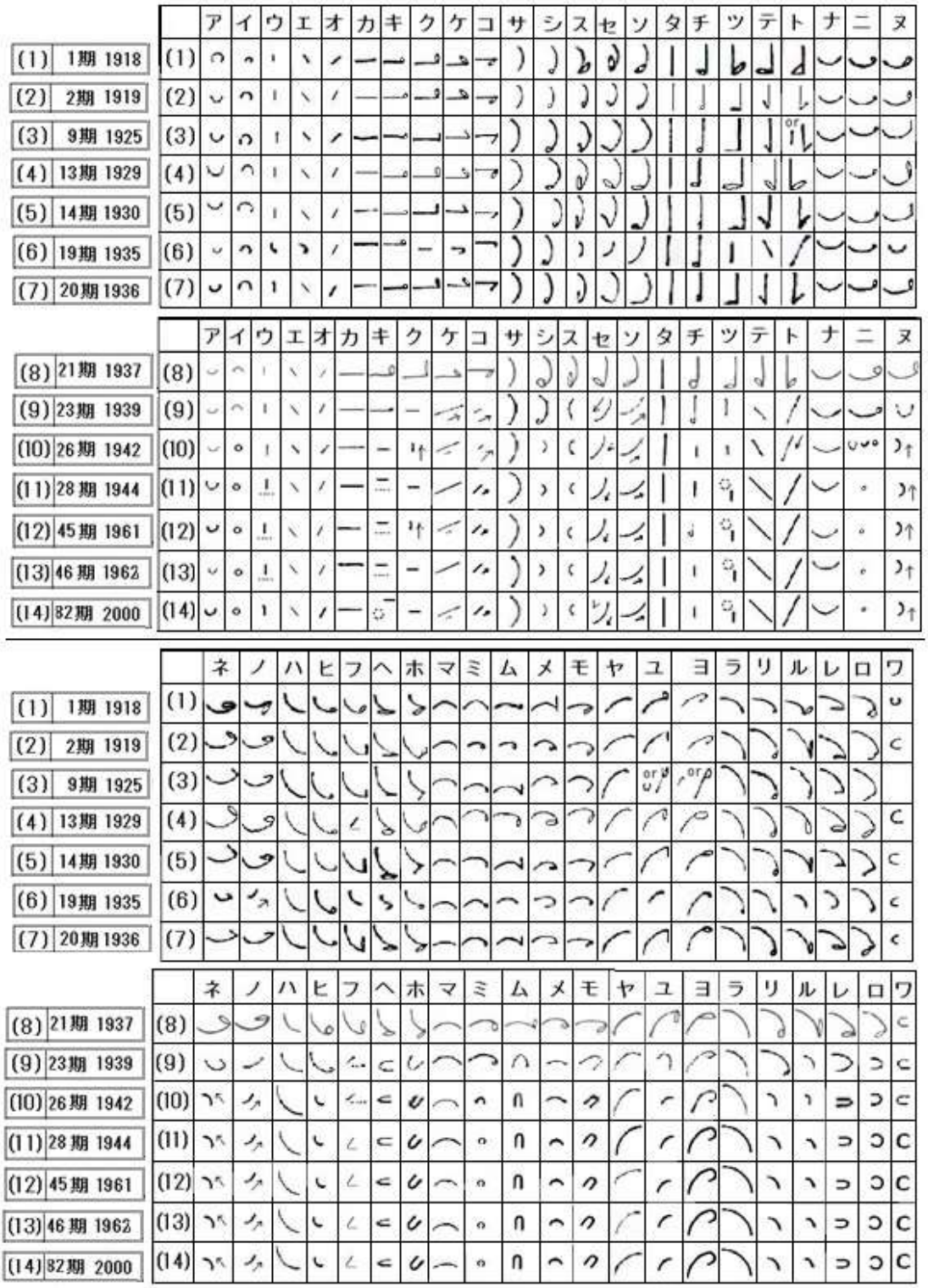


図 2-21　衆・友野茂三郎のダイナミックな直筆

衆議院式標準速記法は,複画から折衷,そして到達目標の単画への移行を遂げたが,2006 年末に廃止され, 速記者の養成を終えた。衆議院式は西来路の期分けによると,初期複画時代,中期折衷時代,そして単画時代と 3 期に分けられる。1918 年速記者養成所が開設された第 1 期は田鎖式そのものであった。

衆議院式の標準符号の変遷を見ると,1918 年から 2006 年までの間に,一度も変わらなかったのは［カ］,［サ］,［タ］,［ナ］,［ハ］,［ナ］,［マ］,［ヤ］,［ラ］,［オ］の 10 符号であった。西来路は,「諸先輩の功績を記念する意味で,もとから単画であった符号はそのままこれを踏襲することにした」と書いている。1 回変更されたのは［ア］,［ワ］の 2 符号,2 回変更されたのは,［エ］,［キ］,［シ］,［ト］,［ニ］,［ヒ］,［ワ］の 7 符号,3 回変更は［イ］,［ウ］,［ケ］,［コ］,［ソ］,［チ］,［テ］,［ヘ］,［ホ］,［ミ］,［メ］,［モ］,［リ］の 13 符号,4 回変更は［ク］,［セ］,［ツ］,［ヌ］,［フ］,［ル］,［ロ］の 7 符号,5 回変更は［ス］,［ネ］,［ム］,［ヨ］,［レ］の 5 符号,6 回変更は［ユ］の 1 符号であった。基礎符号の改良は,同画倍音つまり一音節符号の多音節化を追う一環であった。

実は養成所が開設された初期に,若林の門下,友野は,同門の佃,長谷川の流れを汲む石川らの符号を採り入れて盛んに田鎖式に改良を加えていた。その流れを継承して森田は基礎符号の単画化を最重点に置きながら拗音,略符号の整備を急いだ。しかし, 森田は 1933 年の第 17 期生から改良符号の教授を開始し,1935 年には新符号を公にしたものの,森田が教職を離れると一転して旧式に逆戻りした。



(1) 1期 1918 (2) 2期 1919 (3) 9期 1925 (4) 13期 1929 (5) 14期 1930 (6) 19期 1935 (7) 20期 1936
(8) 21期 1937 (9) 23期 1939 (10) 26期 1942 (11) 28期 1944 (12) 45期 1961 (13) 46期 1962 (14) 82期 2000

図 2−22　衆議院式の符号変遷表　兼子次生作成

注：衆議院養成所80年史口絵 符号の変遷(1)(2)を画像処理して作成した

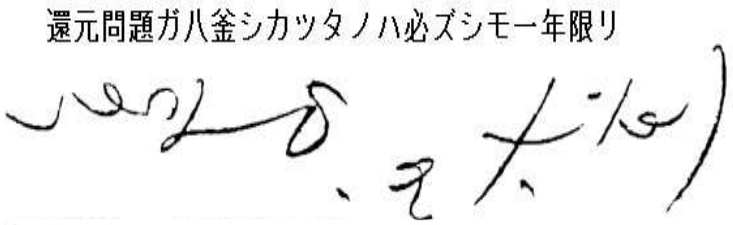


図 2-23　石川隆一の速記符号文例

このころ,折衷派の台頭が盛んになり,さらに民間が考案した単画派の中根式が登場して強い刺激を与える環境にあった。複画派にも,折衷派から単画派への改良を急ぐ機運が盛り上がり,速記課内でも「速記文字の根本的研究と標準符号の確立」を掲げて研究活動が始まった。それは 1939 年の第 23 期から制定される新標準符号の指導へつながる速記研究であった。

標準符号制定委員会では,新折衷派をベースにして取り組むこととし,単画符号のア列,イ列は従来の複画符号体系時のままに据え置いて,新たに複画符号のウエオ 3 列に単画化のねらいがつけられた。また,字音語だけでなく,和語用にも尾音に［ン］,［イ］,［キ］,［ク］,［チ］,［ツ］,［ル］が付く複音符号が整えられた。加えて速記の性能を高めるために略語生成の原則を確立し,それらの体系化を図った。

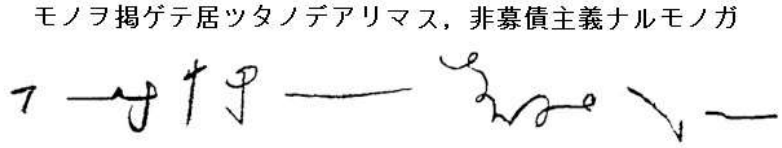


図 2-24　森田章三の速記符号文例

単画化へ助走する過程で,森田は 1933 年の第 17 期生からア行,ア列,ウ列,［エ］,［セ］,［テ］,［ソ］,［ト］,［ノ］を単画化した折衷式を指導していた。図 2-24 は森田の符号である。

ゴールの単画標準符号は,西来路が引き継いで開発を進めた。まず,西来路は 1939 年の第 23 期に［キ］,［シ］,［チ］,［ユ］,［ヒ］,［ミ］,［リ］を除いて単画化を図ったが,続けて五十音符号全部の単画化を完了し,1942 年の第 26 期生から完全な単画符号を指導した。このとき衆議院式は,綱紀の「複画田鎖式」から「衆議院式単画標準速記法」へ飛躍した。

研究熱が高まった衆議院速記課では 1940 年,内部に速記学研究会を設けて,速記本質論,速記思想史,速記史,速記符号学,速記技術発達史などのテーマで速記学の研究を始めた。西来路のもとに,外部から武部が加わって「日本速記方式発達史」を刊行するなど,意気盛んであった。手書き速記全盛時代,速記者養成所を専門学校へと進め,さらには大学への

移行を目標とする構想があったが,残念ながら結実しなかった。

衆議院式標準速記法について,西来路はその全理論体系を以下のように残している。

1. 簡約（単画・短縮化）原理　**単記法　摘記法**

速記の符号はどこまで簡単化し得るか。全速記人の本能的欲求とでもいうべき単画化の理論は，素材としての素音（50 音），複音（二音節），連音（三音節），の各符号はもちろん，進んで四音節以上の単語，単群（文節），連群（句）まで，使用率の高いものはすべて単画化しようとするもの。

同時に同じ符号でも一定の比率で全部を小さく書けば，それだけ運筆速度は速くなるわけだから，高速度になるほど意識的に符号全体を短小化して空筆（虚線）を含む動線の短縮を企図する理論

2. 省略（摘要・少線化）原理　**段記法　接記法**

全部の符号を単画化することはできないから，次善の策としてできるだけ画線を少なくするため，思い出すヒントになる音だけ符号化しておいて，あとは書かないでも読めるように頭脳の方を訓練しようとする理論

3. 類推（推理・関係化）原理　**着記法　交記法**

論理的なつながりの「連度」を利用して，前後の符号と関連付けることによって簡約原理，省略原理で締めくくれない符号の線量を減少しようとする無形化理論

4. 相通（同形・異読化）原理　**略記法　寓記法**

形態として有限な符号を無限に変化する言語活動にいかに対応させるか。同形の符号を幾通りに読み分け得るか。類推の原理を援用することによって符号操作，運用を高度化する研究

5. 卓立（異形・特異化）原理　**同記法　縮記法**

間違えやすい符号間の異同弁（識別要素）を確定し，周囲の符号から際立たせる研究

6. 統合（流動・容易化）原理　**換記法　全記法**

符号の流れ全体を流線化し，容易化して個性的に集約する研究

これらの原理を実現するための符号筆記,縮省略つまり符号化方法として，①単記法，②摘記法，③段記法，④接記法，⑤着記法，⑥交記法，⑦略記法，⑧寓記法，⑨同記法，⑩縮記法，⑪換記法，⑫全記法―を挙げた。

西来路は①単記法は，音韻を表す素材符号の形態とは関係なく，使用率の高い言葉を単画で特記する方法，②摘記法は，思い出すヒントになる音だけ独立して少線化する方法，③段記法は，下段（過去），中段（現在），上段（未来）と，筆記位置を利用して同形の符号の語尾をッタ，ツッテ，ロウと読み分け，同時にこの原則を他にも転用する方法，④接記法は，前の符号に接近させて書くことによって線量を減少させる方法，⑤着記法は，前の符号のある部分（a:中央部，b:末端近く，c:末端）に次に来る言葉の中のある音の符号を付着させることによってその他のものを無形化する方法，⑥交記法は，前符号に，次に来る言葉の後音または尾音の符号を交差させることによって他の音の符号を

無形化し，少線化する方法，⑦略記法は，思い出すヒントになるものだけ符号化して，あとの類推できるものはすべて一定の記号をつけて書かないようにする方法，⑧寓記法は，寓意的な書き方という意味で，ワが小さいから「昭和」，ホが小さいから「保障」，下にラだから「シタラ」，上にニだから「ウエニ」等とする方法，⑨同記法は，同じ形で一画の書きやすい符号を幾通りに読みかえ得るかということを決める方法，⑩縮記法は，合成，複合して具体的に運用するとき，素材符号として個々に定められた本来の記法原則では長大になるものを特定のものに限り縮小して書いてもよいという方法，⑪換記法は，当然考えられるある書き方よりも，さらに簡単に書ける別の方法があるときは，そのより簡単な書き方に転換してもよいという方法，⑫全記法は，素材符号を一つ一つ音の順に原則通り連接していく方法――と説明されている。

９．貴族院式・参議院式の完成

1918 年 5 月 15 日，第一次世界大戦後の好景気に伴い，新聞通信社など産業界の人手不足から議会速記者の充員に困難が感じられたため，貴族院に貴族院速記練習所が置かれた。これによりみずから速記者を養成して，将来の増員に対応することになったと，日本速記年表に記されている。

実は，田鎖綱紀の日本語速記術は，弟子たちによって実用化されて以来，速記技能の訓練は主に，林，若林，佃，安田，荒浪，酒井，長谷川らの速記塾において行われていた。その中で，若林，佃，安田 3 塾の系統を引く人材がこの後継者養成の任に当たった。

貴族院速記練習所が設置されると，第一期の速記担当教官には，速記技手の伊藤新太郎が当たるとともに，同門の川守田武一，安田，丹羽滝男，小宮八十二，月江雋英が貴族院で使用されている基礎符号，略語を収集したのち，複画の田鎖式速記法を整理して指導した。授業の講演は，書記官長の柳田国男が行い，第 1 回の試験を長谷川赳夫速記課長が朗読した。

戦前，戦後の我が国速記界を代表する立場で活躍した，貴族院速記練習所第一期生の荒井庚子郎の記憶によると，授業では同行・同列縮綴法，［エル］，［ケル］，［セル］，［テル］，［エテ］，［セテ］，［ネテ］の書き方，1,000 ほどの略符号，例えば，［アリマス］，［アリマシタ］，［デアル］，［テ］・［ニ］・［ヲ］・［ハ］を学習したり，練習生も，［内閣総理大臣］，［大蔵大臣］といった頻度の高い言葉をすばやく筆記できる略語を工夫したと伝えられている。

伊藤の後任は，同門の佃門下の薦野孝郷が速記符号を指導，第 3 期は木下蔭高，第 4 期は月江，第 5 期は木下が，それぞれ自分が書いている速記符号を教えた。その後，佃の流れの安田やその門下，山田到の系統と，月江の系統の畑田明，久野安一，一方木下門下の入内島修一の系統が貴族院，参議院の速記法改良と速記者養成の柱となった。

参議院において本会議，委員会の発言記録を作成する速記者たちは日夜，速記符号を工夫，改良した。それらは各人それぞれに変化していった。現場で各速記者が獲得した優秀な符

号を共有する気風のもと,また指導者は優れた符号を学びやすく解説,体系化し,間違いの少ない符号をカリキュラムに取り入れる雰囲気があった。

符号の改良を重ねる中で,有志が集まって 1923 年 7 月に安田宅で貴族院速記技手会附属速記研究会の前身となる研究会を発会した。一番の関心事である単画への改良に関する議論では,結局複画を土台にした折衷でいくことに意見が一致したという。こうした自発的な方式改良研究活動は 9 年間ほど続いたが,貴族院の場合,自分たちの符号をよい符号にしたいという動機が中心で,当時,統一符号をつくる機運はなかった。

貴族院速記練習所,参議院速記者養成所では田鎖に始まる複画,折衷,単画の定義を次のように決めている。すなわち「複画式」とは,基本符号五十音のうち,ア列,ア行のみ直線または曲線で,その他はすべて小半円または小弓形を尾端につけて表し,「折衷式」はイ列の［キ］以下あるいはオ列の［ノ］以下のみ小半円を尾端につけて表し,「単画式」は五十音全部を直線または曲線で表すとする。

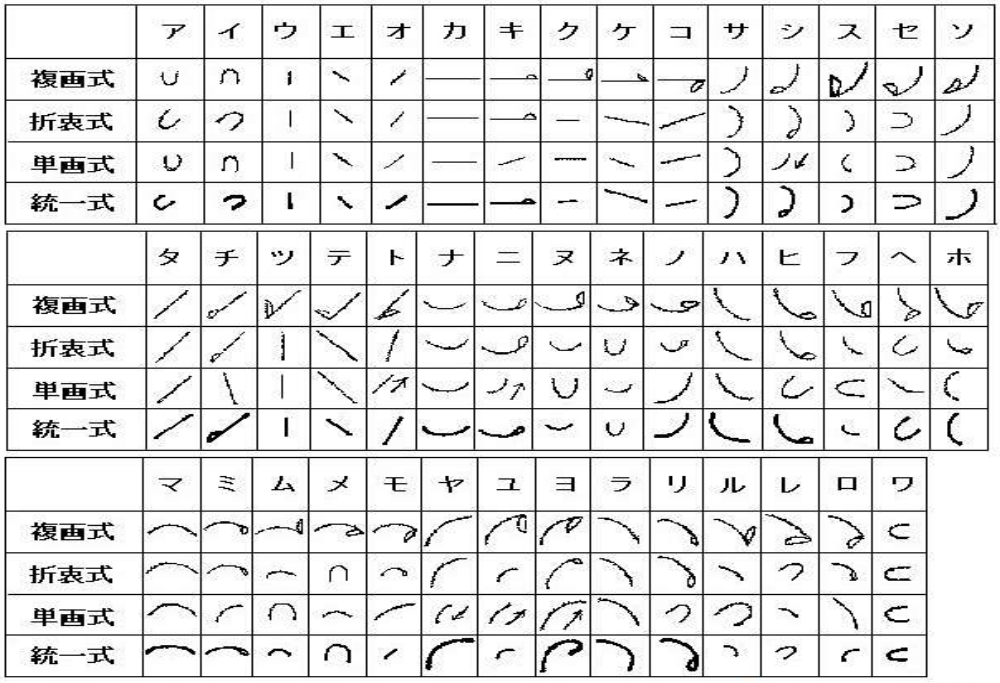


図 2-25　田鎖式から貴族院式・参議院式への基礎符号の変遷

注：貴族院速記練習所参議院速記者養成所 80 年史　442p.

統一式は折衷式（統一）として収録された符号である.　　兼子次生作成

そうして,複画符号は貴族院速記練習所第 1 期生(1918.5-1920.3)から参議院速記者養成所第 3 期生(1948.4-1950.3)までに指導された。その後,より高速度の発言に対応させるために,参議院第 4 期生から折衷符号と単画符号が指導されることになる。図 2－25 は貴族院式・参議院式の基礎符号である。

貴族院,参議院における速記学研究の成果として,1937 年には佃門下の安田勝蔵は字音語の調査解析成果を「日本速記法上に於ける漢字音と其の略字法則の研究」として刊行した。

字音語の音列の規則性を速記理論に用いる手法は, 林甕臣やガントレット式, さらに中根式において中心的な字音語縮記法として取り上げられていた。それに対して先行する田鎖式系統においては, 字音語の筆記法は, 貴族院式でも, 二音縮字による対応が行われてきた。安田は上記研究書において中根の縮記法による提案に関して, 歴史的仮名遣いのレベルで当時の日本語における音列の法則を解説した。

1938 年, 山田は貴族院式初めての教科書として, 師の安田と共著で「日本語速記法」を刊行した。その中で, 山田は体系的に理論を構築し, 文法に則った省略法を解説している。それは本流田鎖式系統の理論研究の成果の一つであった。

山田は「日本語速記法」の序に「旧来の如き便宜主義的な速記法では現代人をして首肯せしめざるのみならず, 速写能力も行詰り, 益々速記術の欠陥を暴露するのみである」と悲壮とも受け取れる決意を示していた。畑田は, 山田が貴族院式, 参議院式の省略法を理論的, 体系的に構築し, 文法に則った省略体系を整えたと賞賛する一方, 「山田は“行う“をぎょうにんべんの下部分を取り去った符号をつくったり, 中根式がとった訓音換記法やインツクキ法を採り入れたりするなど, 寓記法も好んで用いた」と, 実用的な方式体系を目指したとする。

［単画符号への挑戦］

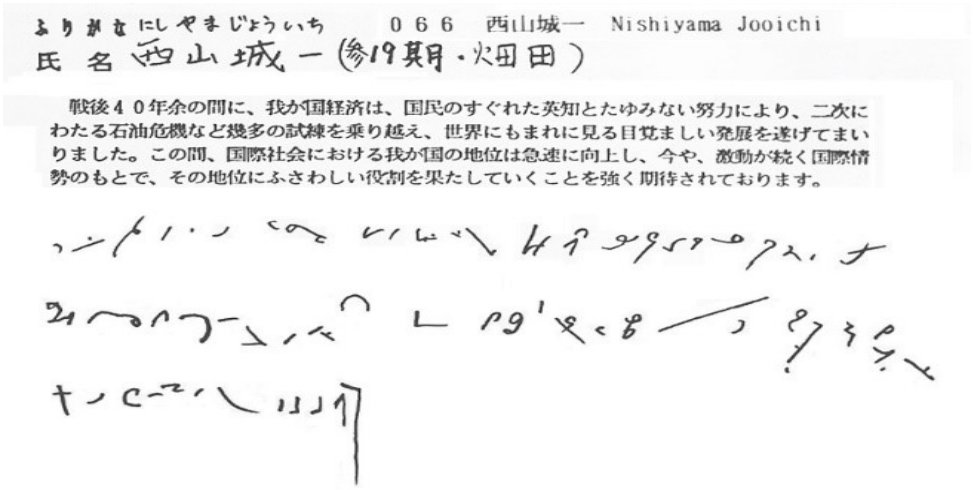


図 2-26　参議院 19 期生の単画符号の文例

複画から始まり折衷を指導して, 単画符号を完成した畑田は, 野口英彦, 田口綾夫－井東里美を育てながら, 酒井の流れを汲む高野章三, さらには久野の流れを汲む紺谷赫へも単画式教授陣の輪を広げた。

「1 画の価値が 1 音と 1 字, ものによってはせいぜい 3 音。これを半分の画数で書けたら速記は楽だなと思った。すなわち単画だ。だから初めから折衷は眼中になかった」と後年語る畑田は, 「字音の 2 音 1 画を 3 音, 4 音へと切り込まなければいけない, 1 画でも切り込もう」と単画理論の構築に突き進んだ。貴族院にも採用され始めた中根式の速記者が書く

速記符号を見ながら,「考えてもいないような節約ができる書き方も可能だ。略字の形をとらない略字がつくれる」と畑田は参議院単画符号の可能性に期待した。反面,「ただ,用言は非常に簡単にできるが。だが,体言ができない。用言・体言の比例をとるために体言の略字がどうしても必要になる」と単画符号にも課題があることを見抜いていた。

図 2-26 の参議院速記者養成所第 19 期生の符号は,畑田が最後に指導した西山城一の単画符号である。

また,紺谷は,単画符号を用いれば「社会保障」を 1 画で書け,「財政投融資」を 2 画で書く。6,7 音の一画化を可能にしたくなる」と単画符号に魅せられていた。

木下の流れを受けた入内島は,複画を伝え続け,豊島信夫－筒井園子,山岸正文と廣田桂助－町田睦美を育てた。

符号研究に当たって,山田は参議院の速記録から日本語の広がり,組み合わせ形式,頻度の統計を克明にとるとともに,音列と符号の最適な配分を計算してきた。速記発表七十周年記念誌「速記・研究と回顧」には,その手法で畑田は単画符号開発のために行った基礎調査,筆記実験データをもとに,単画符号の姿を示した。

1946 年春,占領下で衆議院選挙が行われ,続いて召集された第 90 回帝国議会で憲法改正がテーマになったが,それらの審議時間が長時間にわたった。発言速記録の作成需要が急増して速記者不足が深刻になり,そのため参議院速記者養成所では練習生（二年生）がかり出されて委員会に出ることがふえた。また衆議院においても学習途中の練習生に口述して反訳を手伝わせる復演方式がとられるようになった。貴族院においては参議院になってから,議場における発言速度が平均的に速くなり,速記法の性能を改善する必要性が高まっていった。復演のほかに,テープレコーダーを補助に用いることなども行われて,速記を取り巻く環境が次第に変わっていった。

参議院式における単画速記符号の研究,指導の歴史を振り返ってみよう。

荒井が貴族院速記練習所で学んだ貴族院複画符号は図 2-25 の上段で示されるものであったが,直弟子たちが現場で磨き上げた速記符号は各人それぞれ変化していった。図 2-27 は,山田,畑田らから指導を受けた烏田聰(貴族院第 24 期生,入所 1942.10-卒業 1944.9)が書いた複画符号であり, 折衷符号の直前のものである。24 期生は 3 カ年の就業期限が短縮されて 1944 年 9 月に二学年第三学期試験を受けたのは 7 名のうち烏田と島田一郎 2 名だけで,島田は間もなく出征して戦病死した。翌 1945 年早春には東京大空襲があり,ほとんど速記の練習ができなかったという。

ある意味で, 符号式において,速記とは,聴覚言語記号を聞き取りながら音韻の同定と意味を理解し,それを視覚言語記号の一種である速記符号を用いて符号化 Coding して固定し,そののち視覚言語記号の文字へ転写 transcript する活動を実行する中間言語メディアである。

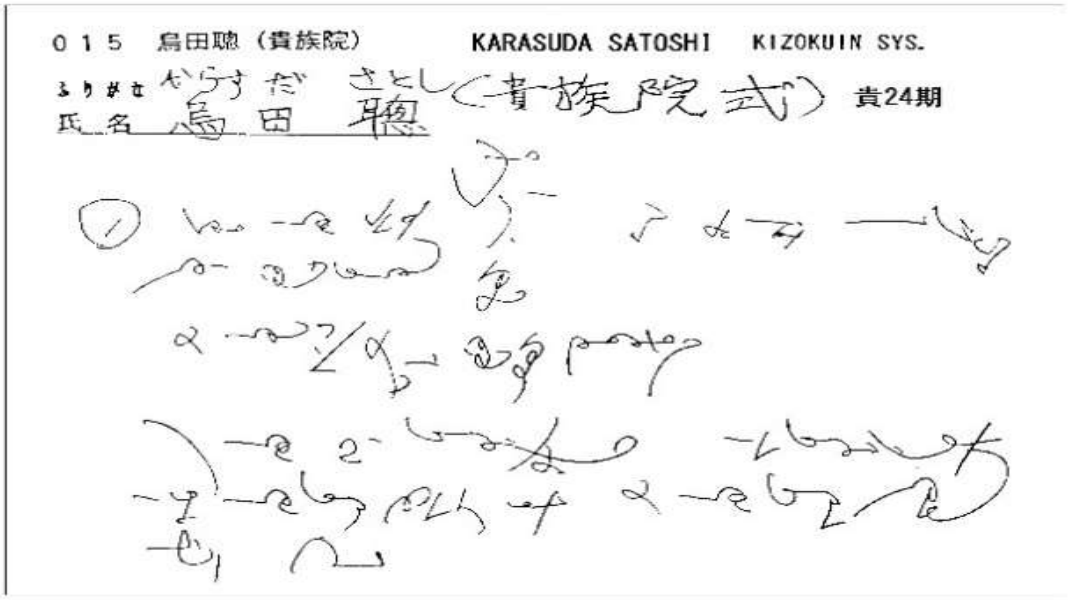


図 2-27 最終期の貴族院複画符号の文例

符号式速記法の体系は，言語音を固定するための基礎符号群と，単音，音列群を簡単な形で符号化する縮記法，あるいは単語単位に言葉をあらわす表語法，さらに意味に対応する形象群を用いる略記法，冗長性を利用して最大限に符号を省く省記法で構成されている。

折衷符号研究に当たって，山田は参議院の速記録から日本語の音韻，表記の頻度，多様性，組み合わせ形式等のデータを克明にとるとともに，音列と符号の最適な配分を試算した。

一方，畑田は単画符号開発のために行った基礎調査，筆記実験データをもとに，単画符号のモデルを速記発表七十周年記念誌「速記・研究と回顧」に提起した。こうした研究データの分析に基づいて，聴覚言語と視覚記号体系の両面から速記文法を検証する姿勢は参議院における田鎖式系統の理論研究の流れであった。

山田と久野は参議院式折衷符号の確立を目指して第 5 期から指導を開始し，第 6 期までの担当には高野省三が加わり，折衷符号への転換を進めた。

一方，畑田は，長年取り組んできた参議院式単画符号に成功の見通しをつけると，1949 年の第 4 期に入内島所長の承諾を得て満を持して複画式から切りかえた。切りかえは大胆に進められる。5，6 期を挟んで，1952 年の第 7 期に畑田所長がＡ組を担当して再開，高野が担当したが，この期には，のちに日本速記協会主催の 1954 年度高速度競技会で第一席の成績を上げる阿波郁子が単画参議院式を学んでいた。

こうして将来，10 分間 3,500 字前後の卒業試験が可能となるめどはついた。ただ，符号研究においては，簡単になった速記符号に起因する誤訳をいかに防ぐかという課題，さらには略符号の体系を整えるという課題が出てきた。その後，畑田の成果を受け継いで，紺谷赫が単画符号研究と指導を続けることになる。

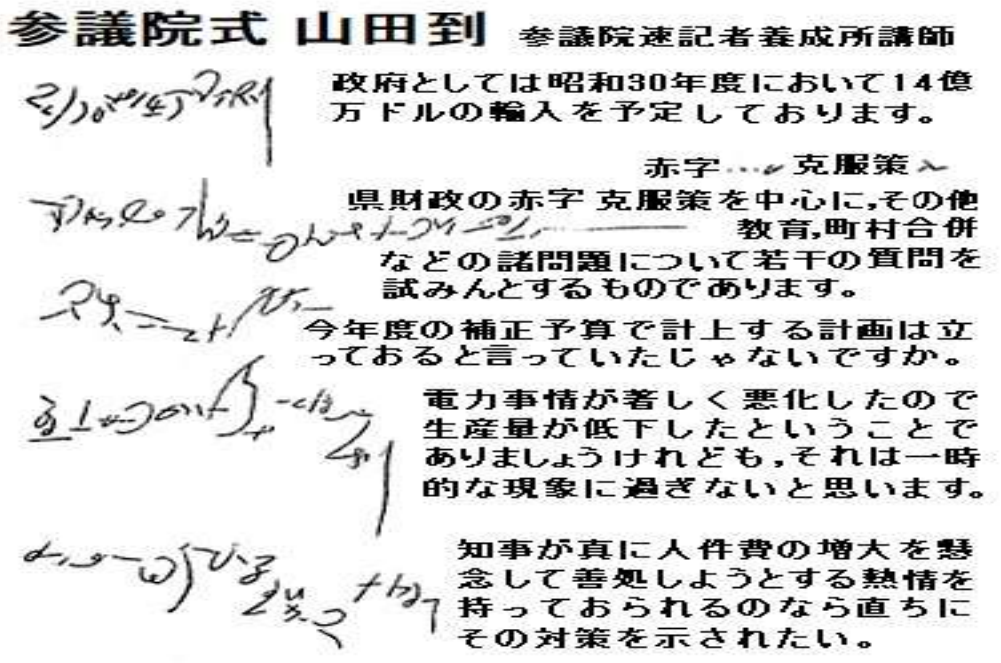


図 2-28 参議院式折衷符号の完成者, 山田到の符号文例

ちなみに第 7 期, B 組では山田が新たな複画式の符号を教授した。それはかなり単画式を取り入れたもので, もはや純粋の複画式は完全に影をひそめていた。つまり折衷式の完成形であった。図 2-28 は山田が書いた符号である。

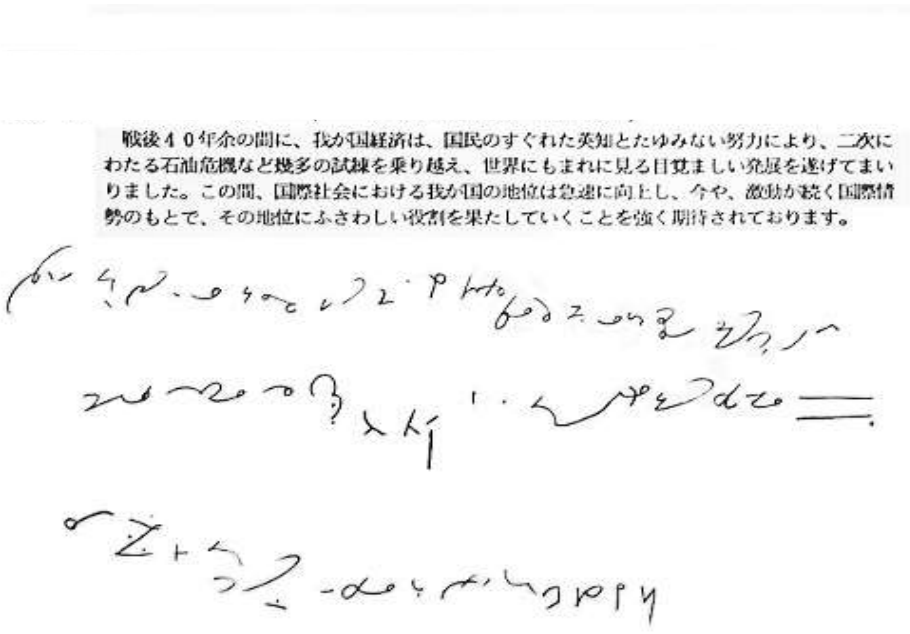


図 2-29 参議院式新折衷式の符号文例

山田は，参議院式新折衷派の特徴として，その構成を品詞別にして特に動詞，助動詞等

の活用言に主力を注いだとする。例えば動詞では,「暖」「厳」「穏」「健」「豊」などの語幹に台字と呼ぶ速記符号群を設定し,「な」「なり」などが続くときに定型的に対応させる規則や, 動詞に接続する「られ」「らる」などが定型的に接続する場合の規則的な書き方を設けたことが特徴であると説明している。

山田は戦前から戦後にかけて複画から折衷に至る基礎符号の改良研究と速記者の養成に貢献したが, その中で, 福原諄治－佐々木実, 須和恭男－高橋正喜・田中仁, 牛木定男―佐藤俊記, 津脇尚志－永田満, 高柳郁朗らが使命を担った。1986 年, 第 41 期からは新折衷式に統一された。参議院式において高速度の発言に対応する逐語型の速記理論は完成されていた。図 2-29 の 41 期の符号は, 高橋の指導によるものであった。

複画から折衷派を確立, 指導した山田は 15 期の長期にわたり養成, 訓練に当たり, 片や複画から単画符号を開発した畑田は 7 期の間, 後進を指導した中心的な研究者であった。参議院からは, 各国議会制度の研究を初め憲法研究で知られる前田英昭, 速記史の豊島信夫らを輩出し, 速記の研究時代の花を咲かせた。ただ, 2006 年, 養成所が閉鎖され, 参議院式速記法の訓練は終了した。

図 2-30 は, 貴族院式, 参議院式の文例の変遷である。現実に書かれる速記符号が一貫して継承されている。

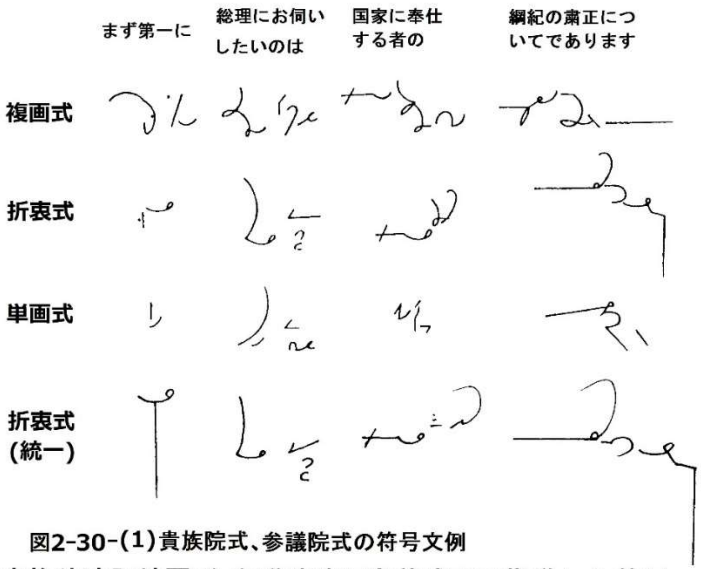


図2-30-(1)貴族院式、参議院式の符号文例

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号) 出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史　1999年3月1日発行　兼子次生整理

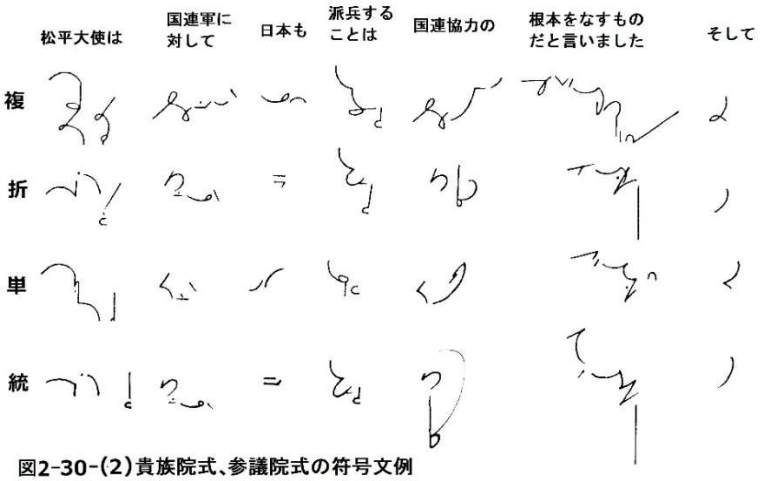


図2-30-(2)貴族院式、参議院式の符号文例
貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院 4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号)
出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史　1999年3月1日発行 兼子次生整理

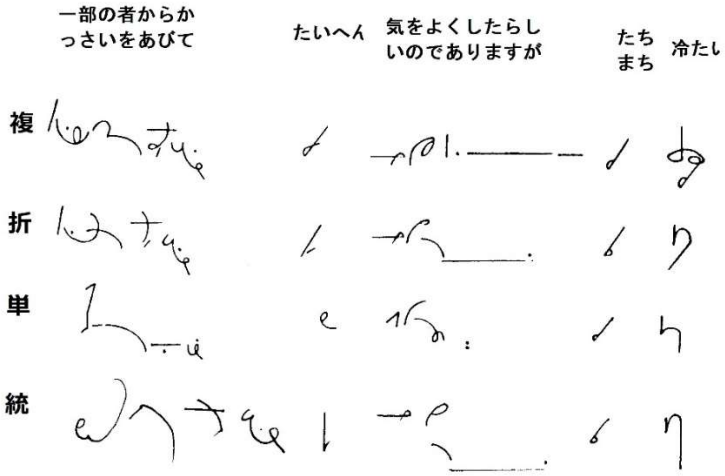


図2-30-(3)貴族院式、参議院式の符号文例
貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院 4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号) 出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史　1999年3月1日発行　兼子次生整理

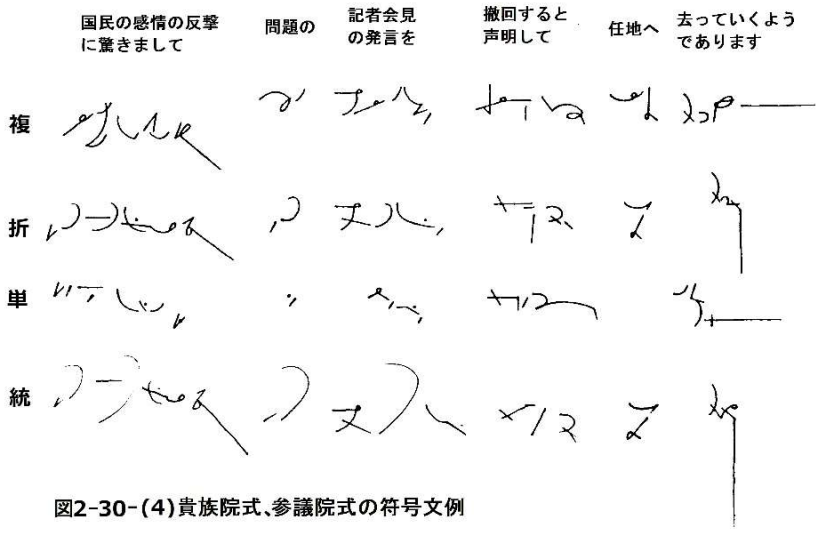


図2-30-(4)貴族院式、参議院式の符号文例

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号)
出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史　1999年3月1日発行 兼子次生整理

［まとめ］

国会の速記採用は田鎖式を3つの系統へ発達させた。国会の主流となったのは,若林の門下であり,その中でも佃は有能な後継者を供給して貢献した。衆議院において佃系の長谷川は石川,また森田は単画化へ向かう流れをつくったほか,若門の友野は西来路を育て,ほかにも同門の荒浪市平は国会には入らなかったが,方式の進歩面などで貢献した。

また,貴族院においても若門の木下蔭高が速記者養成に従事するとともに,佃門下の月江雋英が折衷派の山田,久野安一,単画派の畑田を育てて方式改良に寄与した。

在野では田鎖綱紀の門下からは 1888 年,藤木顕道が濃淡の区別を廃止した完全複画方式を公表したことがある。そのほか,新田鎖式から複画派の野崎仁太郎が 1906 年,サ行,タ行などの基本画線の変更を加えた野崎式の改良案を出し,一方丹羽滝男は1907年,複画系で問題となっていた母音サインの崩れを防ぐために基礎符号を改良した。新しく折衷派の熊﨑式が登場したのちは,折衷派の民間方式が盛んに試みられていく。

II 田鎖式に続く新方式の派生　～折衷派の出現と台頭～

１．はじめに

初めて日本に紹介された速記方式は幾何派だった。一大冒険であった帝国議会における速記の成功は,田鎖式の信頼を確立し,多方面から速記界への新規参入を刺激した。国字改革を目指した国学者，林甕臣初め,ローマ字運動の佐伯功介,川上晃,仮名文字運動の岩村学,マツサカタダノリらが新文字の一つとして速記考案を競った。このように国字改革運動から新方式の名乗りが続き,幾つかの方式が地歩を固めた。武部は,1955 年ごろの時点で全流派合わせて 70 を越える方式が生まれたと書いている。

最初の日本語の速記符号は,欧米流の幾何図形を取り入れて子音と母音の音素を組み合わせて生成される複画符号であった。続いて筆記速度を高めるために画数を減らす折衷符号,さらに一音節一画を目標とする単画符号へ進化が図られた。

折衷派のガントレット George Edward Luckman Gauntlett（1868.12.4―1956.7.29）,単画派の武田千代三郎(1867.5.27-1932.5.26),単画派で最初に実用化された中根正親(1890.10.10-1984.8.16)の３名が,初めてピットマン式に立脚して,新しい流れをつくった。

五十音 44 文字の中で一画化された基礎符号の割合を示す単画符号比率 single-stroke ratio を見ると,複画符号（田鎖式初版）では 31％であったものから,折衷符号（ガントレット式）では 43％へ進み,さらに単画符号（中根式）では 68.1％（ただし濃線,加点を除く）へ高まった。この傾向は太平洋戦争後,線長を 3 種類,4 種類へ増加する方向へ向かい,一音節一画の純単画符号へと進んでいく。

２．折衷派と呼ばれたガントレットの独創性

ガントレット[#3]は,英国で学んだピットマン式の経験をもとに,1899 年,ガントレット式日本語速記法を公にした。彼は英文速記の中で，半草書派のグレッグ式 Gregg system ,正書法筆記体派のオーシック式 Orthic system [#4]にも堪能であった。

田鎖式初版はグレイアムにならって父音の画線符号の長さを 1 種類としたのに対して,ガントレットはオーッシク式のように,線長を長短 2 種にふやすことによって打開しようとした。それは線の長さによって母音を表そうという線表象の戦略であった。その結果,田鎖式では１画で筆記できる符号がア列だけであったのに対して,ガントレット式では倍にふやすことを可能にした。母音を除いて書線に２種類の長さを導入する発想は それまで日本の研究者になかったが,有望な手法と受けとめられ,その後主流となった。複画符号と単画符号の中間点にある現実的な符号として,折衷派と呼ばれた。

ガントレット式は,ピットマン式の子音符号を音節符号の母型としてア列に配分し,［P］を［ハ］に,［R］の直線符号を［ラ］に,［W］を［ワ］に,［TH］(有声音）を［ヤ］に割り当てており,ピットマン式を日本語に適応させた派生方式であった。

1890 年に，ガントレットはカナダを経て来日し,東京高等商業学校,千葉中学校,東洋英

和中学校,麻布中学校,岡山第六中学校,金沢第四高等学校,山口高等商業学校等で語学を教授したが,千葉時代から日本語速記法の開発に着手し,1899 年「新式日本語速記術」を刊行した。「私が千葉に居た時は割合に職務が閑散であったので,(中略) まだ青年で元気に満ちていた私は,無法にも,更に別な新式な日本語速記術を自分自身で発明して見ようと決心し,ピットマン氏の式を基礎として之に着手した」[#3] と回顧している。図 2-1 にピットマン式, 図 2－32 にガントレット式の基礎符号をそれぞれ挙げた。

ガントレット式の創案宣言には,田鎖式との違いを(1)文字(速記符号)の長短によって母音を異にすること,(2) (速記原文帳上の)罫線内における文字の筆記位置を決めたこと,(3)「わな」及び鉤形(楕円・マル鉤)を用いること,(4)同行累音法(同行縮字法),チクシ法,四倍形符号,語尾母音法,従属母音法及び二重母音法,複音文字,前置符号等の考案を創始したこと――とし,それらを独創点として挙げた。

また,日本語の音列の特徴を利用して,異なる音に対して同じ線を使用してもよい場合を挙げた。(1)パ行の半濁点がその語の中間か終わりにあるとき省いてよい,(2)/チャー/,/チュー/,/チョー/,/ジャー/,/ジュー/,/ジョー/,/シャー/,/シュー/,/ショー/の長音点の加点は省いてよい。また,小円サインは(1)マス動詞記号の前,(2)/テ/,/タ/の前にある場合は省ける,(3)日本語では促音は濁音や/ナ/,/ハ/,/マ/,/ラ/,/ワ/の前につかないから,促音の書き方で撥音を示すものとする。武部はこれが以後,日本語方式の開発方針の一つとなったと見ている。

「英語にては母音よりも子音を記す方肝要なれども日本語に於いては然らず。子音母音共に明記せざるべからず。英語にてはＫＫの子音に適宜の母音を付けて読むも七, 八語以上に用いらるることなし。然れども日本語に於いては優に二十六語に用いることを得るなり。是を以て字母を以て記す法を用いることを得ず。」とガントレットは英語と日本語の音声構造の相違点を挙げている。

そうして独創の第４点として,ガントレット式では,日本語固有の言葉における音列の規則性に着目して,同行累音法を立てた。その一例として,/ka/,/ki/,/ku/,/ke/,/ko/のように同じ子音を持つ同行の音節が続く場合,線分である第二音節の子音ストローク部分を省き,母音サインだけを書いてあらわす方法を考案した。この同行累音法によって,Kaki → Kai(Oyster), Sosogu → Soogu(flow into) , Tatoeba → Taoeba(for example) のように併存する子音の後方部分を省いて書くことにした。

日本語の音列にある母音の連続現象は先人が見つけていた。開音節の日本語では,/kokoro/,/akasaka/のように同じ母音が繰り返され,あるいは同じ子音が繰り返されることがある。同じ母音が続く場合,清澤は「傍聴筆記新法獨學全」で略字法において「同格の符号連続するとき其一方を取って代用するが如き」とし,また丸山の「ことば乃寫眞法」では畳呼のア経(行)畳字においても認められる。この筆法は,1883 年,若林が矢野の依頼に応じて口述速記した符号の「紀元前」において同行累音法つまり同行縮字法として運用された。つまり,田鎖綱紀の発案が先行したと考えられ,ガントレットは同じ着想を得た

こととなる。

また,日本語の語彙において, 音構造で 2 音目に/Chi/,/Ku/,/Shi/ が出現する音韻特徴を見出してチクシ法と呼ぶ縮記法を創案した。これら 3 尾音に対してストロークには従属するサイン（例えば大円,小円,フック）を充てて表記することにした。これにより,速記符号における単位符号当たりの音声負荷量を高めることができた。ちなみに,速記技術において縮記とは,図形的には「ストローク」(画線）と呼ぶ基本的な表音符号に対して,より少ない筆記負荷の「サイン」(微小記号）と呼ぶ簡単な表記に置き換えることをいう。

さらに,有声音のば行(/ba/,/bi/,/bu/,/be/,/bo/)の音が言葉の中間に出現する場合,原則的に無声音のは行(/ha/,/hi/,/hu/,/he/,/ho/)と表記を同じにして区別しない。例えば/habataku/⇒/hahataku/,/hibiki/⇒/hihiki/ のように,連濁現象を利用して正しく読めることを利用した。

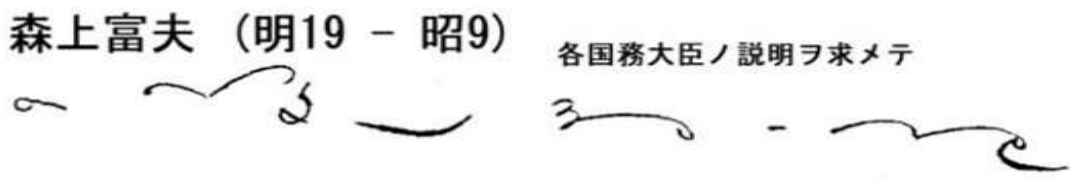


図 2−31　ガントレット式の符号文例　森上富夫による

ほかにも,拗長音の/chah/,/chuh/,/choh/,/jah/,/juh/,/joh/,/shah/,/shuh/,/shoh/における長音符を打たず,拗短音と区別しないこととした。

日本語では/sokki/,/tohha/,icchi/などのように後続の子音を重ねて促音を表すが,促音便の例外となる/na/,/ha/,/ma/,/ya/,/ra/,/wa/の前に促音が出現しない現象も見出した。

ガントレット式は,規範符号を幾何図形に求めた補いとして筆記運動つまり画線の連綴法の分析と人間工学的な対策をとった。

1) ピットマン式にならって,ある同じ音に対して順逆に書記方向が異なる 2 種類の速記符号を用意した。そうして前後の線とのつながり関係に鈍角と鋭角の選択肢がある場合,鋭角接続を優先（鋭角選用の規則）する。

２）曲線を接続するとき,2 種類の書き方がある場合,同じ方向に回転する組み合わせを良とする。例えば[ル],[ム]には書記方向が正反対のものがあるが, 同じ回転方向を採る。その理由は, 前進（順流）方向は後退（逆流）方向よりも速く書けるものである。

ガントレットは「日本語速記術」（３巻）を著す際, 日本語速記法を創案するに当たって,アイザック・ピットマンに表敬の書簡を送り,また田鎖式の促音法の優れた点を見て,その着想の利用の許しを田鎖綱紀や若林玵蔵,林茂淳に請うていた。

また,ガントレットは教職に就いていた学校で自式を余暇に指導した。ガントレット式

で成功した速記者として森上富夫があり，田鎖式が独占していた国会の速記者採用試験に最優秀の成績で合格，田鎖式以外で初めて衆議院速記者となった。また藤田直助[#5]は田鎖式から方式転換に成功し，普及活動を始めたが，25 歳で夭折した。

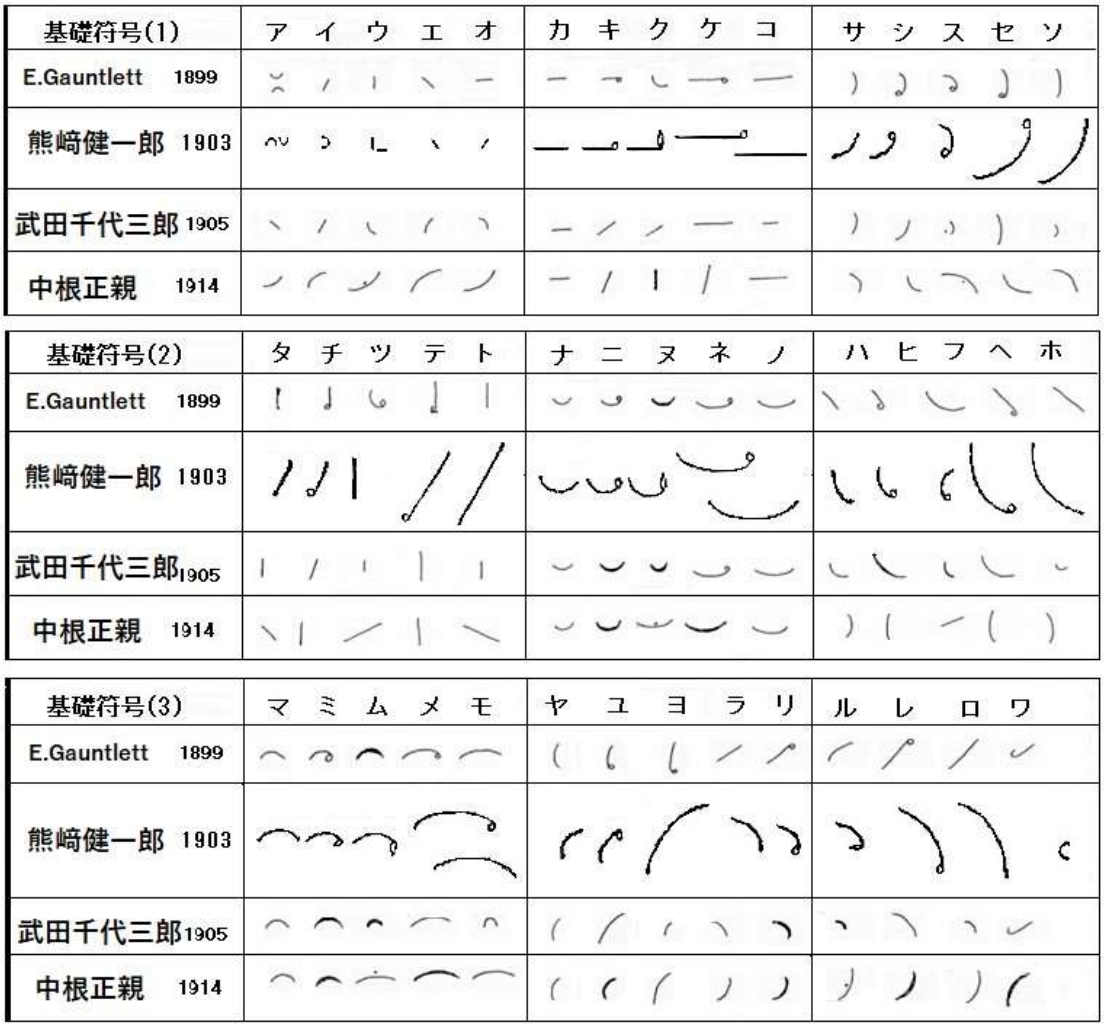


図2-32 ガントレット式、熊崎式、武田式、中根式の基礎符号表

ガントレット式は広く普及することはなかったが，その理論は折衷派の熊崎式に影響を与え，のちの早稲田式へもつながる方式であった。また，ガントレットは，ピットマンに日本語への翻案の経緯を報告しており，ピットマンはガントレットの業績を評価していた。そうした経過から，ピットマンは，ガントレット式の英文解説書「Japanese Phonography」を外国語速記法の一種として出版したが，これは海外で発行された日本語速記法の最初とされている。[#5]

また，衆議院に在籍した森上富夫は 1934 年，「ガントレット式日本語速記術」を出版した。森上の登場はガントレット式の評価を高めただけでなく，衆議院速記者養成所が発足したのちは，教授として招請されて，田鎖式・衆議院式の折衷化の研究に貢献した。ガントレッ

ト式は，田鎖系だけだった日本語速記界において，新たな世界を切り開いた。

３．幻の単画派「武田式」の衝撃　～官選知事の新規の方式提案～

日本語の音節文字は,実際の発音と異なる場合がある。しかし,音声言語を文字化するに当たっては,速記符号が文字に対応するものであれば十分機能する。

武田千代三郎は 1904 年 7 月,雑誌太陽に「速記術の実用」のテーマで論文を投稿した。その趣旨は,田鎖式を起源とする複画派,ガントレット式を起源とする折衷派の次に出現する速記の流派は単画派であると予言する論であった。[#6]

武田は前年,山口県の官選知事を退任して 1905 年の山梨県知事に就任するまでの間に,東京大学時代に学んだピットマン式を参考にして,一音節一画のストロークを配分する幾何派の基礎符号を考案した。その成果を同年 3 月 15 日（水）～4 月 22 日（土）の新聞「日本」紙上で,日本語で初めての単画派となる武田式速記法として公開した。

初の単画派,武田式における基礎符号の単画符号比率は 75%へ高まった。ただし日本語速記理論における単画の概念では,サイン（濃線,大円,小円,カクカギ,マルカギ,加点等）を画数計算に含んでいない。

武田は手書き版の「武田式全畫體速記法」(1905 年 5 月,B5 判 81 ページ)において「これは英国速記学界の泰斗たるアイザック・ピットマン郷の定めたものに基づいて作ったのである」と素性を書いた。そして図 2-32 に示すように，基礎符号を武田は，［K］を［カ］,［S］を［サ］,［SH］を［シ］,［T］を［タ］,［CH］を［チ］,［N］を［ナ］,［NG］を［ニ］,［F］を［ハ］,［M］を［マ］,［N］(下降)を［ヤ］,［R］を［ラ］,［W］を［ワ］としてピットマン式の基礎符号を自式の基礎符号に配当したとする。ここで一音節を一画の基礎符号で表すことができるようになり,複画符号で用いていた尾部の母音のサインを略字体文字と名づける縮記法に用いることにした。

彼はその後も神宮皇學館長,大阪市立高等商業学校長などの官職を重ねており,それ以上の速記研究,速記の普及に従事することはなかった。武田式速記法についての質問も「当時の研究者たりし衆議院速記技手,長谷川篤に委して応答せしむると云うような訳であって,何等発達の途が講じられなかった。（中略）故に現今に至るまで,武田式速記術を標榜して立って居る技術者は,当時同邸に寄宿して居って其教を受けた赤根谷友三郎唯一人あるのみである。」[#5] という状況であった。ほかに,菅原登は，中央大学事務局速記職員,佐藤久仁男が武田式速記法を学んだとするが,学習者は数人出たものの,実使用には至らなかった。武田式は,その後の日本語速記法の研究に大きな刺激を与えた。

４．田鎖式系統の成果を集約した熊﨑式の登場と折衷派の展開

［熊﨑式の登場］

大正時代初期の主な速記流派は，田鎖式，ガントレット式，武田式及び熊﨑式の 4 種であると，熊﨑健一郎（1881.5.5－1961.8.25）は「新式速記術独脩」（1914）の自序に書いた。

新版の新田鎖式を学んだ熊﨑は新方式の立案に乗り出し，1906 年「新式簡明速記学」を出版した。同書には「内外諸種の各式を参考して其長所を折衷し，之に自己創意の新案を加え，専ら記号の簡明と速記力の増大とに重きを置き理論に拘泥せず，実用を主として考案編成したものである」[#7] と，田鎖式，ガントレット式，武田式を土台にして組み立てたことを述べている。その動機は「顧みれば自己の技倆は遅々として未だ上達の域に達したりと云うを得ず拮据勉励夙夜怠らずと雖も意独り先んじて技之に伴わず予此時私かに惟らく之れ予が勉学の足らざるに非ずして速記術の不完全に因れるならんと」つまり速記法体系の完成度に疑問を持ったからである。

熊﨑は，新式の特徴として(1)速記文字を大中小 3 個の円形より割り出したこと，(2)五十音の記号をおおむね単画若しくは単画に等しき曲直線を以て組織したること，(3)線の長短区別法によりて記号の簡捷を計りたること，(4)使用最も多きサ行，タ行に本変二様の書き方を設けたこと，(5)記号は悉く淡線のみなること，(6)縮綴法と称する 6 個の特殊記号を応用して文字の連綴を短縮し運筆の便を計りたること，(7)略字の使用数を極めて少数に減じ記憶応用に甚だ容易なること，(8)脱漏，(9)縮綴法応用の結果，1 字にして 2 音に読み得られる複音記号の制を定めたること，(10)新たに省略法を設け，就中僅かに 10 個の特殊記号を用いて言語文章中の動詞其他を省略するの法を定めたこと等であるーを挙げている。

図 2-32 に挙げた熊﨑式の基礎符号は，ガントレット式の設計方針を取り入れて，次のような特徴を備えた。

1)複画方式において１音節を示す「ストローク＋サイン」で２音節をあらわすことを可能にした。（同画倍音）熊﨑式の単画線比率は 47%に高まった。

2）縮字規則を設けて筆記線量を減らし，略字依存を軽減した。（縮記法による全音記法）

3）カ行，サ行，タ行を含む言葉が日本語に多いので，サ行，タ行には順逆 2 方向で書く線を割り当てて，鋭角選用の規則により連綴しやすくした。（鈍角接続の排除）つまり，二線の接合に二様の接続型がある場合，鋭角で綴れるように，使用頻度の高いサ，タ行に始点Ａ⇒終点Ｂ，始点Ｂ⇒終点Ａのような順，逆の書き方を設けた。

熊﨑は自式の優劣を試すため 1906 年，衆議院の採用試験を受けた。結果は，受験者 28 名中二位の成績で合格したが，国会速記者への進路をとらず，新聞社にとどまった。

熊﨑は速記独習可能論を展開した。創案者自身が電話速記に従事していた関係もあり，熊﨑式は電話速記者を必要とする新聞，通信社などに広がった。つれて，熊﨑式を改良する研究者が続いた。こうして田鎖式から派生した複画派が民間において折衷派へと変化していった。

新聞社が生まれたばかりの速記を用いたのは，1883 年 7 月 9 日，郵便報知新聞社が自由新聞社を相手に記事取り消し要求するために若林玵蔵を雇い，申し入れのやりとりを速記させて同月 12 日から 16 日の 5 日間に連載したのが始まりであった。

1890 年 12 月，東京，横浜に電話が開通し，予約電話に続いて 1899 年に東京・大阪間の長距離電話が開通してから記事原稿を電話で読み上げて送稿する手法が一気に普及する。明治憲法の記事送稿時は東京－大阪間の長距離電話が利用できず，電信による送稿法をとったのと比べ，画期的な技術革新であった。

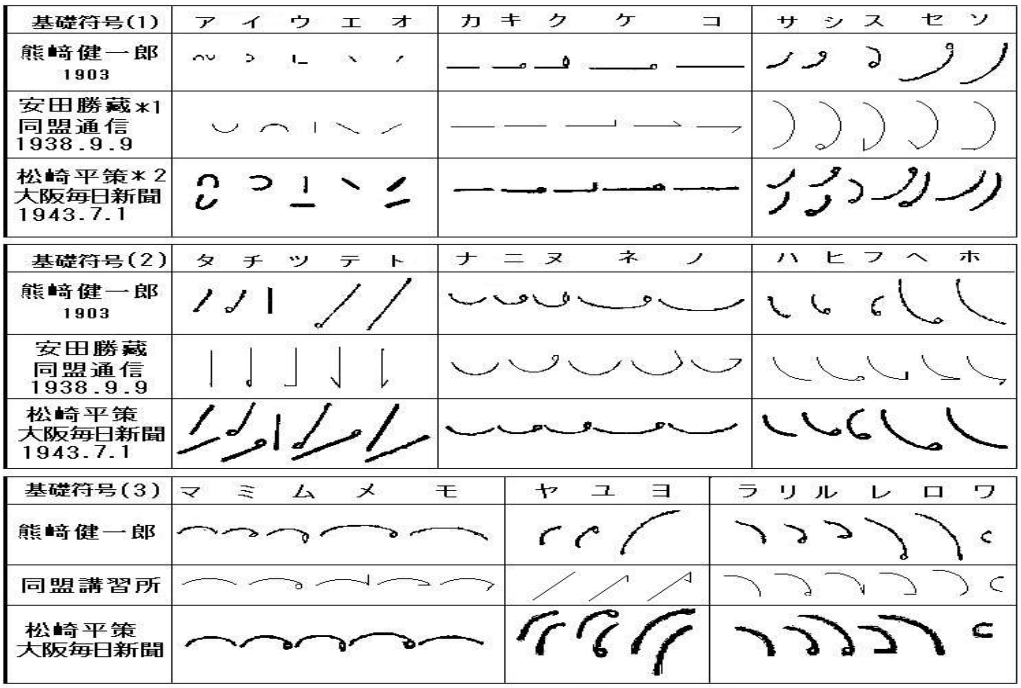


図 2－33 電話速記に用いられた複折 3 速記方式

図 2－33 に電話速記の複折 3 方式の基礎符号を挙げた。商業新聞にとって，速報のため記事の高速送信，大量処理は競争力の原点であった。そうしたニーズに応えて， 田鎖系の速記者が新聞報道市場へ流れた。一方,速記研究者の中では記事受信に適した研究が行われ，田鎖式系佃式の松崎平策はのちに大毎式となる複画式の松崎式を世に送り出していた。さらに青木茂朔は松崎式から大毎式へと改良を進めて，1943 年大阪毎日新聞社は社内養成を始めた。そのほか，取材拠点，取材記者をふやして大新聞が速報競争への時代へ進むと，電話速記者不足が深刻になり，朝日新聞でも社内養成に乗り出した。もっぱら新聞社へ記事を配信する通信社界でも，同盟通信社が安田勝蔵の田鎖系の同盟式で養成訓練に乗り出すなど,折衷，複画派は太平洋戦争末期にあって盛んに電話速記者を育てた。単画派の中根式，国字式等でも電話速記者の供給に力を注ぎ，速記は黄金時代にあった。

話されるとはいえ,書かれた記事を電話で受信する速記は，それまでの話し言葉体とは違って冗長度がない上，固有名詞，同音語，類音語があって難しさが加わった。電話速記ではミスゼロが要求され,また直ちに反訳することが求められた。それは速記者に政治,宗

教,流行,ファッション,野球,文化など全紙面の記事に用いられるであろう豊富な,専門的な言葉を知っている能力が求められたことでもある。

電話速記では頭にヘッドホンを装着する場合もあるが,左手で受話器を保持し,右手で鉛筆を持ちながら右手で速記用紙をめくるような作業現場もあった。そのような速記では,句読点,改行などの筆記が必要で,速度よりも,正確に書けて,完全に読み返せる符号を筆記することが重要であった。狭き門の議会に入れなかった速記者,学習を終えたばかりの速記者が需要を拡大する民間の電話速記に,議会を上回る好待遇で招聘される時代があった。また,地方にも速記の職場が生まれた。1953 年 11 月 3 日には日本速記協会の速記技能検定試験で新聞級(2,300 字/10 分朗読)が設けられて,新聞記事を書き取る技能を評価することになった。

送り手と受け手の協力が電話速記の要であり，朝日新聞大阪本社では 1961 年 7 月，通信部，連絡部が協力して「電話の読み方送りかた」教本を作成し，速記利用のレベルアップを目指した。当時，同社は東京，名古屋，大阪，西部の 4 本社制で，大阪本社管内では地方部 38 版，通信部 34 版の版があり，11 支局から電話送稿が一日 3,000 行(1 行は 15 字)ないし 4,000 行，ほかに書き原稿 5,000 行があった。教本の“はじめに”には，「送稿については，まず受ける速記者が十分に訓練され，ニュース・センスを身につける必要があります。そして，記者諸君の取材の労苦，記者のカンどころが打てば響くようにピンと来るのでなければなりません」とし，「一方，送りの側にも希望したい点があります」と前置きして「最もご理解いただきたいのは，速記をしながら意味が頭に入らないと翻訳できないという点です。どんな有能な速記者でも例外はありません。つまり，送稿にさいして『この読み方で速記者にのみこめるだろうか。この個所は原稿の字を見ないものに間違いなく書きとれるだろうか』という配慮をもちながら吹きこんでいただきたいわけです」と問題点を挙げている。

教本を発行した年の 2 月，岡山で開いた通信会議で若手記者の要望を聞いてまとめたものだが，速記者はニュース記事を速記したのち，漢字電信機（漢テレ）をたたいて反訳文を直接送信テープにパンチを入れ，それを次工程に渡して植字の自動活字鋳造機（キャスター）で鉛活字を割り付け通りに鋳込んで，さらに製版へ回すという画期的な工程変更に新聞業界で初めて乗り出していた。のちに鉛活字を用いない電子写真製版へ進む第一歩に当たり，手書き速記者はイノベーションの荒波に飲み込まれていく時代であった。

1964 年の東京オリンピック時の朝日新聞の速記者の大量確保は電話速記の最後の花だったと言える。そうして日本語漢字テレタイプ技術や電話ファックスなどが普及すると,1980 年代には電話速記は次第に消えていった。

５．牧の新熊崎式が離陸

田鎖式では速記は対面指導で養成されたのに対して，熊崎健一郎はみずから提唱した速記独習論を実証した。しかし，熊崎は創始した熊崎式姓名学（五聖閣）へ転身して速記界からの引退を表明し，独学者の熊崎式改良研究，普及活動を自由にした。著作権に縛られることなく，自由な方式改良や普及指導への動きを促進し，新方式を名乗る者が続いた。

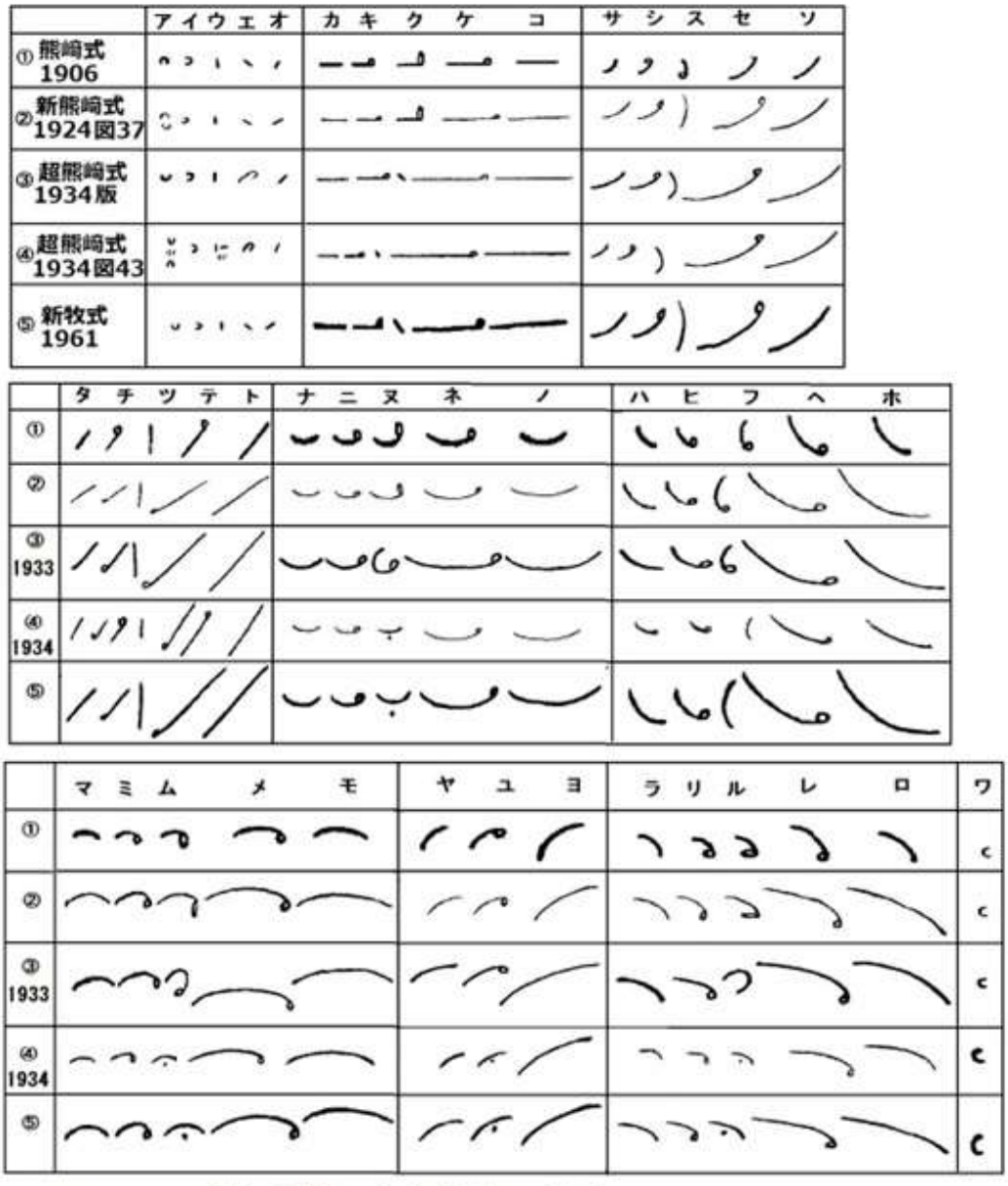


図2-34 牧泰之輔の改良符号の変遷 兼子次生作成
（熊崎式 ⇒ 新熊崎式 ⇒ 超熊崎式 ⇒ 牧式 ⇒ 新牧式）

牧泰之輔は独習した熊崎式の技能を活かしてフリー速記者として関西で実務に就きながら速記教育を行う一方，濁音符号の新設や高速度理論の研究に力を注いだ。牧は基礎を熊

崎式に置いたが,超中根式の森卓明を通じて中根正親の逆記法理論を取り入れたり，中根式や毛利式からラ行音の下段略記法等を導入した。初めに新熊崎式と称したが,森沢諱行が新熊崎式と命名していたため,森にならって「超」を冠して超熊崎式と呼んだりしながら,最終的には牧式，新牧式に改称した。

牧式は基礎符号の特徴として,

1）濁音［ジ］,［ゼ］,［ゾ］,［ド］,［ジョ］,鼻音等の専用文字をつくり,濁点を要せず,濃線化しないで濁音や長音をあらわせる,

2)カ行,サ行,タ行に最も書きやすい線を配分した,

3)英語も容易に速記できる和英共用方式,

――などを挙げた。

超熊崎式の改良では,複画符号の［ク］を廃止して点画の方法に絞り,新たに［フ］を単画とし,複画の［ヌ］,［ム］,［ユ］,［ル］はそれぞれのア列の符号に加点する方法とし，その加点は略してもよいとしたため,五十音表にはイ列とエ列だけが小円つきの複画符号として残った。

図 2-35 に,基礎音節に対応する符号の変更年と符号を挙げた。西暦年は符号を変更した年とその符号を示し,左から右へ改良の足跡を示している。牧は 1923 年に初版を公表し,翌年新熊崎式,1927 年,1944 年に超熊崎式改訂版,別名牧式,新牧式の名称で改良版をガリ版刷りで発行し，西日本で普及活動に力を注いだ。

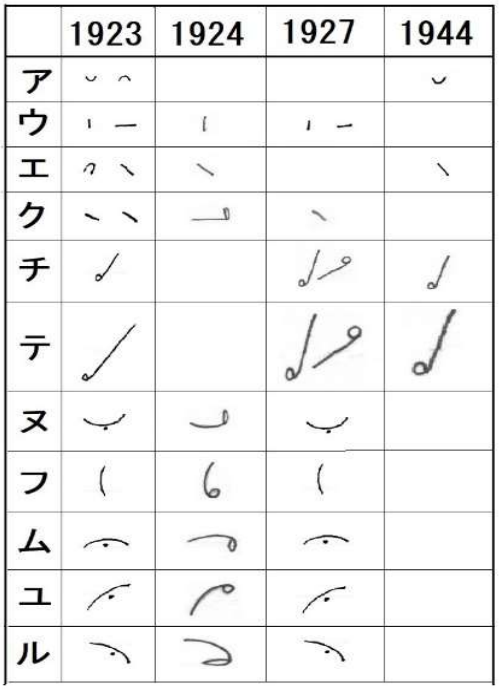


図 2-35 牧泰之輔の熊崎式改良の経過

新牧式の符号研究の特徴について牧は 10 点を挙げている。①符号を下段に書いて[ン]，[キ]，[カイ]を略す，②五十音基礎符号のほかに，[鼻音]，[濁音]，[イ]，[ツ]，[リ]，[ク]等を設けた，③五十音基礎符号を名詞用，動詞用の 2 種類とした，④下降符号と別に上昇符号を設けた，⑤前の符号を利用して後の符号を簡単にした（前符号の下から次の符号を書けば[ニ]，[リ]を省く。[に対し]，[に関し]，[売上げ]，[やりくり]等に適用），先行符号に後続符号を交差して[セー]，または[ショー]を示す（「精神」，「生活」，「情勢」等），⑥連綴上都合のよい反対線（逆字）を用いる（「青少年」→［青少メン］と符号を書くなど），⑦離筆をなるべく避ける，⑧逆モーションをなるべく避ける，⑨符号を下段に

書いて[ク]，[キ]がつくこととする，⑩上段に符号を書いて長音とする，⑪濃線を廃止し，淡線だけとする――とした。

高速度化の成果では,石河勝彦（鳥取県会）が 1956 年 5 月 5 日の第 2 回関西速記技術最高競技会(朗読速度 10 分間 3,575 字)においてミス 54 点で入賞して牧式の評価を高めた。牧は,合理性の観点から縦書き原稿の書字方向で左起右進縦書きを提唱したことがある。

一方,熊﨑式速記法の教育面では,太平洋戦争後の 1948 年 12 月,神戸市において大西田鶴子が神戸速記学校を設けて熊﨑式の指導を開始した。大西のあとを受けて，門弟の藤岡宏彰は 1962 年に「熊﨑式改良法」(1-6 巻）を綜合速記研究会から発行し,1972 年 2 月 11 日に株式会社神戸綜合速記を設立したあと,同年 5 月に神戸綜合速記学校を開校して熊﨑式に早稲田式の一部を加えた熊﨑式改良式の指導を開始した。しかし,事情もあり，藤岡は速記人材充足が進んできたことなどから,2013 年に同校を閉校した。

６．学生速記と早稲田式の誕生

学校教育における課外活動としての速記研究会は,日本速記年表によれば,1893 年(明治 26 年) 2 月に慶應義塾商業学校の生徒有志が速記術研究会を結成し,森本大八郎に教授を委嘱した記録が最も古い。戦前の旧制学校における部活は 1931 年２月,福岡商業学校において中根正世（正雄）が行った講演会から始まり,大学における部活はやはり 1931 年に大学公認となった早稲田大学速記研究会が今日に至っている。国立大学における部活は 1938 年,九州帝国大学で豊島延治が大学公認で創部した速記部（会長平山一雄教授）が始まりで,1958 年 4 月には岡山大学速記部が結成されてカナ速記の相賀式が採用され，大阪大学で中村元保が学生時代に中根式の速記部を創部，中根正親の母校，京都大学では 1996 年下谷政弘教授が中根式の速記部を創部した。正課の速記は 1889 年,私立東京商業学校と,高等商学校（一ツ橋高商の前身）に始まる。

太平洋戦争後，アメリカ式教育を採り入れて，高等学校の学習指導要領に「速記」が加えられて「速記」(1960 年発行,川口晃玉，言潮社）が文部省検定を受け,「中根式速記」（1968 年発行，森下等ら，実教出版販売扱い）が制作された。また，1962 年度からは中学校の指導要領が変わり，選択科目「商業」の中に「速記」が加えられた。武部によると，商業の教科書の 4～7 ページが割かれる形で，①「中学商業」(中根式，大原出版)，②「中学商業」(中根式，開隆堂出版)，③「最新中学生の商業」(衆議院式，暁出版)，④「中学商業」(衆議院式，実業之日本社)，⑤「中学校新しい商業」(早稲田式，一橋出版)，⑥「中学商業」(中根式，三省堂)，⑦「標準中学商業」(中根式，教育出版)，⑧「実教中学商業」(荒浪式，実教出版)，⑨「標準中学の商業」(早稲田式，講談社）が検定済みとなっていた。武部は,「高等学校学習指導要領に「速記」が加えられてかれこれ 15 年にというのに，いまだに文部省検定済みの教科書が出ていない」とし，高校の「速記」教科書と連携させることが課題だと述べた。しかし,武部の夢は実現しないまま，21 世紀に入って

専修学校における速記教育は終了し,また国立３速記者養成機関は 2006 年末までにすべて廃止された。

こうして速記の普及活動は,職業としての速記から,教養リテラシーや競技速記へ関心が広がってきた。そのほか，太平洋戦争末期から手書き速記に加えて機械速記や，その延長から電子機械速記，21 世紀には自動音声認識（ＡＳＲ）が実利用され，科学技術の進歩による新しい機能が加わって,速記のパラダイムが大きく変化しつつある。

高校,大学とも速記の部活は太平洋戦争後の昭和中期に最盛期となったが,平成,令和に至って低調期にある。大学の部活速記は最盛期に全国に 20 数大学を数えたが，国語速記発表 140 年を迎えた 2022 年現在,福岡大学,関西大学,関西学院大学,岡山大学,早稲田大学の 5 大学が活動する状態となっている。

民間方式の中根式と早稲田式は学生速記ベンチャーの所産であった。学生が考案した速記方式を普及する先行事例としては,1914 年第三高等学校在学中の中根正親が研究し京都帝国大学に入学後、公にされた中根式があるが,早稲田大学速記研究会においても第一期単画早稲田式にかわって 1930 年に始まった第二期折衷早稲田式が成長していった。その後,早稲田式は川口渉の努力によって社会教育，専門学校教育面で発展したが，まず早大速研における早稲田式創案の歴史を諸記録に基づいて考えたい。

早大速研の歴史は川口抜きに考えられない。川口は 1906 年，広島県賀茂郡三津口村で鉄蔵，ノブの第四子として生を受けた。事情があって川口は 1921 年秋，逓信省広島逓信講習所へ入所し，翌年卒業して社会人となった。その間，速記に興味を抱いて 1924 年，田鎖式系荒浪式の独習を始めたが，正規の学校への進学を目指して 1925 年には広島広陵中学校に中途編入，翌年修了した。荒浪式の練習を続けながら進学への夢を描き，1928 年旧制早稲田大学附属第一高等学校政治経済学科に入学した。第一高校時代に一年上級の大嶋武士（昭 8 法，茸次とも。のちに畑中と改姓）の呼びかけに応じて集まった仲間が速記諸式の長をとり早稲田式速記法を開発する活動が始まった。仲間は，野村（荒浪式，2,600 字程度/10 分間），高木（中根速記学校卒，2,200～2,600 字/同）といった顔ぶれで，大嶋のリードで研究を進めた。川口はよく書けるレベルにあり，個人的に 1930 年には折衷式案を立案していた。事情があり川口は一高を一年間休学，その間の練習で川口はさらに課外授業の講義録をとれるほどの技量に達したと伝えられる。

田鎖が初めて速記を講習した 1882 年から半世紀たって,速記研究会が 1931 年 3 月 20 日に大学公認となった。リーダー大嶋の単画早稲田式開発は，会員の合意を受けて進められた。大学法学部英法科に入学した川口は速研の幹事に就任し，単画式の研究に力を注いだ。

大嶋は速記界に積極的に働きかけ，田鎖式本家二代目，田鎖一が応援する態勢を整えた。期待の一期単画符号で練習を続けてようやく速記が書けるようになったころ，単画符号は壁にぶつかった。速記符号が完全に読めない。反訳に 10 倍，20 倍の時間がかかり，30 倍かけてもわからない符号が残る。当時，会議の発言速度は年々速くなっており，国会でも複画は時代遅れだと言われ始めており，後戻りできないところに追い込まれた。

大嶋が卒業すると，幹事長に就いていた川口は単画式断念を提案し，荒浪式の経験をもとに個人的に研究してきた折衷式案への転換を会員に諮った。二期折衷早稲田式の立案に挑戦するものであった。学生らしく自由な雰囲気のもとで活動が進んで，川口は実務経験を活かしながら先進諸方式の成果を集約した折衷派の早稲田式完成に打ち込んだ。

当時，日本の速記界は，主流が複画田鎖式系や折衷熊崎式であり,新進気鋭の単画中根式,さらにはドイツ草書派系の毛利式や仮名文字式といった理論が出現して大衆化が進んで，黄金時代を迎えようとしていた。

複画派は基礎符号の構成を子音画線＋母音サインでつくり出す体系をとり，1音節を表記するために1画半程度の筆記負荷であった。それに比して，単画派は1音節を1画線で筆記できて半画程度書字負担が少なくなり，その分高速度の発言を追うことができると期待された。一方，折衷派は五十音表のア列とオ列が1本の線を配分され，複画と単画の中間程度の筆画数が期待でき，書きやすさ，反訳面で完成度が高い流派だった。

公認時の早大速研は会長を教授稲毛金七とし，大嶋は幹事長,川口が幹事であったが入学したばかりながら右腕を務める力量を備えていた。速研公認を祝う講演会では、日本速記学堂長の田鎖一が「速記の社会性」，創立者の大嶋が校友として「早稲田速記学及使命」と題する講演を行った。

田鎖家には，当時の折衷派「早稲田式速記学」の謄写版刷り教本と活版刷りの単画派「早稲田式初歩の速記学」が伝わっていた。単画から折衷へのバトンタッチを示す証拠とも言える資料であろう。武部良明の「1924年ごろより既成方式の研究を始め，1928年一度試案を完成したが満足せず，さらに研究を続けた」とする展開が進んで，川口の研究が実ることになる。

やがて川口は卒業，その後早稲田式速記普及会を設けて，符号研究だけでなく，指導法，教材，通信，全国展開の組織的な態勢が整えられ，速記の社会教育体制が確立されて今日に至った。

早稲田式成立過程の記録には日本速記年表（日本速記協会)，早稲田大学百年史,早稲田速記五十年史，川口学園80年のあゆみ，早稲田式速記普及会愛媛支部編「早稲田式速記創始苦心談」などがある。

第一期の単画式案はおおむね(1)濁音は清音符号を濃線化する,(2)長音は濃線化または2ミリ長く書く,(3)［ン］は小円を順記（発音順で筆記）する,(4)［イ］は小円を逆記（中根式の用語でイ音を一音前に繰り挙げて書き，反訳の際に元の位置に繰り下げて読むことを言う）する,(5)助詞は基礎符号を最短線化して筆記する――ことになっていた。

同じ画線を用いる基礎符号の一致度を比較すると,中根式と早稲田式単画符号では8符号（［カ］,［キ］,［コ］,［ナ］,［ニ］,［マ］,［ミ］,［モ］）が一致し,同一符号率が18％であるのに比して，熊崎式と早稲田式折衷符号との間では36符号（除［イ］,［ク］,［ス］,［ツ］,［ヌ］,［フ］,［ム］,［ル］）が同一で,近似率は81.8%であった。

ゆえに早稲田式単画符号が中根式を手本にして創案したとの評は当たらない。

図2－36 早稲田大学速記研究会の第一期単画符号と第二期折衷符号　兼子次生作成

早大速研の活動は（1）「速記とは発言を正確超速度に筆記する法則を定めたる学なり」と定義し，（2）早稲田式音標文字兼一言一字一劃の速記文字の民衆化，（3）日本速記界の統一，（4）速記報国，（5)10分間の速度3,500文字以上（『早稲田学報』1933年2月発行第456号38ページ）－の5カ条が掲げられた。

今日につながる「早稲田式速記学」（以下初版と呼ぶ)には折衷派の基礎符号を掲載している。その初版と,1942 年版武部良明著「日本速記方式発達史」と 1963 年版「早稲田速記研究・研究編」の基礎符号とを比較すると，［ス］は初版［ ］，発達史［ ］，研究編［ ］で，［ツ］は初版［ ］，発達史［ ］，研究編［ ］で違いがあり，揺らぎながら決まっていったことがわかる。

初版の目次を見ると，表音体系の説明に続いて，同行省略，W式イクツ省略法，同二段使用法，同レ，ネの三法，同特殊上段使用法，同特殊下段使用法，特殊省略法（成語・熟語），反語，重字法，成句省略法，特殊音標文字，数詞，助動詞が説明されている。

武部は「国語速記史大要（下)」に早稲田式の評価を次の 9 点にまとめている。

① 丹羽式の行き方をとって五十音表ではウ列の独立楕円を大楕円にかえた，
② また濁音，撥音，促音等の諸表示法に若干の修正を加えた，
③ 漢字音の取扱いにおいて，中根式の行き方をとって逆記による[ク][ツ]を用い，
④ 並びに毛利式の行き方をとって五十音表にア列系のアイ列を附し，それに小円を順記しエイ列とした，
⑤ さらに複画派の行き方をとって高頻度の二音節から 24 種を特定二音文字とした，
⑥ 同行縮字法においては熊崎式の行き方を改良し，新たに次音が濁音及び長音の場合を示す母音符号を加えた，
⑦ 助詞においては，複画派の行き方をとって，単独系には点画化せず，単画派の行き方をとって符号助詞の一方を点画化した，

⑧ 音訓転記法には中根式と同じく上段を使用したが，これを高頻度 30 数種に限定し，
⑨ 助動詞，高頻度単語に対する略字等には複画派の長をとりその特定を惜しまなかった。

速研では早稲田式速記法を広く普及するために，夏季休暇中に大嶋，川口ら役員，会員が東北，北海道を訪れて各地で講演会や講習会を開いていた。

海外への普及についても，1938年には「支那における速記を研究して将来の日支提携の一助になさんとする趣旨のもとに」（『早稲田大学新聞』1938年6月29日号）上海へ会員の派遣が計画され，1939年7月に佃元治が訪中している。

丹羽式では，創案者の丹羽瀧男は父音に母音を組み合わせる複画派の場合，母音部分が乱れて、縦に書くべき直線符号が右に，左に変形し，ことに小さな円，楕円が似て反訳の際に読みにくくなるとして，新丹羽式に改訂する際に大小2種類の円を父音符号の上下，左右に結合することに変えていた。単画早稲田式では反訳時の識別が課題であったため，折衷早稲田式では新丹羽式の行き方をとって速記符号が書きやすく，正しく読み分けられる点に力を入れた。この特徴点は草書派の毛利式においても強調された点で，のちの泉式や仮名速記においても，日本語の筆記運動の特性に基づく筆跡を用いる符号研究，運筆法として取り入れる流れとなった。こうして折衷早稲田式では，日本的な書字運動の特性に基づいた速記符号の筆法を追求する立場をとり，その後幾何派の符号へも動態符号として日本的な草書派思想を広めることになる。

田鎖式を究極の省略レベルに高めた衆議院式では速記符号を小型にすることが高速度化の必須条件としたが，早稲田式は符号の運用を自然に，合理的に行う筆法によって，大型の符号で高速度発話を固定することを可能とした。

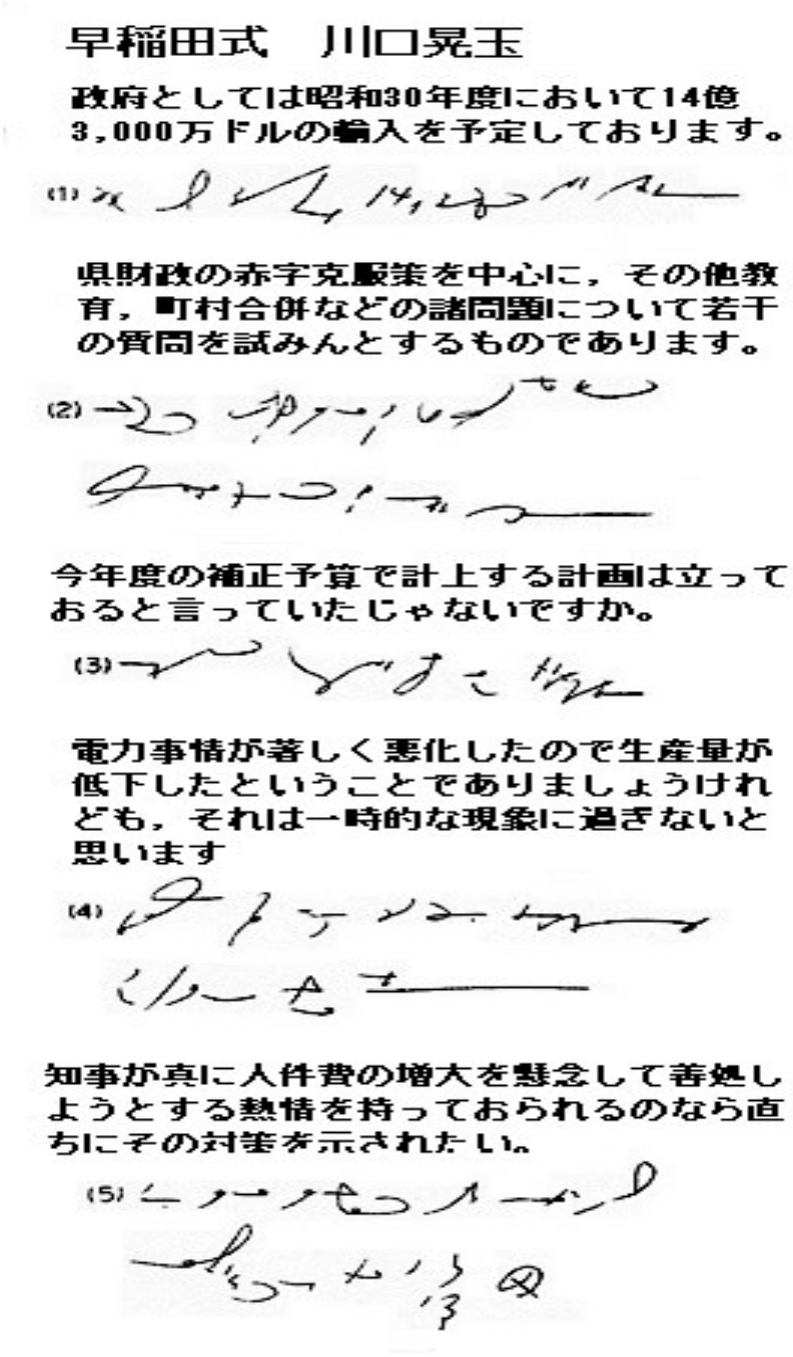


図 2-37 早稲田式の速記文例

早稲田式では寺井美巳が「搬送線原理」において速記線, 搬送線の性質, 字頭の打ち込み, 半音節の理などを分析して, 書きやすく, 読みやすい速記線の研究を進めた。「半音節の理」で搬送線は通信工学におけるキャリア波にちなんだ命名で，実線間の送り線を数学的に論じた。折衷派が目指した同画倍音を実現するための指標として，寺井はパラグラフ速記の発想の中で速記符号の画数を漢字, 熟語, 語彙, 句を構成する音数の半分の画数で筆記で

きるなら発言速度に遅れないとした。彼の論によると，速記技術は（1）書く技術，(2) 読む技術，(3) 聞く技術から構成される。そして速記符号は速度に応じて変化し，弾力性と安全性を持つべきであるとして，記線短縮万能主義を批判した。

速記符号を書く行動は，三次元の軌跡を描いており，速記線には目に見えない搬送線と見える実線がある。全体として空中を移動する搬送線を含めたスムーズな筆運びを研究することが課題と見た。

その寺井の論によると，速記符号は半音節の理に基づいて書く必要があり，音節と文字数の比率は K＝x/y＝6188/4800 として ≒1.29 に当たり，すなわち2音を1ストローク強で書くことを指標とすることが，その目標である。実践派の佐竹康平は,この目標を達成するため，二音文字の体系を整えて高速度理論を追求し,多くの優れた人材を育てた。

創案者の川口は，早稲田式速記法の立案の方針として，①一部職業人の武器とせず，大衆の速記とすること，②超速度の美術的流線型文字たらしめること，③反訳に容易ならしめるように記線量を適当にすること，④専門速記者としても十分に立つに足る諸原則を備えること，⑤広義の国語力を涵養する限り遠い将来まで，つまり根こそぎ日本語が改められない限り，十分なものであること――を挙げた。

立案の方針を具現化するために，研究は当時の優秀方式の採長補短と融合化に向けられた。基礎符号は熊崎式の現代版と評されたように田鎖式の系統を汲む折衷とした。

田鎖系有力方式における速記理論の整備の流れは，二音文字の追求であった。1963年発行，川口渉著「早稲田速記研究」研究編では,二音文字として［〇ン構造］を9種，［〇イ構造］を28種，［〇ク構造］を22種，［〇ツ構造］を15種，［〇キ構造］を14種取り上げ,和語用に各行に分けて多くが特定符号として解説されている。また,主要方式にならって助詞,助動詞が設けられた。簡字いわゆる略語が多く加えられ,先行方式で経験的に得られた日本語の特性に応じて筆記するための速記理論がきめ細かく整えられていた。

一般に速記法の運用技能としては，まず発話速度に十分に対応できる必要があり，そのために基礎符号の筆記負担を軽減する「縮記法」，重要でない音を省いたり，意味を示す「略記法」，言葉を復元できる場合には大胆に省く「省記法」を整えて，高速性と判読性を高めている。そこで，早稲田式では，各種方式の長所にならい，独創性を加味して6原則を制定した。それらは①ラ行音省略法，②加点字音簡略法，③依意省略法，④特殊簡字及び省略文字，⑤自由な活用を許容する特殊各人簡略法，⑥外国語の書記法――である。

これらを教材におさめ，原理，規則の目的，内容が記述され，また略語辞書体系の辞書化によって通信教育や独習ができるように配慮し，速記線の筆記運動の科学的研究によって動態符号の標準化が図られて技術，技能両面の教育体系が完成されていった。

推進者の川口は卒業後,個人を対象に早稲田速記の普及活動に乗り出し,ピットマンのように通信教育を行い，あわせて全国にスクーリング体制を整えて普及事業を大成した。

英文速記と言えば世界に広く普及したピットマン式が有名であった。その成功神話の道を開いたのは,イギリスの郵便制度の開始だった。1837 年ピットマン式を公表したアイザ

ック・ピットマンは，1940 年に郵便制度が始まったとき，ペニー・プレート（図 2-38）を制作し，郵便料金一ペニーで最新ピットマン式のすべてを学べるテキストを送るサービスを提供した。イギリスでは世界各地と貿易が急発展し，ビジネスレターを口述作成する速記秘書が出現する時代にあり，ピットマン式を学ぶ人が急増した。

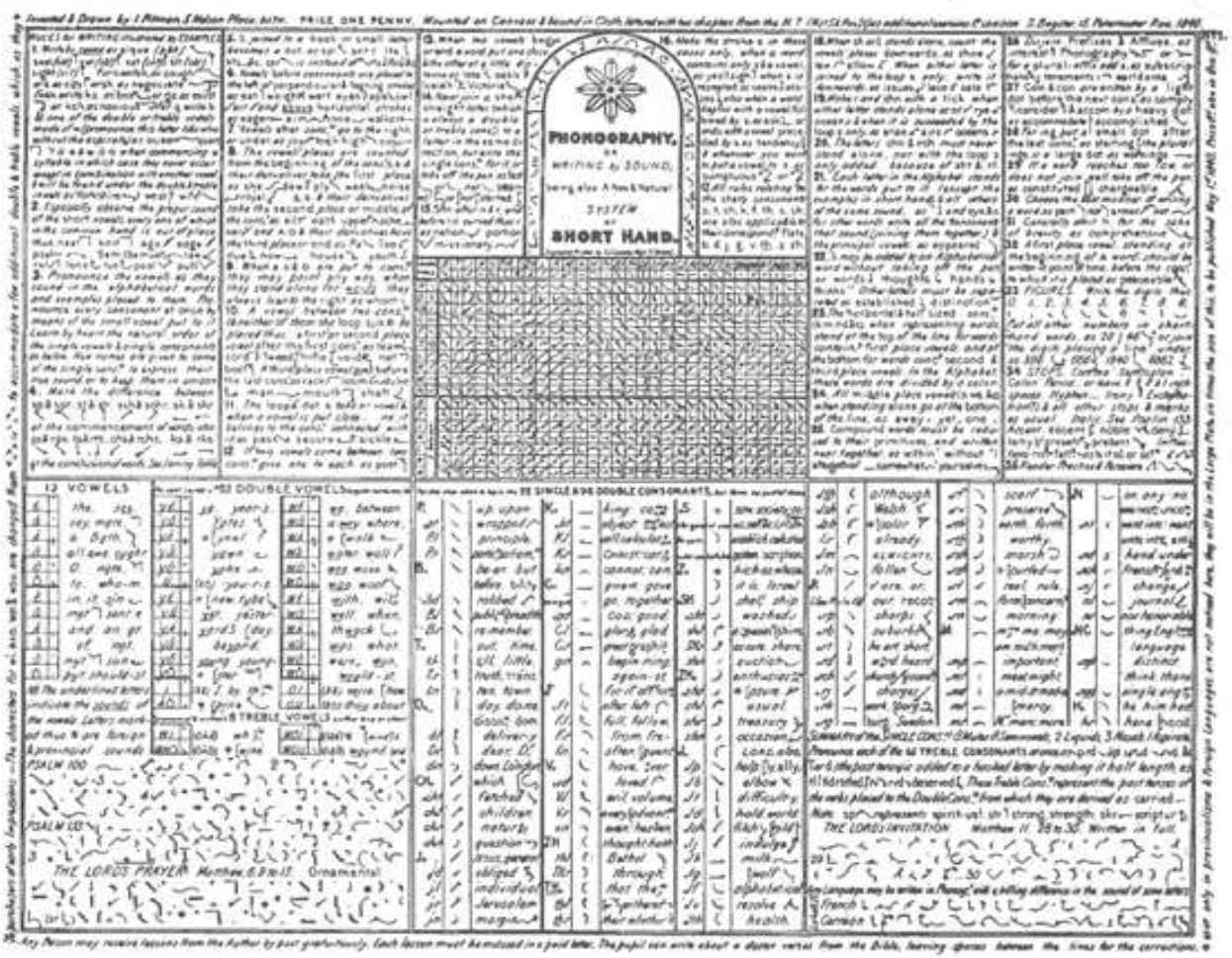


図２－38　速記の最初の通信教育　ピットマン式のペニー・プレート

日本では佃式の思想を受けて，安田勝蔵が速記独習論を厳しく批判する環境だったが，さきに熊﨑の速記独習可能説が実証されており，川口が考えた通信教育という新しい速記学習の門を開いていた。川口は通信教育のための豊富な教材開発，速記略語字典，練習教材を整備した。併せて多くの研究者，指導者を育て，とりわけ速記符号の綴り方研究（寺井美巳），高速度符号研究（佐竹康平）が進んでいった。その後も，手書き速記を電子速記へ移植する研究（柴田邦博）が行われるなど，速記方法の多様化を図るなど，日本で最大の速記者数を擁する方式へと発展したことは評価される。

ただ，手書き速記のゴールは，どんなに速く話されても完全に言葉として固定できる技倆であり，書いた速記符号が正しく，確実に反訳できることに尽きる。そのようなレベルに

達するのは，すべての学習者ではない。高速度理論を追った佐竹式の基礎符号表を見ると，［ス］を早稲田式の［］から［］，また［セ］を同［］から［v］，［フ］を同［］から［］へ変更するとともに，図 2－39 のようにタ行とサ行の角度を寝かせた。

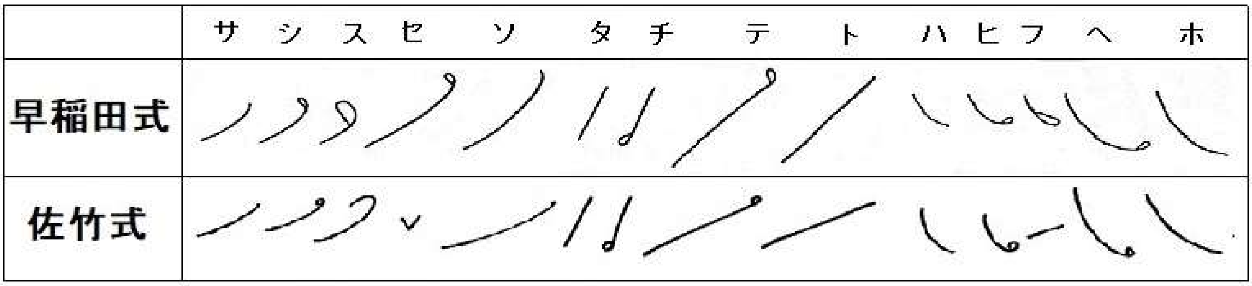


図 2-39　早稲田式と佐竹式の主要符号の比較表　兼子次生作成

佐竹は，研究の動機が「そもそも音速に伴わぬ字画に悩まされたところにあるので，音速と字画との調整のため音速につり合わぬ画の多い単語を片っぱしから集め，これを検討した。音速と字画との問題で学んだことは，一単語中に円が 2 つ以上あるもの，くびれが 2 つ以上あるものはほとんど音速に合わぬということ」だったとし，一般への普及を図るために「早稲田式を高速度も書けるように研究した」と説明する。

その理論は 1 音，2 音以上を表す速記音字と単語，文節，連文節などを表す領域で構成し，6，7 万語の語彙を検討して正確性を持たせて高速度の符号筆記を期し得るようにした。佐竹は，早稲田式と比較すると「五十音はほとんど同じで，違いがあらわれるのは拗音以降。省略法は，相当高度な研究を行った」と述べている。

現実に日本語における速記理論の特徴はいろいろな流派があり，佐竹式速記理論編ジュニアにおいて，佐竹は「一つの方式の中でも皆が同じ字（符号）を使っているとは限らず，各人各様の癖がある」ことが問題になるとする。その解法は理論の高度化と符号の運用経験に基づく緩やかな標準化であった。

佐竹らは運筆法にも着目して「短線は普通の速さで書く，長線はサッと速く書く」と書線リズムを重視しながら，符号運用のイメージを標準化し，符号連綴の原則として⑴作角の筆法，⑵ゆりつぎの筆法，⑶ 平行の原則，⑷流す筆法，⑸癖の修正（直線をそらす，長さを加減する）――書法を指導し，動態符号レベルでの筆跡書体の標準化をはかった。これによって日本語的な手書き速記のカリグラフィを完成したと言える。

佐竹の速記歴を見ると，1937 年第三回卒業証書授与式で卒業を認められ，翌年 10 月 10 日，衆議院で行われた第三回速記技術認定試験に早稲田式で初めて合格した。その後，長年，速記教育に携わるとともに，速記実務に従事しながら，高速度理論を完成していった。例えば類音語，同音語の処理などにおいて，田鎖式系に蓄積されてきた日本語研究の経験

知を参考にしながら取り組んだ。

平易な速記理論をとるか，高速度の専門速記者のための理論を極めるかで悩んだが，高度化をとる佐竹は川口渉と話し合って 1956 年 1 月独立し，佐竹式を名乗った。とりわけ佐竹は二音字の整理充実と易誤文字の改良研究に膨大な研究を行い，その成果として高速度速記に適応する符号体系の確立を果たした。

その中で普通二音字は字音語,和語,外来語など発言される言葉の中で頻度の高い 2 音列を取り出したもので,撥音,ク音,ツ音,キ音,ラ行,同行の二音字が 125 例挙げられた。また,工作二音字を使用範囲が狭く,適用が限定的なものと定義し,佐竹式速記学習コース 1 には二音字のうち工作二音字の生成原理として別行同列省略法,クキツチ省略法,加点使用法応用,基本代使応用,整線法,純粋二音文字が説明されている。佐竹は「工作二音字は,各省略法を拡張応用したり,似た音の音字を使ったり,形を変えたりして構成する二音字である」と定義した。

「簡字」（略語）の構成においては,上段法,略記法,特殊上下段,字上字下法,純粋簡字と応能省略法が重語と反語,成語成句,臨時多発語の見出しで説明した。そこでは音を前提にした速記符号の生成法,速記符号の形状に基づく書き方（線表象法）が示されている。

門下の橘孝幸は 1982 年 7 月 24 日,膨大な二音字整理ノートをまとめたが,そこで 1958 年版学習コースと 1980 年版簡字字典の用例を比較して(1)ク音,ツ音各省略法,変則音字,特殊音,(2)同行省略法・略語音字,特殊音字（3）ラ行省略法,特殊音字,（4）工作法,イ音字工作二音字について論じていた。

一方,易誤文字について，橘は1984年3月8日,易誤文字整理ノート初編をまとめた中で,「相互に誤りやすい速記文字である」と定義して,音声を聞いてから反訳までの間にミスが出る主因として（1）聞き間違い,（2）書き間違い,(3)速記文字の読み間違い（①ケアレスミス,②速字自体に紛れの要素があるとき）,（4）反訳時の間違い（①漢字を知らない,うろ覚え,②思い込み,うっかり）の 4 類型があるとし,「吉川欽二が約 1,000 組の易誤文字を整理し,その結果をもとに/シン/と/ジン/,/セン/と/ゼン/などの速記符号を別字に変更した」と書いており,橘自身でも 350 組の易誤文字を確認している。

佐竹理論の研究は既存理論の整理拡張と新秩序の発見の歴史であった。佐竹はのちに早稲田式に復帰したが,晩年は再び佐竹式に戻った。佐竹式は中央大学速記研究会が採用し,吉川はかつてその一員であった。橘の佐竹観は「佐竹式は幾つかの改良の余地を残しているものの,早稲田式を根本から組み立て直した専門家の方式である。この点は,吉川が佐竹速記塾の塾報で非常に詳細,適切に分析している」であった。

７．熊崎式から派生した米田式が続く

熊崎式系では,米田好兼(1912－1981.11.5)が太平洋戦争後に沖縄戦線から復員して,京都で米田式を発表し,その後大阪に本拠を移して方式改良と後進の育成につとめた。米田

は最初，桜井郷三著「最新応用速記術」1922.8.4 で熊﨑式を独習し，それに改良を加えて 1941 年「日本語速記術新講」を著した。その基礎符号は[ル]＝［ ］を除いて熊﨑式のものであった。さらに 1949 年には，「熊﨑式発展日本語速記法」において大胆に改良した基礎符号を公表した。

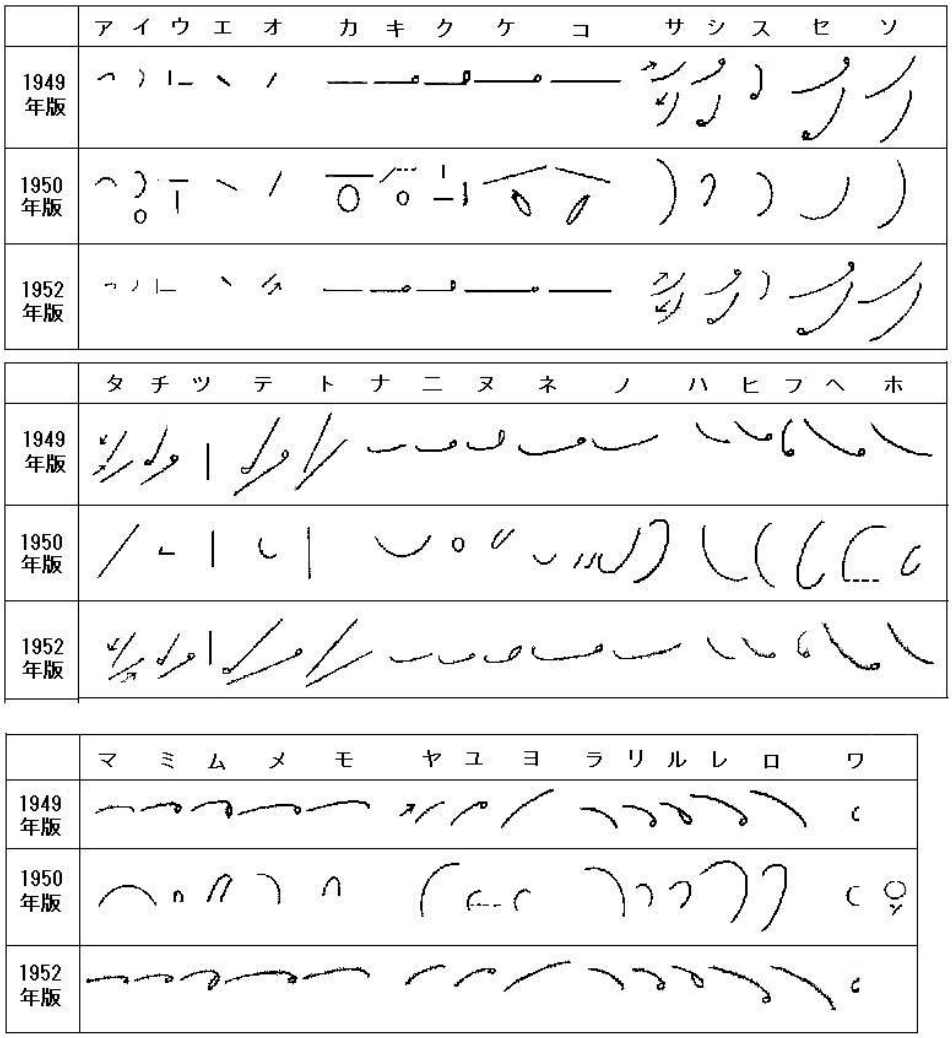


図 2-40　米田式初期の符号変遷表
(1949,1950,1952 版)　　**兼子次生作成**

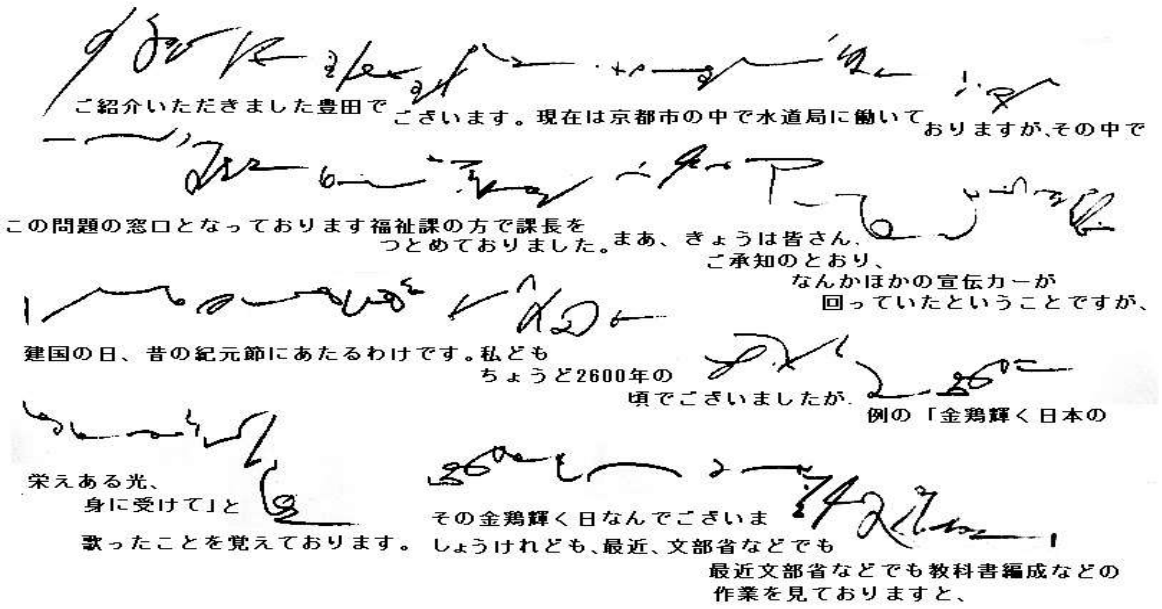


図 2－41　米田式の文例　山口庄治　「速記符号集」1993.9.1　#095

京都を中心に,森卓明らの速記理論研究が盛り上がる中で,米田式は1950年版の基礎符号において,田鎖系の強い影響を示しつつ,衆議院単画符号と約 20 符号で類似性を持ち,一方半草書派のグレッグ式や正円楕円幾何派の国字式の影響を受けて[ヌ],[ム],[モ],[ホ]に楕円曲線を適用していた。また，1957 年の「最新米田式標準速記法」においても幾何派の正円ダイヤグラムに加えて,半楕円符号を取り入れていた。米田は基礎符号の一部をよく変更しているが，図 2-40 では 3 つの版(1949 版，1950 版，1952 版)を取り上げた。

あわせて米田は,グレッグ式との互換をねらい［サ］⇒［S］,［カ］⇒［K］,［コ］⇒［G］,［ハ］⇒［F］,［ホ］⇒［V］,［ナ］⇒［N］,［マ］⇒［M］,［ラ］⇒［R］,［ロ］⇒［L］,［エ］⇒［H］,［ケ］⇒［D］,［ツ］⇒［J］,［ヤ］⇒［X］などを設定して,みずからの改良符号を提案した。ただ,グレッグが避けた 90 度線,右下 60（210）度線を米田は用いた。これらの活動には単画化と,有力な速記理論を積極的に取り入れる米田の姿勢があらわれている。

	ウ	ク	ス	タ	チ	テ	ト	ヌ	フ	ム
1952年版										
1954年版										
1960年版										
1972年版										

図 2-42　米田式における基礎符号の改編歴（各教本から抜粋）　　兼子次生作成

一転して 1972 年,米田は「総合速記講座」を発表した。この版を厳密に見ればウ列の[ス],[ヌ],[フ],[ム],[ル]に小さな変更が見られるものの，1949 年の基礎符号にほぼ戻った感じで,熊崎式に回帰している。

米田式の文例は京都府舞鶴市議会の速記に従事した山口庄治による。

京都府立鴨沂高校時代に米田から学んだ門部卓志は，同志社大学へ進んで，米田を助けて速記講習会開催を実行し，その後の研究会の発足に関係した。卒業後は広告業界に入り,美空ひばりの蚊取り線香のコマーシャル「金鳥の夏、日本の夏」を制作するなど活躍した。

同大速研結成で主導的役割を担った東野裕一は 1958 年に学術団体公認を実現するなど,課外活動の体制整備に貢献した。ちなみに,当時,速記講習会を受講すれば教職課程の２単位を与え,速研の正式会員となるというものであった。また，同大速研は全日本学生速記連盟の原加盟校として早稲田大学等と中心的な役割を担い，その結成を実現した。

一般に，大学における学生速記では三年生が一年生を指導し,持ち上がりで四年生が二年生を指導するサイクルをとる。その後，教養課程の同志社田辺校地への移転が行われて,京都市内今出川校地にいる上級生の拠点と分離されたため，日常の練習の場で行われる技能伝承がうまくまわらなくなり,1990 年ごろ解散したと推定される。

米田式では,1955 年 5 月 3 日の第 2 回関西最高速記技術競技会で竹元健次(朝日新聞)が一席で入賞し,高速度型としての米田式の評価を高めた。若津博一は読売新聞で電話速記に従事，小渕一雄は日本速記協会の機関誌「日本の速記」編集長を務めた。

８.日速研式とコクサイ式の登場

折衷派における各行の基礎符号生成の原則は,ガントレット式に見られたア列を基準（父音）としてイ列は尾部に小円を付し,エ列はそれを 2 倍線とし,オ列はア列を 2 倍線にするものであった。熊崎式においても同様の構成がとられ,ウ列にはア列符号の尾部に楕円を付して表す規則も一部にとられた。このような熊崎式の基礎符号生成法は,早稲田式にも影響が認められる。

図 2-43 に示すように，太平洋戦争後,さらに吉崎謙太郎は 1954 年 4 月，早稲田式をベースとしたと推定される日本速記研究所式速記法，つまり日速研式を完成した。日速研式の基礎符号で,早稲田式と類似する規則性は,例えば早稲田式のオ列とウ列の符号を交換する例が[ス]↔[ソ],[ル]↔[ロ]に見られ,[ノ]には早稲田式の[ヌ],[ニ]・[ネ]には早稲田式と同じ符号,ほかに[ホ]→[フ],[モ]→[ム],[ヨ]→[ユ]のように入れかえたと判断できる符号が認められる。

また,京都を地盤にワコールの株主総会の速記も担当した，中村優里（ゑつ）が 1968 年に出版したコクサイ式においても,熊崎式におけるオ列の符号がア列に入れ換えられる規則性があり,イ列とオ列の関係でも[キ]↔ [ケ],[シ]↔ [セ],[ニ]↔[ネ],[ミ]↔ [メ],[リ]↔[レ]の入れかえが認められる。

両式の符号イメージは運筆法の違いから異質な印象があるが,田鎖式から発達してきた折衷派における基礎符号の構成戦略であると言える。

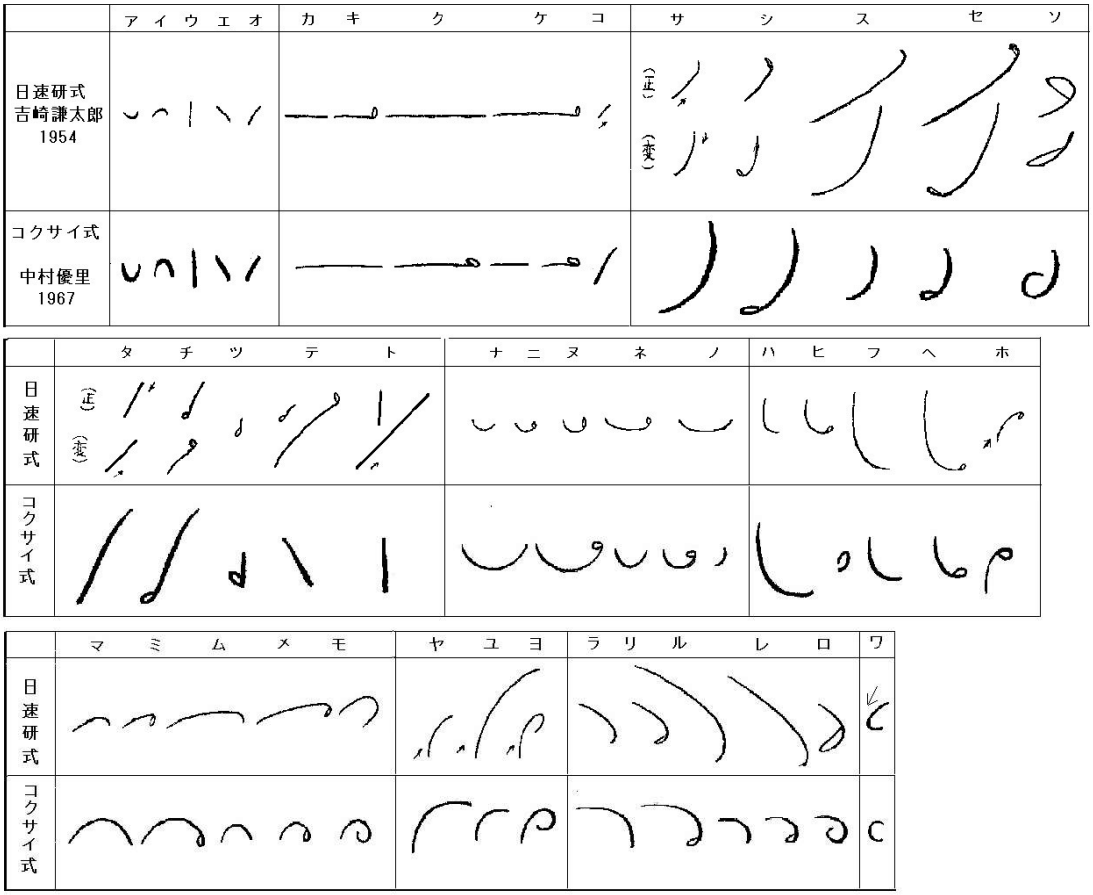


図2-43 経済の高度成長期に折衷派の改良方式が続いた日速研式(大阪)とコクサイ式(京都) 兼子次生作成

日速研式では,吉崎が 1955 年に事情があり速記界から次第に離れる方向へ進んだため,一時期関西学院大学における部活連携を働きかけようとしたものの結実しなかった。また,1968 年には後継者の中西国夫が西来路の指導を受けて速記理論を改訂したユニ式速記法を公表し,その普及活動の中で,立命館大学在学中の塩冶優が速記同好会を組織するなど関西を中心に普及活動を進めた。しかし,中西や,同門の「日本ユニ速記の基礎と練習編」を出版した小東(中村)一恵が相次いで夭折して普及活動は途切れた。ただ,愛知県瀬戸市の田辺則男が中部地方を中心に同式の地盤を固めたが,後継として山田早苗が指導に当たっている。

速記界の評価は,日速研式は早稲田式の基礎符号のウ列とオ列を入れかえた点を強調されてきた。しかし,運用された動態符号は早稲田式においても見られる運筆理論が認められており,高速度対応に達する方式であることが特徴であった。

III 草書派の移植

１.はじめに

未経験の文化である速記の実用化を急いだこともあって,田鎖綱紀は日本語の書字伝統を十分に考慮しないまま,欧米の幾何派理論を受け入れた。それに対して,ドイツの書字伝統に着目する研究者がいた。

帝国議会第一議会の記録方法に関して欧米における速記を調査する過程において,早くからドイツに草書派の手書き速記があることは知られていた。田鎖も草書派の存在を承知していたが,国語速記実用化の立役者となった若林玵蔵が, ドイツ草書派の理論を採り入れようと試みたことが伝えられている。

一方,豊後佐伯藩最後の藩主,毛利高範（1867.1.10―1939.11.5）は,田鎖の第１回講習会を受講して速記に強い関心を持っていたが,ドイツ留学中に,草書派の日本語速記法の創案と普及を終生の使命とすることを決意した。

２.毛利高範の立案方針と理論

ドイツの大学の講義で教授も学生も速記でノートをとっている状況を見て,毛利は草書派による日本語速記法の開発を決意した。毛利が手本に選んだのは,オーストリアのファウルマン Karl Faulmann がガベルスベルガー式を学んだのち改良して成立したファウルマン式であった。ファウルマンは草書派の祖,ガベルスベルガー式と最新理論のシュトルツェ式を統合しようとしたが,ガベルスベルガー,シュトルツェの同意が得られず,私案をファウルマン式として 1875 年に公表し,最終版は 1883 年に出た。ファウルマンの戦略は両式の母音表記法を標準化して長所を統合し,欠点を除こうという,今日のドイツ統一方式（ＤＥＫ）へつながるものであった。

図 2-44　毛利高範

帝国議会が始まり,貴族院議員となった毛利は,音声学に基づいて日本語の速記方式を体系化することが重要だと考えて研究方針を立てた。ドイツ草書派では,基礎符号に画線要素を用いて音声を音素単位としてとらえ, 子音と母音をローマ字式に続けて書くことを前提とした。そのために図 2－45 の符号源図に基づいて, 音声学からの科学的な評価によって基礎音にラテン文字の一部分を割り当てるとし,頻度が高い音にはなるべく書きやすい線を配当することとした。毛利が感じた速記研究の魅力は,ラテン文字の書字運動に基づいた書線を日本語において用いる点にあった。

草書派の起点となるガベルスベルガー式においては図 2-46 のように,ドイツ語におけるラテン文字の筆跡の特徴をもとに基礎符号が設計されており,英文速記と様相が異なる。例えば幾何派で多用する直線の直立体,水平の直線を避ける反面,角度 75 度の画線を上から下へ,あるいは下から上へ筆記する符号が実に 23 種あり,次いで水平に筆記する符号が 11 種,右下へ向かう 45 度は 2 種の符形に 7 符号,下から上へ 15 度で上がる直線では 4 符号を

設定している。

毛利式 1927

図 2−45　毛利式の符号の源図

毛利はファウルマン式を手本にして,線の配分は子音と母音で分け，子音には下方へ向かう線を用い,母音には上方や右へ向かう線を配分することとした。

ドイツ流の速記字体を取り入れるために,斜線は下方の先端を(1)左方つまり前方へ曲げるもの,(2)鋭く止めるもの,(3)右方つまり後ろに曲げる3種とし,また上部の先端部分でも(1)前のほうから曲げるもの,(2)鋭く書き始めるもの,(3)後ろから曲げるものの 3 種とした。

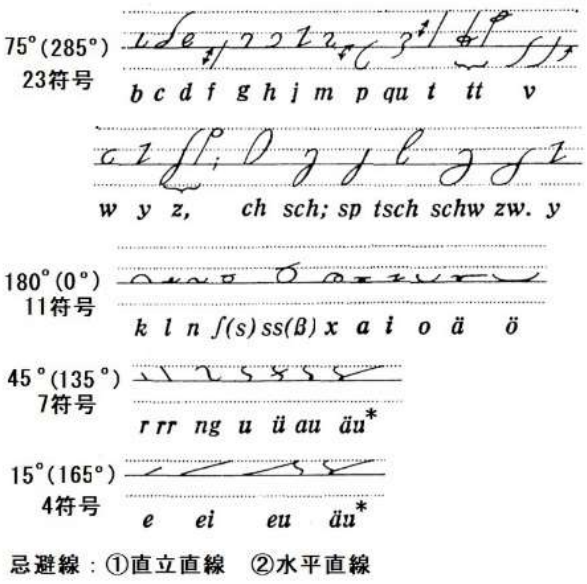


図 2-46　草書派ガベルスベルガー式の画線体系

子音の符号はすべて淡線を用いたのに比べ,先行した日本語方式にならって,毛利式では清音を淡線とし,濁音に濃線を使用した。

幾何派の基礎符号は見た目がシンプルで,筆記時間が短いと思われている。それに比して,草書派の基礎符号は，それ自体は書きやすいが,図形としては幾何派に比べて筆記時間がかかり,音節当たりの筆画数が多くなることが課題であった。

そこで,毛利は子音の略韻法,子音の略音法を取り入れ,ドイツ草書派のように綴り字の筆記線量を減少させる方法を設けて,高速度にたえる速記線を実現することに成功した。それは幾何派方式が略字,略符を設けて筆記線量を減らす高速度化を進めたのに対して,毛利式では音を省くのではなく,音韻を暗に示す表象的な全音記法を組み立てた。この音表象理論のアイデアは幾何派でも,アメリカのクロス式に導入され,森卓明の超中根式に導入されて表象法へと完成されていくことになる。

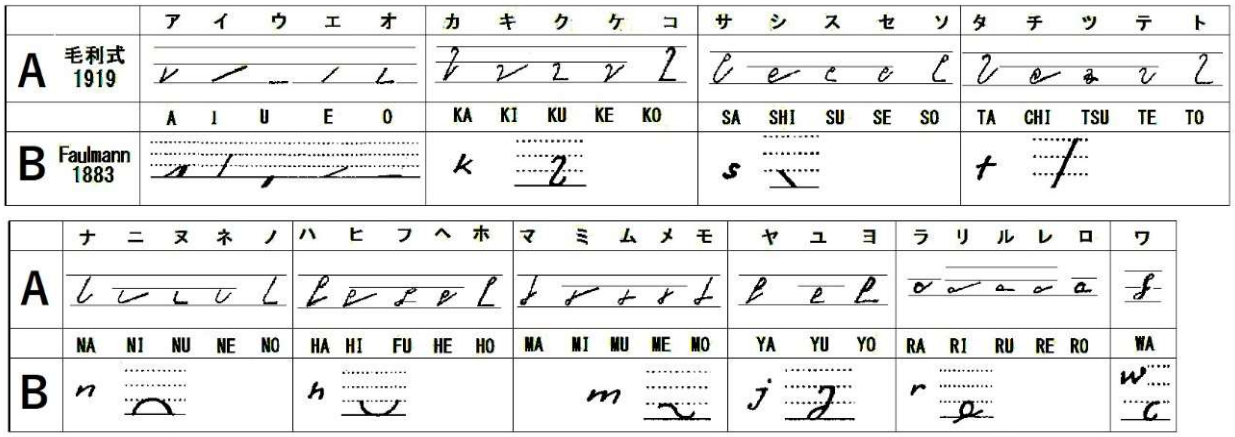
近代速記法の表音主義に立つ毛利は,幾何派と同様に，日本語の音声学に基づいて基礎音を類型にまとめるとともに,清音と濁音の関係でも「類音類線」の原則を採用した。

幾何派は基礎符号の単純化が進むと,続け書き時に崩れやすくなって運筆の改善が問題であったが,逆に動態符号を重視した草書派では,多い画数で担う音声量をさらにふやすことが課題となった。それ以上に,ドイツ語と日本語は言語特徴が違い,また文字,符号の書

きやすさの価値観が異なり,さらによく用いられる音列が同種でないためドイツ語速記理論を日本語へそのまま移植することは困難を伴った。図 2-47 は，毛利式と手本にされたファウルマン式の基礎符号である。

毛利は日本語の基礎符号の画数を減らすため「略韻法」をつくり,母音を書かずに音節をあらわす着想をした。これは同画倍音の効果を実現するもので,例えば「加賀」(かが)という言葉を速記符号で綴る場合,/ka/＋/g/と書いて末尾の母音/a/を省き，/kaga/を表象した。

毛利の略韻法では,音声学に基づいて母音を発音する際の開口の広さ,狭さと,舌の位置の高中低に応じて速記符号の種類を「一階」(First floor) と,「二階」(Second floor)に置く 2 種とし,さらに線条に濃淡の違いをつけて,符号を置いた 3 つの段で母音を表すという母音表象規則を組み立てた。



(毛利式速記法詳解 1927　Art und Bau der wichtigsten Kurzschrift 1988)

図 2-47　毛利式とファウルマン式の基礎符号　兼子次生作成

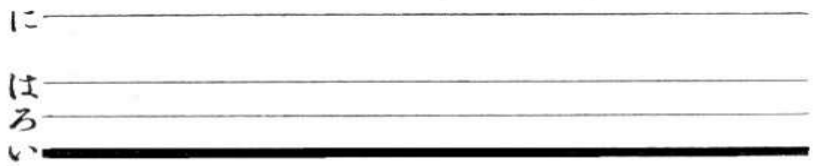


図 2-48　毛利式の符号筆記帯を示す線譜

1)独立略韻：図 2-48 の筆記位置の上,中,下段に子音符号の一部を書いて母音を示す規則,

2)同終音略韻：2 音節の言葉の末尾に出現する尾音節の母音を省く規則,「や・は行類の独立略韻」と「同終音略韻」,「ば・わ・ま行の同終音略韻」と「同終音略韻」,2 音語,3 音語,4 音語を対象とする「略韻変体法」の規則――を設けた。

また,毛利は,言葉を表記するときに子音を省く手法として「略音法」をつくった。これは最後の音節の子音を省き,第一音節をあらかじめ決めた「書く高さ位置」(段,階ともい

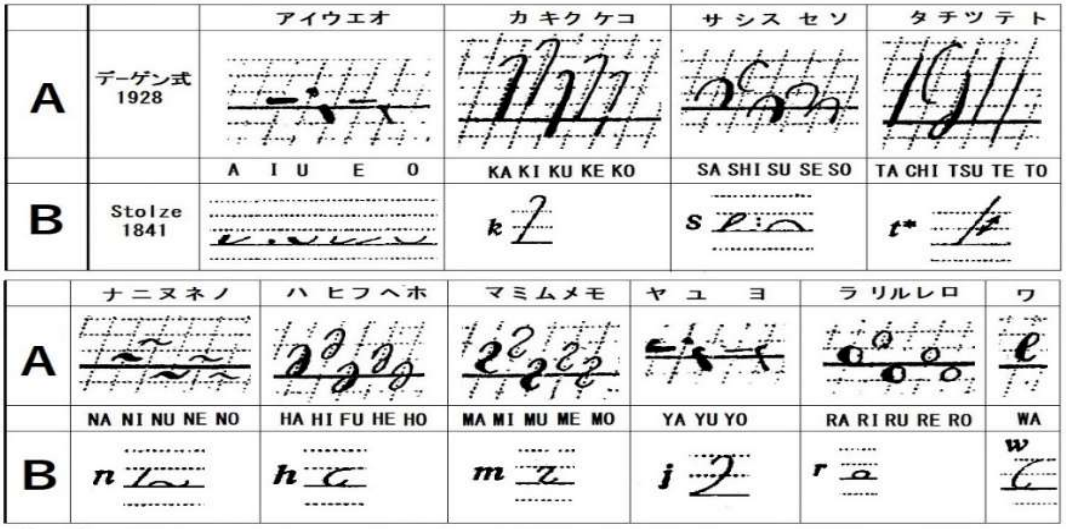
う）に符号を置いて母音を表すものとした。

さらに膠着語の特徴の１つである日本語における助詞,助動詞,動詞の省画化を体系的に行うために略語規則を設計し,基礎符号,速記文法,略語の構成を整えた。また,頻出語を対象とする自由略法を設けた。このような理論構成により,1920 年,毛利式を逐語速記レベルの速記方式へと高めることに成功した。

こうした研究を毛利はすべてをひとりでやり遂げなければならなかったため,完成は1919 年までかかった。毛利が訓練した速記者は貴族院速記者に採用され,戦後も参議院において複数の速記者が活躍した。また,長男高棟の弟子, 穂積武子は民間の速記依頼に応じたり,教授,訓練を行った。

毛利は自分の子供にも速記を教えており,近衛秀麿に嫁した次女,泰子は,西園寺公望の秘書,原田熊雄男爵に協力して公の行動記録を速記し,のちに東京軍事裁判においてその速記録「原田日記」(「西園寺公と政局」) が唯一の証拠として採用された。

３.デーゲン式



デーゲンは「シュトルツェ･デラ･シュパダ萬国発音速記法」を参照して翻案した。

図 2-49 デーゲン式 1928 とシュトルツェ式 1841 の基礎符号

幾何派が主流であった日本の速記界において毛利式に続いて登場した草書派は,デーゲン式であった。1930 年,デーゲン Joe Albert Degen によって開発されたものの普及に至らなかった。

同式は,独シュトルツェ式の「シュトルツェ・デラ・スパダ萬国発音速記法」(SS:Stolze della Spada)を日本語に適応させた草書派方式であったが,「新日本文字」と呼んだように文字改革を目指して,ローマ字使用法として組み立てた。そのねらうところは,音節一画の基礎符号(図 2-49 参照)であった。

SS 式と対比すると,デーゲン式において,カ行は〔K〕(SS 以下同),タ行〔T〕,ナ行〔N〕,ハ行〔H〕,マ行〔M〕,ラ行〔R〕という関係が見出せる。母音は(1)ア列は中心線上に子音の尾端をつけ濃線化して表象するほか,(2)イ列は上段に淡線,ウ列は中心線上に,その尾端を小交差させて濃線化する,(3)エ列はア列と同じ位置に淡線,(4)オ列はウ列と同じ位置に淡線で,それぞれあらわすこととされた。この手法は線表象と呼ばれる。

デーゲンは,小林定正(小樽水産学校教諭)を補佐として普及を計画したが,デーゲン自身がタイや,太平洋戦争後アメリカに移住するなど,十分な態勢をとれなかったことと,日本語の文字改革を一つの狙いとしていたため定着しなかった。

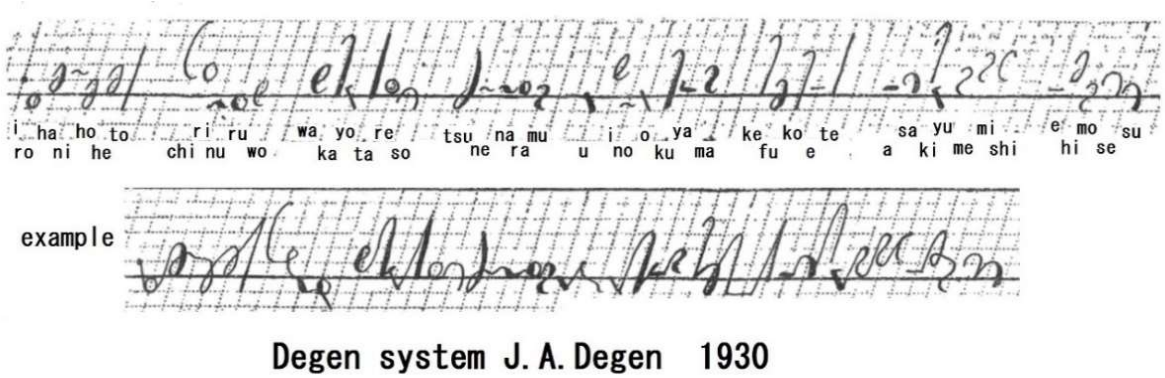
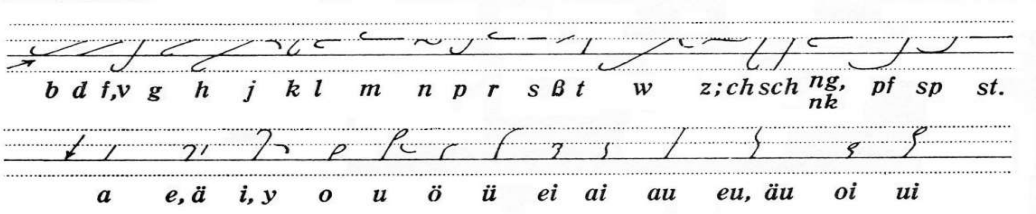


図 2−50　いろは順に罫線用紙に書かれたデーゲン式の基礎符号

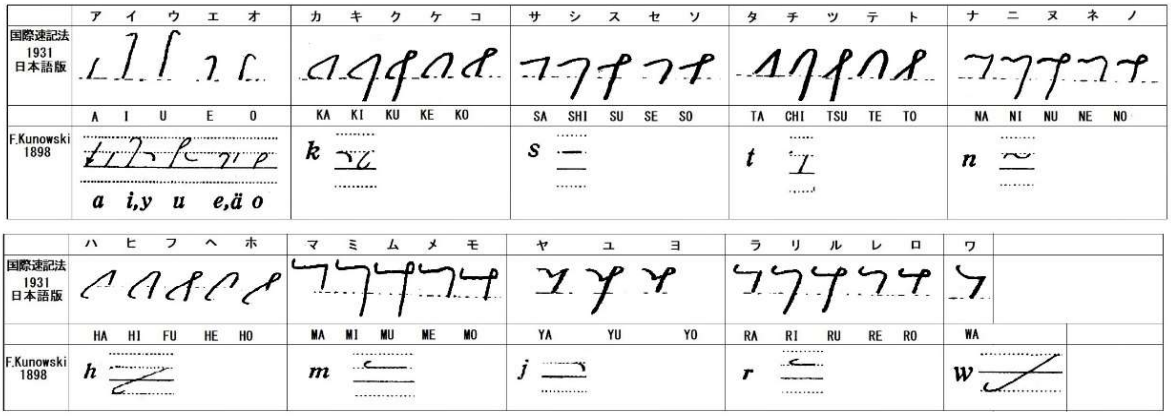
４．国際速記　INTERSTENNO

3 番目に登場した草書派として大場格(1905？－没年不詳)は,1931 年,クノウスキー Felix v. Kunowski が開発した「国際速記」と呼ばれるクノウスキー式(図 2-51)を日本語へ適用した。この方式は,エスペランティストが用いており,多言語展開が図られている。その関係で,音素符号は各国語とも同種の音価を担っている点が特徴である。ちなみに,エスペランティストとして日本へ来た速記研究の外国人では,ガントレットが日本での運動を主導する役割を果たしていた。



文例図 2−51　　国際速記のもととなったクノウスキー式速記法

大場は最初の版でエスペラントのラテン文字式の綴りを用いて日本語に適応しない点があったので,改良を重ね，図 2-52 に見られる基礎符号によって，最終的には他言語の体系と同じように,職業速記者用と一般人向けの内容に分けて内容を整えた。国際速記は，ドイツ語の速記だけでなく,エスペラント,英語,フランス語,イタリア語,ルーマニア語,ブルガリア語,中国語など世界 22 カ国語に対応していたのが特徴であった。大場のあとを受け



上欄の日本語版は「INTERSTENO」名で大場格が日本語に適用し、深堀義文が編集した版を用いた。下欄は、Moser-Erbash共著、Lebendige Kurzschriftgeschchteに収録されている Nationalstenographie(1898),Felix Kunowskiの符号を用いた。兼子次生整理

図 2−52　大場格設定の日本語用音節符号とクノウスキー式の子音符号　兼子次生整理

て,深堀義文は国際速記の普及活動を長年続けたが,21 世紀初期に後継者がなくなり,消滅した。深堀は尺八の楽譜を作成する速記法を考案するなど,長崎市を拠点に地道に活動した。深堀は九州大学でエスペラントを学習し，大場から国際速記を学んで,高校の数学教員をする傍ら石村式も学習したが，晩年大場のエスペラント教本を用いて普及活動を続けていた。図 2-53 は，国際速記教本を作成する際に利用した大場の文例を紹介したもの。

なお，ドイツのアーヘン工科大学教授の B.ノイバウアー博士は，エスペラントに加えて学術分野の補助語インターリングアを操っているが，詳細は不明である。ノイバウアーは 2007 年のインテルステノプラハコングレスの多言語速記競技で 17 言語の速記を書いて最高記録を達成した。

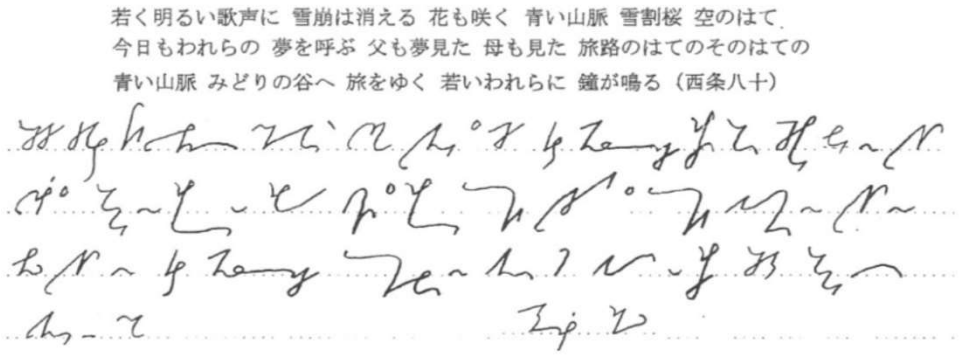


図2-53　国際速記法による「青い山脈」歌詞の文例
出典：「インテルステノ国際速記入門」深堀義文編集から 2000.10.10

５．顔式８５日本語斜体速記法

図 2-54 「日本語斜体速記」1985,顔廷超,
下段の符号は第二符号

熊崎健一郎が 1909 年に「支那語速記術」を創案したことを知った，清国政府が資政院開設に伴い発言記録作成のために速記を採用する方針を決めて熊崎に協力を要請したことがあった。続いて田鎖綱紀が中国語の速記を考案するなど話題になった。清国政府では 1896 年, 蔡錫勇が新文字として考案した「傳音快字」のあることがわかり, 次男, 璋に命じて中国速記学を創案させ, 議会の発言記録の作成に当たらせた。

一方, 日中戦争後, ソ連から国家統一式のＧＥＳＳが中国へ伝わり, 黒竜江省の顔廷超がそれを参照して中国語の草書派方式を考案した。在学していた満州建国大学において西川伍作から田鎖式を学んでいた顔は, 朝鮮自治区の厳世亮と共同で朝鮮語速記を 1955 年に開発しており, 1985 年には同じく草書派の日本語速記法「顔式 85 日本語斜体速記」(図 2-54) を創案した。

６．EPSEMS

21 世紀に入って,4 番目の草書派が平野明人によって創案された。平野は早稲田式,中根式,石村式,モリタ式とみずから開発した示唆式の 5 方式を独習して日本速記協会の検定試験一級に合格した技能を持ち,速記符号の比較研究を行ってきたが,2002 年～2009 年にかけて草書派理論に基づく中速度速記法を EPSEMS（エプセムス）と命名して公にした。

図 2-55　日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎符号(日本語用)

2009 年に発表したのは,日本語と英語を筆記できる個人用途版である。開発のねらいを学習量が少ないこと,書きやすいこと,判読が難しい符号を避ける点に置いて,草書派の体系を採用した。草書派を志向する中で,筆記上の調和がとれることを前提として正円幾何派,半草書派（楕円派）で用いられる画線種を採り入れる折衷コンセプトとした。

図 2－55 に示す EPSEMS の基礎符号は音素単位で筆記する方針をとった。膠着語,開音節語,母音優勢の日本語と屈折語,閉音節,子音優勢の英語の両方に対応するため,母音には直線を配当し,類似音別に A グループ（ /a/と/o/ グループ）,I グループ（ /i/ と /e/ グループ),U グループ（ /u/グループ)に分けている。

同じグループの中では同じ形の符号を用いて１：２の長さの違いで区別する。無声音と有声音の区別は速記符号の符号末尾の形の違いで表す。日本語では字音語をサイン縮記法で処理し,またラ行音に対する縮記法を用意している。画数を減らすために,省画法,上中下段に母音を置いて子音を省く法（毛利式での略音法）,二重子音,頭音摘記法を用意した。

図 2－56 日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎符号（英語用）

Ⅳ　単画派の展開

１.新案 中根式速記法

複画派全盛の時代,単画派の提案を初めて行った武田に触発されて1914 年,中根正親（以下，正親と呼ぶ）が中根式速記法を発表した。続いて,複画派から森山波蔵が 1917 年 8 方角,2 種類の線長を配分した森山式を発表し,国字運動の中から1921 年には大川小一郎が大川式を世に出した。さらに高橋鉄雄,鬼塚明治が単画派への転換を目指して方式研究を進めた。

大阪毎日新聞
（日曜日）
（休み知らず）
大正三年五月十日（金）
（十一）
●新案出の速記術
大學生の發明
中根正親

図 2-57 大阪毎日新聞の中根式速記創案の報道記事

武田の単画派発表の刺激を最も強く受けたのが,第三高等学校から京都帝国大学理工科大学土木科へ進むことになる正親であった。熊﨑式を独習しながら,ガントレット式,田鎖式,武田式などを分析した正親は,三度ピットマン式に立ち戻って,単画派を開発した。武部は,この中根式を「熊﨑式の武田式化である」と評した。図 2-57 の 1914 年 5 月 10 日毎日新聞紙上で報道された中根式速記法は,基礎符号における単画化率が 68%（加点符号等を含めて 90%）に至り,初めて実用化に進んだ単画派である。

正親は,中根式速記法立案の方針として日本語の構成を(1)漢字で書く言葉と，(2)仮名で書く言葉に大別してそれぞれの処理原則をつくり，(3)単画派の立場をとる－－ことを宣言した。

漢字で表記される言葉は音読みされるとき,末尾音にある種の音が付属することは,1887 年林甕臣の「一大発明速記大日本字」に「漢語綴字法」の前提として見られる。林は「漢語の語尾音はイウツンキクチツヰの九音に定まりたるを,其の音の標字に基づける種々の横線をもて符号とせるものを謂う」と書いている。のちに 1937 年には貴族院の安田勝藏が「日本速記法上に於ける漢字音と其の略字法則の研究」において,405 種の字音とその構成を明らかにし,これらを対象とする二音文字研究の成果を公にしている。

一方，工学分野では森田正典が日本電気の新型キーボードの特許出願書において,日本語の字音語の尾音に一定の法則性を発見してM式キーボードの発明に至った概要を 1987 年電子情報通信学会論文誌に報告している。

もっとも,森田以前に,正親は,中根式速記法を発表する際,字音語における 5 尾音の規則的な出現を根拠にして中核理論となる字音語縮記法のインツクキ法を発案したことを明らかにしていた。それは，かな文字 2 字以上の読みを持つ漢字は尾音に長音,拗音,インツチクキの 10 音を伴うことから,別に定めた長音,拗音を除いた 6 音に対する筆記法をインツクキ法と名づけて規則化したものである。

日本語の表記法を漢字と仮名の二型に分けて,正親は大胆に字音語の縮記法と和語の省記法の発想を具体化した。「縮記」とは音を省くことなく画数を減らす表記法で,「省記」は音声を示す符号を省いて書かずに読ませる短縮化をいう。一方,「略記」とは,符号は音に対応させているが,音列として簡単な視覚記号の形態に置き換えて短縮する筆記理論を総称している。中根式において,インツクキ記法の筆記順は,2 音目のサイン符号（小円,大円,丸かぎ,角かぎ,有尾小円,有尾大円,楕円）を 1 音目の線分符号の前の位置に書いて,文字化する際に 2 音目の位置に戻して読む方法を意味する「逆記」と定義した。例えば図 2－58 の②の（1）のように,「改選」/カイセン/の漢字の 2 つの尾音を前に繰り出して/イカンセ/と綴り,反訳の際に/カイセン/と/イ/,/ン/の尾音を正規の位置に戻して読む。このインツクキ法は,[サイン（点画）＋ストローク（画線）構造の特別符号]の生成規則であり,複画派,折衷派における二音文字と同等の処理規則であると下谷政弘は見る。加えて,正親は,図 2－58 の②（2）のように,ピットマン式の加点母音の原理を加点インツクキとしても取り入れた。

また,仮名つまり訓で読む言葉については,音読みに変えてその符号を書く音訓換記法を適用した。その理由として訓読みよりも音読みの方が音数は少なくなり,省画化が図る利点があると見た。

日本語の動詞の活用については上中下の三段法を用いて,現在形,過去形,未然形を示す規則的な筆記法を設けた。また,ピットマンの表記法を取り入れて,活用語尾の表記に加点法を設けて,見た目の複雑さと筆記負担を大幅に削減することにした。

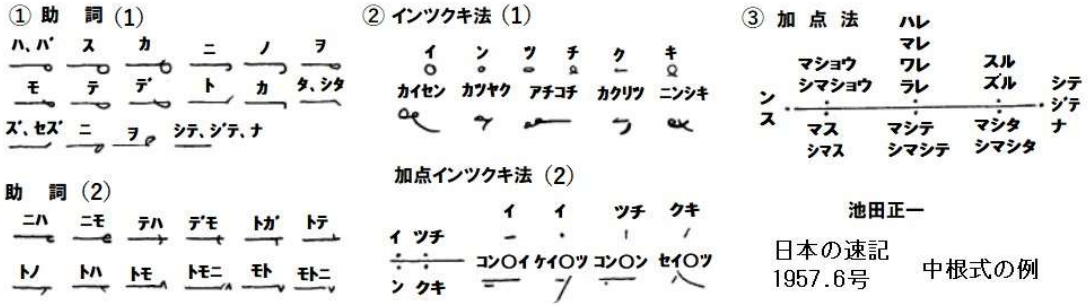


図 2－58　中根速記学校で指導された主要理論（池田正一）

使用頻度が高い語には,略語を生成する方法として,略記法の最大線,最小線を用意した。中根式初版においてはこのような特徴を備えていた。図 2-59 の今日残されている正親の直筆文では「ところ」,「こと」で中根式初版にはない符号が書かれている。中根式成立までに 17 回基礎符号を変えており,初版完成までに用いられた速記符号である。正親の中根式創案を聞いて,熊崎健一郎は「幾多斬新なる法則あるが中にもインツクキの妙用には只管敬服の外無御座候,是等独創的御発明に対し満腔の敬意を表し申候」と正親へ書簡を送ったという。

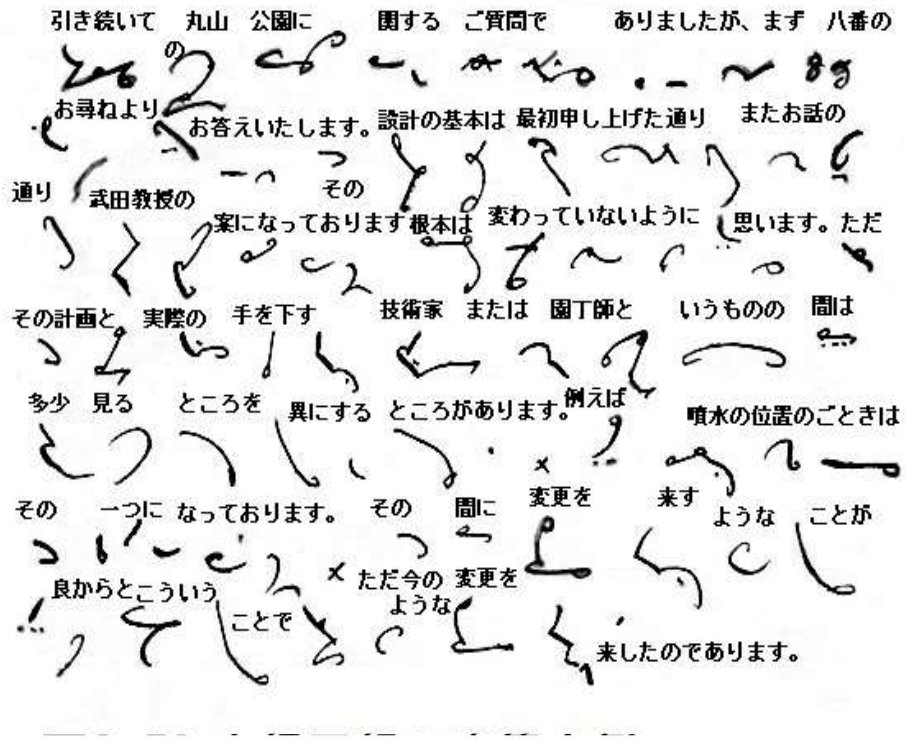


図 2－59　中根正親の直筆文例

正親は速記の普及活動を実弟,正雄（戸籍名正世）へ託し,その後三代目の康雄へ継承されて 2004 年,「ハヤカナ」と名づけられた改良方式が公表されている。図 2－60 に中根式の基礎符号の変遷を示す。中根式の初版と 2 版の違いとしては,［サ行］と［タ］,［ト］の右下向き画線の角度を正親版の 60 度から 30 度と改めている点がある。

ピットマン式との関係は,［K］→「カ」,［T］→「チ」,［N］→「ナ」,［NG］→「ニ」,［M］→「マ」が見られ,清音に淡線を充て濃線化して濁音とするほか,ア列音を二倍長くするとオ列音,イ列音を二倍長くするとエ列音とする面で影響が見られると武部は分析した。

正親は早くから教育法（要体教育）の研究，普及に傾倒しており，1914 年 9 月設けた中根式京都速記学校の活動を弟，正雄（戸籍名正世）に委ねた。正雄は中根式の実用化研究を行いながら，旧制中学を対象とした普及活動を全国的に展開した。そうして 1927 年,「通俗中根式速記法」を出版して，1929 年 4 月には東京都千代田区に中根速記学校を設立し，翌年には東京府から認可を受けた。

一方，1931 年に中根速記学校に入学した池田正一は速記を学んだのち，日本大学へ進学し，戦後 1946 年に中根速記学校へ戻って終生速記教育に従事した。池田は，中根式内部の符号研究をまとめていたが，1957 年 6 月に日本速記協会「日本の速記」紙上で「我が式の誇る省略法」(図 2-58)を紹介した。その体系は基本的に正雄が大成した速記理論であった。

正親，正雄の速記理論の構成は，(1) 基礎符号，(2) 濁音，半濁音，(3) 長音，拗音，(4) インツクキ法，(5) 助詞，(6) 上下段法，(7) 節音法，(8) 最大線，(9) 加点法，(10) 加点インツクキ法，(11) 交差平行法，(12) 符省法―とされた。

基礎符号は一種線と二種線の 2 つの長さを用いて，その生成規則は①ア列×2＝オ列，

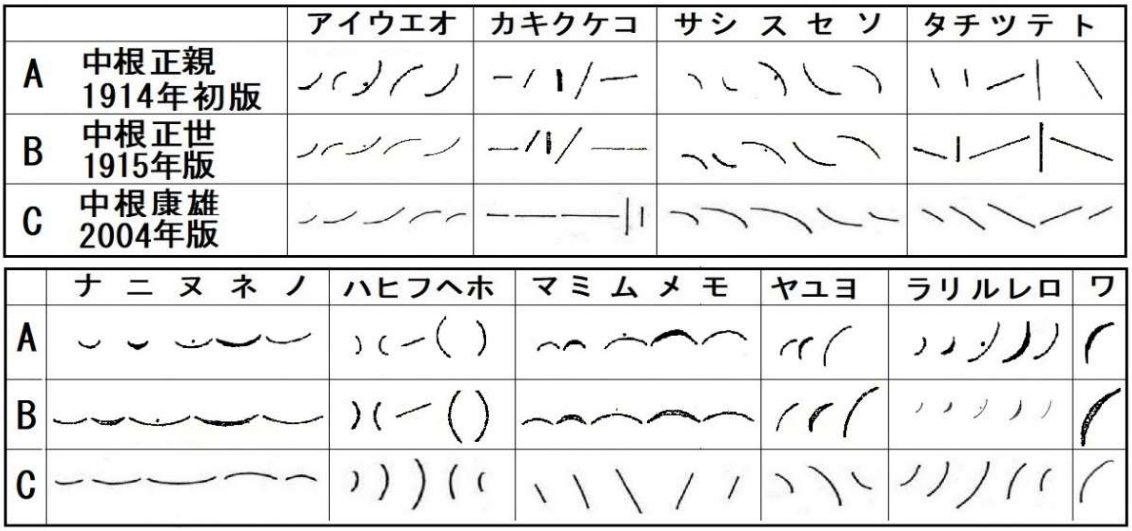


図 2－60　中根式速記法の基礎符号の変遷

②イ列×2＝エ列，③ア列の反対または濃くしてイ列，④ウ列はオ列＋点，⑤ただし[ク],[ツ]，[フ]，[ユ]は例外とするものであった。

線分符号の角度は 5 方向角度（方角）とし，線の両側を分けて正側（水平線は上側，その他の角度は左側）と負側（正側の反対側）の概念を用いることと，線長種は合計 4 種類とした。(この正側，負側の考え方はピットマン式，ガントレット式に見られ，正親はそれらの影響を受けていた)

濁音は，清音符号を濃線化するほか，[グ]，[ブ]，[ヅ]は正側中部に加点，半濁音は正側に小半円をつける。

基礎符号の直線は正側，曲線は内側頭部に大丸カギをつけて，ウ列，オ列は長音とし，ア列は拗短音（キャ等)，エ列は拗長音（キョー等）とする。

インツクキ法では，字音語の尾音につく 5 音を図 2－58②(1)にあるサインを逆記する方法を創始した。別に，ピットマン式の加点母音の手法を加点インツクキ法(同図②(2))として用いることにした。

逆記で尾部にサインがつかなくなった結果，助詞を順記（発音順に基礎符号を綴る書き方）によるサインで表し，頭部と尾部で同形のサインを巧みに読み分けさせた。また，助詞に二音のものを設けた。

符号を置く位置を筆記線の上側，下側に置く上下段法では，上段を訓読転化法（音訓換記法）による略語の筆記帯，下段をラ行音を持つ略語を置く帯域とした。

節音法は，和語のような二音字の訓読みから構成される言葉を略語化する方法である。

例えば「やり方」を「ヤ＋小丸カギ＋カ」と書き，中間小カギ法と呼ばれる。

最大線は，言葉の一音を取り出して長線（四種線）化して一語一線化する略記法である。

交差平行法は，単語から二音を取り出してその線分を組み合わせたり，平行に並べて卓立化や判読性を高める略記法である。

インツクキや拗音，長音のサインを接触，交差，空間表象によって表す略法を符省法と呼んだ。

このような縮記，略記，省記を実行する方法が整えられた。

中根式速記法は,旧制中学校,高等商業学校,戦後は新制高校における課外活動として普及し,最盛時には全国で5,000人規模の速記学習者を擁した。高校生が2年間程度の課外活動で最もよい成績では 400 字～450 字/分に達するという,それまでの方式にない学習性のよさを実証した。

中根式は課外活動として普及した関係で,専門速記者（1962年ごろ日本速記協会所属537名）以外の分野でも用いられてアカデミア関係へも広がり,学術研究のヒアリング調査などに利用されていた。例えば民俗学の岩倉市郎が速記を用いて調査した北陸の結婚儀礼の中根式による速記ノートを立命館大学の真下厚が研究してきたほか,民俗学の川島秀一は柳田国男らとともに口承文芸研究を行っていたが,みずからの調査聞き取りに中根系の山根式速記を用いていた。

また,近年日本教職員組合で偶然に符号原本が発見されることがあり,未解読のまま保管されていた速記原本が歴史研究のため解読に供される事例が出てきた。速記符号は使用者が利用分野,方言,時代などの違いから個人的な変化が生じたり,意図的に改良を加える場合もあり,多様化する傾向があることは第三者解読上で問題がある。

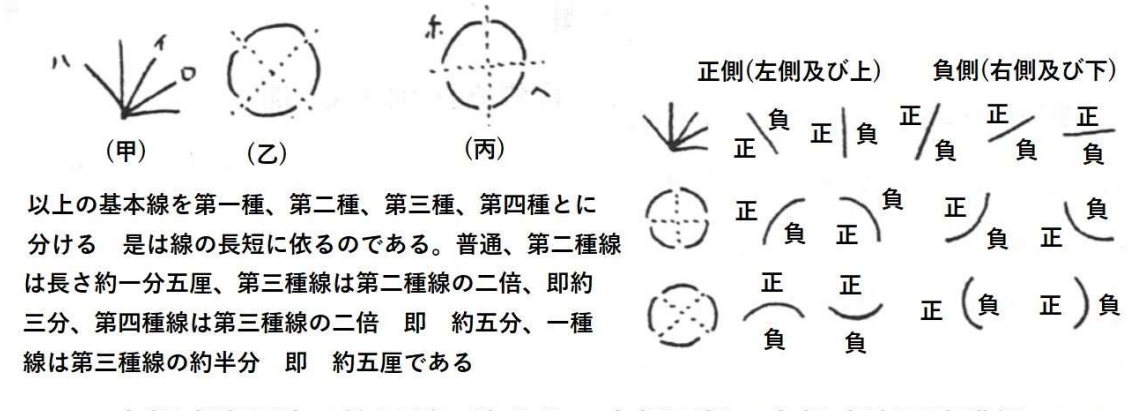


図 2-61　中根式速記法の基礎符号の決まり　中根正親　中根式速記法講解　1916

２．中根式から広がる多様な研究

中根式は多くの人材を輩出しながら多様な研究を生んできた。北村蘊雄の指導を受けて中根式を学んだ武部良明は,さきに中根式速記法の改良研究書「学生速記」を出版してい

たが,初めて「日本速記方式発達史」を著し,国語速記の理論,文化,方式の発達など,幅広く科学的な研究を進めた。「学生速記」の基礎符号は,中根式の線分符号の角度 5 種を 8 種へふやし,筆記負担のある加点符号を［ヌ］だけに減らす一方,同方向異角度線をふやした。

欧米では速記法の理論内容は,個人用途として用いる基礎符号のラテン文字式綴り法の正書法理論と,記録用途の高速度,逐語型の省略理論の 2 階層構造をとっている。一方,日本

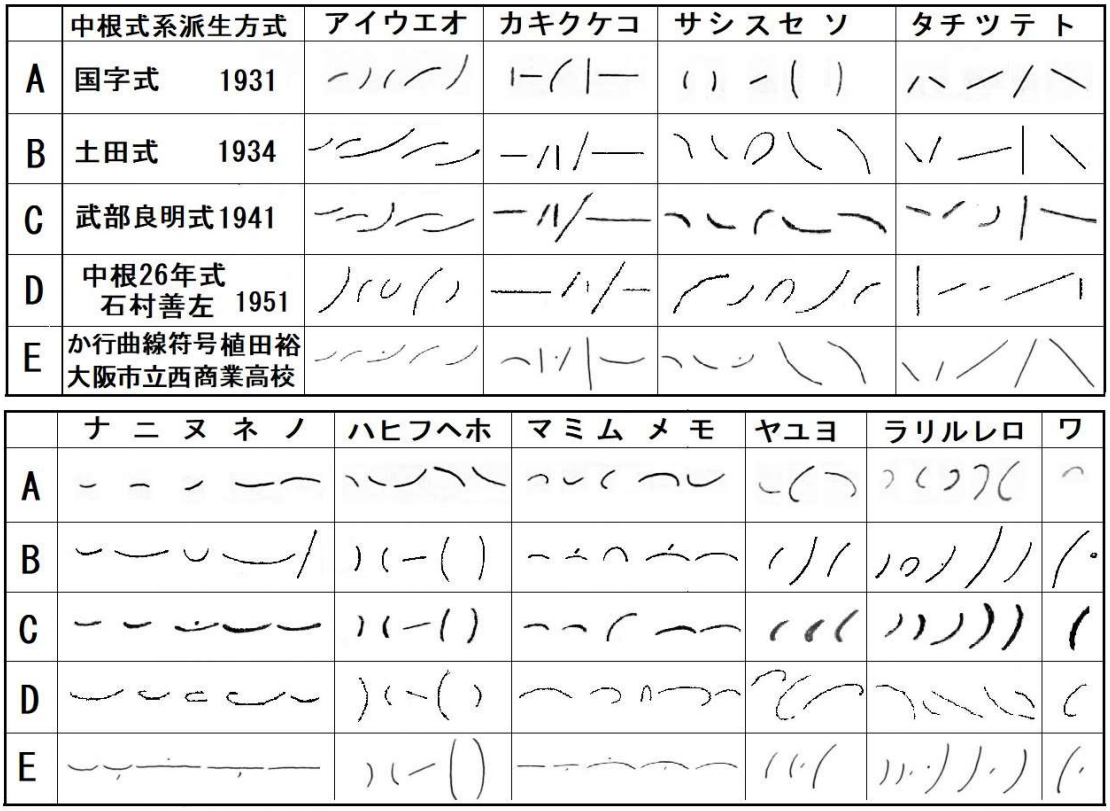


図 2－62　中根式系の基礎符号の多様化事例

では議会速記に用いる高速度逐語型用法に力点を置いて研究されてきた。しかし,基礎符号の連綴や縮記規則の運用を中心とする全音記法（発せられた音を省かないで全部書き取る書き方）では速度面に限界があった。そのため,高速度理論の研究においては,頻出度が高い熟語を省略する方法や２音節，３音節単位の特定符号として二音文字の工夫などを運用経験に基づいて改良されてきた。

正親は京大の速記を担当していた松川梅軒の依頼に応じて英文速記練習のために読み手を務めてピットマン式に触れる機会があり,新式設計においてピットマン式に似た符号イメージの実現を目指した。ピットマン式では子音の基礎アルファベット 24 個を画線とし,その生成器として図 2-63 のような 2 種の四分円と 5 種の傾斜から切り出した線分符号が定義されていた。

正親は，画線符号の長さを 4 種とし,一種線(線長 5 厘＝約 1.5 ミリ)，二種線(1 分 5 厘＝

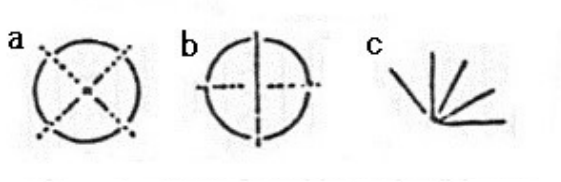


図 2-63 ピットマン式の符号源図

約 4.5 ミリ)，三種線（3 分＝約 9 ミリ)，四種線（5 分＝約 15 ミリ）で構成し，基礎符号には二種線と三種線を充てた。一種線と四種線は目的に応じて利用する。線分符号の角度はピットマン式のダイヤグラムズを採用して方角を 5 種としＡ：60 度(右下方向)，Ｂ：90 度(垂直下降)，Ｃ：30 度（右上方向），Ｄ：60 度(左下方向)，Ｅ：180 度(水平方向)とし，一方向へ書くことにした。角度Ａは，ピットマン式では 45 度であるが，これを正親は 60 度としたのに対し，中根式を大成した正雄と，超中根式へ進む森卓明はそれぞれ独自に 30 度に改めた。

また，筆記具はピットマン式にならって万年筆が用いられ，小型の符号を筆記するピットマン式の筆法を再現しようとした。図 2-59 に，直筆が残る，正親が運用した符号は小型で緻密なスタイルであった。

森は，中根式について①基本文字に濃線を用いることは幾何派では常識であり，②加点は筆運びが鈍るという意見がある，③頻度が高いサ行，タ行に右下向き線を用いるのを非難する意見があるが，[サ]，[タ]の連続は少ないので，規則によって書かずに表せば簡単に解決がつくはず，④ウ列加点文字のうち最も頻度が高い[ウ]，[ス]は等しく苦労するところ。例えば加点位置から次の符号を続ける工夫も可能，⑤ア行に短線，長線を与えたこと，⑥[ウ]の長線への加点文字も対応が可能，⑦インツクキの大円と小円をはさんで結ぶと不円滑を生じやすいので，代用形を考えることと，とした。

中根速記学校で学んで衆議院速記者となった土田利雄は，1934 年，改良を加えて土田式を公表した。主な変更は①本来ペンを使用する条件で組み立ててあるが，著者の実際の経験に鑑み鉛筆を使用する，②インツクキ法を改めた，③助詞に大改変を加えた，④いわゆる和語の一部を縮字した，⑤速記数字を制定した――点を挙げた。

その基礎符号(図 2-62Ｂ)は(1)角度を，右下向き線の 45 度，垂直線，左下向き・左上向き線を 120 度，同 150 度，水平方向線の 5 角度に改めた，(2)基礎符号の長さを３種類にふやして単画符号の数を多くした，(3)ウ列の加点符号で[ル]以外の符号を長線化ないしは半円，開口楕円などを用いて単線化し，[ク]の淡線化と一部の濁音に別種の符号を加え，また一部に加点ダッシュを設けた。

日本語の速記は 1882 年発表以来，もっぱら高速度逐語型の符号を完成することが目標とされた。その方式から国会速記者の採用試験に合格者を出せば実力が証明されたと言われる時代であった。土田式の登場は，中根式の評価を高める一方，既存方式の改良，新方式の立案を目指す研究が盛んに行われた。

森門下の赤坂薫は 1928 年，中根系で初めて貴族院の速記者採用試験に合格し，中根式が逐語用高速度方式として評価を得ることになった。赤坂は単画化研究を始めていた国会速記

者との交流において中根式，超中根式理論を紹介し，官民集まって速記学研究が盛り上がっていった。

３．単画派への転換と完全単画化への到達

点画が符号式速記の符号素材である。画つまり「画線とは，記線速記方式が速字の形式に利用する，いわゆる線のことである。ほとんど無限の種類の実際に書かれる具体的な線を線条と名づけて，特に有限個の条件によって規定される理想状態ともいうべきものを画線と名づける」と武部は説明する。「点は，連続して線をつくり，場合によって円となる符号の要素である」と，山根祐之は速記符号図形の生成原理を説明した。

利用しやすい録音技術がない時代，高速度にたえる記録型の速記の需要が発生し，文字文化の中で機能性人工文字体系の速記が開発されてきた。それら手書き速記は線分符号を筆記するため記線式とも呼ばれ，速記符号を生成するための線条は（1）幾何的な図形を用いる幾何派，（2）ラテン文字の筆記体の部分を用いる草書派，（3）それらを折衷した半草書派があり，（4）そのほか日本では日本語の文字の筆記を反映した文字派が研究されてきた。(図 2-64)

日本では主流の幾何派においては複画符号から折衷符号へ進化をたどり，理想的な単画符号が速記研究の目標とされた。それは一線に幾つの音韻数を担わせるかを追うものであった。基礎符号の完全な単画化は太平洋戦争後，国字式，山根式において実現を見た。

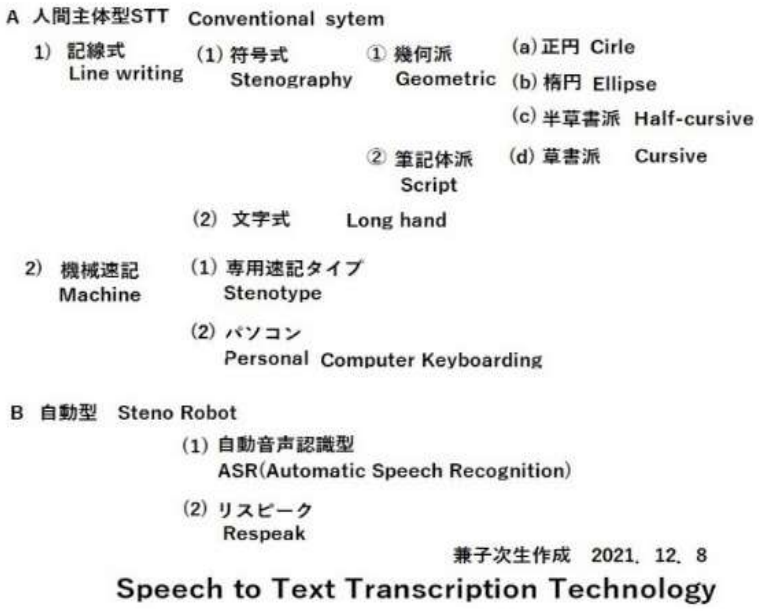


図 2−64 発話を文字化する速記の技術革新の進化

もっとも，複画派系から単画派への転身をはかる動きも高まりを見せていた。図 2−65Ａのように，田鎖式を修めた森山波蔵は 1917 年，8 方角，長短 2 種の単画方式を公表した。

大川小一郎は 1921 年,「大川式一字一画カナ改造応用速成速記法」を公表した。基礎符号（図 2-65Ｂ）に小円,楕円を導入して,中根式にある加点符号をなくしたが,ただ濃線は残した。それに対して,北村貫吾は直線の方向,角度を 6 種にふやし,一方曲線は深い曲がりと浅い曲がりの 2 種とし,濃線は残したものの,すべて一画の線条で基礎符号（図 2-64Ｃ）をつくり出した。中根式では［ア］の 2 倍が［オ］,［イ］の 2 倍が［エ］という関係だったが,大川式では［ア］の倍を［エ］,また［イ］の 2 倍を［オ］とする関係に変更した。また,複画の流れで,高橋鉄雄はすべてが一画で書ける,完全単画化の基礎符号を創案した。

一方，中根式においては，菅原登は1984年7月2日発行「中根式速記法体系（上）（中）（下)」において，中根式の主要研究者を中根正親派，中根正雄の中根派，中根速記学校の九段派，稲垣正興派，森卓明派，植田裕派の 6 派を挙げている。

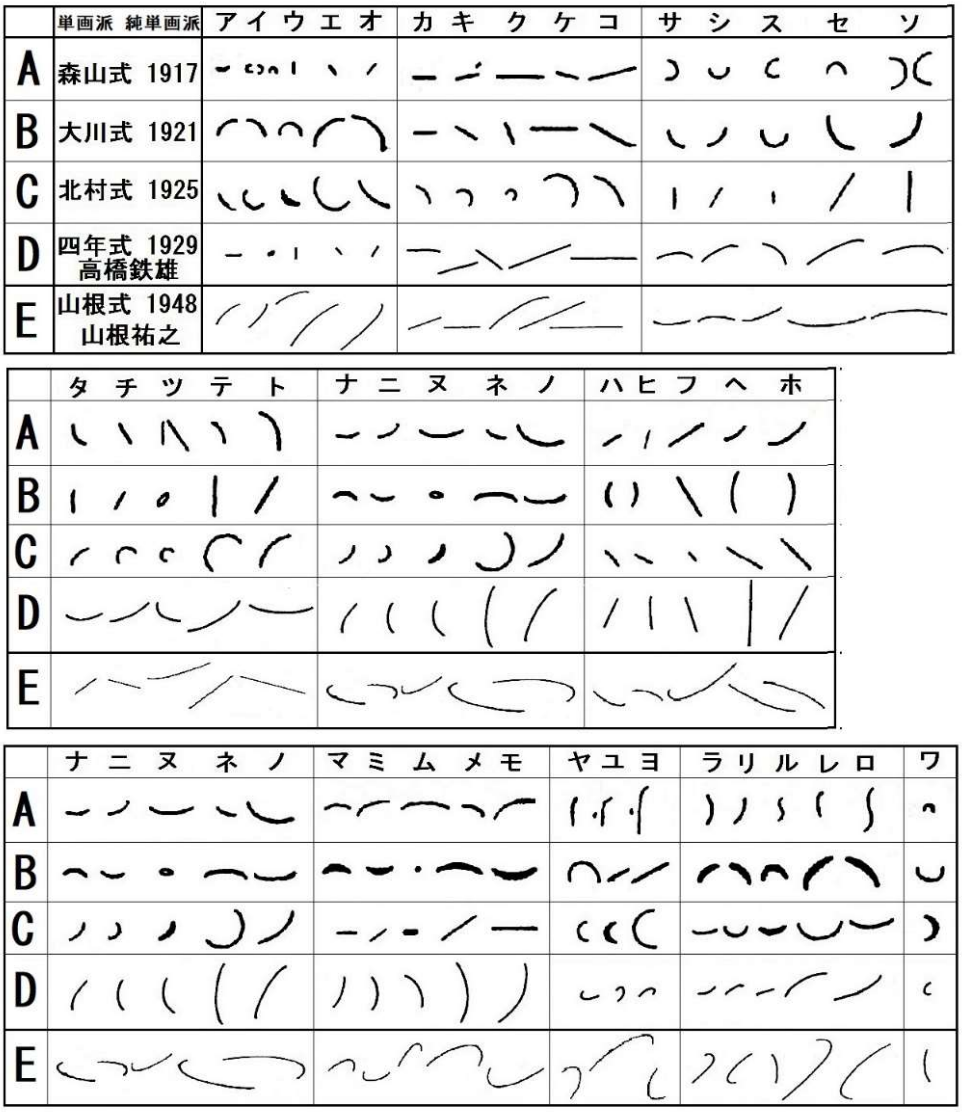


図 2-65　複画派からの単画化研究と純単画化の達成

４．速記研究における森卓明の業績

中根式で早くから速記理論の研究を進めた一人として,森卓明(1897.10－1987.10.24)がいた。森は,1919 年,中根正親が開いた第 4 回中根式速記法講習会を受講した。以後，先進国の速記理論を研究しながら中根式を高度化して，1931 年には超中根式速記法を公表した。その中で,和語の略記について音訓換記法に疑問を感じ，田鎖系の同行縮字法に着目して和語縮字法を工夫し,学習性と反訳性を向上した。

和語縮字法は,和語に同じ母音を有するものが非常に多いことを根拠にして,森は同じ母音を持つ子音を［カ行］は小カギ,［サ行］は大正円,［タ行］は有尾小円,［ナ行］は小円,［ハ行］は逆大カギ,［マ行］は逆小カギ,［ヤ行］は大カギ,［ラ行］は短小化または長大化――によって省画を図ることとした。その場合,混同を避けるために上段に書くことを原則と決めた。ただし,存在しない音列もしくは混同するおそれのない場合は同列だけに限定しないで,母音全体に応用するとした。さらに,森は外国語縮字法を設けて,あらゆる言葉の符号短縮にも備えた。

森は欧州の速記研究者とエスペラント語を用いて交流し,中根式の進歩,高速度理論の研究を開拓した。基本的な立ち位置として，師の正親への敬意を示して,僧籍にある森は基礎符号を終生変更しないと明言しながら,縮記法,略記法の改良や，比較速記方式理論，速記方式史の研究で業績を挙げ，日本における手書きの符号速記理論の研究をリードした。

欧米の速記先進国における母音の表記法を見ると,加点法が英語圏の正円幾何派,線条または筆記位置のドイツ語圏の草書派,円類サインを用いるフランス語圏の幾何派があり,その中で森は草書派の書きやすさにひかれた。

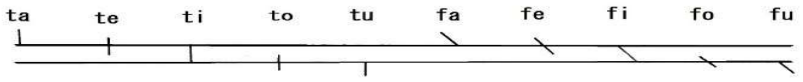


図 2－66　Moat 1833 における母音位置表象法
出典：Navarre Stenography 77p.

1833 年,モート Thomas Moat の音節符号（図 2-66）の生成法を見ると,/t/の子音符号を速記ノートの書線の高さに応じて,最上階を/a/,次を/e/,中央階を/i/,４段目を/o/,最下段を/u/とし,それぞれの高さに子音符号を置いた場合,/ｔa/,/te/,/ti/,/to/,/tu/と読む母音位置表象法が発案している。

幾何派のシンプルさと草書派の筆記運動のよさを組み合わせる視点から,クロス J.G.Cross は,図 2-69 にあるように，垂直線を用いないなど正円幾何派の符号に制約を加える一方,複雑な草書派符号の省画を目指す諸派理論折衷型の幾何楕円由来の半草書派方式を完成していたが,その楕円形の曲線はグレッグ式にも影響を与えた。ただ異なる点では,クロスは符号の筆記ゾーンを 5 段に分けて,そこに母音と子音を音表象する巧みな仕組みをつくり,符号の一線化と音声負荷の倍加を実現する理論を確立していた。

1872 年,フランスのルフェーブル Lefèvre の音表象文例(図 2-67)を見ると,一線化が実

現されている。

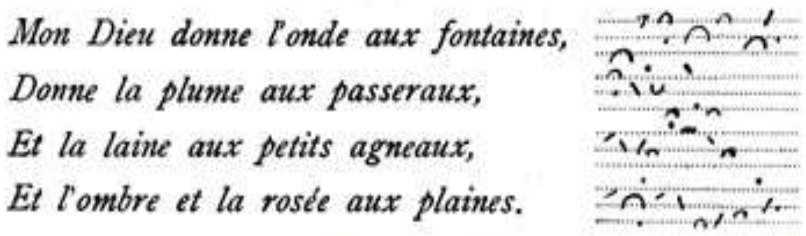


図 2-67　ルフェーブルのポジション式の文例

クロス J.G.Cross は「高速で発せられるすべての音声を完全に書き取ることは不可能である。言葉の中で聞こえてくるすべての音声を書きとめる速記理論はない」と言い,実務上の課題を解決するために,幾何派と草書派の理論から融合が可能な理論を取り出して調和させ,エクレクティック方式つまり折衷型と名づけた。(基礎符号は図 2－69)

速記符号の筆記位置		子音＋	母音＋	＋母音
1階	above	a au aw	p b	w
2階	on	e eu ew	s z sh	l
3階	across　中心線	i oi oy	m n	r
4階	just below	o ou ow	f v	t d th
5階	Farther below	u oo	c k g qu x	ch j h

図 2-68　クロス式における音表象法

現実に筆記する符号の運動量を減らすために,図 2-68 のように，クロス式でもよくあらわれる子音列に対して 2 文字列,3 文字列などの特定符号を設け,母音を示す位置に書いて,例えば/ｐ/を 1 階（above）に書くと“play”としたり，また,/sp/を 3 階（across）に置いて“spy”,/s/を 4 階（just　below）に書くと“slow”とするような位置による語表象を設定した。

クロス式では母音にもストロークを与え，子音を筆記帯域の 1 階から 5 階の位置に置くと，後に続く母音が変わり，また母音符号を 1 階から 5 階に置くと続く子音を示し，一方同様に 1 階から 5 階に母音を置くと先行する子音を表す規則（図 2-68）を設けた。

クロスの手法は（1）濃線化，（2）長線化，（3）サインの大型化，（4）短線の短線化，（5）サイン記号の小型化－という複雑な便法を組み合わせて,省画化,一線化を実現する体系であった。

森は「速記文字は早く書けること,すなわち速度を第一要件とする。速度の要素としては“簡単”と“流暢”がある。簡単さと言えば一線より簡単なものはない。そこで,速記文字を発音のとおり綴れば二線以上になるのを,一語を何とかして合理的に一線で表すようにしようというのが線表象法のねらいである」とクロス理論の日本語速記への応用を目指した。

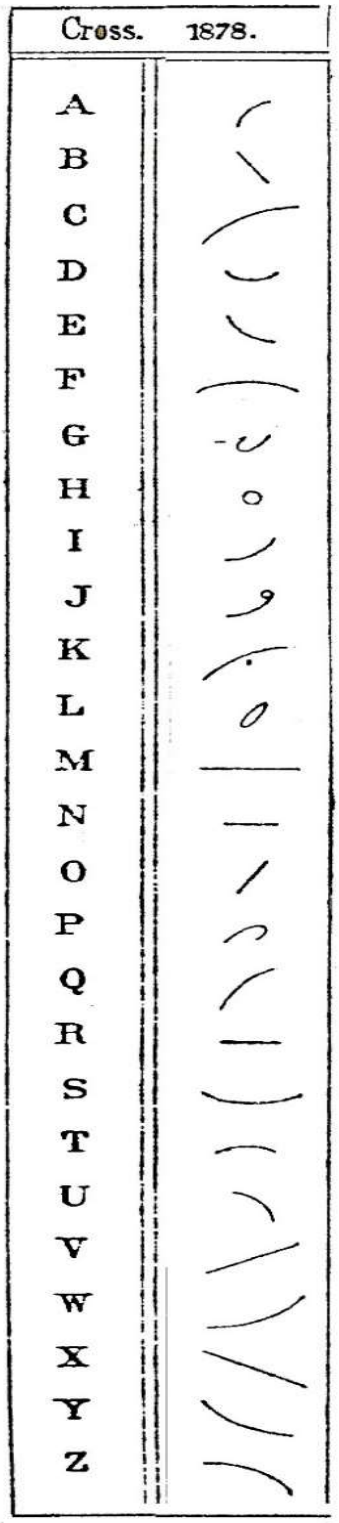


図 2-69 クロス式の基礎符号

シンボライズ Symbolize,つまり「表象」する法は,言葉を象徴させる特定の音声を，直接にではなく位置関係で付随的に示す音表象と,複数の線を簡単な一線として代表させるなどの線表象の 2 法がある。表象は象徴と同じ概念で用いられ,音声や言葉,意味を示す記号を生成する方法として機能する。

森は超中根式速記法の理論を発展させ,そうして中根式表象速記法を創案した。

近代速記法は音声による言葉を文字の言葉に変換するために中間メディアの速記符号を用いるが,それは必ずしも文字に支配されるものでなく,また音声の支配を受けるものでもないメカニズムで規則的に生成され,機能する。森の発想はクロス式にあり,ドイツ草書派にも存在する表音主義の縮記,省略思想であった。ただ，武部は，表音といっても，速記符号の実用上の機能は,「発話内容を思い出すためのヒントであればよい」と言う。

ところで,森は 1942 年,略画法として略符号生成の方程式となる一語一線,一文一線の着想を公表していた。これは,超中根式時代に,中根式における最大線,最小線が上中下段で用いることを「表象」という用語で示していた概念を線表象理論として規則化したものである。例えば中根式では長音拗音表記法で用いる頭部丸かぎを平行,交差等の方法によって頭部丸カギなどサインを省略（符省）する方法で,インツクキ法の中でインツクの 4 法を基本規則よりも簡単な形に変更する方法である。

前記の手法は楷書に相当すると森は言う。また,滑らかでない運筆を一筆化する手法として「草書化」をはかることにした。それは省画とあわせて書きやすさをもたらす効果があった。膠着語特有の助詞の扱いにおいても表象助詞を設けて草書化した。

線表象法においては,幾何派を対象にした速記符号一線化方程式を設定した。

$$A=f(x)$$

A は導き出される略字,f は最初の音の画線（第一線），x は最後の音の画線（第二線）で,それらの属性によって A が決定される。

また，例えば「経済」,「財政」のような字音語に対して，図 2-70 のように〇イ部分を第一種線化したのち，前音つまり頭音だけを取り出して略語化する前音摘記法を用意した。

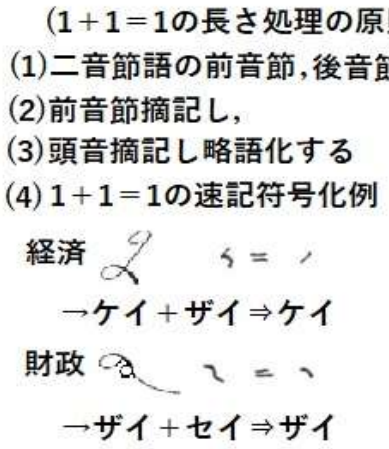


図 2-70　同じ線長の符号における前音摘記法

(略字の線の長さの決定法)

森は使用する速記符号の長さを 4 種類としており,短いほうから番号をつける。

もし,

(1)2＋2＝2 のように第一線 f と第二線 x が同じ第二種線の長さの場合,A は同じ長さ,

(2)第二線の長さが第一線よりも長い場合,A は第一線を 1/3 程度に短くする。2＋3＝1

(3)第二線の長さが第一線よりも短い場合,A は第一線を一倍半程度長くする。3＋2＝4

なお,2 線とも最短の一種線の場合は A の長さは 1＋1＝1 の規則を準用する。

のちにこれを,多音節語の一線化へ応用するために追加した。速記者が各人の判断により,句,節,文単位で決めておくことが可能である。

(二線一線化した速記符号を書く位置の決定法)

線表象で導き出された略字 A を筆記する位置については,図 2-71 のように,やはり第一線と第二線（ｘ）の属性に応じて決める。

図 2-71　５方角でまとめた線分符号のグループ

もし,線分符号の角度について,

(1)第二線が角度 a,または角度 b の場合,略字 A を上段に置く,

(2)第二線が角度 c,または角度 d の場合,略字 A を中心線上に置く,

(3)第二線が角度 e の場合 ,略字 A を下段に置く,

こととした。(図 2－72 参照)

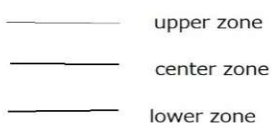


図 2-72 筆記位置(上,中,下)

森は表象理論を完成し,1977 年 6 月 1 日,方式名を「現代国語表象法」と命名した。

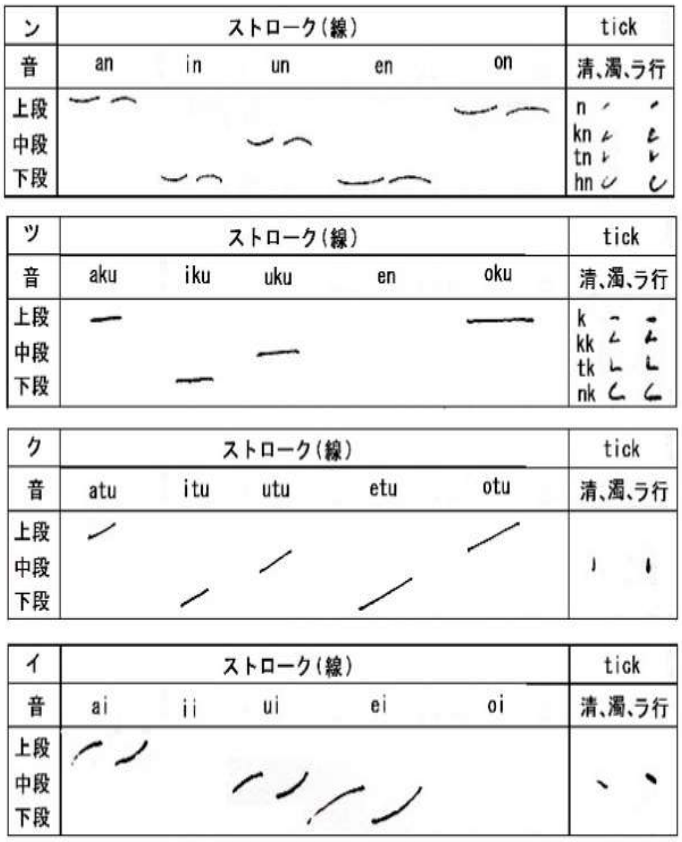


図 2−73「現代国語表象法」におけるストロークとティック・サイン

現代国語表象速記法では図 2-73 に見られるストロークとティック・サインを駆使することが特徴になっている。その開発の方針を森は,次のように述べている。

① 中根式の基礎符号で右下方向へ下がる線を極力使わない,
② 母音を書かないようにする,
③ したがって母音アイウエオを長音,拗（長）音の母音とする,
④ 母音を位置（段）で表象する,
⑤ 父音 consonant 符号をストローク(画線)で設定し,形はインツクキ法のようだが,「順記」にした最初の符号が父音 consonant をあらわす,
⑥ ア行と同様,ヤラワも書かないことがある,
⑦ 最短線（tick,ティック・サイン）を 5 方向に限り用いること,
⑧ 同様に,最短線の波線を３種用いる（左下方向,右上がり方向,左下がり方向),
⑨ 線分は長短６種を使い分ける,
⑩ 濃線は濁音とラ行に用いる,
⑪ この法則を外国語にも応用する。ただし,ｐ と ｆ を定める,

線表象法は，省画化と筆記時間短縮のために，特定の言葉の略語をつくる方法であり，２，３回出現した場合，臨機に略字として生成する用法であると位置づけている。

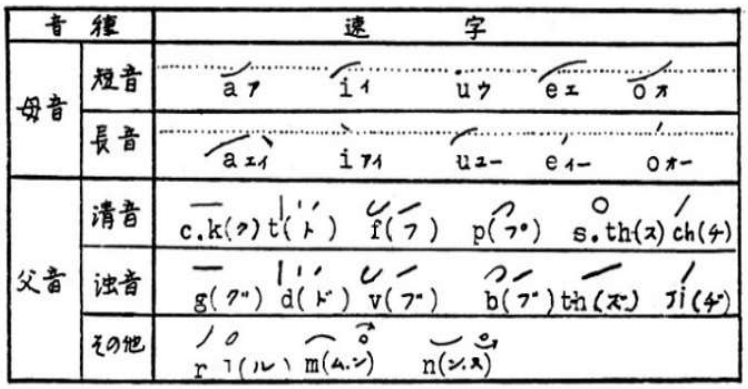


図 2-74「現代国語表象法」森卓明 の外国語用符号

音表象法としては，よく使われる言葉は，書きやすい線構成をとり，一般の略字として設定する。その場合，短線（ティック・サイン）を初音の特定符号として設定しておき，慣れた線や運筆を多用できるようにつとめた。そうすると同形の符号が同じ段に出現するリスクが高まるので，尾音が濃線の場合は本線のほうを濃線化して示差性を持たせた。森は濃淡と長さを正確に書き分ける能力にたけていたから，この筆法が可能であった。

創案者，正親は中根式のアイデンティティを立案の方針において示した。そこでは，漢字で書く言葉はインツクキを逆記し，訓読の言葉は音読にかえてインツクキで簡単に書くことと宣言していた。この速記理論の方針を踏襲する限り，中根式の枠を越えることにならないというのが，正親の見解であった。ここにおいて，森は順記法に転換し，和語縮字法，線表象法などを創案し，クロスの表象理論を日本語上で具現化して中根式立案の方針を超越する次元に達していた。

京都で中根正雄から中根式を学び，森の研究とも身近に接していた古久保はクロス式の五段法を採り入れ，幾何図形の正円ダイヤグラムにとどまっていた単画派から脱皮する方向へ進む。正円に加えて手書き態ながら幾何楕円を導入し，基礎符号のすべてを純粋な単画符号の規範とする考えであった。古久保はのちに国字峯吉，常弘，さらには寿光と名乗るが，その研究の最終形を門下の山根祐之が完成した。また，中根系で仮名速記を確立する岩村学を含めて，新しい速記の分野を切り開く動きが京都を舞台にして盛り上がっていく。それらについても別項で取り上げる。

中根式においては[ウ]，[ス]，[ヌ]，[ム]，[ル]の基礎符号が長線で，かつ加点を伴っている点に疑問を持つ研究者が多い。森は1932年８月に改良案を「速記研究」８月号に提案し，浜田喜一は1933年４月に除点四種線（最大線）化の改正私案を明らかにした。正雄は中根式速記協会機関誌に長さ１ミリの最小線（一種線）を[ウ]，[ス]，[ヌ]，[ム]，[ル]の代字とする提案を公表した。

基礎符号について森は中根式を変更しない立場であったが,1931 年に国字常弘は[ウ]の二倍線を[ク], [ス]の二倍線を[ツ],[ヌ]の二倍線を[フ],[ム]の二倍線を[ユ]とする構成方針を確立し,その規則性は 1951 年の山根式に継承された。一方, 土田は 1934 年,[ウ]の最大線（四種線）化,[ヌ],[ム]への半円,[ス]への開口楕円の割り当てなどを内容とする土田式を著した。武部は, 1941 年版「学生速記」において, [ウ],[ス],[ツ],[ム],[ユ],[ル]に 45 度曲線を中心に割り当てた新符号を示したが, [ヌ],[チ]の加点符号,[ニ],[ネ],[ミ],[メ],[リ],[レ],[ワ]の濃線符号は残された。

一方, 石村善左は中根 23 年式において基礎符号の改良を始めていた。それは中根系の国字式の影響を強く受けたもので,改良点は(1)濃線を廃止した,(2)幾何楕円の一部を取り出した曲線を[ニ],[ネ],[ミ],[メ],[ユ],[リ],[レ],[ワ]8 符号に配分したことである。そうして中根 24 年式においてさらに変更を加え,ついに中根 26 年式において大胆な改革を行い,同式をもって石村式が出発することとなった。

複画, 折衷派では頻度の高い字音語等の音列に対して一筆で書ける二音文字を与えることが中心であった。それに対して, 中根式は字音語の二音目に出現するインツクキ 5 音を縮記する普遍性のある理論を採用した。このインツクキ法の高度化面で,植田裕は順記法の採用などをはかった。香川県立高松商業学校で国語教師森一男から部活で中根式を学んだ植田は 1947 年卒業後四国新聞社に就職したが, 母校の速記部を指導し, 1948 年の戦後第 1 回高校中根式速記競技大会において教え子, 二年生の大塚都夫が分速 400 字を書いて優勝し, 翌年も優勝して連覇を遂げ, さらに 1953 年から 3 連覇を実現する快挙をあげた。中根式の改良研究に没頭し, 植田は四国新聞社を退社して, 全国でも珍しい高校の速記教師となった。

基礎符号の変更案が盛んな一時代,植田は「カ行曲線タ行斜線符号」を高松商業高校速記部で指導した。その符号案は[カ]と[マ],[コ]と[ノ]を入れかえ,[チ]と[キ],[テ]と[ケ]の符号を入れかえたのが主な変更であった。図 2-62Ｅは大阪市立西商業高校速記部が用いた「カ行曲線タ行斜線符号」で,巌正之が転校して創部した際に伝えた改良案である。[ヌ]が[ノ]に加点されているが,これが高松商業では[コ]に加点されている点が異なるが,数年後高商の基礎符号は元に戻った。

中根式において 1 文字前の位置に二音目の符号を繰り上げて置いて書く逆記法は, 他方式から筆記上無理があると指摘されていたが, 植田は,発音順に符号を書く順記法を導入して改善した。また,二線一筆化など画線のつなぎ目で筆を停止しないなど,書線の円滑化を図った。植田は,運筆法を改善しピットマンの幾何符号を離れて, グレッグ流の流麗な書線を万年筆で書いた。なお, 下谷は逆記法を田鎖系がとる二音文字を生成する規則であり, 筆記上の無理に結びつけることは合理的でないと見る。

植田は 1980 年 9 月には同じサイン記号を多読化する「スミニヒカリシ符号」を設けて, サイン符号を複数に読み分ける方法を考案した。また, 晩期にはＺ記法と呼ぶ, 字音語の音構造を対象とするＶＳＯＰ(Vowel Vanish, Stroke Omit at Position)理論の完成などが

ある。ＶＳＯＰの発想は，直音＋拗音など 12 種の音構成パターンを対象に，［上段］（イ・エ列，〇ウの形の長音･拗音，イ・チ・キ尾音），［中段］（ヨウを除くウ列長音・シュ，ツ・ク尾音），［下段］（ア・オ列，オ列長音，ただしヨウを除く，ショ，キョ，チョ，リョ．キャ，ショ，チャ，ニャ，ヒャ，シャ，ヒャ，ン尾音）の三段に筆記帯域を分け，代表音の母音，長音・拗音，尾音の種類に応じて省画化した摘記略語を規則的につくり出す方法であった。

要するに中根式は，日本語における字音語の音構造の規則性に着目し，それら尾音の縮記式を設けて演繹的に適用する原則をとった。これにより，戦前の中学生でも，個人の原則応用型の努力によって高速度に達する平易な理論を強みにして中等教育段階の部活に普及した。植田は字音語の複合語には早い時期に特殊漢音縮記法を加えた。

学生速記出身者の稲垣正興は，新制高校における部活速記の普及並びに速記実務者の養成に貢献した。早期の研究面では植田と並んで独自にインツクキ法の高度化をもたらす特殊インツクキ法を開発し，字音語の複合語を省画化する応用性の高い高度理論を実現していた。例えば「経済政策」の場合，「政策」は初音「セ」を取り出し，「経済」の略語となる「ケイ」符号の周辺にある「ク」の筆記位置から「セ」の符号を書く，つまり「ケイ」＋「セク」と書いて表す方法である。中根式の学習性のよさを拡張するアプローチがそれら研究の理想であり，稲垣はオーソドックスな理論を継承し，みずからの体系を「学生の速記」（1969 年），「速記練習ノート」の教材として発行した。

門下の高橋立成（朝日新聞）は日本速記協会の関西高速度競技会（1961 年）で第一席入賞を遂げたが，高橋が創部した関西学院大学速記研究部がその符号系統を継承してきた。同部では多様化する時代に合わせて左利き用の速記教科書を発行するなど，学生速記の継承者としてユニバーサル対応の教材の開発など有意義な活動を続けている。

５．純単画派の完成

ソシュールの言語の第一原理が速記にも適用される。いかなる言語においても，発音と速記符号との関係は創案者の恣意によるものである。グレッグの符号の書きやすさは，正円幾何派一本で来たピットマン系統の日本語速記方式に大きな刺激を与えた。武部は，グレッグの書線を自然線と呼び，いち早く取り入れたのは国字式であったとする。

ここでは書字行為を右手で書く形態に限って考えることにする。国字式にはグレッグ式が掲げた原則に外れる点がある。すなわちグレッグがいう（1）濃淡を使い分けない，（2）直立の直，曲線を用いない，（3）右下方向へ進む直，曲線を避ける，（4）鈍角接合は一線化して，そのままの使用を避けるーなどの禁則は守られていない。

グレッグが採用した線条はラテンアルファベットの筆記体であり，ドイツ草書派の符号観を踏襲している。一方，規範符号に幾何派の基礎符号を持つ国字式，山根式は，筆記体を規範書体とする半草書派ではない。両式の系統は，森の「現代国語表象法」を通じてク

ロス式の折衷式を取り入れたと見るほうがよい。例えば早稲田式が用いる［ノ］の規範書体はグレッグ式の［L］とは異質な価値観に基づくもので,図 2－75 に見るように，屈折語の欧米語と膠着語の日本語では筆記体の書き方が異なる。

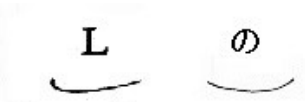


図 2-75　グレッグ式と早稲田式の運筆の違い

後者の価値観は，日本語の文字書き習慣に対応した動態符号を用いる研究へ進んでいく。文字書き技能には可塑性があり，田鎖式が登場したときから日本語の書字特徴を織り込む筆法を自然に体得する者がいたが適応できない者もおり，手書き速記の学習には手続き記憶の一面があって，佃式では速記独習不可能論を主張した。実際，幾何派の符号は綴りにくい組み合わせがあり，若林玵蔵ら優秀な者の筆跡をまねることが上達の近道でもあった。

だが,速記が登場して半世紀がたつと,速記理論の研究が進んで，日本的な習字技能を前提にした速記符号，連綴法に注目する者が出現してきた。それは意識されないでいたが,日本人が書きやすい線条の連なり,一定の崩れ方をさせる筆法,逆には用いてはいけない筆法を避けることが,日本語速記法においても,自然にこなされてきた。早稲田式の筆跡とグレッグの書体はそんな書字文化の違いを示している。

日本語においても，知識としての抽象的な静態符号は，速度を伴って現実に書かれるときに変化した動態符号となり，両者の関係を踏まえた速記符号理論が早稲田式などで研究されてきた。ことに，新しい概念の速記方式を構築するときに,過去の速記経験が肥料として働き,西欧の速記符号とは違った日本語速記法が生み出される。

その流れは「小型の精密な速記符号を崩れないで書く」という正円幾何派の書字態度から,今日では「大型の流暢な符号をのびのび書く」という筆記法へ変化してきた。言い換えれば西来路が求めた速記符号の小型化こそが高速化の条件とされた時代から,早稲田式,佐竹式のように速記符号の大型化が進んできた裏に,日本的な運筆の合理性への配慮が関係している。その流れから，純単画派のＶ式が生まれてきた。

一方，職業速記者の基本的な速記力としては,聞き慣れない音声を正確に聞く能力と,専門用語などを含んだ内容を理解する能力が求められ,かつ反射的によどみなく，絶えず 15～20 字程度遅れながらも符号を綴れる「ため書き」に熟達することが質のよい速記符号を筆記できると考えられるようになってきた。

６．国字式の誕生

基礎符号の純単画化の実現に尽くし,多くの高速度記録型の速記者を養成した研究者に,古久保峯吉（国字常弘，寿光,1896.7－1967.5.19）と,その弟子の山根祐之がいた。

1929 年，中根正雄が中根速記学校開設のために東京へ転じる際,古久保は京都成安女子学院の速記講師を正雄から任されたが,みずからの方式を創案する夢に挑戦し,1931 年新しい体系をつくり上げた。

古久保が理想とした速記は,「発音動作と書記運動を一致せしめれば，発音と密接不離の文字ができ，[ア]の字となる。ここに一音一字一画の簡単極致の音文字ができる」と主張する，幾何派の一線一音節符号の体系であった。

その際,字音語の縮記法はキクイツ法を創案して発音順に速記符号を書く「順記」を原則とし,五十音符号には,正円図形に加えて図 2-76 のような「自然円」と呼ぶ手書きした楕円の一部を取り出した曲線を取り入れ,濃線,加点のない完全な単画化を実現し得た。ただ，グレッグ式では図 2-77 の B の方角,C の方角を用いない。

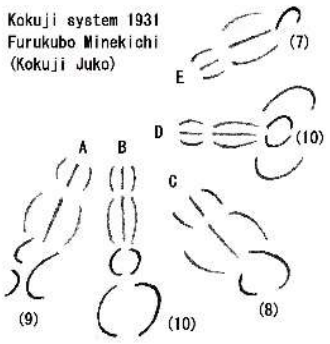


図 2-77 国字式の基礎符号の花

ここにおいて,古久保は中根式立案の方針を外れて国字常弘と名乗り,国字式が成立した。古久保は幾何派において手書きながら正円と楕円を用いる世界で初めての符号パラダイムの門を開いた。

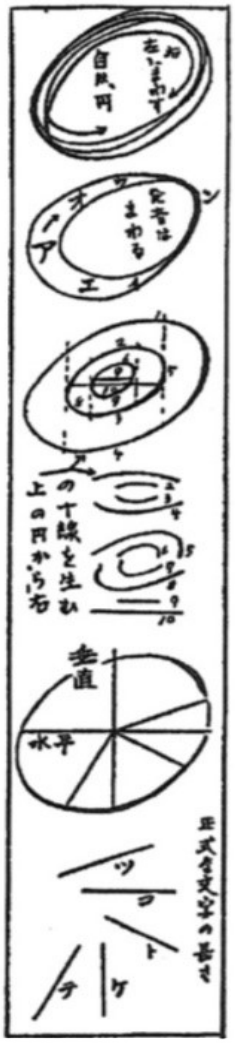


図　2-76　国字式の符号生成ダイヤグラム

国字式の隆盛期について武部は「普及は積極的に進んだ。その努力が実り,関西地方を中心に広く行き渡る存在へと発展した。後に日本速記協会が大阪で認定試験を行うに至ったのも,国字学塾の尽力によるものだった」と日本速記百年史に書いている。

また,古久保は,森が最新の理論方式と考えていたクロス式から新理論の研究を取り入れた。森の影響を受けて古久保が導入したのはクロス式の５段の筆記ゾーンを用いる着想で,体系の転換を終えた時点で国字寿光と改名，方式名を寿光式と改めた。しかし，クロス,森，古久保の符号観は山根式へは伝わらなかった。

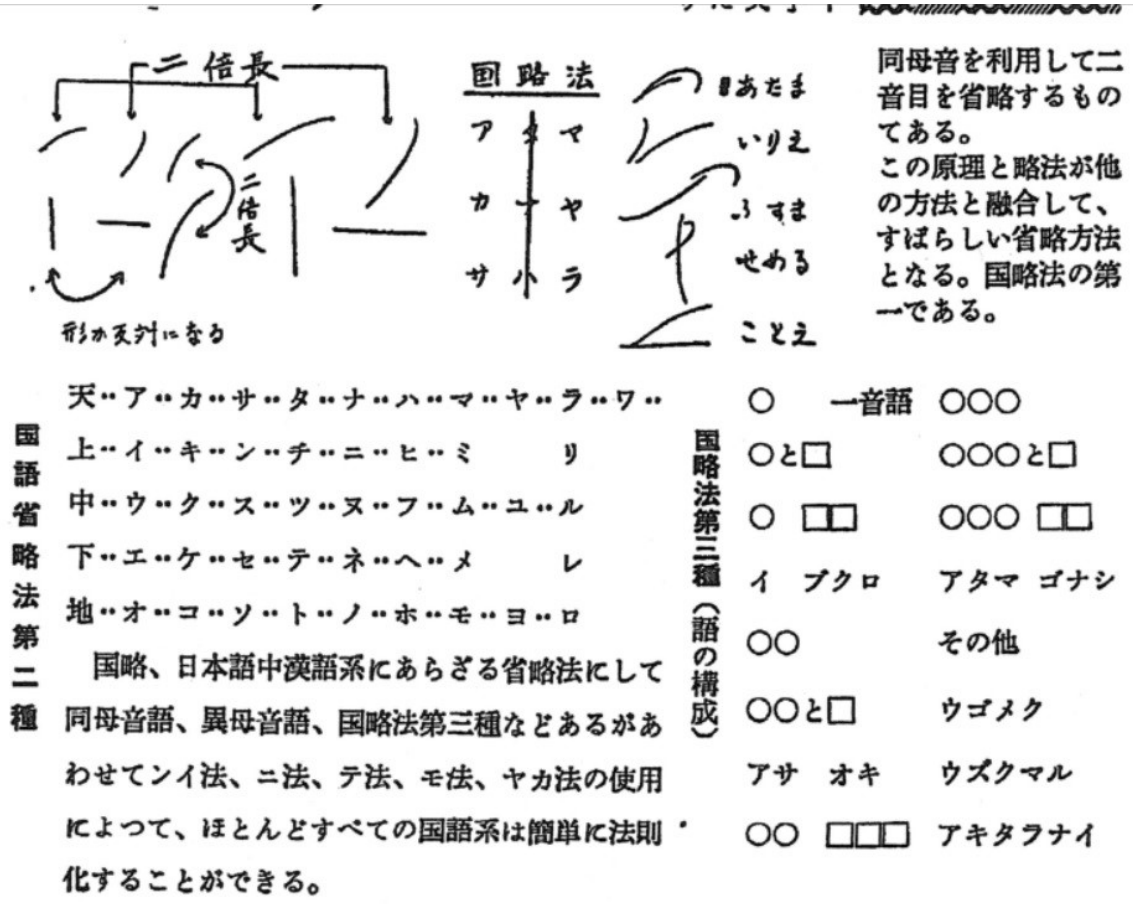


図 2-78 国字式寿光速記法の五段法

古久保は「国民を文字のドレイより救え！」とする師，中根正雄の速記普及精神を体して国字と改名し，考案した速記符号を日本語の文字にしたいとの理想に燃えた。新方式の発表は毎回，紀元節の祝日に行っていたが，理想を古久保は発音動作と速記の筆記運動を一致させることに置いた。符号の源図として四分円の第一象限から第三象限へ向かう楕円運動と直線を採用し，その中から線分符号を取り出した。符号要素の楕円を自然円と呼び，基礎符号の線長は長短 2 種，角度は 5 種とし，出現頻度と書きやすい符号要素を対応させた。

国字式の理論体系は，大和文字と呼ぶ基礎符号と，国語省略法（第一種，第二種，第三種）と漢語系省略法などで構成している。図 2-81Aのように，国字式の基礎符号はア列の二倍長をエ列，ア列曲線を反転させたり，対称的な角度に傾けた符号をイ列とし，イ列の二倍線をオ列，そのほかウ列符号はア行とカ行，サ行とタ行，ヌ行とハ行，ム行とヤ行，ラ行とワ行の関係で二倍線化させる規則的な対応をとった。

国字式における国語省略法の第一種は，対象の語が同母音であることを利用して 2 音目を省くもので，線分符号の周囲の位置（各行分 9 箇所）で表象する音の行を指定して，例

えば「頭」を［ア］と［マ］の符号を重ねて表したり，「入り江」（［イ］と［エ］），「ふすま」（［フ］と［マ］），「攻める」（［セ］と［ル］）を筆記する。図 2-80 の文例の 3 行目「破壊」では，［ハ］の周辺の［カ］の位置から［イ］を順記して書いて［カ］を省いている。

図2-79 字音語速記符号の符省法（国字式寿光速記法の例）
「日本の速記」1958年4月号から

同第二種は，天（ア列），上（イ列），中（ウ列），下（エ列），地（オ列）の五段において，同母音語，異母音語，国略法第三種などに応じて，「ンイ法」，「ニ法」，「テ法」，「モ法」，「ヤカ法」を用いて和語を規則的に処理する。

一方，漢語系の符省法として日常使用語 5 万語の音列の構成関係を分析して第 2 音に［キ］，［ク］，［イ］，［ツ］，［チ］，［ン］のどれかが出現する特徴を導き出した。この性質と第 1 音との関係に応じて 144 通りに応用できる 25,000 語余に適用して一筆化できる省略法とした。それは（第一字）［一字］，［長音］，［拗音］，［拗ク］，［拗ツ］，［拗ン］，［キ］，［ク］，［イ］，［ツ］，［チ］，［ン］×（第二字）［一字］，［長音］，［拗音］，［拗ク］，［拗ツ］，［拗ン］，［キ］，［ク］，［イ］，［ツ］，［チ］，［ン］で形成される文字列であった。

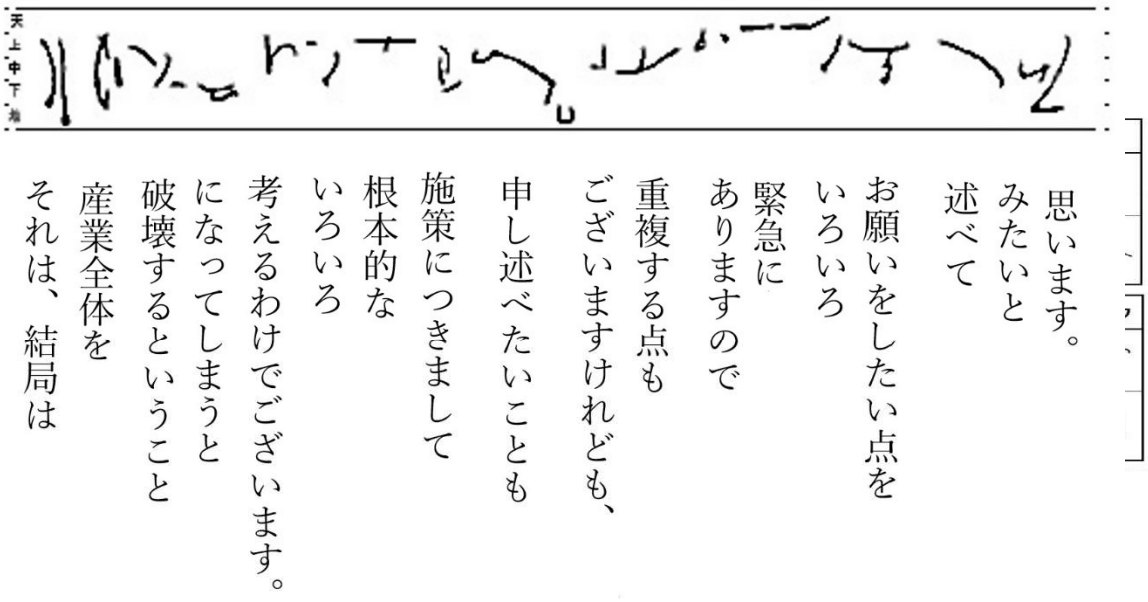


図 2-80　国字式寿光速記法の五段法による文例　国字寿光（古久保峯吉）

古久保は，寿光式の創案の目標を①正，②書きやすく，③読みやすく，④しかして簡単であること，がその構成の必要条件であり，⑤しかも美的にして品格が高ければ理想的である――とした。

京都の地では，中根, 森ら独創的な知のリーダーの啓発を受けて国字式, 岩村式, 米田式が育った。基礎符号における単画化比率は, 国字式, 山根式で 100%に達した。

図 2-81 国字式と山根式の基礎符号　　注：両式の基礎符号は必ず中心線から書き始める

兼子次生整理

７．山根式の創案

1931 年から古久保は大阪市浪速区桜川の国字速記学塾の本拠で国字式速記法の教育に当たり，旺盛な速記需要に応えて西日本有数の規模に成長させていた。1938 年から山根祐之は 2 年間，国字式を習っていた。太平洋戦争が激化する中，古久保は五段法を用いる新式「寿光式」の研究に乗り出したところ，大阪の国字速記学塾が戦火にあって教科書等すべてを焼失し，寿光式への切りかえを決断した。原爆投下で終戦を迎え，直ちに郷里広島へ帰り「寿光宝典一」をまとめたのは 1948 年 2 月，全体が完成したのは 1953 年であった。

山根祐之（1910.6.29－1995.3.2）は，古久保から国字式の教育に従事する許可を得て 1946 年 12 月大阪市都島区の国鉄淀川駅前に国字速記塾の支所として山根速記塾を開いた。1948 年から山根は学んだ理論に飽き足らず改良に取り組み，書きやすく，中学生にも学べるとする平易，合理的な符号を求めて先行方式の長所を採り入れながら整然とした体系を整えていた。それは「従来の国字式とは大いに異なっている」と自信に満ちた理論であった。

しかし，寿光式が完成すると古久保から全面切りかえを求められ，山根は五段法初め旧式と異なる寿光式に困惑しながら，それは符号観に混乱が生じると見て，山根式の立案を視野に入れて猶予を求めた。その間，古久保の許可を得て 1950 年には旧式「国字速記」No.1，同 No.2 を発行し，国字式を教え続けた。兵庫でも高弟豊岡敬人が教室を開設した。

そうして山根式の研究を開始し，3 年がかりで 1951 年に完成していくことになる。

一方，古久保は 1946 年から寿光式の講義プリント，寿光宝典などの教本を整備しながら広島で指導を始めていて，一式二符号の混乱を避ける方針から山根に新式転換を急ぐように強く求めた。しかし，煮え切らない山根の回答に対して事態の解決を急いだ古久保は著作権を根拠に山根に国字式，山根式の指導禁止，あわせて著作権を根拠に山根式の教科書発行差しとめ，1952 年以降停止されている山根からの納入金の支払いを求めて法的な解決を求める挙に出た。椎名靖とともに山根弁護に立った瀬戸豊は「師弟間の争いは結局 7 年がかりで 1961 年に和解した」と自伝（「速記百年にんげんばんざい」p126）に書き残している。その間，山根は都島区都島北通に山根速記学校を新築し，1956 年 5 月 20 日には大阪府知事認可となり，大阪山根速記学校と改称している。

山根が事態打開のためやむなく選んだ新方式では，長い指導で感じた体験に基づいて，基礎符号は，図 2-81Ｂに見るように学びやすさの視点から表音体系が見直され，符号群が横に流れるイメージへの転換を目指した。山根の理想は基礎符号から高度理論の体系へ一貫して至る点に置かれ，国字式をくまなく見直して緻密に組み立てた。その原点として，符号観について，自然円と称して手書きの楕円を使用する国字式が楕円符号の連綴に崩れを生じたり，書きにくいケースがある点を解決するため，幾何的な正円形と楕円形を規範符号とし，書き方の規範筆記法をとる方針をとった。ここにおいて，山根は基礎符号に静態符号を用いることになり，幾何派の正円楕円折衷が登場した。

法廷における速記方式の新規性，進歩性の評価は「山根式符号には国字式符号と同一符

号及び異音同形のものを含んでいる顕著な類似点のあることが認められるが，基本符号を全体として考察すると，縦直，曲線は運筆上不便であるため，被告においてこれが使用をさけたものであると認められ，原告の独創性にかかるものといえないことを考慮すると，偽作というにあたらない」（昭和 32 年（7）第 306 号違約金等請求事件判決文）と書かれている。そして古久保が求めた著作権侵害については，山根式の教本には国字式の教本にある内容をもとに説明しており，これが「出所を明示していないから，正当な節録引用に該当せず，偽作」（同判決文）とし，国字式の教本を無断で模倣しており，今後も原告の著作権を侵害するおそれがあるため著作権侵害であると判断した。その結果，判決文では，「被告は山根式速記講座①②③を発行してはならない」とした。

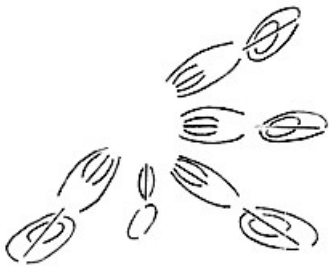


図 2－82　山根式の基礎符号の花

山根式立案の戦略方針は①基礎符号は言葉の頻度と発音の頻度の高いものに，例えばアカサタハ行に流れのよい線を配分する，②将来の省略法体系とその運用する符号形から逆算して基礎符号を決定する，③熟語の簡略化よりも音の簡略記法を目指すーこととした。

1951 年発行した山根式教本において,かくあるべき基礎符号が示されたが,その規範符号は静態であり，速度要素を持って書かれる動態符号の書き癖,崩れを許さないものとなった。そのため，楕円，正円，直線の綴り方を詳しく教材に挙げて，図 2－83 の第 1 図のように「公差」つまり方変の差の程度を詳しく解説した。とりわけ正円，楕円，直線を正確に書くために，山根は中根式から始まる字音語の尾音縮記法のキクイツチンの運筆法を詳細に定義して綴り方の規範化をはかった。例えば関連法には/イ/の書き方として(1)頭音のほか，(2)第 4 図②「イン法」にある「委員」の「員」の例，(3) 同③[ンイ法]にある「引退」の「退」の例，(4) 同④「イ拗法」にある「解消」の例書き方――などが示されたほか，図 2－83 第 2 図④の「イ長略法」に見られる「解答」,「声望」のような独特の筆法が設けられた。

学習者に規範符号の姿，規範運筆法の定着を習慣化させるために，基本となる基礎音の組み合わせを徹底する練習法をとった。その目的は，速く書くよりも，正確に書くことを徹底する初歩教育である。そのため,規範符号の測字器を用いて矯正が課された。

山根式の理論体系では祖系中根式，父系国字式の影響を受けて，速記法の書記規則を法則と呼び，山根式では①撥ね，②流し，③縮字，④加点，⑤公差，⑥接頭，⑦接尾，⑧順逆，⑨段位，⑩反語，⑪名詞，⑫漢語，⑬和語，⑭後略，⑮数詞，⑯関連，⑰大文字の 17 法を体系化した。その運用技能面では，基礎符号の鈍角接合を避けて鋭角化と変化による書速向上（図 2－83 第 2 図④），反訳の能率化を挙げ，書き崩れしない筆記に慣れるために 2 文字を連綴練習する 1936 法を設けた。同法は/アア/，/アイ/，/アウ/のように基礎符号を 2 個ずつ連綴すると，44 字×44 字で合計 1936 組の接続形になるので 1936 法と呼ぶ。

速記符号の書き方理論面では，図 2−83 第 2 図「イ音ン音拗音・イ長略法」の関連で①「長長（長音と長音）の略法」: 2 音目の符号の頭部を交差して符省（符号省略）する，②「ン長略法」:「ン」の右上ハネにこだわらないで，長音は頭部交差する，③「拗長略法」: 拗音小カギをつけて，「長長法」にならう，④「イ長略法」:「イ」の大楕円と長音の小楕円を合して特大円として字間に位置する―を設けたとする。

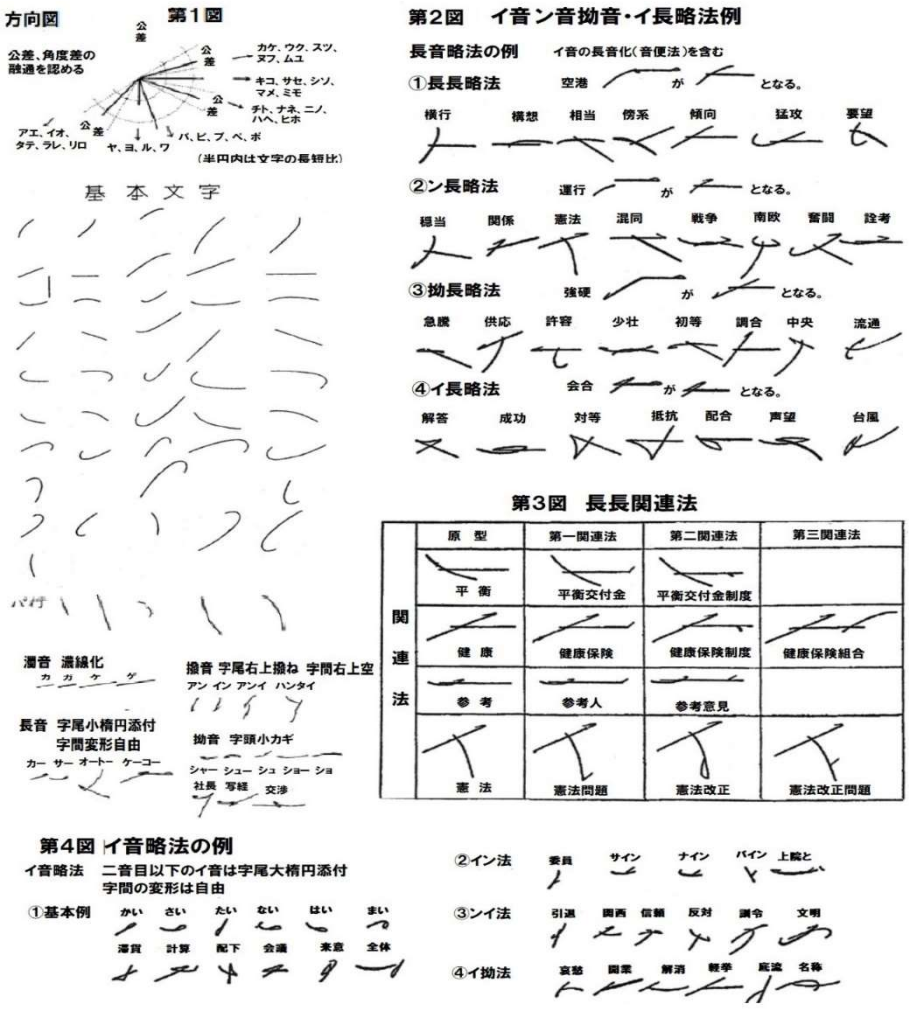


図 2-83　山根式の速記理論概要図

さらに⑤「ン拗法」では（a)「ン」をハネて着地したと思われる位置から次線を書き出して「ン」を符省，(b)「ン」のハネを利用した逆カギ法では「拗音カギ省略法」，(c）前字を利用して「ン」のハネとカギを符省する，⑥「イン略法」では（a）前字脚部から「ン」を書いて「イ」を符省，そのほかの方法では⑦「順逆法」として（a）線分符号の上側，右側を順側，反対側を逆側と決めて，動詞型の「ラレ」，「カレ」等の受け身型を順側と決め，反対の逆側を「シメ」，「サセ」等の使役語を表す方法，(b)「ラ行省略」: 2 音目以下に来るラ行音を下段位において符省，⑧流し法を設けて，述部部分の多様な表現を，

前字を利用して簡潔に書く方法なども加えた。

古久保峯吉の死去により国字式の教育は途絶えた。また山根祐之の死去により山根式の普及活動は終了して,山根速記学校は同年 8 月大阪府が認可を取り消して閉校した。山根式を継承するのは,関西大学文化会速記部だけとなった。

８．石村善左の符号研究

石村善左（のちに禧行と改名。1916.3.9－2009.11.28）は 1949 年,石村式の第一歩となる中根 24 年式の改良案を完成し,さらに 1951 年に中根 26 年式へと改良案を重ねた。1958 年 1 月に石村は「私は現在の案を得るまでには，1940 年以来基本文字だけでも 50 を下らないほどの改訂を行った」と回顧している。石村は生涯にわたり,確認できるところで 18 版,97 回基礎符号の変更をしている。図 2-84 に主要な符号変更の例を挙げた。歴史的に見ても，世界の速記符号研究者で,速記実務を行いながら,これほどの回数の符号変更をした者はいなかったであろう。

石村は旧制福岡市商業学校在学中に中根正雄の速記講演を聞いて,独習で中根式を学んだ。1932 年第 1 回全国中根式速記選手権大会で優勝するなど伝説の選手として知られ，福商速記部を育てて,石村善右，善左（禧行），善兵衛，善助，善治の 5 兄弟はいずれも優秀な速記競技選手として活躍した。

同時に石村は,速記符号とその書法について自身の速記線の理想像を描き,合理的な表音思想と幾何符号の調和を求めて好きな線と書きよい線の体系化を求め続けた。ねらいとしたのは,書きやすさ,綴りやすさ,学びやすさの改善であった。

戦後の中根式速記協会の中根式標準符号制定委員会において,石村は中根式研究の命題として(1)基本文字の濃線廃止,(2)(逆記を行う)インツクキ法の再検討,(3)二音目にあるインツクキの省略―を挙げた。

そして幾何派の基礎符号資源を広げる方法として中根系国字式で自然線と呼ぶ幾何楕円の一部を活用する発想に着目し,10 符号を変更した。これが早期に公開した中根 23 年式の符号であった。

石村はグレッグ式の速記線を理想としたが,ただし画線の中でグレッグが避けた縦 90 度,右下への下降線を改めず,また縦のずりを問題と見ずに対策をとらなかった。

中根式立案の方針の境界線を越えた 1951 年には,一旦公表した「中根式 26 年式」を「石村式」と変えて,中根式から離れた。

一般に基礎符号を変更することは大変なエネルギーを要するが,石村は天才的な適応力を持ち,半草書派,幾何派理論を融合し,幾何派の書きにくさを改善するため日本的な連綴運動を重視した線イメージを追い続けた。その前提にある石村の速記線観を解明する必要がある。

中根正雄はそうした石村と終生,師弟関係を温めた。

石村は優れた速記適性を備えており,基礎符号を 1948 年から 2000 年までに 18 版を改訂した。定説の石村式初版となる中根 26 年式では五十音符号の 90.9%が変更される大規模な変更だったが,離陸定説とされる中根 24 年式の前年に中根 23 年式を実施していたことが発見され,8 基礎符号 18%を変更して正親版,正雄版に続く中根標準式を目指す動きを進めていたことがわかっている。主な改訂は 1958 年,1959 年,1963 年,1968 年,1973 年,1988 年などに見られた。

石村式における基礎符号改定を数えるベースとして，基礎符号は清音 44 音に撥音 1 を加えた 45 として数えた。多い順に変更した合計回数に見ると,8 回が［ヌ］，［ム］2 符号,6 回が［ネ］1 符号,5 回が［ウ］，［ユ］2 符号,4 回が［ヤ］，［フ］，［ああニ］3 符号,3 回が［ク］，［タ］，［ミ］，［ル］，［ロ］5 符号,2 回が［イ］，［エ］，［オ］，［カ］，［ス］，［ツ］，［ノ］，［ラ］，［ワ］［ン］10 符号,1 回が［ア］，［コ］，［サ］，［シ］，［セ］，［ソ］，［チ］，［テ］，［ト］，［ナ］，［ハ］，［ホ］，［マ］，［メ］，［モ］，［ヨ］，［リ］，［レ］18 符号,中根式時代から変更がなかったのは［キ］，［ケ］，［ヒ］，［ヘ］4 符号であった。

一般に符号素材用の図形資源は有限であり，理想的な配分が難しいため,音韻,音列の出現頻度と連続関係，筆記能率の効率,連綴条件の相性などから基礎符号の設計を判断せざるを得ない制約があり,改良者,創案者の速記線イメージが重要な判断要素になっている。その裏に基礎符号配分の満足度が相対的なものであり,満足できない符号の入れかえに創案者の線嗜好が関係していると見られ,石村の変更歴は速記方式研究における基礎符号の選択動機を解明する上で意味がある。

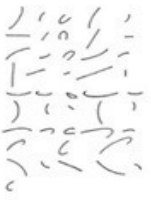
明治時代の創案者，改良者は,英文速記の方式書を入手して日本語の速記法を設計する際,英語の音声と速記符号の関係を参考にして日本語に当てはめた。その合理的関係は科学的な根拠を持たなかった。日本語の音声や言語学的な知識体系と関連づけることは試みられたものの,むしろ研究者は手にした速記符号をどう改良するかに興味を持った。

日本語における,母音の比率を見ると,大西雅雄「語音頻度より観たる十カ国語の発音基底」において，a 母音 15.96%,o 母音 12%,i 母音 10.59%,u 母音 5.57%であるから,ア列を重視する田鎖系のア列父音の単画は有効であるように見える。

一方,今栄国晴「日本語の diagram の相対的頻度とその特性」では

1949版

1951版


1957版

1962版

1967版

1973版

図 2−84 石村式の主な符号改訂表

上位 10 音節として①「イ」(4.7%),②「ウ」(3.8%),③「ン」(3.3%),④「ノ」(2.9%),⑤「カ」(2.8%),⑥「タ」(2.7%),⑦「ト」(2.4%),⑧「シ」(2.3%),⑨「オ」(2.3%),⑩「テ」(2.0%) とする。これらが前後合わせて 3 音節でどのような音列を形成するかを見て,基礎符号の配分を計画することができる。

研究者が持つ基礎符号改変の動機は,「理想的な線構成の実現」が大きい。石村の符号変更を見ると,0 回の[キ],[ケ],[ヒ],[へ]や,1 回変更の 17 符号についてはベストセッティングされたとみてもよい。使用頻度が高いものほど書きよい符号を配当するので,変更回数が 0〜3 回程度であれば基礎符号が適応したものと見ることができる。一方,上位回数では 8 回変更が 2 符号,6 回変更が 1 符号であり,出現頻度はそう高くない音,かつ良線を配当するゆとりがなく最適解を得ていない符号であると理解できる。

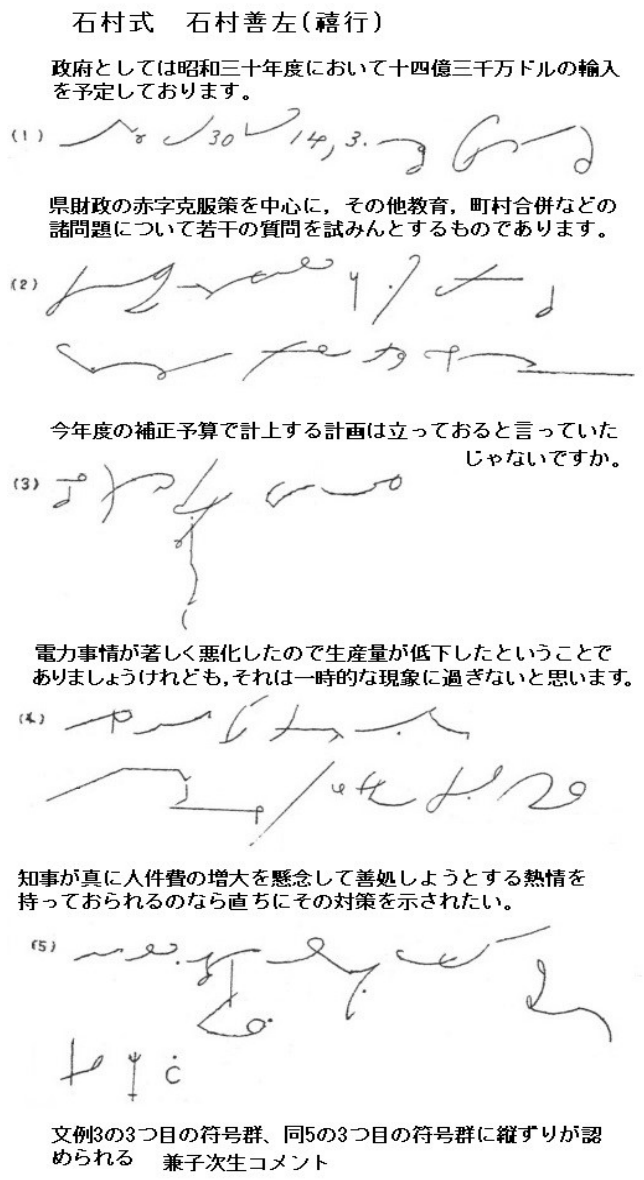


図 2-85 石村式の文例

不思議なことに，基礎符号をこれほど変更しても,石村が綴る符号のイメージは変わっていない。それは筆記者に内的な速記符号イメージがあり,心的な符号の筆記態度ができ上っている場合,画線運用の構成イメージが存在するように受け取れる。見方によれば,筆記習慣により,実行する個人の好きな線,書きよい線が定着していると感じられる。

一方,岩村から刺激を受け,石村は 1941 年には岩村式カナ速記の講座を受けたのち，速度練習に励み，1944 年 8 月に 10 分間 2,800 字の技能に達した。そのあと,岩村式の単画符号化を実行,全面的に変えた方式で3カ月練習し10分間 3,500 字に到達した段階で,衆議院の採用試験を受けて 55 名中 2 位,参議院の試験でも 60 名中 3 位の成績で合格した。これは石村の内的な画線筆記のパターンが完成されていることを示唆しているようだ。

図 2-85 の速記符号文例の 3),5)

に見られる垂直のずりは幾何派の欠点とされる線の組み合わせであるが,石村は苦もなく書きこなしており,方式を変更して最高速度へ達するのも非常に早かったことも前人未踏である。

石村は，次のように基本符号研究の結論を書いている。

しからば，いかなる基本文字を理想と考えたか。

1)基本文字はやはり純単画（加点，濃線等を含まず）がよいと考える。ただし単画の欠点は極力是正し，折衷，複画の長所は取り入れる，

2)無意味な構成原理，より重要な構成原理にとらわれて，より重要な要素（頻度・運筆・方向等）を軽視してはならない，

3)長短の差はなるべく二種までとし，長短の関係は似た音同士とする。似た音には似た線を使ってもよい，

4)基本文字の中にできるだけ縮字法の要素を含ませ，基本文字を覚えたら縮字法の大半を一緒に覚えたことになり，別に複雑な縮字法を覚える必要のないように基本文字を工夫する，

5)単画基本文字の欠点の一つは覚えにくいことであるから，できたら既習の普通文字に関連を持たせる，

6)基本文字はできたらなるべく一通りがよい。最初から幾通りもあることは生徒が選択に迷う。

さらに，縮字・略字については，

(1)方向を一貫させ覚えやすくする，

(2)濁音表示法を工夫して，スピードを落とさず，かつ明瞭で読みやすい符号とする，

(3)基礎の縮字法を覚えて，いきなり使用頻度の少ない，覚えにくい略字を覚え込ませることなく，覚えやすく使用頻度の高いもののみで，中級文例，中級略字を選定し，むりなくこれに導入する，

(4)略字は，一符号一字主義で，前後の判読に頼らなくでも読めるようにする，

(5)略字は，特に方向，運筆を考え，右下に下がる線等多くならないように作成する，

とした。

９．小西佐都志と長商式

早くから石村の影響を受けたのは,小西佐都志（1920.2.22－2006.4.14）であった。中

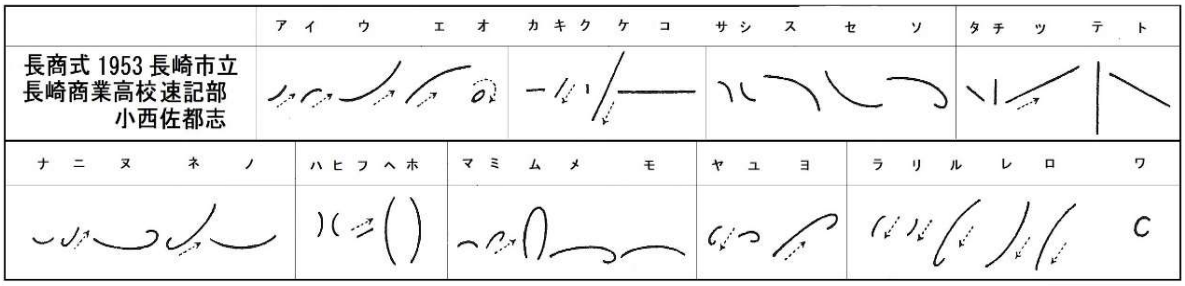


図 2－86　長商式の基礎符号　1953　小西佐都志

根式の小西は母校名を冠して 1953 年長商式速記法を創案した。

小西は 1933 年,旧制長崎商業学校の 2 年生で中根式速記法の学習を始め,旧制長崎高等商業学校に進んで速記部を創設している。長崎高商を卒業後,大陸で夢を追ったが,敗戦後故郷に復員した。家業のかたわら,1949 年 4 月,県下で初めて県立長崎第二商業高校に速記科が設けられた際,速記教育に身を投じ,1951 年県立長崎商業高校に選択科の速記科が置かれた際にも講師を引き受けた。1956 年には方式名を長商式と名付けた。

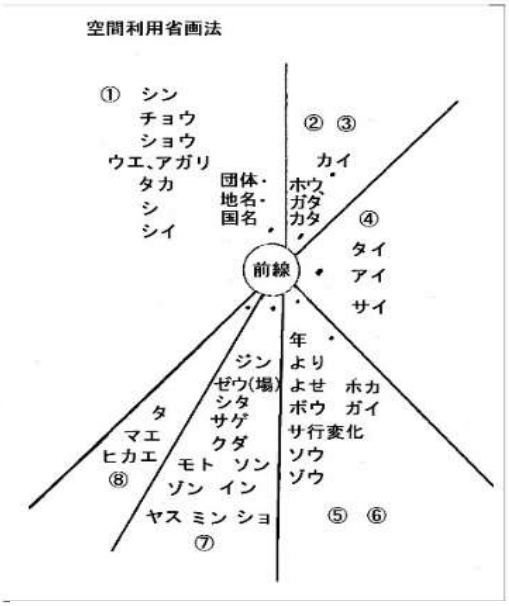


図 2-87　長商式の加点法

図 2-86 のように，小西の基礎符号は中根式の基礎符号にある加点符号と濃線符号を廃止し，衆議院式単画理論の一部を導入した。その際,石村の中根 24 年式の影響を強く受けたとする。また,西来路「衆議院標準速記法原理」の省略法理論の理念を中根式に適用して縮記法,略記法を整えた。

例えばある符号の周辺位置に意味を持たせて省画化をはかる空間利用省画法や位置省画法,加点省画法（図 2-87)）を設けて,漢字音を主とする手法を組み立てた。長商式は 1953 年に完成した。さらに研究を続けて 1978 年 5 月に日本語の速記法を強化して英語も書ける英語速記法を公表し,1996 年には「日英同時速記法」を出版した。

Ⅴ　書きやすさを追って,筆記理論からの新しい研究

１．速記の科学研究　畑田明の符字論

太平洋戦争後,参議院単画符号を開発した元参議院速記者養成所長,畑田明は,速記符号の設計に関して発音速度との関連から,次のように書いている。

速記符号の筆記速度：S　　発音速度：P

S＞P

これは,不可能ではないし,別に夢でもない。

畑田は「幾何派の高速度速記法のクライテリア（基準）は 1 ストローク（画）に 2.6 音～3.5 音をいかにして負荷することができるかどうかというところ」とした。そのカギとなるのは,筆記運動の研究にあり,「速記は求心力(図 2-88)で書かれる。求心力をどう活かすかが草書派の実用化の鍵を握っている」と言う。参議院速記者養成所で速記符号の筆記実験を行って,畑田は曲線を連綴する場合,小円を挟むほうが単位時間当たりでより多く書けるとデータを示している。視覚的なシンプルさと運動上の筆記性向の間にある速度の心理的な捉え方の誤解を畑田は解いた。

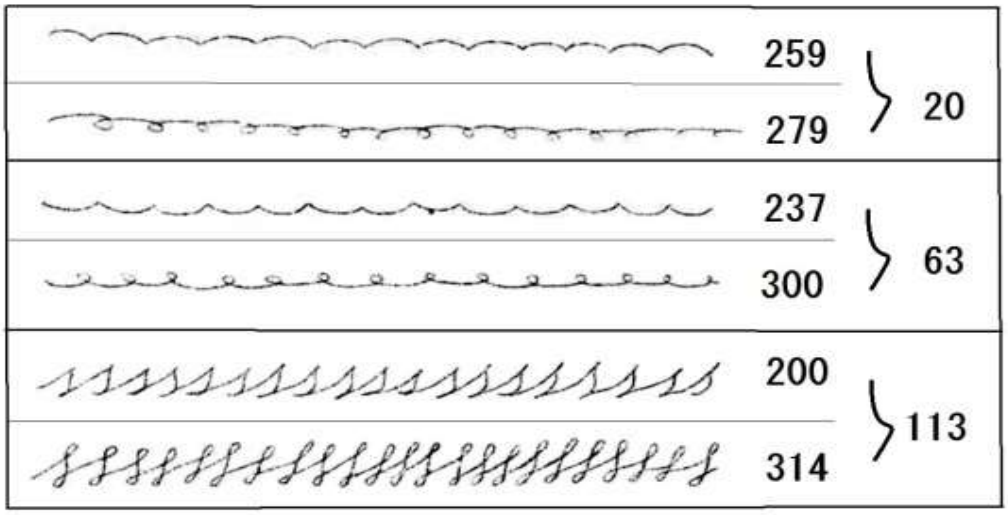


図 2-88 回転運動の効用を探究した実験：畑田明「符字論」1952.9.20　p19.

２．半草書派の登場

英国は,近代速記のほとんどの可能性を生み出し,成長させた苗代であった。ローマのタキグラフィの復活,幾何派の創造,そしてボードリー Simon Bordley による草書派の発芽が英国において見られた。

草書派はドイツに渡って筆記体派として完成され,幾何派で加点母音を主流に大陸へ広がる流れがフランスへ渡ると母音を円やフックなどのサインで表すフランス流派の発展をもたらした。図 2-89 は草書派が求める美しい筆記体の綴りである。

図 2－89　ガベルスベルガーの美しい早書き書体

３．グレッグ式の影響～　酒井式,タクマ式,日本グレッグ式

グレッグ John Robert Gregg は ellipse(幾何楕円)を基礎アルファベットに用いたとしたため楕円派と呼ばれてきたが,グレッグ式ではラテンアルファベットの筆記体の要素を用いており,ドイツでは幾何派と草書派の折衷理論であるとして半草書派と呼ぶことから,ここでは半草書派とする。

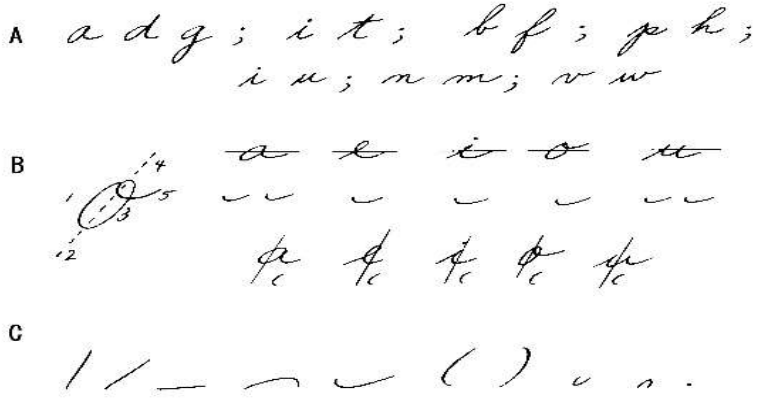


図 2-90 グレッグ式の筆記体要素からの符号生成法

英国でテーラー式など幾つかの速記方式を学んだグレッグは,わずか 13 歳で新方式理論の立案を目指し,筆記体の動作原理に基づくドイツのシュトルツェーシュライ式の動態符号に共鳴し,またフランス語系スローン・デュプロワエ式英文速記法を参考にして連綴母音を導入して,速記史家アンダーソンが示した理想の速記方式の開発に着手した。第一の課題は,時代が文字式から符号式への発展期にあって,ピットマンによって表音主義が完成される時代であったことから,学習性を改善するため理論の簡潔に力を注いだ。[#8]

小池喜三郎は「最新式グレッグ速記法」1956 年 において,「普通の longhand と同じ筆法で書き,総ての運筆方法が通常の handwriting と同一である。普通の handwriting と少し

も変わらず,横に,前へ前へと運筆をなめらかに続けて行けばよいのである。書いたものが実に綺麗にすらすらとしており,従って誰にでも容易に書き易く,なお且つ読み易いように出来ている」と書いた。

グレッグは符号素材をラテンアルファベットの筆記体から要素を取り出して用いた。図2-90のAに見られる筆記体の部分がとられ,その要素はBの“Q”の筆記体の部分として説明される。そうして用いられる符号はCにある10の要素に限られた。1888年のアニバーサリー版では二重母音などを書き分けられるように設計されていたが,シンプリファイド版以降では簡略化されていった。

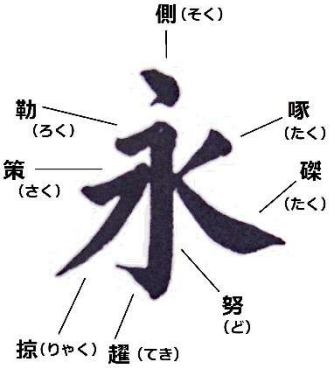


図2-91　永字八法図　漢字百科大事典p48　から

グレッグは,永字八法(図 2-91)のように漢字書法が好む垂直,右下方向の線を避け,濃線をも避けた。右下方向線を除いてクロス式と同様の線嗜好はラテン文字のものであった。書きやすい角度,方向の一部に3種の線長を採用し,また,図2-92のように，母音を表記するためフランス方式の円や半円（フック）のサインを取り入れた。

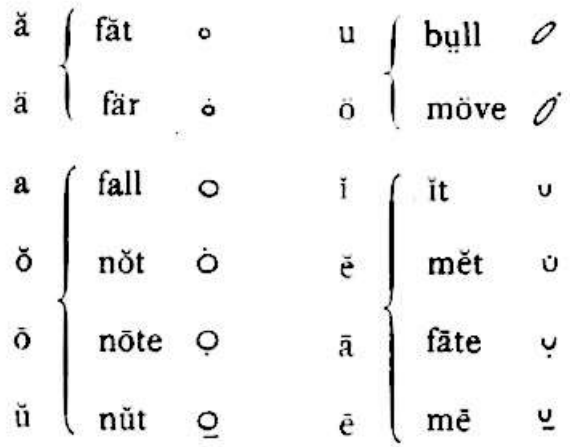


図2-92スローン-デュプロワエ式の母音(1)
The Sloan-Duployan Phonographic Instru-ctor 1913, James Matthew Sloan, p6

逐語高速度型のピットマン式が,理論が難解で習得することが困難であったのに比べて,グレッグ式速記法は学びやすく設計されたので,ビジネスレターの口述用に,秘書技能として全世界に普及していった。初版に続くシンプリファイド版は,省画化のための語末の分離記法Disjoinedを最低限の用法だけ残して廃止され,また略語Brief Formsを319語から184語に減らした。これらの改良を施して,ハイスクールで学習できるように平易になり,秘書型速記の全盛期を招いた。しかし，20 世紀末からの情報通信革命により， 速記秘書はアドミニストレーターにとって代わられ，ほぼ消滅した。

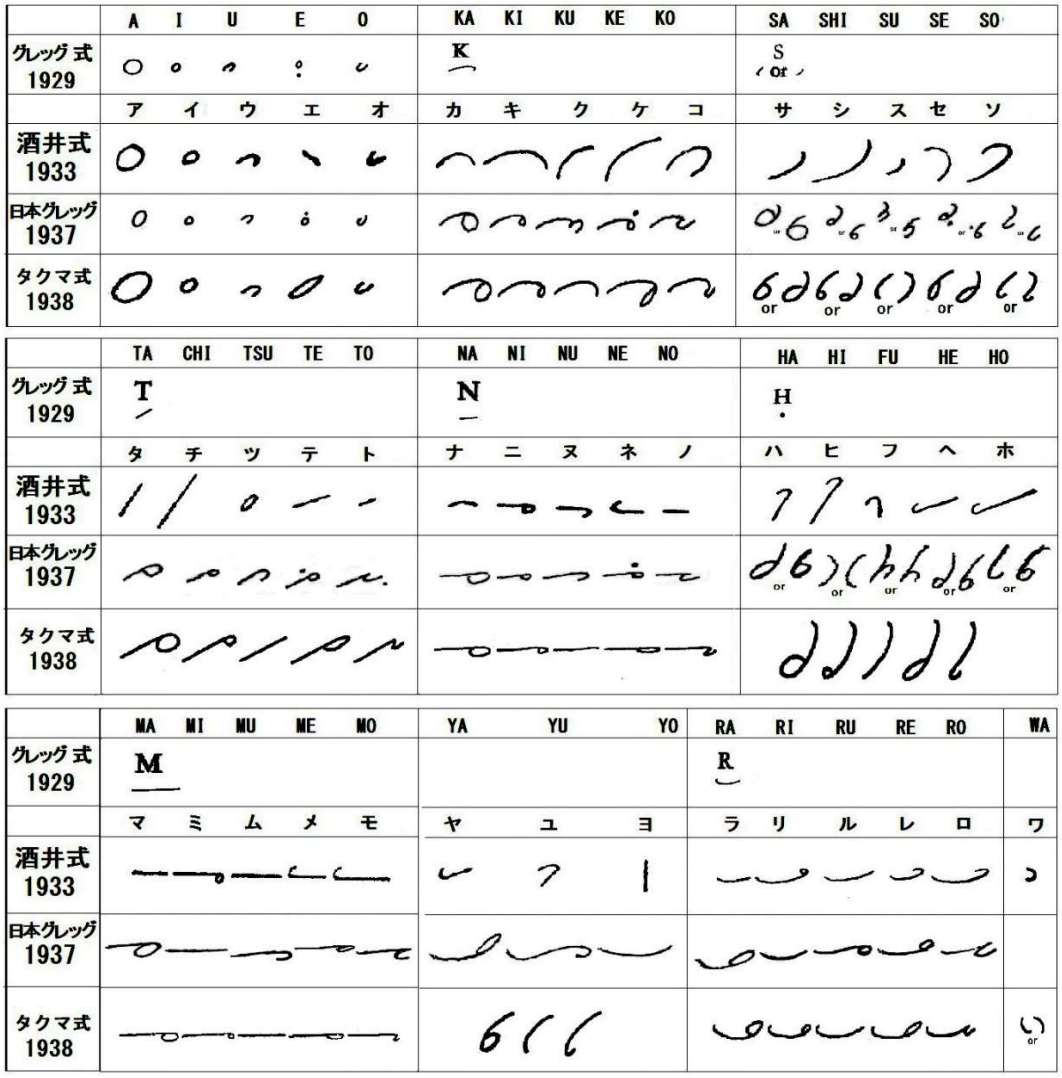


図2-93グレッグ式系統の日本語速記方式と基礎符号 兼子次生作成

歴史的に見ると,綴り字改革を目指して厳格な表音主義を追うピットマン,学習しやすいグレッグの書線,高度な筆記理論を持つクロス式が日本の速記符号研究者に影響を与えてきた。またドイツの速記理論は筆記ゾーンの用い方などで示唆を与えるものであった。

速記符号は「音声言語を文字に転換するための単なる道具としての中間メディアだ」とする考え方と,ピットマン式のように「速記は文字と同様に表音記号の一つであって,音声を正確に固定する中間メディアである」という考え方が存在してきた。中国,蔡錫勇の傳音快字は掃除文盲を目的とする新文字を目指して創案されており,文字改革の流れの中で機能性文字として速記は多様に展開してきた。

日本においても,符号研究者から人間工学的な視点で新方式が生み出されていく。グレッグ式(図 2-93)を日本語に適応させる動きの中で,最初に登場したのは,1932 年 11 月 1 日発表の酒井伍作による酒井式速記法(図 2-93)であった。酒井はのちに相模女子大学で英語

の教員を務めるが,英文速記のグレッグ式を教えながら日本語への応用を研究していた。酒井式速記法の最初の指導は,1932 年秋,東京市社会局大塚市民館主催の速記講習会で行われた。翌年には慶應義塾大学に速記研究会が結成されて,酒井は講師を務めている。流派は折衷派をとり,1936 年には酒井式速記法講義教材を発行するに至っている。

1935 年には,宅間清太郎の和英両用タクマ式速記術(図 2-93)が発表され,アメリカで 1937 年,バーディック　P.H.Burdick,岡村キクエによる「日本グレッグ・ショートハンド」(Nihon Gregg Shorthand(図 2-93) が出版された。

だが,グレッグ式を日本語へ適用するこれらの日本語翻案の試みは成功しなかった。日本では既に幾何派が日本語の複雑な体系に対応しながら専門レベルに達しており,音声言語の多様性に対する経験が十分でない半草書派は地位を築くことができなかった。

４．母音の新しいあらわし方,Ｖ式の登場

早稲田式を学びながら,小谷征勝は,中根式やグレッグ式,その他の方式を参考にして自然な筆記モーションを研究した成果をもとに,1968 年,同じ母音を持つ基礎符号は同じ角度,筆記方向の線で構成するＳＶＳＤ (Same Vowel Same Direction) 式を創案した。時代環境として日本語速記法は単画派時代へ既に入っており,また幾何派理論に対する批判から,人間工学的な画線を志向する流れにあり,それらの枠組みにおいて,小谷式初版では基礎符号には長短 3 種の淡線を用い,純単画式として設計した。このような音節符号の母音を角度で表象する発想は, 図 2-94 のミニョン式に見られた。

図 2−94　母音を子音符号の中で表す
Mignon 1874,"Sténographie phonétique"
に見られる同母音同方向の例
出典:A.Navarre, Stenographie,78p.1906

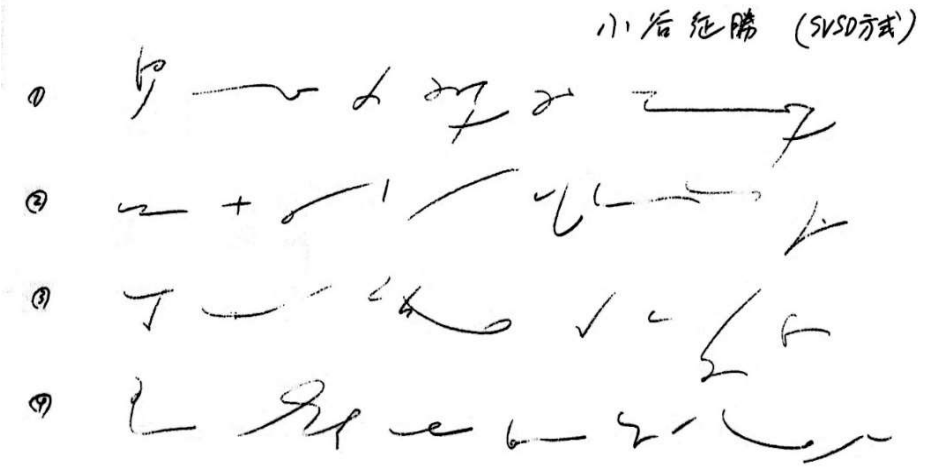
ＳＶＳＤ理論とともに,小谷は類音には類線を用いる原則を確立した。

ＳＶＳＤ式はのちにＶ式と名称を変えたが, Ｖ式研究の目標は(1)学習性の改善,(2)書きやすさ,（３）読みやすさ――に置いた。同じ母音を持つ音節は一つの角度方向とする基本原則によると,母音/ア/を持つ音節は右上方向 30 度の向き,/イ/は左下方向 60 度の方向,/オ/は水平 0 度方向,/エ/は垂直 90 度の方向,そして/ウ/は右下方向 30 度方向とされた。図 2-95 はＶ式の基礎符号である。

欧州方式では, 母音を筆記帯域の高さ位置に応じて表象（シンボライズ）する,つまり目に見える形で表す発想や,子音画線の角度を変えることによって母音を表象する着想があったが, 日本語において小谷は実用レベルで初めて母音を方向で暗に示す線表象理論を確立した。

図２－95 Ｖ式の基礎符号　小谷征勝　1975

小谷は，日本語の固有の言葉にはア列長音がほとんど存在しないので,それらの符号をア列音＋/イ/と読ませることにした。また,字音語末に出現するインツクキ尾音について,ク尾音はア列音,イ列音,ウ列音,オ列音には後に続くが,エ列音には続かないことに着目して,同じ尾音のサイン符号を，先行する母音によって/ク/と/キ/に読み分ける設計とした。例えば/saa/は/sai/と読み,/ak/は/aku/,/sek/は/seki/と読ませる。



①結論的に　申しますと、いわゆる　　神らしいといいますか　神戸の　都市容量といいますか、
②そういうものを　十分　踏まえて、また　社会経済情勢等の状況も　見ながら、
③ご指摘の　ポーアイ2期も　含めて、今の　そういう　一連の　施設の
④連携を　図るという形に　今後　検討を　進めてまいりたい、そういうふうに考えております。

図２－96　SVSDの文例　小谷征勝　Ｖ式

小谷は 1968 年「中速度速記法」を公表,翌年には速記技能検定試験１級に合格して実用性を証明した。(文例は図 2-96) さらに機能改善を続け,[ア行]と[カ行]の入れかえなどの調整を加えるとともに二線一筆化等を図り,1975 年現在のＶ式である「日本語速記法ＳＶＳＤ」を著した。1976 年「やさしい速記」,1998 年「Ｖ式でらくらく合格速記入門」,2011 年,そして 2012 年「みんなの速記入門Ｖ式」を出版して成果を公にした。

一方,高速度化面では加古修一が新しいアイデアを出し,その評価を検証しながら改善する活動が行われてきた。日本速記協会等の高速度競技会で高速度型の性能を実証するとともに，得た知見をもとに,加古は 1982 年「ＳＶＳＤ高速度速記法」,続いて 1988 年「ＳＶＳＤ高速度速記字典」をまとめた。さらに複合語用にワイルドカード（特殊インツクキ）

を加えたり,定義された筆順の逆方向に書く「逆流」,「反転」を採り入れた。類似音類似線の原則を大胆に取り入れ,「ナ行」線を濃線化（濁音の線表象）して「ガ行」線とし,「マ行」線を濃線化して「バ行」線とする方法を符号の反転で実現し,さらに「ラ行」線を濃線化して「ダ行」線とした。また高速で筆記する際の離筆の不利を避けるため,加古は類音類線原則に基づいて,符号末尾を流す箇所を続け書きに変更する「消撥」の書法を採り入れて,結果的に長音と短音を同じ書き方にした。さらに佐竹式の二音文字理論を導入し,同列縮記の運筆形態がよくない「ラ行」,逆長円（楕円）,直線に適用し,書きよいものの,使われる頻度の少ない符号形態を拡張活用するなどの経験的な改良を加えている。

研究チームは,早稲田式や佐竹式の運筆法や中根式,石村式など,高速度速記法で得られた経験知を基礎として,合理的な筆記理論を研究した。

５．一行内に収まる速記法　TIMACE

石村式を独習した岡本隆博は,小谷征勝の発想に刺激されて,1982 年 TIMACE(タイメース)式(図 2-98)を創案した。手書き速記は幾何派,草書派を問わず,符号を連ねていく際,ずりと呼ぶ同じ方向へ書き下がったり,書き上がる現象が生じる。図 2－97 の例はフランス語の

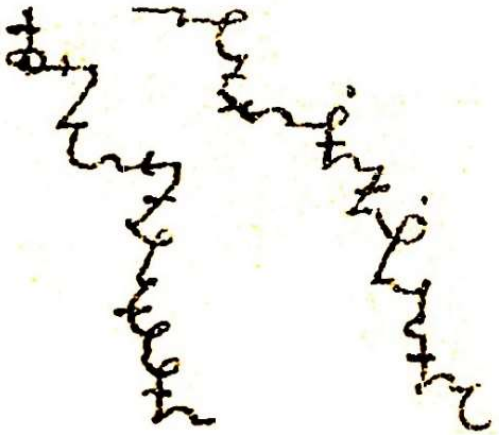


図2-97
幾何派方式に避けられないズリ現象

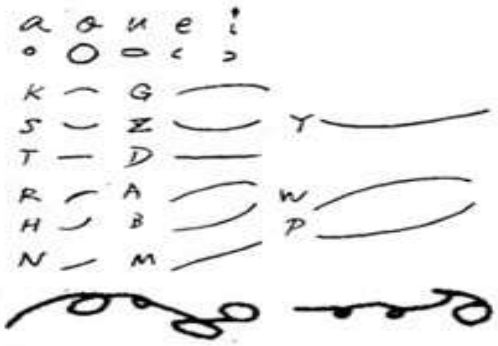


図 2－98　TIMACE の基礎符号と連綴例
岡本隆博　1982

ロビー式の例で，縦ずり,横ずりの極端な例だが，複合化して斜めに上下のずりを生じることがある。これは避けるべき筆法とされ,グレッグ式は縦線と右下方向を少なくする配慮を行うなど,各方式とも対策に苦慮している。岡本は,ずりの生じない複画の基礎符号を考案することに着目した。その結果，ノートの罫線を守って書ける速記符号が可能となり,1 ページ当たりの符号密度を高めるメリットが実現された。

VI　文字式速記法の発展

１．はじめに

欧米から受け入れた符号速記が定着，発展する時代，初学者にわかりやすく，使いやすい速記理論を求めて，図 2－99 のような墨書，仮名の続け書きや，片仮名の続け書きの筆記をベースに，毛筆と和紙，鉛筆と洋紙を用いて横書きや縦書きで経験した日本語的な文字書きの特性を組み入れた速記法の立案が試みられてきた。

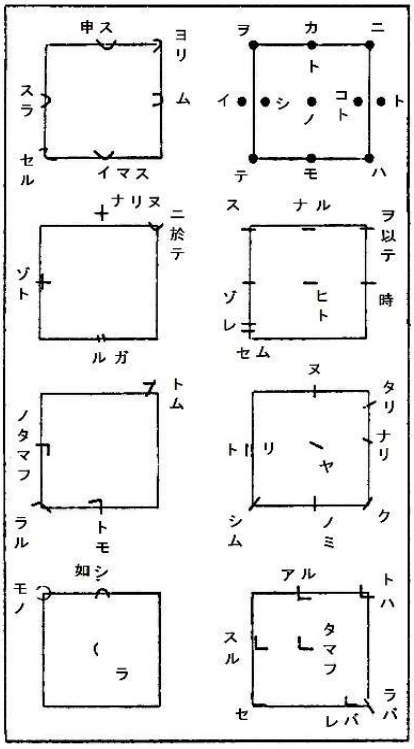
日常の日本語で用いられる文字の一部分を速記符号の一種として採用する，文字式速記法の研究は早くから取り組まれてきた。早期の速記研究者は，国会での逐語速記の使用には耐えないと見て，文字式を後回しにしたが，早くから国学者の林甕臣が日本語の発声機構を模写した速記符号の試みをしたり，カナ文字論者，さらにはローマ字運動の中からも文字改革を目的として速記研究に取り組む動きが見られた。その中で，片仮名や平仮名を表音記号として用いる方法は，欧米の幾何符号派に比べて日本人には学びやすくて使いやすさがあり，カナ速記が先導役となって，太平洋戦争後に速記需要が拡大したころ大いに発展した。

図2-99 毛筆で書いた俳画
「俳画　四季の気韻」p50

２．日下部忠次の「写言術」

音声で発せられた言葉を文字で書きとめる活動において，天武天皇の勅命を受けて稗田阿礼が暗誦し，太安萬侶が筆記して古事記が編纂された故事をもって日本における速記行為の始まりであると，武部良明は「日本速記方式発達史」に書いた。しかし，この方法は文字を用いる通常の筆記行為であって，早書きの工夫などが行われていないので，速記ではないとする見方がある。

また，ヲコト点(図 2-100)の発想をもって速記の起源とする武部の説もその技術，方法から見て，ヲコト点は漢語を日本語に読み下すためのものであり，音声固定を特徴とする速記の概念には含まれないと下谷政弘は見る。



平安初期のヲコト点『成実論』第一群点
出典：国語学研究事典　訓点　村上雅孝

図 2-100　ヲコト点

そもそも紀元前，古代ギリシャにおいて存在した速記は，略語主義をとり今日の表音主義の速記と異なるとする点や，文字に機能性を求める点において速記の前駆的形態であるとする認識が有力である。また，古代ローマにおけるティロの速記は，文字を用いて言葉を略す書法としてタキグラフィ　Tachygraphy　と呼ばれ，手書き符号速記に至る前段階の文字による略記法であるとするのが通説である。

日本語の速記方式は，国会開設年が確定して無から急いで実用化を図る必要があり，民間が英語の符号方式を日本語へ適応させる方法がとられた。したがって，田鎖綱紀，黒岩大らに日本の文字を用いて組み立てる選択は最初から視野になかったが，速記という機能性文字の概念が見えてくると，身近な文字を用いて符号速記に準じた体系を目指す動きが出てくる。

そうした文字式速記法をさかのぼると，早期に林甕臣の試みのあと，1910 年 2 月 25 日，日下部忠次が「写言術」を出版し，図 2-101 の基礎符号に片仮名起源の符号を用いて田鎖式のように筆記する手法とした。[#9]

図 2-101　日下部式の基礎符号
「写言術」 1910　日下部忠次

日下部の動機は「欧米語と日本語と根本的に異なれる言語を写すに，同じ符号を用いて完全に速記せんとするも，あに得べきの理あらんや」という疑問から発するものであった。つまり，操作しやすい高速度速記法がまだ完成しないのは，「これ，本邦言語を欧州

各国の言語と同一視し,適当せざる符号をもって記せんとするがゆえに,正法を求むを得ざるなり」というわけである。(武部,「日本速記方式発達史」)

日下部が見た文字式の利点は(1)日本語を完全に筆記できる,(2)翻訳を要せず,(3)身心を痛めず,(4)筆記原書は何人でも読み得,(5)片仮名をわきまえる者は何人にしても修得し得る――とあり,文字改革を意識するものであった。

ただ,片仮名には似た文字が 28 音あり,速く書くと判別しかねるかもしれないと考えた。日下部は,[シ](shi)は[ン]/N/,[ヲ]/wo/は[ラ]/ra/と,[レ]/re/は[シ]/shi/と,[ン]/N/は[レ]/re/と,[コ]/ko/は[ユ]/yu/と,[エ]/e/は[ユ]/yu/と,また[エ]/e/は[コ]/ko/と,[ア]/a/は[カ]/ka/と,[マ]/ma/は[ヤ]/ya/と,[ニ]/ni/は[ユ]/yu/と,[マ]/ma/は[ア]/a/と,[カ]/ka/は[ヤ]/ya/と,[コ]/ko/は[マ]/ma/と,[ロ]/ro/は[ル]/ru/とそれぞれ紛らわしいとした。

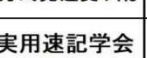
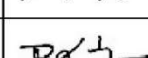
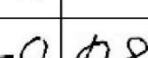
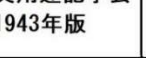
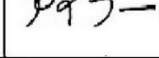
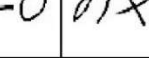
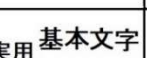
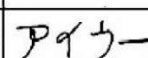
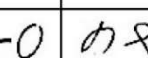
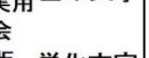
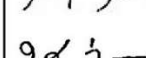
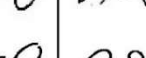
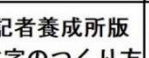
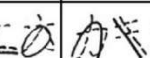
といっても,日下部の関心は基礎音の字体に研究が限られ,高速度化を図るための速記理論には及ばなかったため,実用的な用法には至らなかったと武部は言う。そこでは表音技術と速書への対応面や,連綴するための運筆法への配慮などが欠如していたとされる。

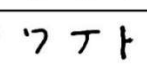
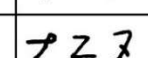
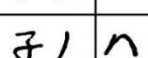
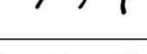
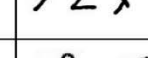
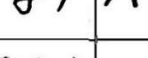
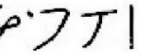
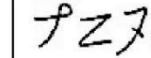
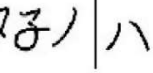
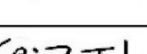
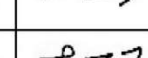
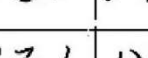
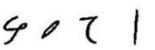
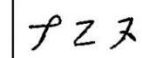
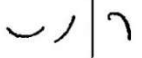
1922 年には桜井郷三の片仮名を用いる「最新応用速記術」があった。1929 年には菅原長太郎が「速記術応用学生筆記法」を著し,片仮名を用いて普通の文字の 2,3 倍の速度で書ける筆記法として流行したと日本速記年表に書かれている。

ちなみに,中根式速記法では創案者,中根正親が五十音符号を説明するために,図 2-102 のように片仮名の画の一部を取り出して説明していた。歴史的には，片仮名が速く書けることを理由にカナ速記に着目され，中根式を学んだ岩村学が岩村式カナ速記法を創案し,太平洋戦争後の高度成長期にカナ速記ブームを巻き起こした。続いて 1958 年中根正雄は片仮名と平仮名を巧みに用いて筆記する即席速記法を創案した。後継者，中根康雄は 1984 年「スピードメモ法」を出版し，その普及活動を続けているが，仮名書きでは平仮名縦書きの方が片仮名横書きよりも速く書けると指摘する。

図 2-102 中根正親の仮名からの符号説明図

２．岩村式カナ速記法

		ア イ ウ エ オ	カ キ ク ケ コ	サ シ ス セ ソ
1	岩村式初版 1930 岩村学 日本速記方式発達史 p118			
2	岩村式実用速記学会 1943年版			
3	岩村式実用速記学会 1949年版 基本文字			
	単化文字			
4	立川速記者養成所版 基本文字のつくり方 1955年版 基本文字			

	タ チ ツ テ ト	ナ ニ ヌ ネ ノ	ハ ヒ フ ヘ ホ
1			
2			
3			
			
4			

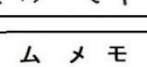
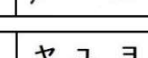
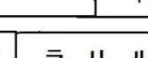
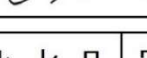
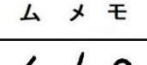
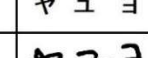
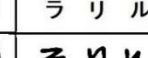
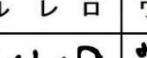
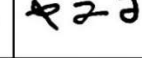
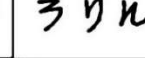
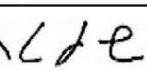
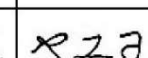
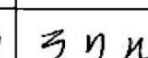
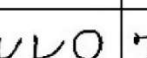
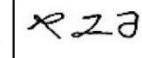
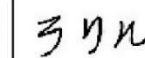
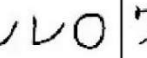
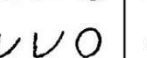
	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ	ラ リ ル レ ロ	ワ
1				
2				
3				
				
4				
			行	

図2-103岩村式カナ速記の変遷 (1)
（主流版を中心に比較）

中根式京都速記学校で中根正親,正雄に符号式の中根式の指導を受けた，岩村学は,符号理論をもとに,1930 年岩村式を創案した。開校間もないころの写真（図 2-104）前列右から 2 人目に岩村が写っており，このころ岩村は中根式速記を学んでいたことがわかる。図 2-103 は岩村式カナ速記の初版から最終版の符号の変遷である。岩村は師を正親と言い，一方正雄はみずから中根式速記を指導したと，発言が異なる。記念写真で前列左から 2 人目が正親，左端が正雄で，下部の白抜き文字に氏名が中根式で書かれている。

ﾀｶﾓﾄ･ｼｮｳｿﾞｳ ﾔﾏﾓﾄ･ﾉﾎﾞﾙ ｳﾉ･ｷｻﾌﾞﾛｳ ｱｲｶﾜ･ﾄｼ ﾅｶﾞﾀ･ﾀﾀﾞｵ ﾊﾅﾜ･ﾏｻｶｽﾞ ﾀﾅｶ･ﾜﾀﾙ
ｺﾓｲｹ･ﾂﾔｺ ｷﾀｶﾞﾜ･ﾉﾌﾞｺ ｼﾏﾀﾞ･ﾐｷｵ ｵｶﾞｻﾜﾗ･ﾜｶﾅ 中根式京都速記学校
ﾅｶﾈ･ﾏｻﾖ ﾅｶﾈ･ﾏｻﾁｶ ﾅｶｼﾏ･ﾊﾞﾝｷｮｳ ｲﾜﾑﾗ･ｻﾄﾙ ﾐﾑﾗ･ﾉﾌﾞ

図 2-104 中根式京都速記学校の記念写真

京都出身の貴族院速記者,安田勝藏によれば,「岩村は,中根式発明当時の門弟であって,中根式速記法を初めて実用に供し,大本教事件当時京都府特高課に専門速記者として入り,大いに活躍した人であるが,氏は夙に熱心なカナ文字会員であり,何とかして純国字たるカナ文字を以て速記は出来ないものであろうかと,種々研究の結果,遂に昭和 5 年(1930)岩村式カナ早書法として発行し,爾来,京都を中心としてカナ文字会と連絡をとりつつ各地に講演講習会を開き,短期成功をモットーとして居るので,非常な勢で広まりつつある」(「日本速記五十年史」1934，65p）とする。岩村の著書には 1943 年の岩村式実用速記学会版（岩村学筆）や,1949 年の岩村式カナ速記法決定版（岩村学述）,岩村式カナ速記法通信講座な

どがある。

カナモジカイ傘下では，岩村式に続いて松阪忠則や深堀義輝らが，学びやすさを追求するカナ速記を盛んに研究していく。岩村が学んだ京都には，折衷派では熊崎式から派生した牧式（大阪），米田式の拠点がある中で，中根兄弟のほか森卓明，古久保峯吉（国字常弘のちに寿光）らによる最新の単画理論研究が盛んに行われる環境にあった。単画式，純単画式，カナ速記は刺激し合って，開花していった。岩村式の晩期を担ったのは，立川市の関根雪峰らであった。（図 2-105 に文例）

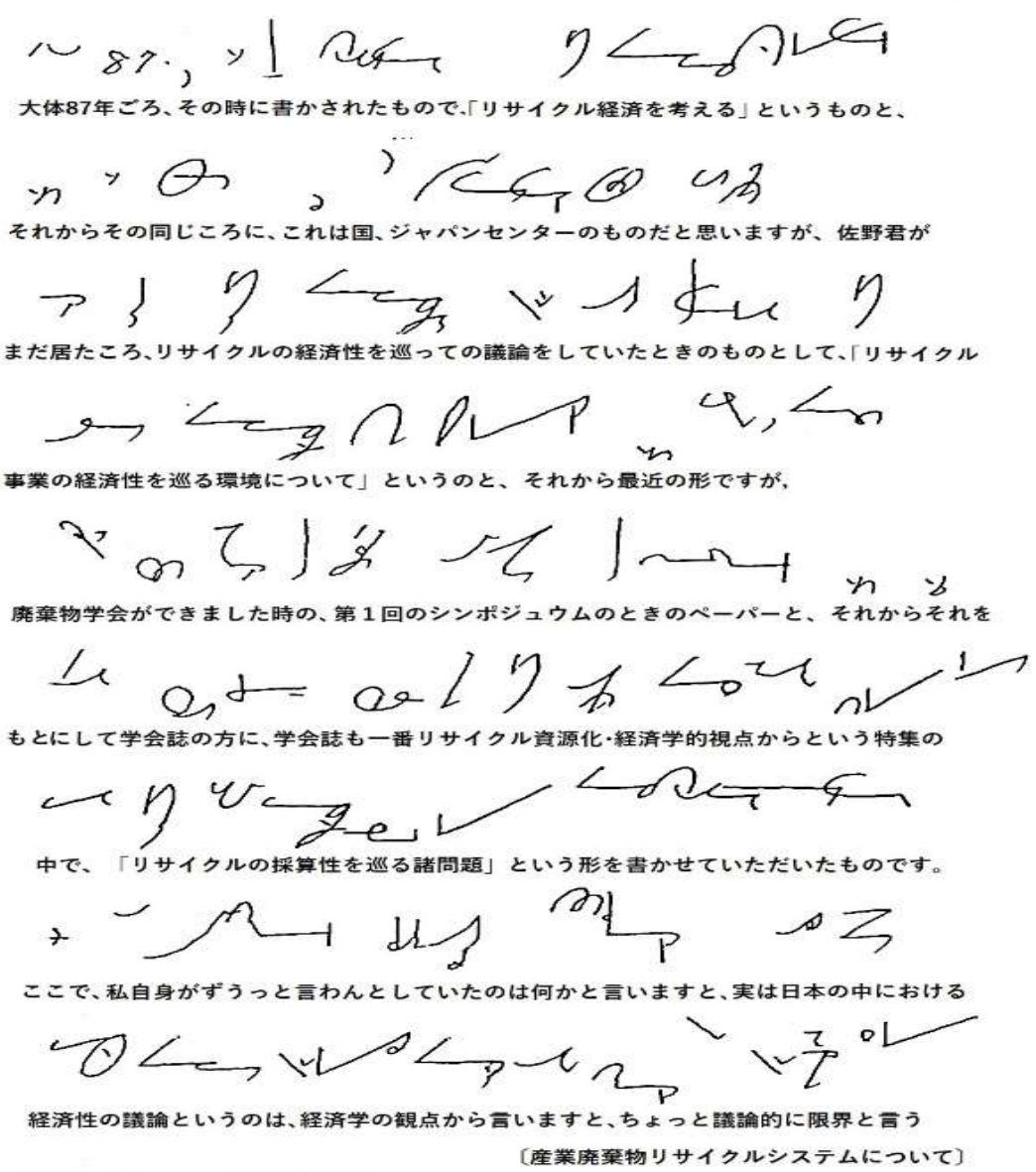


図 2-105　関根雪峰による岩村式カナ速記の文例

岩村は,カナ速記の特徴点を(1)カナ原形を変ずることなく一筆化すれば倍以上の筆記能力を発揮し,普通の講演はほとんど速記できる,(2)連綴法,(3)縮字法,(4)略記法などを合理的に採用し,従来の符号方式に比して遜色のない程度で速記符号群を仕上げることに成功したことを挙げる。

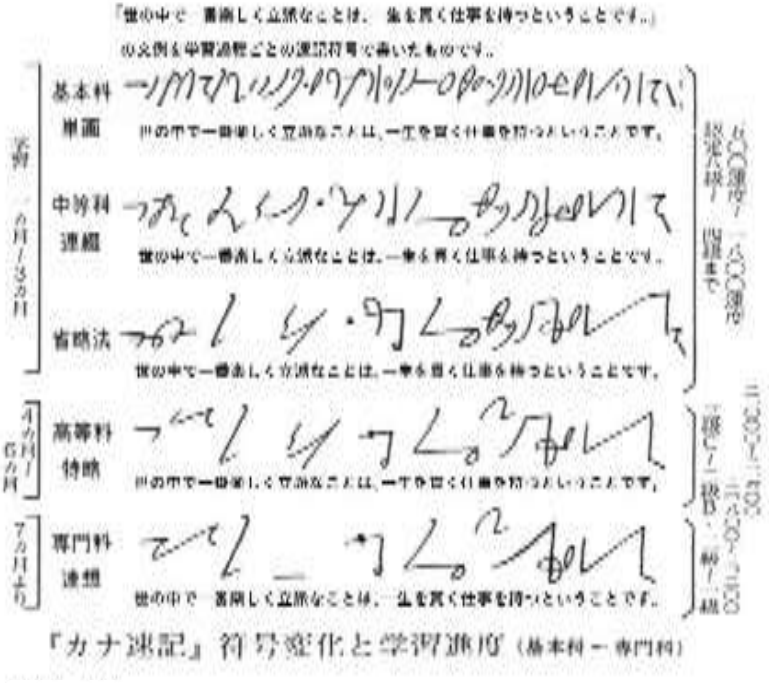


図 2-106 岩村式カナ速記における段階順で変化する速記符号

1943 年版の岩村による速記法理論の体系は(1)基本文字 44 音節,(2)濁音 20 音節･半濁音 5 音節,(3)鼻音(撥音,例:/アン/),(4)長音符(例:/クー/),(5)拗音として拗短音 21,拗長音 21,濁拗短音 9,濁拗長音 9,(6)促音表記法(交差,例:筆記),(7)踊字(畳音)筆記法(字末に加点等,例:[ハハ],[さまざま]),(8)綴字法(例:[カイ],[イエ]),(9)縮字法(例:[イス],[コナ],[トリ]),(10)助詞([ヲ],[デ],[ト],[ニ],[ノ],[ハ],[ヘ],[モ],[デハ],[ニハ],[デモ],[ニテ]),(11)略字:①特定略字:19 種,例:[或],[於],[考],[けれども],[私],②下段略字(ラ行省略文字,口語略字),③二段略字(例:(a)[ある],[いる],[する]等,(b)[ござい],[ます],[ません]等,(c)[ありさま],[あらゆる],[いまさら],[我が国]等,(12)重要特定略字 60＋60,(13)複音漢字の省略ーなどで構成した。ほかにも,上段小文字(例:/アイ/,/カイ/,/サイ/など 32),下段小文字(例:/アク/,/カク/,/サク/等 16),中段小文字(例:/カツ/,/サツ/,/タツ/,/トツ/,/シチ/・/シツ/5),各段の活用(例:/アン/,/カン/,/サン/等 6),拗音の略体文字(例:/キュー/,/キョー/,/チュー/,/チョー/など),畳字法の活用(例:[ササキ],[ココロミ]等)など,実務上で得た改良を加えた。

さらに,各種高等略法として畳字標の応用,漢語の熟語,和語の熟語,ナカッタの略法,数字の扱い方,ラ行省略,加点法,交叉法,敬語,受け身の変化など,個別の用例の対処法を細かに解説していた。

こうして岩村八重子編集の 1949 年版において「基本文字の単化」を加えて,基礎音節の[ア],[カ],[サ],[ス],[ツ],[ト],[ネ],[ハ],[ホ],[ヤ],[ユ],[ワ]を単画化もしくは画数削減を図る基礎符号の省画化が認められる。その目標は符号式速記法に伍する高速

度型カナ速記法に置かれていた。

継承者,関根雪峰が用いた資料(図 2-105,106)からは,岩村式はカナから導入し符号へ段階的に高度化する教育法で最終的に高速度符号速記法へ誘導する体系であったことがわかる。岩村式は直接,間接を含めて,その後のカナ速記に大きな影響を与えた。岩村式の教育拠点は,立川,赤平(北海道),東京,名古屋,岐阜,四日市,京都,大阪,奈良,神戸,姫路,広島,松山,福岡に置かれ,関根は東京都立川市で長く岩村式を指導するとともに,議会速記などに従事した。関根は 2017.1.12 に死去し,岩村式の普及活動は終わりを告げた。

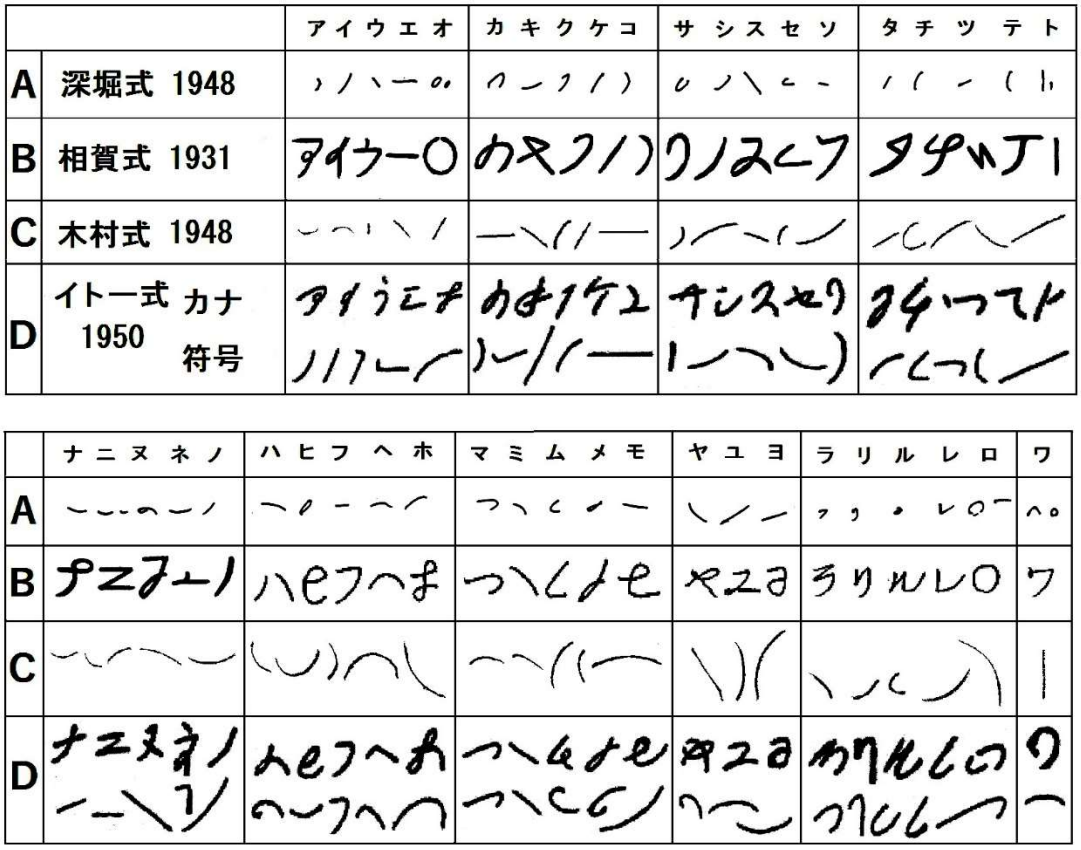


図2-107 岩村式カナ速記の発展(2)(注)深堀式は中田知版による

深堀宇宙 赤穂速記学

4．イトー式速記法

愛知県の伊藤勝持は 1931 年に岩村式を修めたのち,毛利式の草書理論を導入してイトー式を 1950 年に創案した。片仮名カナ速記を組み立て,その後符号式の基礎符号へつなぐという岩村の考え方を踏襲するものであった。「和草」つまり日本型草書派の動きの一つである。

伊藤は基礎符号を①カナ文字から生成する,②音の頻出度に合わせる,③単画線をなめら

かに書く,④単画線に明瞭に特徴を持たせる――点を立案の根本方針とした。

日本語においてよく出現する音と,つながりやすい音の組み合わせ確率について求め,さらにそれらの確率から正しく,速く,流麗に筆記できる線条符号を設計するのが着眼点であった。２音節,３音節,4 音節の言葉から手計算して，言葉の出現頻度や音節のつながりの確率を調べ出したという。

伊藤は「連続音調査,恐らく数百万語,3 年ぐらいかけて,例えば/カ/という音は,最初に何回,2 音目には,/ア/の次の/カ/,/イ/の次の/カ/,/ウ/の次の/カ/,/エ/の次の/カ/,/オ/の次の/カ/は何回あるかというふうに,そして 3 音目,4 音目以下も同様に,すべての音について同じように調べ,よく続いて使われる音と音は続けやすい線にするためのキソとしました」と振り返る。人工知能研究分野の自動音声認識技術 Automatic Speech Recognition では統計的確率法を用いて言葉の音列のつながりを決定しているが,近年のＡＩブームの恩恵を受けて音声認識による速記においてもビッグデータ処理,深層学習手法によって音のつながりの予測精度が驚異的に高まっている。伊藤は“人力”という方法をとったが,人智の限界から期待どおりの成果につながらなかった。そうして完成されたのが図 2－107D の基礎符号であった。

イトー式の速記理論を見ると，①濁音は濃線化，加点法によらず頭部にサイン符号をつけて表す,②助詞には一音助詞 19，複音助詞（[カラ]，[クライ]，[マデ]等）20 を定めるほか，位置によって複合助詞を表すことにした，③アオスナ記号として，[アル]，[オル],[スル]，[ナル]の 4 語に特別な符号を与えて，連続する言葉を簡単に書く，④過現未法と呼ぶ語尾変化させる[アリマス]，[ゴザイマス]，[イマス]，[イイマス]，[イキマス],[ユキマス]，[オリマス]，[キマス]，[キキマス]，[出マス]，[ナリマス]，[ミマス],[ヨリマス]等の[マス]の符号にサイン記号をつけて語尾変化に対応させる，⑤コソアド言葉を対象に[コー]，[コーイウ]，[コンナ]，[コレ]，[コイツ]，[コッチ]，[ココニオイテ]などの変化に対応させる，⑥加点法を用いて，[デアル]，[デアリマス]，[ゴザイマス]，[モイマス]等に対応する略記法とする，⑦数詞の速記符号体系を用意する，⑧20 ミリ文字として[イタノデアリマス]，[アルトオモウノデアリマス]等，述語部分を簡単に書ける速記符号を用いる，⑨第二ヨー音として/ウィ/，/ウェ/，/ンェ/，/ティ/，/テュ/等 28 音の拗音符号を設けた。

伊藤の問題意識には「日本の速記は,この 75 年間に非常な進歩を遂げたが,それは『専門家用』としての進歩であって,『一般向き』という面においてはむしろ後退している状況であり,一般向きで,しかも高速度の速記が可能な方式こそ,そういう方式が現れてこそ,はじめて『万人が速記のできる時代』を望むことができるわけである」という考えがあった。

伊藤は初め,伊藤式,イトウ式と称したが,のちに「イトー式」と名乗っており,本稿では最終方式名をとった。速記理論の構成は,基礎音の符号,縮記法,略記法などで構成していて,基本的には岩村式の理論体系にならっている。理論は実用編と専門編の 2 編で構成し,基本文字では（1）カナから自然発生的にただ一つの法則によって生まれる文字を使

う,(2)音の頻度に合致させる，(3) 画線をなめらかに書く，(4) 画線にはっきり特徴を持たせるという立案の方針を具現するために制定した。また,オ列符号には頭部にサイン記号をつけ,離筆の不利を跳ね返して,連綴時のくずれと判別性を強化した。

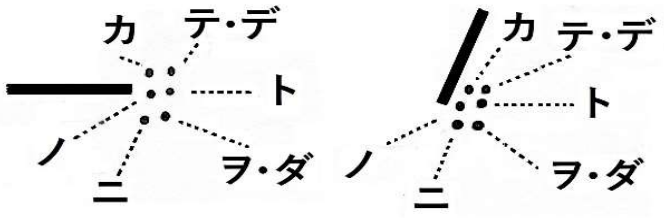


図 2-108　イトー式の(加点)助詞法　伊藤勝持

省略法上では,濁音は加点法(図 2-108)をとり,助詞では一音助詞（19）,複音助詞（20）のほか,位置利用による複合助詞（20）を設けた。またアオスナ記号には特別符号を与えて変化に対応する体系を整えた。[マス]には 5 角度と助詞によって変化に対応させ,[シル],[トル],［ミル],［ヤル],［ヨル]等 9 語にも過去現在未来法への対応を整えた。[コノ][ソノ][アノ][ドノ]のコソアド言葉にも上中下段に書き分けることによって省画化を図った。同音語の差異化のために加点法を用いるほか,数詞法の制定,符号の長さ種類を 4 種とする決まり,正確な表音のため 28 拗音を制定した。

伊藤は「コトバは生きているものである。たえず進化し――少なくとも変化しているものである。10 年前の書き方がいかにスグレタ方式であったとしても,そのままでは時代おくれの役に立たない存在になるわけであるから,常にクフウして改善することは何人にも必要なことである」と言語環境の変化への対応を挙げ,いわゆる速記符号における規範性については限定されるべきとの考えを持っていた。

５．相賀式速記術独習書,高速日本実用速記学

1931 年 10 月 1 日,岩村式を学んだ，相賀庚(1910.4-不詳)は相賀式カナ速記(図２－107Ｂ,図 2-109)を創案した。1942 年,相賀は岡山市に岡山速記塾を開設して,岩村式カナ速記を改良した相賀式の指導を始めた。1948 年同門の木村嘉男(1926.9-不詳)が木村式(図 2-107Ｃ,図 2-109)を発表して倉敷市に富士速記塾を開設し,また高鳥富士夫(1929.12-不詳)が岡山市に速記塾を開いて富士式の普及活動をそれぞれ始めていた。1950 年には木村,高鳥による「高速日本実用速記学術速記講座」が著された。これら 3 式の詳細な関係の解明が残されている。

相賀式を採用した岡山大学速記研究会は 1958 年に発足し,1966 年 1 月 20 日には学友会傘下の速記部へ昇格した。方式は当初相賀式が指導されたが,講師が木村嘉男に代わって方式名を木村式へ変えたのち「岡大式速記」と呼び名を変更し,1980 年には速記教本を発行した。

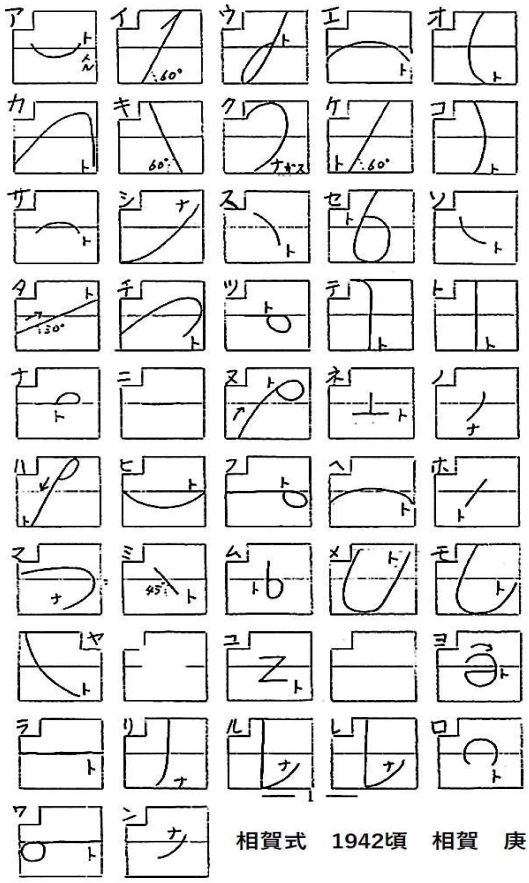


図 2-109 岡山大学速記研究会におけるカナ方式の相賀式と木村式

また，並行して早稲田式とＶ式を採用し，自主運営している点が特徴である。「岡大式速記」と題された相賀式教本の「初めに当たって」には，次のように書かれている。

「我が岡大式は相賀庚氏によって 1931 年 10 月 1 日に従来の符号式速記を脱皮し，文字式を創始されたのを受け継ぎ，さらに改良に改良を重ね，今日に至っている。文字式速記としては現在日本では唯一のものであり，我が部では 1958 年に発足し，1966 年 1 月 20 日学友会速記部となり，大学における文化活動の一端を担っている」

ただし，唯一の文字式速記ではなかった。

また，1971 年，岡山理科大学においても速記研究会が発足し，木村が木村式を指導した。木村は 1968 年 1 月 24 日，木村式速記発表 20 周年記念会を岡山市立公民館で開いており，岡山県下でカナ 3 方式（相賀庚，木村嘉男，高鳥富士男）が協調関係を持って活動した時期があった。[#10]

６．深掘式カナ宇宙方式

岩村式カナ速記研究会は 1948 年に通信教育を始めており，中田知は初め岩村の指導を受けたが，深堀義輝から引き続き指導を受けていた。カナ速記においても，高速化を目指す研究が行われるようになると，岩村と深堀の考え方に違いが生じてきたため，深堀は 1950 年に基礎符号を単画化（単化）や，逆記法など高速型の理論を考え出すに及んで，岩村式から離れて深堀式と名乗ることになった。（図 2－107Ａ）

深堀式成立時の経緯について，中田は「深堀先生が基本文字を 7 字ずつ単画化されて 21 文字にふえるころになると岩村学先生と意見が対立し，1948 年 12 月，深堀先生が撥音省略法を発表されるに及んで深堀式として生徒 40 人前後で独立されたようだ。これより位置利用の取り組みを開始，撥音方法の書き方の変更による反訳の混乱を生じながら 20 数年の年月を経て今日に至っている。」と回顧している。

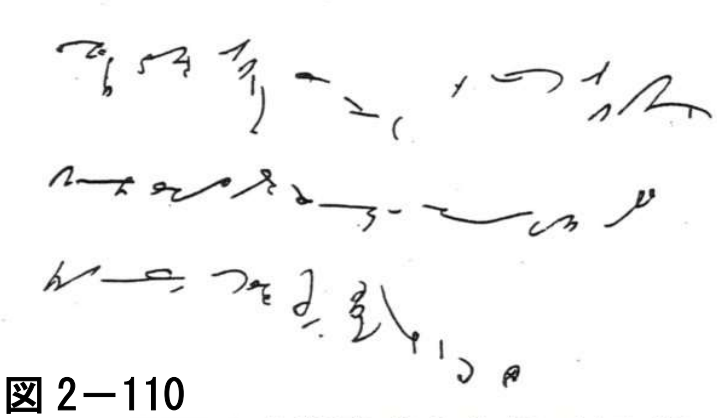
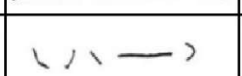
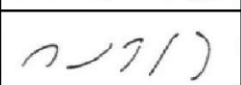
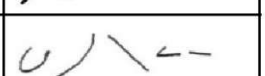
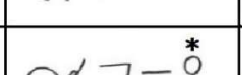
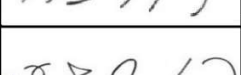
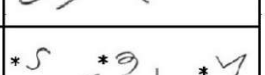
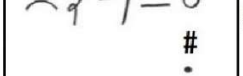
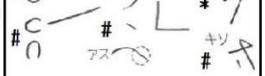
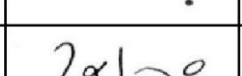
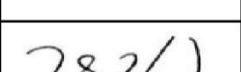
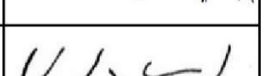


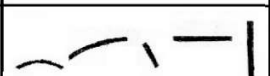
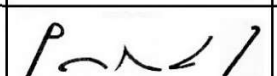
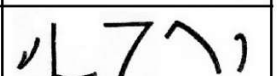
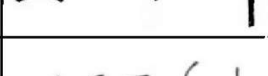
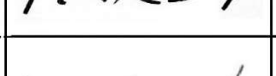
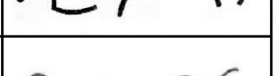
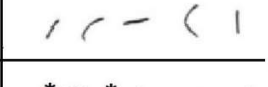
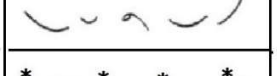
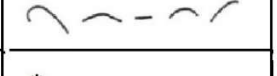
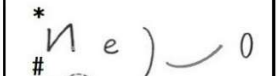
図 2－110
深堀カナ宇宙式の文例 中田 知

文：ロンドンは緯度が52度で北カラフトあたりに相当するそうです。だから日本人の私たちから考えると、寒冷地で冬じゅうを雪で埋もれているように想像されますが、実際は暖流の影響によって真冬でも東京より暖かく過ごしやすいところでございます。

深堀から岩村式を通信教育で学んだ，中田が兵庫県赤穂市議会の速記者として活動しながら深堀式への転換を図り，「深堀式カナ速記宇宙方式」へ発展させた。中田が深堀式の基礎符号と理論体系を堅持し，実務上の経験をもとに行った改良点は(1)同じ形の符号を４通りに読む，(2)撥音省略法を用意した，(3)　逆記法と前音の位置を利用して後音を省略するなど，離筆に意味を持たせる分かち書きなどを特徴とする。

その理論構成を見ると，(1)縮字法において字音語の尾音を上中下３段の位置を利用して頭音符号を 2 分の 1 の大きさに縮小する。上段には，例えば/アイ/，/カイ/，/イキ/，/エキ/など，中段には/アッ/，/シャッ/など，下段には/アク/，/イク/，/ウク/などに適用する，(2)続記として，畳音からヒントを得て 2 音目に/イ/，/キ/，/チ/，/ナ/，/ニ/，/マ/，/モ/，/ワ/，/エ/が来る場合の縮記法を用意した，(3)促音をあらわす交差法を/キ/や 3 音目以下に/リ/が来る場合に応用する，(4)並記（平行）綴字を応用して左右，上下に符号を置いて言葉の単群とする，(5)前符号の脚部から後符号を書き出すことにより後続符号長を 2 分の 1 に短線化する，(6)長音筆記法を拡張して逆記する略字を設定する，(7)撥音を伴う言葉において，タ行音節は角度 30 度で前音の 2 分の 1 に短縮，ナ行は同角度，同長さ，ラ行は同角度，1.5 倍長とする――など，さらに詳細に設定した点を改良の骨子であるとする。（文例は図 2-110）

		ア イ ウ エ オ	カ キ ク ケ コ	サ シ ス セ ソ
A	カナモジカイ式			
B	寺谷式 1949			
C	三村式 1963 注：＊大文字　＃小文字			
D	植岡式 1964			

	タ チ ツ テ ト	ナ ニ ヌ ネ ノ	ハ ヒ フ ヘ ホ
A			
B			
C			
D			

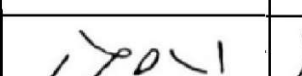
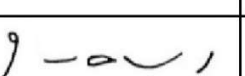
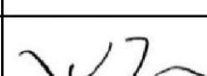
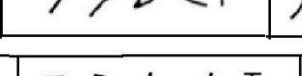
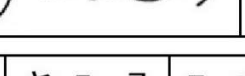
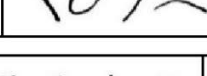
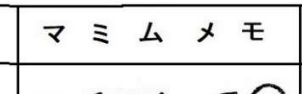
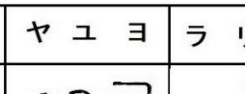
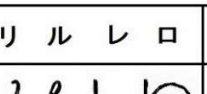
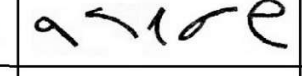
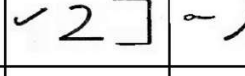
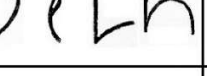
	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ	ラ リ ル レ ロ	ワ
A				
B				
C				
D				

図2-111 岩村式カナ速記の変遷 (3)

兼子次生作成

７．カナモジカイノ速記術

岩村はカナモジカイ会員として片仮名から符号式速記へ導入するアイデアを実現したが，カナモジカイ理事長を務めることになる松阪忠則による「カナモジカイノ速記術」（基礎符号は図 2－111(3) A）が 1946 年に登場した。速記の価値が高くて社会的に優遇された時代に，難しい符号速記を避けて，学びやすい手書き速記を普及させようと，1950 年ごろには岩村の成功モデルを見た後発組が続いて文字式の創案ブームを呈した。

文字改革運動の中で，カナモジカイは松阪がシロトリ・キミオ，キノシタ・ユーイチローの協力を得て，速記教育へ進出した。片仮名文字の普及を訴え，文部省国語審議会委員を務める松阪が取り組んだ事業であった。図 2-112 の文例は北九州市議会の速記を行っていた田中佐智子のもので，地方議会の速記録を作成する者が多かった。

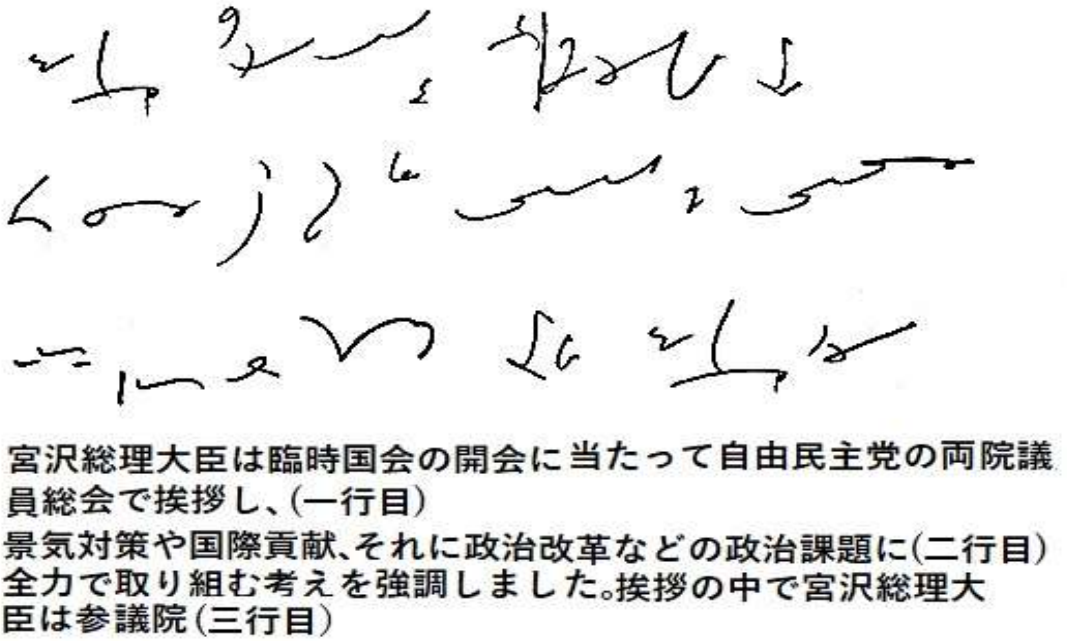


図 2-112 カナモジカイ式の文例　田中佐智子

一方，文字改革運動の中から，手書き速記と並んで機械速記への挑戦は，ローマ字運動家が進出を図っていた。第一次世界大戦のパリ講和会議に出席した日本政府団の中で，田中館愛橘が英文タイプライターを携えて随行し，ローマ字つづりで議事録を作成したことがあり，会議後，田中館はフランス製機械速記グランジャンをローマ字会へ持ち帰った。のちに，シカゴ万博を訪問した緒方富雄がアメリカ製の機械速記を持ち帰り，事務局を預かる佐伯功介が日本語機械速記法の研究を呼びかけて，名乗りを上げた川上晃が 1944 年日本語速記機械の特許を得たのが，裁判所における「ソクタイプ」（緒方が命名者）であった。ソクタイプでは日本語をローマ字で表音的に打ち，英文タイプで清書する発想であったが，のち

にコンピューターを利用した日本語処理システムを開発し,漢字仮名交じりに変換して裁判速記録を調製しようとする構想へ発展した。ほかにも英文タイプ,カナタイプを用いて速記しようという発想が牧泰之輔らによって試みられた。

カナ速記推進者の「一般文字と関係のない記号を使うことは習得を困難にする」という意見から,松阪は講述した「新速記術講義録」(一)の中で,「本速記術ワ容易ニ習得ノデキルコトガ一大特色ニナッテオリマスケレドモ,ソレワ,数年間ヲ要スル在来ノ速記術トノ比較ノ話デアリマス。ワズカ 3 ケ月デ熟達スルコトワ,ムシロ非常ナ努力ヲ要スルモノト御承知クダサイ。ソシテヒマサエアッタラ,目ニフレ,耳ニスルコトバヲ指先キデ書取リスルコトデス。」と書いている。

衆議院,参議院の速記者養成所において 2 年間で訓練する符号速記に対して,カナ速記はたった 3 カ月,150 時間で高速度対応の技能を身につけられるとする宣伝文は速記学習者を引きつけた。

日本語の文字の合理化を図ることが,カナモジカイへ奉職する理由であった松阪は,科学の立場から国語,国字との関わりからカナ文字の研究を続けた。その過程で,片仮名の反射能力を利用して,最も簡単に覚えやすく,早く書ける方法を模索した。そして 1942 年から創案を実験教育に移して修正の上,まとめた体系をカナモジカイの文化事業の一つとして 1946 年 9 月 23 日公表した。

松阪の速記体系は,清音,濁音,半濁音,促音,撥音,拗音,長音,畳音の基礎音節の書き方,助詞,一般省略法,終止符号,過去符号,マス符号,否定法,仮定符号,独立助詞法,未来符号,言葉の繰り返し,外来音のほか,セレ,テデ,ベキ,タラ・タリ,イタス,タイ,マイ,ナル,シイ,存在詞法,ト動詞法,テ動詞法,大文字動詞法,アゲカギ法,リどめ法,倍文字法,接尾語法,数字法,記号類などの説明と練習となっている。

８．寺谷式版岩村式カナ速記

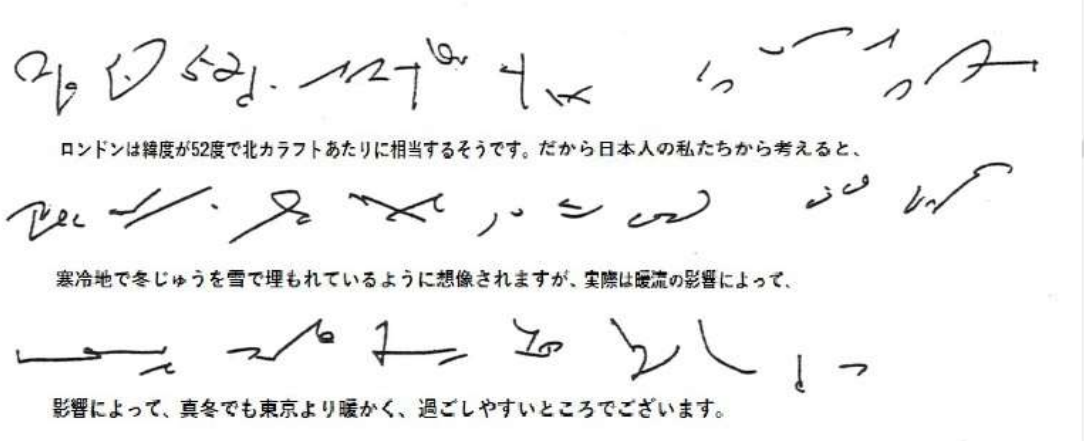


図 2-113　寺谷式の速記文例（榊原守正）

岩村式カナ速記の通信教育で,1949 年から 1952 年にかけて寺谷武の指導を受けた榊原守正は中日新聞社編集局速記部で電話速記に長年従事した。(基礎符号は図 2-111(3)Ｂ)

電話速記は明治以来,新聞通信社で用いられた記事原稿の受信方法で,取材現場ないしは拠点間で送受稿する際,電話口で口述した原稿文を各地の印刷拠点でそれを内勤記者（速記者）が書き取り,普通文字に清書してデスクへ提出するものであった。1970 年代に送受稿が機械化されて消え去った。図 2-113 は榊原守正による寺谷式の文例である。電話速記者は戦後,全国に速記市場を拡大し,民間方式が発展する職場であった。

９．植岡式カナ速記法

戦後続々登場したカナ速記がほぼ落ち着き出したころ,愛媛県議会速記者の植岡健治郎は「植岡式国民速記法」を世に出した。植岡は 1956 年第 84 回速記技術検定奨励試験を岩村式で受験してＢ級に合格し，1958 年の第 128 回速記技術検定奨励試験をその他方式で受験しＡ級に合格しており，この間に植岡式カナ速記法を立案した可能性がある。

植岡は，符号式の速記が複雑難解で２年，３年をかけないと習得できないことが課題であるとし,一方カナ速記は比較的簡単に習得できても速度が出ないのは,速記方式自体に最大の原因があると見た。その課題は,従来のカナ速書法は片仮名の一筆化にとどまり完全な速記文字化に成功していないと結論づけた。

出発点となる基礎符号では,漢字の最初,または最後の数画を充てた省画体と,字体を多少曲線化して草書化する方針をとったという。その場合,従来のカナ式に見られる片仮名の草書化,ないし一筆化等の無理な速記線を排除するとともに,単にカナ文字の画線の一部分をとるような符号化を避け,さらに省画法においても統一性を持たせて記憶しやすくしたと主張する。(基礎符号は図 2-111(3)Ｄ)

基礎符号の中で,(1)長音は横長直線を続ける,(2)鼻音は右上にはねる,(3)濁音はその音節符号の尾部や中央部に点を打つ,(4)促音は前後の符号を交差する－表記原則を定めた。速記理論の主要な略字と,省略法を用意し,暗記を必要としない実用的な方式としたと宣言している。

基礎符号を見ると,岩村式系統の配字をとり,カナ速記の普及を目指して植岡式国民速記普及協会を設けて通信教育に取り組んだ。

10. 標準式カナ速記法

太平洋戦争後,速記は依然として社会的価値が高く,独学が難しい符号式速記の改良を目指す研究が競われた。符号の改良は速記法理論が難解になる負の面を絶えず伴い，研究者は学習性の向上と高速化のバランスをとることに苦慮した。

衆議院において標準符号(単画)を完成した，西来路がカナ速記を考案したのは,当時最

高ベルにあった速記理論体系をカナ速記に移植しようという狙いであった。図 2-114，115 は，衆議院式の標準符号（単画）と，カナの素音符号の比較で，「速記入門ハンドブック」に収められた。

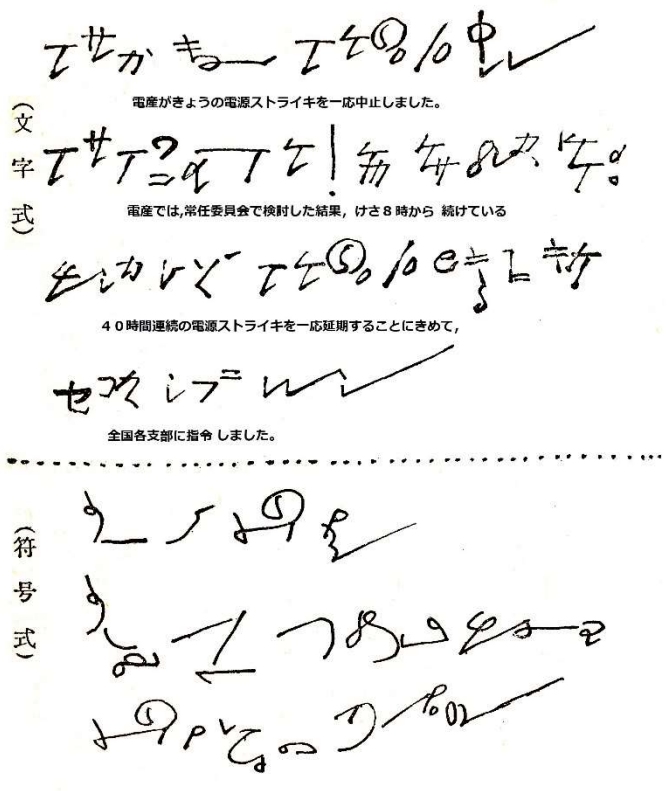


図2-114　西来路秀男による標準式速記文例（上がカナ式，下が符号式）
「速記入門ハンドブック」1955.11.15 西来路秀男 衆議院式単画符号完成者

図 2-115　西来路秀男による単画標準符号とカナ速記の素音符号

11. 簡易速記法

文字を母体にした基礎符号を用いる方式としてカナモジカイは片仮名, ローマ字会はローマ字, さらに平仮名を速記符号材料とする平仮名方式の三様の提案が日本語で行われた。その中で, 平仮名と片仮名を用いる発案が中根正雄によって 1958 年 8 月 12 日生まれた。京都府警察本部から速記講習会の出講依頼を受けた際, 中根は警察用語を符号式でなく, 警官が日常簡単に使える方法を創案しようと研究した結果, 仏教界で昔から書かれてきた略字のような速記法を考案したと「中根正雄自叙伝」(2003 年)に書いている。そのアイデアは画数が非常に多い「窃盗逮捕」を例にして説明され, ポイントは平仮名と片仮名を読み分けするというものであった。図 2-116 は簡易速記法考案のヒント。

図 2-116　カタカナひらがな使用の簡易速記法のヒント　中根正雄　1958

あ列短音	い列長音	う列長音	え列長音	お列長音
		う：ウウ		お：オウ
か：キャ	き：キュウ	く：クウ	け：キョウ	こ：コウ
さ：シャ	し：シュウ	す：スウ	せ：ショウ	そ：ソウ
た：チャ	ち：チュウ	つ：ツウ	て：チョウ	と：トウ
な：ニャ	に：ニュウ	ぬ：ヌウ	ね：ニョウ	の：ノウ
は：ヒャ	ひ：ヒュウ	ふ：フウ	へ：ヒョウ	ほ：ホウ
ま：ミャ	み：ミュウ	む：ムウ	め：ミョウ	も：モウ
		ゆ：ユウ		よ：ヨウ
ら：リャ	り：リュウ	る：ルウ	れ：リョウ	ろ：ロウ

イ列符号による拗短音表	き：キュ	し：シュ	ち：チュ	に：ニュ
	ひ：ヒュ	み：ミュ	り：リュ	
エ列符号による拗短音表	け：キョ	せ：ショ	て：チョ	ね：ニョ
	へ：ヒョ	め：ミョ	れ：リョ	

簡易速記法の筆記例

ホケ：ホケン 保険　キン：キケン 危険　キネ：キネン 記念　キネビ：キネンビ 記念日

コムイ：コウムイン 公務員　イれ：イリョウ 医療　ゴル：ゴール　ヨサ：ヨサン 予算　ゆビ：ユウビン 郵便

ワシト：ワシントン　とザヨキ：トウザヨキン 当座預金　シホ：シホン 資本　シホキ：シホンキン 資本金

図 2-117　簡易速記法の表記法体系　中根正雄　1958

「簡易速記法」の音の表記法は図 2-117 に示されているようなもので,片仮名は単音節,平仮名は拗音,長音を示す分担である。したがって「交通」は[こつ]と書くこととした。用法は図 2-117「簡易速記法の筆記例」にあるように,文字のサイズを大小 2 種,小さな文字を書く場所を 2 種に分けて異なる音をあらわすことになっている。

警察官が職務上,聞き取り調書を作成するための早書き法として教育されたほか,1958 年から自衛隊でも講習が各地で行われて,隊内部の伝言板「口達会報」(図 2-118)にも情報が簡易速記法で書かれることもあった。簡易速記法の講習を受けていない者,外部の者には暗号のようなものなので読めないが,書き込み,読み取り能率がよいため,情報交換の能率が上がった。

なお，警察官を対象とした速記書として「警察叢書第十四輯速記法」1932.7.5 奈良県警察部 は，グレッグ式の楕円を幾何的に分解して単画符号を設定した方式があったとするが,著者不明，方式系統不詳。

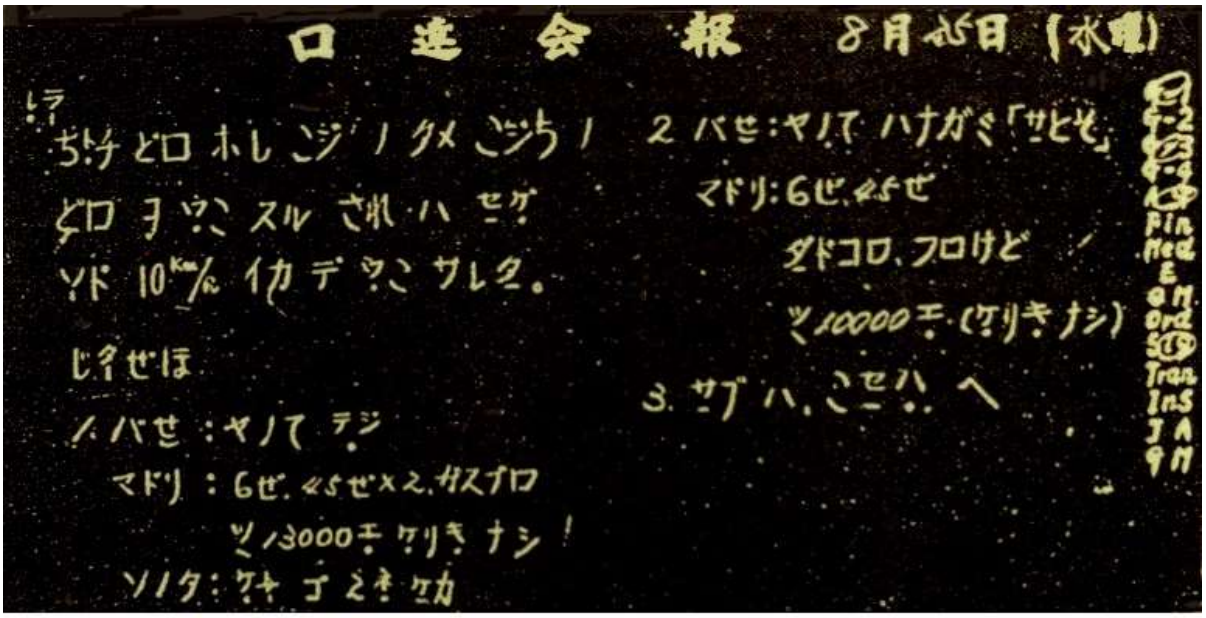


図 2-118　自衛隊の「口達会報」

中根は最初,「即席速記法」と命名したが,最終的には「スピードメモ法」と改めている。その原則は,左起右進横書きで文字を表音的に,可能な限り続け書きするものとなっている。

片仮名は短い音,平仮名は長音をあらわすだけでなく,言葉の最初の音だけを書いて略字とする中根式速記法の符号理論を適用している。また,文字の大きさを大小 2 種に書き分け,肩の位置,脚の位置に書いて,鼻音（ン）,促音を表す符省法として採用した。中根式速記法のインツクキ法を導入してツキイチクン法を制定した。略字としてはよく使われる言葉を最初の仮名だけを書いて表す頭音摘記法を組み込んでいる。

VII 和草派の方式登場

１．はじめに

漢字，片仮名，平仮名，ローマ字 4 種類の文字を使い分ける日本語において,正円幾何派，ラテン文字の草書派が成立する流れにあって，仮名文字の筆記運動を反映した速記に着目する流れが始まる。その初期に,泉式があった。また,伊東稔による伊東式ひらがな速記法では左起右進横書きながら,日本の平仮名の書法の特徴を取り入れようとした。さらには,平仮名と片仮名を素材にして表音符号を綴る方式が三村侑弘によって縦書き速記として登場し,さまざまな広がりを見せた。

２．幾何派の動態符号研究から日本語筆記体符号への視点へ

グレッグ系日本語新方式は定着しなかったが,そのかわりグレッグ式の書きやすさは速記符号の動態理論のテーマとして幾何派に大きな示唆を与えた。

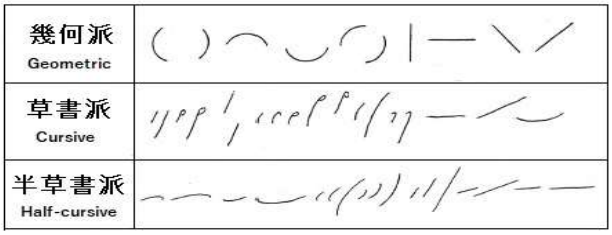


図 2-119　幾何派，草書派における符号の多様性

歴史的に見ると,速記符号研究者にとり,1つの速記符号にどれだけの音列を載せるかが,高速化のカギであった。

中国では速記符号研究の課題を「三易」という言葉で説明する。それは易学,易書,易認で,学びやすく,書きやすく,読みやすいものであるべきだとする。

手書き速記符号の種類を文字式,符号式に大別して,後者をさらに幾何派,草書派,半草書派に分類できるが,符号式の３流派(図 2-119)はどのような特徴や課題があるのだろうか。

１）幾何派は,見た目の簡単さを追求することを高速度理論研究の課題とする,

２）草書派は文字と同じような機能と書きやすさをラテン文字の筆記運動から追求し,

３）半草書派もラテン文字の筆記運動に基づいて,書きやすく,学びやすさを追求する,

草書派は,単位符号当たりの音声負荷性能が，幾何派に劣ると言われる。

しかし,実務上で，他者の幾何派の速記原本を見ると,規範通りに書けているようだが,符号が読めない場合が起こり得る。

速記者の技能レベルに関係するが,速記符号が読めないという現象は外国語,外来語,未知語,初出語等がきっかけになって生じることが多い。漢字のような「単語優位効果がなさそう」な環境が関係しているようであるが,符号が読めなくなる理由としては音だけをとらえる速記符号には文字が持つ働きの何かが不足していることが考えられる。この点が速記符号による文通や速記符号の第三者反訳の場合に問題を生じる可能性がある。もし,主に全音記法をとる草書派においてこの欠陥の程度を少なくする要素が存在するとすれば,幾何派のコーディング（符号化）・デコーディング（解読）のメカニズムに隠されている

解決されるべき要因が見つかる可能性がある。

一方，認知心理学では情報の認識について「作動記憶容量のゆとり」と，その知的処理上で実行される言語課題と思考課題の仕事率が重要だとする。一方，速記符号の認知と解釈，また話線，話題の理解の面で知識や処理メモリの余裕が十分でない場合，速記符号が期待通りに読めなくなることが考えられる。

それは，朝日新聞大阪本社の「電話の読み方・送りかた」教本の「はじめ」にある「記者のかんどころが打てば響くようにピンと来る」点，「速記をしながら意味が頭に入らないと翻訳できない」とする点が，文字による意思疎通の不成立の要因の一つであり，解明すべき課題である。

早稲田式において「搬送線原理」（例は図 2-120）を執筆した寺井美巳は，速記上達のこつは，運筆，文法，心の置きどころとする。読む技術においては，単語から思想を汲み取る力が必要であるとした上で，見える線と，見えない搬送線の重要性を説く。参議院式の畑田明は「音に即して書き取っていくというのではなく，言葉に即して書き取っていくように符号観を変える必要があるように思うのである」と書いている。

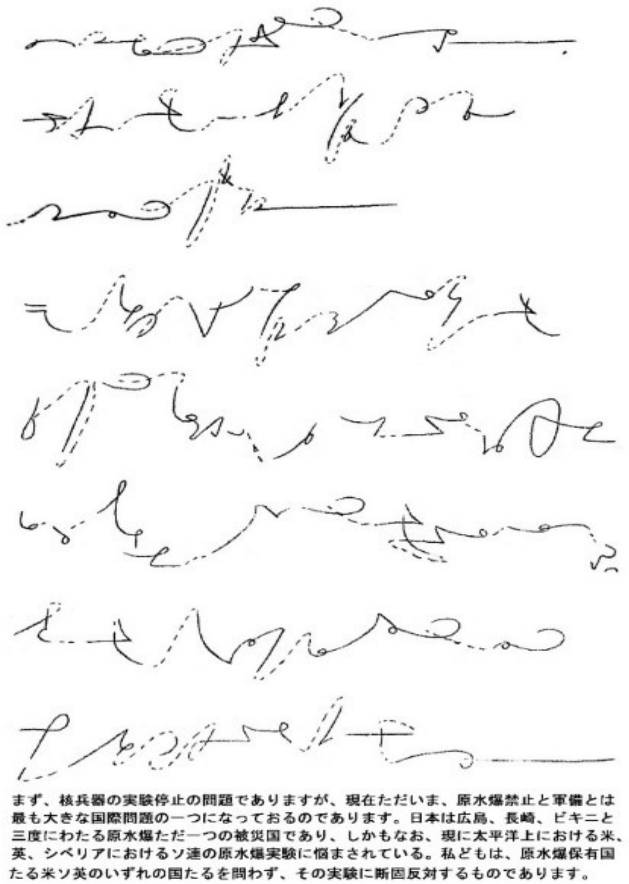


図 2-120 実線の速記符号と送りの搬送線の関係

衆議院式の西来路は，速記符号には，テキストに示される規範の静態符号と，現実に書

かれた動態符号があると述べている。静態符号の動態変化はいつも同じ結果を生じるものでなく,速記者個人にとっても常に同じ変化を生じることはない。筆跡の変化を生じる大きな要因は,話の速度と話の内容があり,聞き取りやすい話し方をしているか,環境騒音がないか,話し手の近くで肉声を十分に聞けるかなどが関わる。

幾何派方式において速記符号について静態と動態のずれを重視しなかったことは,教えられた速記符号の形と現実に綴った速記符号のズレの課題解決を書き手に委ねてきたとも言える。

一方，普通文字は書き手によって,さまざまな筆跡が生まれ,速記の単画符号を書き崩しかねない。そこで,方式の創案者,教育者が動態符号を定義づけて,その筆跡を一定の崩れの範囲内で書けるように規範化する研究が幾何派の中で行われてきた。

速記用紙上に三次元で移動する筆先の動きがつくる「点」がつながって実線の速記符号,あるいは見えない搬送線となる。現実には,その移動の結果がペンや鉛筆で二次元の符号群として速記用紙の上に固定される。淡線は主にＸ軸，Ｙ軸の軌跡であり，濃線はＺ軸の力が軌跡に加わってできたものである。したがって速記線と搬送線を全体として考えなければ,書きやすく,読みやすい模範的な速記符号を理解できない。筆先の移動は加速度要素を持ち,実線と搬送線を生む点の移動について動的に観察して速記符号の組み合わせごとに運筆法を研究することが手書き速記において重要となる。

日本人の文字書き運動の性質は,漢字,平仮名,片仮名,ローマ字,数字ごとに,また縦書き,横書きにおける続け書き,分かち書き，書字材料と筆づかいの違い，用い方によってそれぞれ異なる。

例えば幾何派の田鎖式では,字を書く手を浮かせる形で自由度を確保しながら速記符号を書いたり(懸腕),鉛筆では小指の先やこぶしの下部分を用紙に触れるような持ち方（提腕）で符号を書いたが,左手を平らに机上に伏せ,筆を執る右手をその上に載せて文字を書く枕腕は行われなかった。

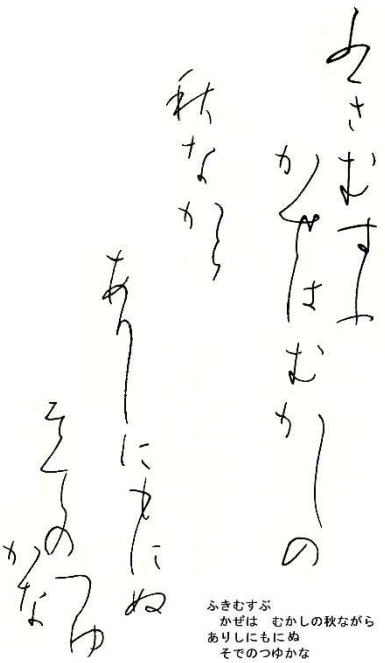


図2－121 平仮名の続け書きの動き
「たちまちうまくなる字の本」1979 小林龍峰 p149
新古今和歌集 小野小町

そうして,直線,曲線ともに接続関係によっては書き崩れる点において，それらに伴う変化があり,次第に合理的な線の連綴関係がわかって規範化されてきた。書道では，懸腕は運筆の自由度が高く大字を書くのに適するとみるが,速記では違ったねらいで正円楕円幾何派の山根式において懸腕が採用されている。すなわち,山根式においては基本的に書き癖が否定され,定規やコンパスで書くような楕円符号,正円符号,直線を要求することになっているので,幾何図形を実現するために，肩を支点とする懸腕が選ばれていた。

３．泉式全音記法

武部良明は「国語速記史大要」（下）に「昭和十五（1940)年,乙部泉三郎は泉式を発表し,長野において泉式速記講習会を開くとともに翌十六(1941)年『ひらがな速記術』及び『ひらがな速記術独習』を著した。乙部はグレッグ式がピットマン式にドイツ系斜線派を取り入れて楕円派をつくったのにヒントを得,同じような立場をひらがなの書記運動に求めた」と書いた。

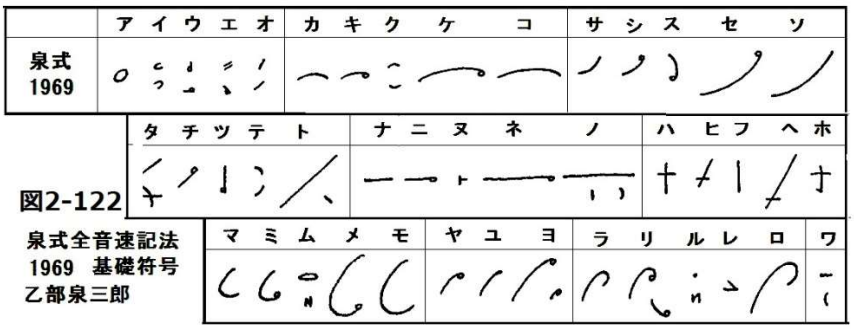


図2-122
泉式全音速記法
1969 基礎符号
乙部泉三郎

乙部は,「私が平仮名の分解線を以て,その基本父字に採用したのは,平仮名の運筆が極めて流暢であり,吾々の手に書き馴れていると云う所に着眼した為である」(「ひらがな速記術独習」）と,ひらがな速記法に着目した理由を述べている。それではひらがなの書記運動とは何か。武部良明は「それは結局回転運動に外ならない」(「日本速記方式発達史」)と述べている。

1940 年,折衷派「泉式ひらがな速記術」を刊行した中で，乙部は「それは西欧の速記符号は幾何派,草書派いずれもラテン文字筆記体のペンづかいの癖をベースにして符号形,連綴を考えたが,日本語では平仮名の続け書きこそが手になじんだものであるから,基礎符号の設計は平仮名書きの特徴を取り入れて行うべきだ」という考えであった。方式名に「ひらがな」と書かれていることは誤解を生むが,泉式は熊崎式系統の符号体系を用いている。図 2－122 の基礎符号は，連綴上の関係で音によっては 2 種類の符号を用意し,書きやすさを追求している。

一般に,日本語では古くは濁音を好まず,清濁音の識別が連濁の場合などで正しく行えることがあって，多くの速記研究者は実務経験的に,濁音は必要な語にだけ示して,そのほかは一応の区別法はあるものの，清音と同じ符号を用いてきた。実際に要注意語以外は清濁の区別を行わない速記者が多い。しかし,乙部は清音と濁音符号を図 2-123 のように，別々に設定した。「泉式全音速記」では,基礎符号は「放火」,「防火」,「忘我」,「邦画」の異音を忠実に発音どおりに書き取るものであったが,同音語は対象とされなかった。また,助詞は「母は東京へ行く」を「母わ東京え行く」と筆記され,日本語の正書法とずれがあった。

日本語は漢字と仮名を主に用いて書かれるが,漢字が永の字八法の筆画で書かれるのに対して,仮名文字の平仮名は筆運びで独自の続け書きが発達し,書き方が片仮名の場合と同じでない。

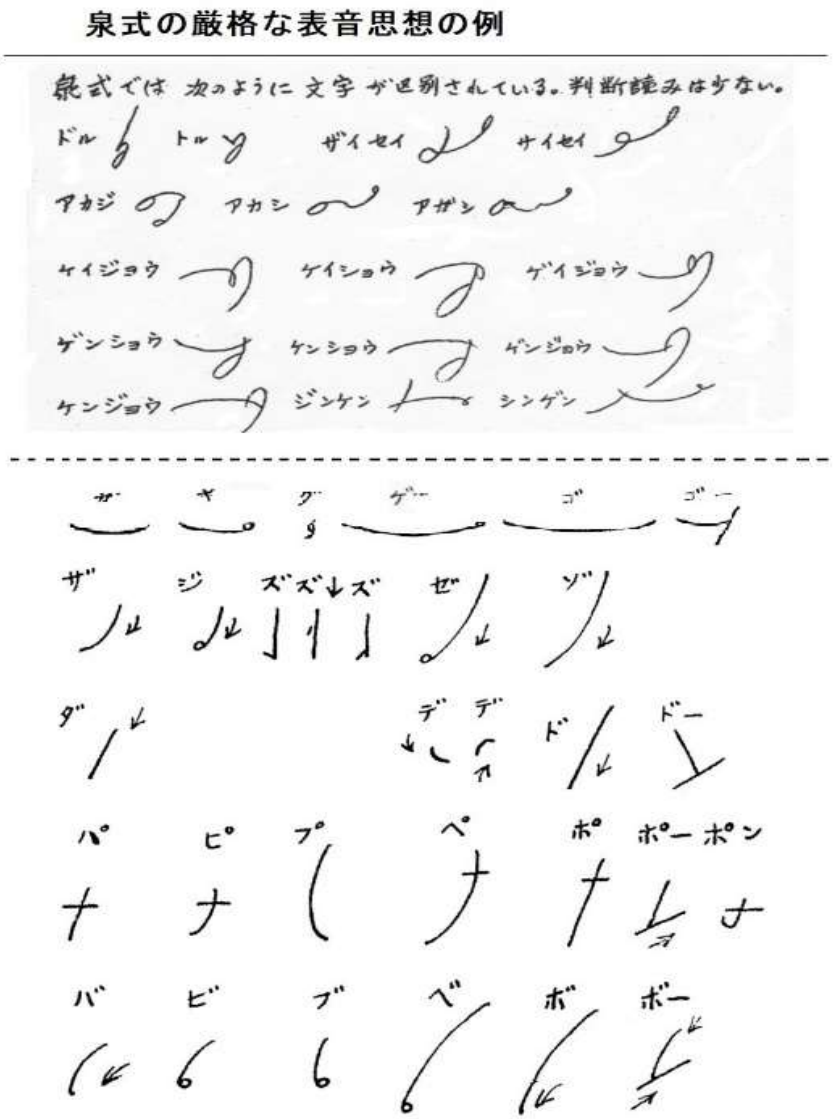


図 2-123　泉式全音速記法　濁音,半濁音符号表

泉式は基礎符号体系を熊崎式ベースの個性的な編成とした。ア列の符号は長さを中型とし,二倍にするとオ列の符号になり,ア列の 1/3 形は小型として母音などに用いられた。基礎符号の規則性としてア列×２＝オ列,ア列＋小円（順記）＝イ列,イ列×２＝エ列と全く熊崎式に則る，としている。

その場合,カ行,ナ行,ハ行,マ行,ラ行は独自の図形を選択し,清音,濁音,半濁音との整合性を持たせる方針をとった。カ行を見ると,/カ/は凸型の水平曲線を採用し,末尾に小円をつけると/キ/とし,/カ/を二倍にすると/コ/,/コ/に小円をつけると/ケ/とした。濁音（ガ

行）は凹型水平曲線を用いて同様の構成をとった。単画符号はア列,オ列とし,全体としては折衷派としたが,サイン符号以外に交差型符号(ハ行),枝出し型符号（ズ: ）などをつくり,離筆で不利とされる符号を積極的に用いて分かち書きとした。撥音,促音,畳音などにも独自の符号観に基づいた形式を採用したことが特徴であった。

日本語の音韻を間引かず，必要なレベルで全部を書きとめる全音記法によったことから「全音速記」と命名された。ただ,書字方向は左起右進横書きを継承し,仮名文字が続け書きの妙を実現する縦書きではなかった。

このようなストローク符号の設計のほか,サイン符号の工夫を行い,小円の省略法,キ字簡略法といった独自の書記法を考案した。

しかし，高速度型速記法が備えた基礎符号,縮記法,略記法,省記法,略語辞書という体系をとらないで,文法に基づく品詞の扱いとして助詞14,助動詞19,口語体の言い回しなどを簡単に筆記する便法を整えており,略語についても 28 種（36変化）にとどめて,日本語を学習性のよい方式としてつくり上げた。

図 2－124 の文例を見ると,ドイツ草書派,グレッグ式が避けた垂直線が使用されており,この点で日本語の書字文化を踏まえていることがわかる。この鳥取速記士会が実施した標準文例による符号は基礎符号の複雑さと別に,画線の連綴性に配慮した速記理論によって書きやすい線を実現している。

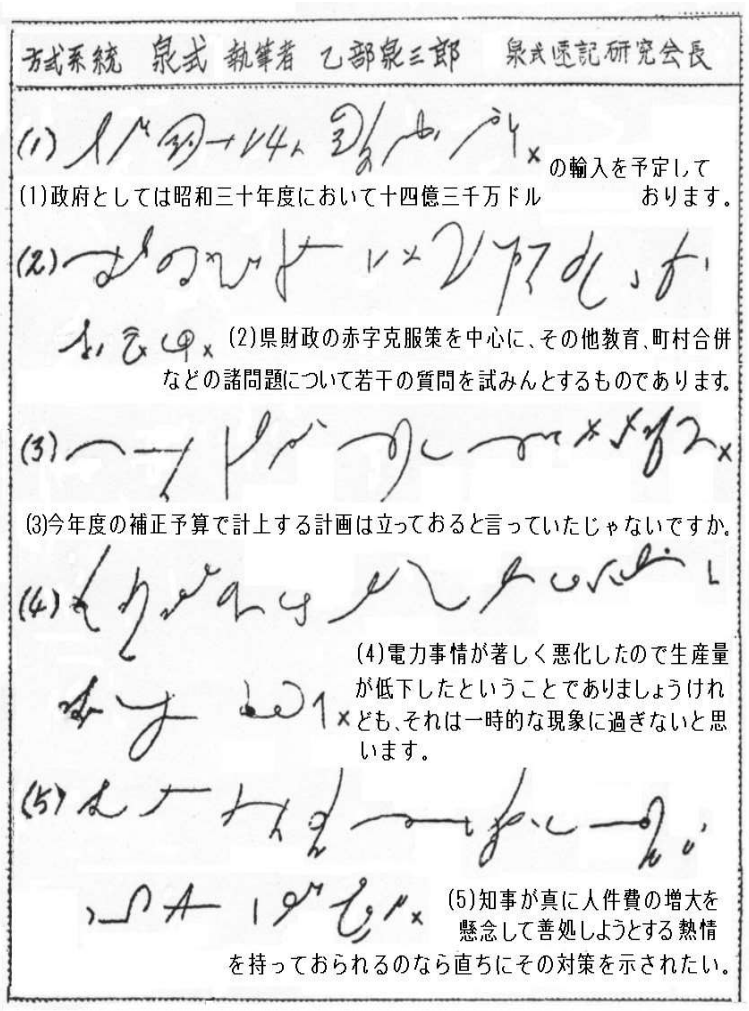


図 2-124 泉式全音速記法による文例　乙部泉三郎

４．伊東式ひらがな速記

1952 年以降,福島県白河市議会,逗子市議会の速記に従事した根田良子は,1951 年から 2 年間伊東稔に個人的に伊東式ひらがな速記を学んだ。(「速記符号文例集」報告書,268P) 伊東は初め個人的に自案を教え，通信教育に乗り出すとともに，横浜山手英学院邦文速記科においても創案した「ひらがな速記」の指導を始めていた。時期によって伊東式の基礎符号に異なるものがあるが，基本的にあまり基礎符号を変更していなくて，図 2－125 は根田良子が習った 1951 年ごろの基礎符号である。

図2-125　伊東式ひらがな速記の基礎符号　1951年ごろ　根田良子によるもの
ひらがなの部分を取り出す原理と単画化した基礎符号を示している。兼子次生整理

伊東は「ひらがな速記法は,ひらがな文字をさらに省画化して構成された新しい速記法です」とし,「初歩から親しみ易い字体になっているばかりでなく,その省略法にしても,ひらがな文字の特徴を生かしていくというやり方で,これを理論的に体系づけてあります」と書いている。

基礎符号は総数で 73 を設定し,その内訳は清音 44,拗音 21,半濁音 5,半濁拗音 3 とした。基礎符号には頭部にサインのつくものがなく,山根式に見られる楕円の一部を取り出した曲線符号を取り入れ,横書きする原則をとった。

連綴原則を見ると,主則として続け書きするものでは 23（[え]，[く]，[し]，[す]，[つ]，[に]，[ぬ]，[は]，[ひ]，[ふ]，[へ]，[ほ]，[も]，[け]，[ま]，[め]，[そ]，[て]，[ろ]，[の]，[ゆ]，[か]，[る]）,ただし 3 符号（[け]，[ま]，[め]）は交差するときもあるほか,準則として 14 符号（[あ]，[お]，[き]，[さ]，[せ]，[た]，[ち]，[な]，[み]，[む]，[や]，[ね]，[れ]，[わ]）は交差することとし,また離して書く符号として 7（[い]，[う]，[こ]，[と]，[よ]，[ら]，[り]）を挙げた。

そのほかの表音原則として(1)促音は前字の字尾の右側に加点し,撥音は字尾を右斜め上に撥ねて書く規則,(2)濁音は符号の上側,または左側に加点,(3)長音は横線を続け,(4)長濁音には上側に加点する規則,(5)同音が続く重音(畳音)は下側,または右側に加点,(6)三重音には横に線を引く規則を採用した。さらに(7)数字の書き方を決め,(8)略字として助詞,動詞で出現頻度が多いものを挙げた。

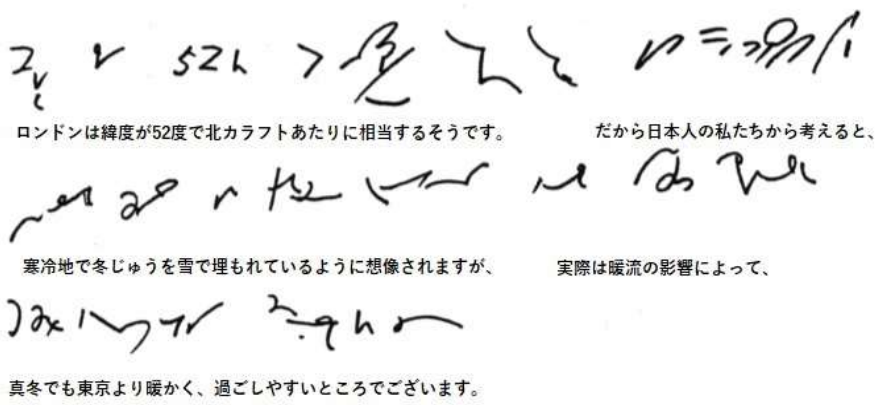


図 2-126　伊東式ひらがな速記の文例

図 2－126 は，根田が伊東稔から指導された符号文例である。

５．三村式タテ書き仮名速記法

1964 年 9 月 28 日，三村侑弘（旧名島比古）は平仮名と片仮名の筆づかいをまじえて縦書きする仮名方式「タテ書き速記」を東京・東栄堂から出版した。乙部が平仮名文字の運動を横書きで設計したのに対して，三村はタテ書き速記とし，かつ左から右へ縦書きで行が進む左起右進とした。図 2-126 の文例，回文として有名な和歌（「長き夜の遠の睡（眠）りの皆目醒め波乗り船の音の良きかな」）を見ると，速度面を別として，日本文字らしさを感じる筆記運動によって速記符号が綴られている。

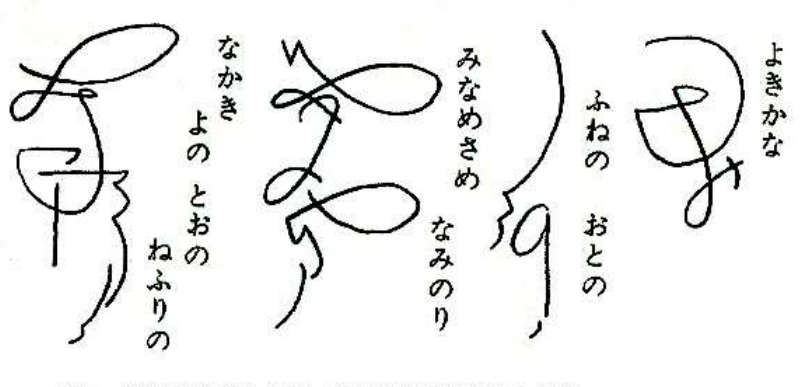


図 2-127　カナ，かなを統合した三村式の文例

日本語文字の書字特性は，ペン，用紙の書字材料によって違いが生じる。また漢字，平仮名，片仮名ごとに，縦書き，横書きにおける続け書き，分かち書きの筆記体がそれぞれ異なっている。漢字文化圏の中でも中国の筆の持ち方，姿勢，筆使いと日本のそれとは同じではな

い。西欧文明の速記が日本語へ移植される過程で,書字用具はインクとペンではなく鉛筆

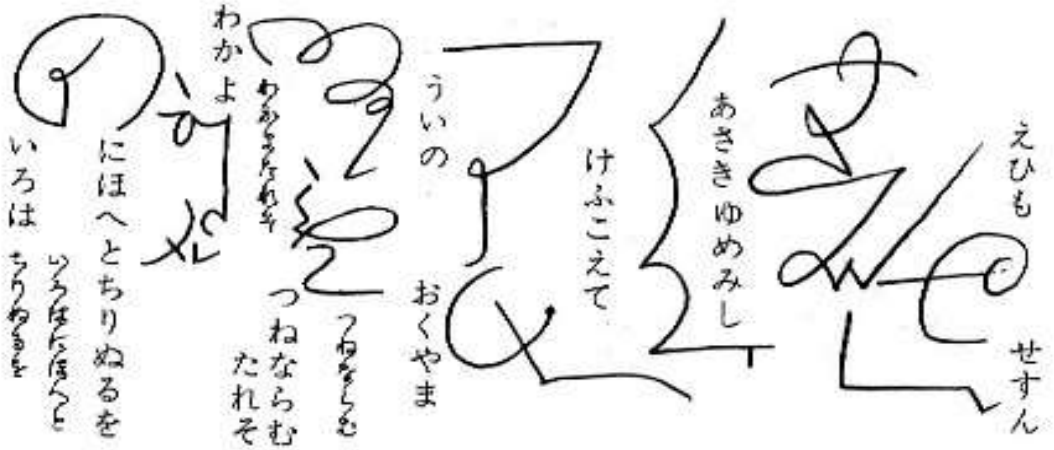


図 2-128　三村式のいろは歌文例　三村侑弘

を結果的に採用したが,それは経済性があり，ピットマン系の幾何派符号を筆記する際にうまく適応できたからだ。もっとも,万年筆を用いた中根式の中根正雄,森卓明，植田裕らは,ピットマン式の符号を再現する上で都合がよかった。しかし,複画派から折衷派へ改良方式が進み,単画派,半草書派へ多様化する環境下で,動態符号は変化を遂げながら,日本人の手に合った形態へと変わっていった。

三村は，1936 年に都新聞（東京新聞）に入社したのち，旧田鎖式の安田勝蔵が同盟通信社で指導した同盟講習所式を受講したが，飽き足らず毛利式，中根式から理論を採り入れてタテ書き速記を完成した。創案のねらいを兼子への書簡に次のように書いている。「私は横書きが速いという『迷信』を打破したいと思い，タテ書きでも，他人様に負けないだけの速度が出るということを示してみたく，そして事実タテ書き速記で，昭和 16(1941)年以来昭和 38(1963)年まで，速記をたのまれれば書いてまいりました」，続けて「タテ書きの長所は（手前ミソです）そのまま読めるということ。別にホンヤクしないでも，結構それだけで読めることです。日本人のタテ読みの習慣が役立っているせいでしょうか」と読みやすさを挙げている。

田鎖式以来，速記者の間で文字式は速度が出ないとして評価が低かったが，三村は「速度の点ですが，速記界では十分間三千三百字を目標にしていますけれど，どうせ人の言葉はそのままでは文章にならず，速記の試験には，文章朗読をもって採点しています。しかし実際の話言葉（日常語）では,『えー』とか,『まあ』とか,『なんと申しますか』などという余計な連結音乃至連結語が数多く入り，そのまま書いたら文章としてチンプンカンプン。してみると三千三百字しゃべっているような文章が書けたから速記の達人とはいえません。そこにおのずと『修文』や『構文』がなされ，しかもその人がしゃべっているような文章が書けなければ，ホンモノの速記といえないと存じます。」と吐露して文芸，座談，講演など出版分野での速記利用に向いた方式として推奨していた。

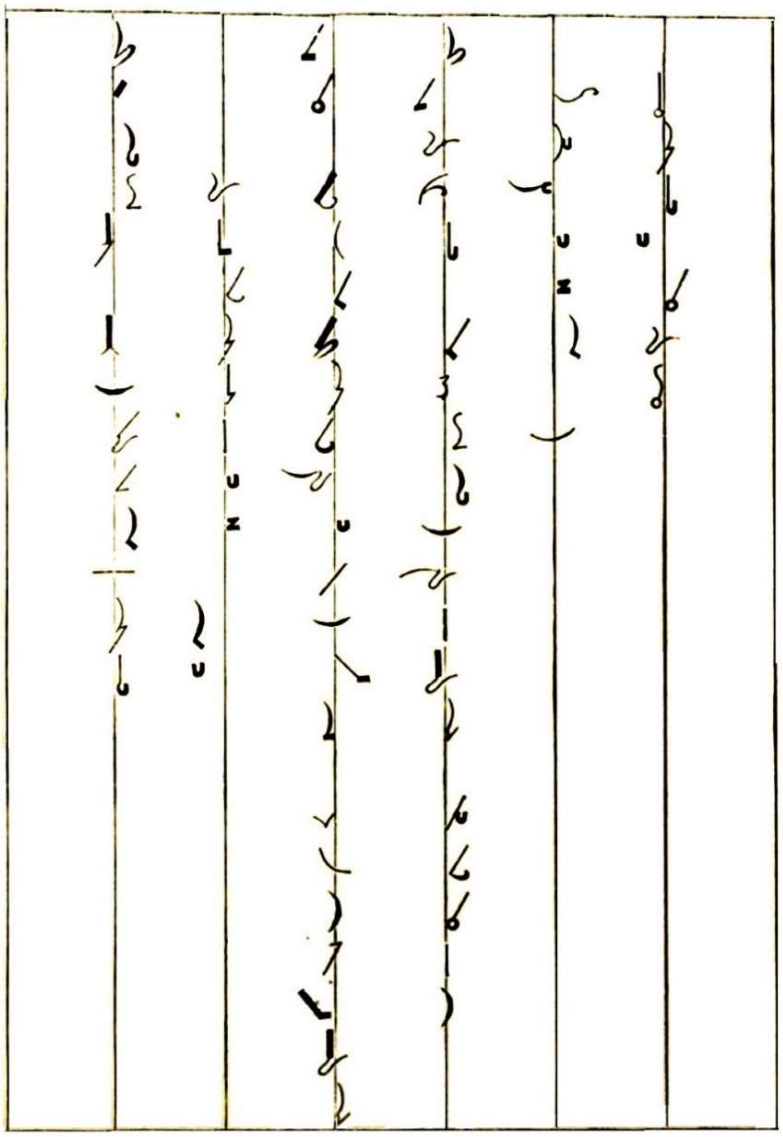


図 1－129 傳音快字の縦書き文例 蔡錫勇 1896

実際, 文字を速記符号の素材に用いる場合, 日本語では漢字は画数が多く, 早書きに適していないので, 片仮名と平仮名が素材として可能性がある。その場合, 部分を切り取って符号の要素とするか, それらの書法の特徴を取り入れて, 速く書ける速記理論を構築する道がとられた。片仮名は横書きに適し, 見た目がシンプルで, 分かち書きが可能であり, 幾何派の速記符号のイメージに準ずる傾向にある。一方, 平仮名は縦書きで続け書きする傾向があり, その書字運動は, なめらかな筆跡で, 緩速があり, 幾何派の速記符号のイメージに準じた傾向がある。こうして豊かな筆先の変化を速記に取り入れたカナ速記が戦後ようやく公開された。

その中でユニークな方式は, 平仮名, 片仮名の動きを活かした三村式タテ書き仮名速記法であった。この方式では片仮名, 平仮名をそのまま使用するのでなく, 部分を用いている。図 2-128 はカタカナとひらがなを巧みに用いるタテ書き速記で書いたいろは歌である。

かつて折衷派の牧は, 速記原本の反訳を左起右進縦書きとする提案を行ったが, 三村はその書字方向を速記符号の筆記に取り入れたことになる。

タテ書き速記における線条は, 日本人が好む円運動の縦流れを取り入れ, 交差, 平行など, 仮名文字の筆法を活かしているのが特徴である点で, 日本的な草書つまり和草派と言える。

もっとも, 縦書き速記は, のちに中国語初の速記となる蔡錫勇の「傳音快字」1896 におい

て,右起左進縦書きを採用されていた。それは中国語の筆記習慣を前提としたものであった。図 2-129 の傳音快字の文例である。

前野貴子によると,「傳音快字」は,縦書きの罫線紙に,行は右から左へ進む。速記符号を書く位置で四声（去声,入声,上平,下平）を表す。去声は中心線の左寄り,入声（現代中国語にないアクセント）は右寄りに符号を置き,上平（一声）の場合,声と韻は続けて書く,下平（二声）の場合,声と韻は分かち書きする。書く位置によって四声を表記するために,２文字以上の語彙は連綴できない。そこで,清国政府の命を受けた,蔡璋が「中国速記学」として完成する際に「連書法」を採用し,スピードを向上させるために四声の一部の表記法をなくした。それは,2 字以上の語彙は最初の符号だけ四声を表示するものであった。[#11]

ただ,三村はタテ書き方式考案の動機について,洋服のポケットに速記用紙を忍ばせてこっそり書くために工夫したと書いている。

図 2-130 は三村式の基礎符号で, 基礎符号を母音符号とそれ以外の音節を単位とする子音符号に大別し,母音は複画派,折衷派の最短線・点を配当し,子音には初音に用いる大文字と二音目以降に使用する小文字を用意した。子音符号で「サ」,「テ」に大文字 1,小文字 2 の 3 符号を配分した。2 符号を設けたのは「オ」,「カ」,「ナ」,「ハ」,「ラ」,「チ」,「ニ」,「リ」,「ス」,「ツ」,「ヌ」,「ル」,「ソ」,「ノ」の 14 符号。その他は 1 符号を割り当てた。

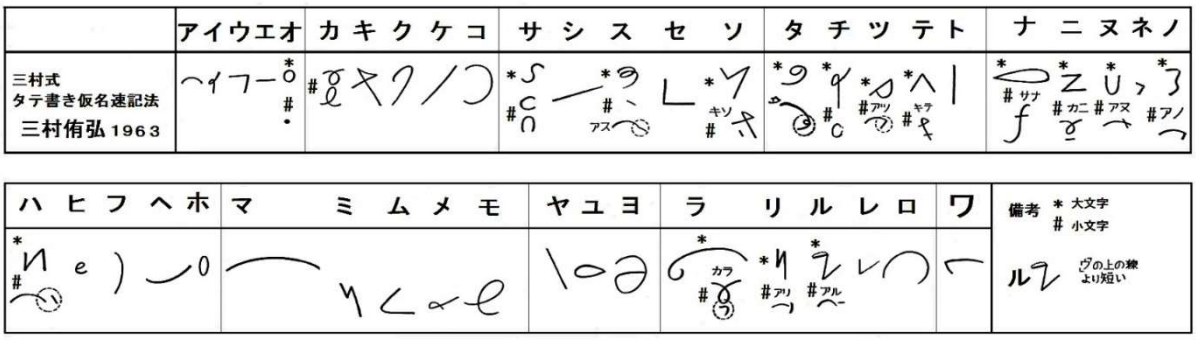


図 2-130　三村式タテ書き仮名速記法の基礎符号　三村侑弘　1964

三村式は, 離筆,交差,並行の形式で筆記する点が仮名の筆法と似ているが,基礎符号のほか,撥音,濁音,半濁音と長音符,畳音,拗音,数詞といった平均的な符号体系を整えて,また字音語に対応するため「イ」,「ク」,「ツ」,「ル」の尾音を簡単に示す省略法を加えている。略語は 257 個を用意し,「コト」には文字の「⌉」を用いている。

縦書き速記の傳音快字では縦罫線用紙の上に漢字のように右行から左行へ書き進む方向で幾何符号を上から下へ書いた。それに比して,三村式は符号速記の経験をもとに速記理論を組み立てているため,横方向への符号が連続したり,右下方向への速記線のずりが出現して,縦書きと言えない綴りが生じる場合がある。両式の着想は一元的に発展してきた西欧起源の速記文明と,漢字文明の融合が行われた試みであった。

図 2－130 を見ると, 三村式では符号の連綴で離筆,並行,交差などの表記をしたり,小文

字の使用があって複雑なため,山根式の 1936 法と同じ方法つまりイロハ文字の一音ずつをずらして次の音を綴る練習方法を採用している。基本的にはすべての音を固定する全記法をとるが,省略しても正しく判読できる言葉では音を書かないことを勧めている。

発話速度を完全にカバーできる最高レベルの衆議院式標準符号（単画）と,仮名式の三村式で同じ文章を書いた文例を図 2－131 に挙げておく。

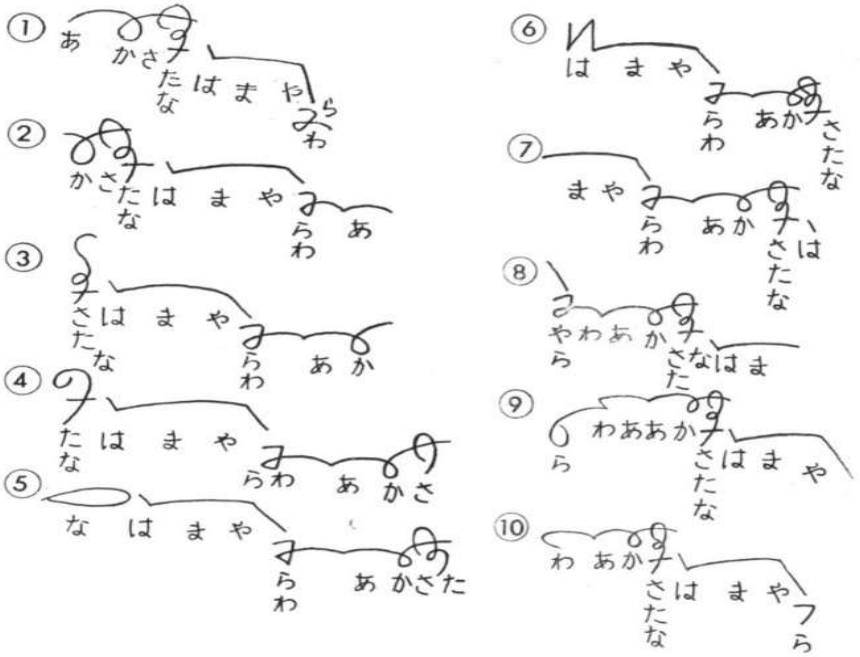


図 2-131 三村式における基礎符号の連綴練習課題例

ア列の符号を１字ずつずらして大文字と小文字のつながりに慣れる。ほかの列や音節をアトランダムにつないでいく。それによって速記符号の筆記を体得することになる。

幾何派,草書派,半草書派の比較に図形の要素を単位として数えることが妥当であるかどうかは疑問であるが,最初の「ロンドンは緯度が 52 度で北カラフトあたりに相当するそうです」の朗読文について,幾何派の画数計算法によると,西来路は 6 ブロック,18 ストロークで書いており,一方,三村侑弘は,6 ブロック 46 ストロークで書いたと数えられる

VIII　おわりに

手書き速記は,発せられる言葉を発生とほぼ同時に固定し,そのあと読み返して文字に変換する活動であると,速記者は考えてきた。その速記は,言語に適応する合理的な知識システムであり,一方それを使いこなすスキルを得て実際に利用される。

符号改良を目指す研究者は,言語音に対する図形資源の配分を最適化して,最小の筆記負担で最大量の言葉を表す速記理論を組み立てようとする。教育者は学習性のよい指導法を研究し,必要な規範符号体系を最小の負担で習得させる訓練を追求する。

20 世紀末には世界的にみて相対的に速記の学習負担が大きく感じられるようになり,技能試験の合格率低下等もあって，速記離れが世界的に進んできた。一方,手書き速記の学習者が符号を正確に速く筆記し,確実に反訳する練習につとめても,技術革新の進行によってアメリカでは速記秘書はアドミ administrator に代替された。

日本国内では議会市場において定員制から外部化が進められ，それに対応する大手速記会社による市場寡占化が完了した。生産性を高める点で，個人経営の速記者は競争力を失っており，黄金時代に謳歌した職場がほぼなくなり,職業としての速記は衰退した。

文化として見れば速記は広い文字体系の一領域にあり，高速筆記を可能とする機能性文字である。そして速記は，評価が難しい知的技能要素があって成果をあげるものであり，日本語の速記方式理論を客観的，科学的に評価する上で難しい一面がある。

経験的に見て，学習意欲を高められる教育者は,速記の成功者を輩出しやすいようだ。

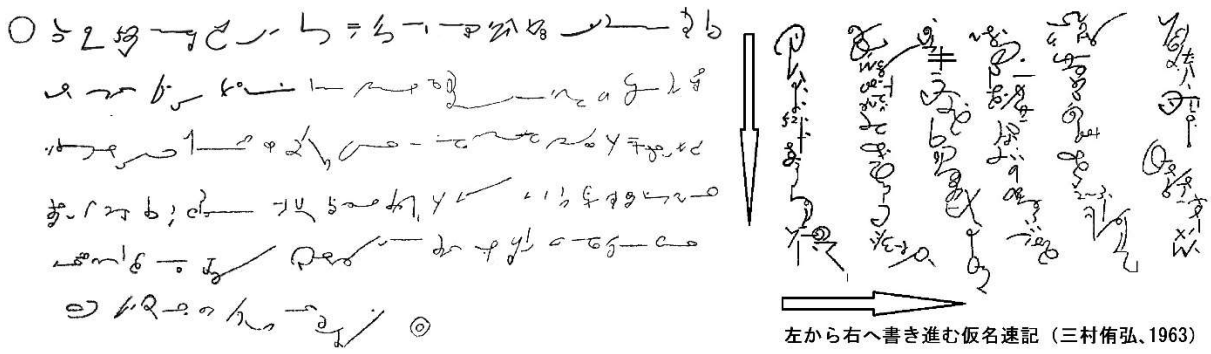


図 2-132　同一文を符号式(左：衆議院単画符号)と仮名式(右：三村式タテ書きカナ速記法)で書いた文例

日本語の符号式,文字式速記法ともに,畑田明が言う「それは詰まるところ手指の回転運動にほかならない。速記は求心力によって書かれる」ものであり,その方式を巧みに操る者の書法を手本にして練習することが経験的には成功率がよい。手書き速記は理論的に高度なレベルに達したが，技術革新，経済価値の挽回面で課題に直面しており，新しいパラダイムに立ち向かうべき時代へ入っている。

本稿をまとめるに当たり,各方式の理論等についてご協力をいただいた方の氏名を次に

挙げて謝意を表したい。明石文雄, 荒木章, 石川吉正, 石河勝彦, 石村善左， 石渡潔， 稲垣正興， 植田裕, 岡本隆博, 加古修一, 川口晃玉， 顔廷超， 北川暉基, 樟根重和, 小出邦彦, 小谷征勝, 小西佐都志, 小林多聞， 西来路秀男, 佐賀田徹, 佐竹康平, 瀬戸豊， 高橋健吾， 髙橋恒治, 高橋正喜, 武部良明, 田中星子, 寺井美己， 唐亜偉， 鄧方晟， 豊岡敬人, 中田知, 中根正親, 中根正世, 中根康雄, 中村優里, 西村泰一, 橋田光雄， 東野裕一， 平野明人, 前野貴子， 真木敏郎， 真下真, 三牧勉, 宮田仁子， 宮本修一, 森卓明, 山口庄治, 米田陽子, 両下昌三， Boris Neubauer ほかの諸氏。

（図版）

図 2-1　初期日本語速記法と母式の影響　兼子次生作成:参考文献は,「日本速記方式発達史」1942, 武部良明, グレイアム式は第 1 図,ピットマン式は第 19 図,リンズレー式は第 5 図,田鎖式は第 2 図,黒岩式は第 6 図をもとに兼子次生が作成した。

図 2-2　田鎖式初版と黒岩式の基礎符号比較表：黒岩式の基礎符号は,「議事演説討論傍聴筆記新法全」, 1883.7, 黒岩大,日置益訳補,神田乃武校訂 p15,16 から,田鎖式は「傍聴筆記新法獨學全」1884.12　清澤與十 p1-5 から兼子次生が作成した。

図 2-3　田鎖式初版と黒岩式の比較文例：「速記術大要全」林茂淳 1885.4.15 の p8-9 から引用した。

図 2-4　同行縮字法の萌芽：「実験改良速記術独学」1887.4.4　丸山平次郎の p68,69 から引用した。

図 2-5　清澤版「傍聴筆記新法獨學全」表紙：1884.12, 清澤與十。

図 2-6　「ことば乃寫法」表紙：1885.11.13,丸山平次郎。

図 2-7　幾何派の符号生成源素図例：「傍聴筆記新法獨學全」1884.12 清澤與十の p1-2 から引用した。

図 2-8　文節単位の筆記が早期から工夫された:「ことば乃寫眞法」1885.11.13 丸山平次郎 P.62 から引用した。

図 2-9　丸山版と清澤版の基礎符号　兼子次生作成：「ことば乃寫眞法」1885.11.13, 丸山平次郎,「傍聴筆記新法獨學全」1884.12 清澤與十 を用いた。参照した英文速記法のアルファベット符号をもとに工夫している。

図 2-10 べた文を読みやすく区切る工夫例：丸山版「ことば乃寫眞法」1885.11.13,丸山平次郎 P62 から引用した。分かち書きしない日本語をべた書きすると書きにくく, 読みにくいため, 英文速記のように分かち書きする方法を選んだ。

図 2-11 早期の速記符号の連綴状況：「傍聴筆記新法獨學全」1884.12, 清澤與十 p8 から引用した。文字, または単語単位に読点を振る工夫が見られる例。

図 2-12 現存する最古の速記符号：矢野文雄口述, 若林玵蔵速記「経国美談後編」 1884 巻末 p2-3 から引用した。

図 2-13 田鎖式初版成案に至る過程　武部良明　「速記概説」　1948.5.3.

図 2-14 音節符号の生成法　田鎖式初版：「傍聴筆記新法獨學全」1884.12 清澤與十では, 父音（ア列の音を呼ぶ）に母音サイン符号を音順に連ねて音節符号をつくっており, 日本語速記法の基礎符号の生成にはこの方法がとられた。

図 2-15 衆議院単画符号における逆記法：「逆字」の例は田鎖一「日本速記法」1950.11.3 P.61 から引用した。

図 2-16 田鎖式 3 代基礎符号変遷表(田鎖綱紀,田鎖一,田鎖源一) 兼子次生作成：A 田鎖綱紀の 1882 年初版は林茂淳「速記術大要」p5 から,B 新田鎖式 1893 年版は綱紀「田鎖新式速記術」1904 年発行版,D67 年式は一「日本速記法」から,E1976 年版は源一「速記 6 ケ月コー

ス」1981 年発行版から,それぞれ兼子次生が作成した。
図 2-17　三遊亭圓朝「怪談牡丹燈籠」に掲載された若林玵蔵の速記符号：1884.7, 圓朝口演,若林,酒井昇造速記による初の講談速記本に,語り始めの速記符号が 13 巻のうち 6 巻を除いた巻の表紙裏に速記符号が掲載された。復刻版から引用した。
図 2-18　福岡隆(新田鎖式)速記文例(松本清張「砂の器」口述速記)：速記 110 年記念事業「速記符号集」に回答があった福岡の田鎖式符号#076 を引用した。
図 2-19 田鎖一の速記符号文例：鳥取県速記士会報 2 月号 1955.2.8 の調査特集「全国主要速記方式符号紹介」記事ｐ17 から引用した。
図 2-20　ある時期における国会速記者の方式系統の実態：若林玵蔵の符号は「速記術大要」林茂淳のｐ8 から, 佃式は佃与次郎が教本を発行しなかったので 1912 年に学習した榊原清の資料を用い, 衆議院第一期は衆議院速記者養成所 80 年史口絵「符号の変遷(1)」から, 貴族院第 1 期 1918 符号は貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史のｐ44 や教本を参照して兼子次生が作成した。
図 2-21　衆・友野茂三郎のダイナミックな直筆：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者の直筆符号 p80 から引用した。
図 2-22 衆議院式の符号変遷表　兼子次生作成：「衆議院速記者養成所 80 年史」口絵 符号の変遷(1)(2)を画像処理して作成した。
図 2-23　石川隆一の速記符号文例：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者の直筆符号(p83)から引用した。
図 2-24　森田章三の速記符号文例：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者の直筆符号(p82)から引用した。
図 2-25　田鎖式から貴族院式・参議院式への基礎符号の変遷：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」442p,統一式は折衷式(統一)として収録された符号である。兼子次生が編集した。
図 2-26　参議院 19 期生の単画符号の文例：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された参議院式速記者の直筆符号(#068)を引用した。
図 2-27　最終期の貴族院複画符号の文例：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された参議院式速記者の直筆符号(#015)を引用した。
図 2-28　参議院式折衷符号の完成者,山田到の符号文例：鳥取速記士会会報「全国主要速記方式符号紹介」1955.2 の直筆速記文例, p17.を引用した。
図 2-29　参議院式新折衷式の符号文例：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された参議院速記者養成所卒業生の文例（#046）を指導時期から判断して引用した。
図 2-30　(1)貴族院式・参議院式の符号文例：貴族院速記練習所・参議院速記者養成所において指導した速記符号の変遷(複画式は貴族院一期生から参議院三期生まで),(参議院四期生から折衷式, 単画式を指導), (四十一期生から新折衷式の統一符号)「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から兼子次生が整理し, 引用した。

図 2-30 (2)貴族院式・参議院式の符号文例：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から引用した。
図 2-30 (3)貴族院式・参議院式の符号文例：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から引用した。
図 2-30 (4)貴族院式・参議院式の符号文例：「貴族院速記練習所・参議院速記者養成所 80 年史」から引用した。
図 2-31 ガントレット式の符号文例　森上富夫による：速記 110 年記念事業「速記符号集」に収録された衆議院速記者,森上富夫の直筆符号(p82)を引用した。
図 2-32 ガントレット式,熊崎式,武田式,中根式の基礎符号表：ガントレット式は森上富夫「ガントレット式日本語速記術」1934.10 版の p32,熊崎式は熊崎健一郎「熊崎式速記術」の p31-179 から符号を抽出,武田式は武田千代三郎「武田式全画体速記法」1996.8.18 版の p16,中根式は中根正親「中根式速記法講解」1916.2 の p21 の基礎符号を用いた。
図 2-33 電話速記に用いられた複折 3 速記方式：衆参両養成所から採用されたほか,熊崎健一郎の熊崎式を独習した者らが応募した。「日本速記五十年史」, 毎日新聞社「新章 80 年史」などを参考にした。
図 2-34 牧泰之輔の改良符号の変遷(熊崎式⇒新熊崎式⇒超熊崎式⇒牧式⇒新牧式)兼子次生作成：牧は熊崎式を学んだ後,民間速記者として地方議会の速記や後進の育成のかたわら,速記理論の改良研究につとめた。著作は「牧式和英六十字速記術」1927 年,「牧式速記術講義録」1928 年,「超熊崎式速記術初歩」,「牧式速記術初歩」1938 年などがある。符号変遷はかっこ内に書いたように進んだが,紙質,印刷法などから良質の教本はほとんど残されていない。
図 2-35 牧泰之輔の熊崎式改良の経過：熊崎式のウ列音を単画化する点や,第二符号を設けるなど符号の変更があった。
図 2-36 早稲田大学速記研究会の第一期単画符号と第二期折衷符号,兼子次生整理：単画早稲田式(第一期「早稲田式初歩の速記学))のテキストは,田鎖式二代目の田鎖一が学生の要請を受けて応援した関係で田鎖家に残されていた。三代目の源一は「単画早稲田式は, 速記界の理解と協力がうまくまとまらなかった」と語っていた。単画式の夢が消え去ると, 川口が温めていた折衷式(第二期早稲田式速記学)が浮上して盛り上がっていったと見られる。
図 2-37 早稲田式の速記文例：鳥取速記士会報「全国主要速記方式符号紹介」1955.2 の直筆速記文例にあった川口晃玉の符号 p15 を引用した。大阪早稲田速記専門学校長, 石川吉正の言によれば,川口晃玉は日本速記協会検定試験Ａ級に合格していた。
図 2-38 速記の最初の通信教育 ピットマン式のペニー・プレート：ピーター・ピットマンから兼子次生へ贈られた複製ペニー・プレートを縮小した。
図 2-39 早稲田式と佐竹式の主要符号の比較表　兼子次生作成：符号は「早稲田速記研究・研究編」1963.8.1,p10-11,と「佐竹式速記学習コース 1」p15 を用いた。佐竹式は 10

符号を変更しており,斜めの符号をより寝かせているなどが特徴的である。
図 2-40 米田式初期の符号変遷表(1949,1950,1952 年版) 兼子次生作成：二段目が新米田式への試行符号,1952 年版で初版に回帰した。米田式教本としては,1949 年「熊﨑式発展日本語標準速記法」を出発点として,1950 年版「新米田式速記法実用編(1)」で衆議院式,国字式,グレッグ式などの符号を取り入れた。大小正円と小楕円（カ・ン,イ・ク・ニ,ケ・コ）,小半円（ミ）,丸カギと曲線（シ,ノ,ヘ,ホ,ル,ロ）,フック記号（ヌ,ム）,最短線化（キ,ク,チ,ノ,ユ）のほか,複数符号の採用（ウ,キ,ク,ノ）が図られて熊﨑式の面影がなくなったが,1953 年版「米田式速記法実用編」1952.10.20 で初版にほぼ復帰した。その後「米田式速記法運用編(第一分冊)」1953.1,「同(第二分冊)1954.3.1,さらに 1954 年版「米田式速記法実用編要約(改訂版),1960 年版「詳説米田式速記法第一分冊」1960.5.10,1972 年版「総合速記講座総論編」,最終版は仮名速記の「ビジネス略記法」(未完）であった。
図 2-41 米田式の文例 山口庄治「速記符号集」#095 1993.9.1
図 2-42 米田式における基礎符号の改編歴：各教本から抜粋,兼子次生作成：
図 2-43 経済の高度成長期に折衷派の改良方式が続いた。日速研式(大阪)とコクサイ式(京都)兼子次生作成：吉崎健太郎「日速研式速記教科書」1972.2 の第 2 巻 p24 の基礎符号,中村優里(えつ)「速記テキストブックⅠ上下」1967.4.1 の p18 の基礎符号を用いた。コクサイ式は基礎符号のダイヤグラム,用語が植松尚男「すぐ役立つ,速記の学び方」1959.と類似し,田鎖式系の方式と判断される。一方,吉崎の日速研式は早稲田式と類似しており,例えば[ア].[イ],[ウ],[エ],[オ]は同じ符号,[ク]には[コ],[ス]には[ソ],[ヌ]には[ノ],[フ]には[ホ],[ム]には[モ],[ル]には[ロ]を充て,[ソ]には[ス],[ロ]には[ル]を充て,[ノ]には助詞の[ノ],[モ]には助詞の[モ],[コ]には[オ]を逆方向へ書く短線,[ホ]には[ユ],サ行とタ行には正規と変規符号二種を充て,[ト]には縦短直線を充てた。[ホ]には[ユ]を割り当てた。このような基礎符号の類似性から日速研式を早稲田式系統と見る可能性がある。
図 2-44 毛利高範：毛利高範(1867.1.10-1939.6.12)は, 肥後宇土藩主細川行真の次男として熊本で生まれ,その後, 豊後佐伯藩毛利高謙の養子となり藩主を継ぎ,明治維新後, 1884 年子爵に叙せられた。田鎖の第 1 回講習会を受講し,1888 年学習院高等中学校を終えてドイツへ留学,そのときドイツの草書派に魅せられて草書派創案を決意した。戒名は速記院殿開新高範大居士。
図 2-45 毛利式の符号の源図：毛利高範「毛利式速記法詳解」1927,p10 から作成した。
図 2-46 草書派ガベルスベルガー式の画線体系：Moser-Erbach,”Lebendige Kurzschrift Geschichte “ p45 の表から兼子次生が作成した。ガベルスベルガー式の方角別符号表。
図 2-47 毛利式とファウルマン式の基礎符号 兼子次生作成：発音学の視点を持ったものの,毛利はファウルマンの速記符号にとらわれずに毛利式の符号を改良した。子音では[サ],[ナ],[ハ],[マ],[ヤ],[ワ]6 符号は独自の符号を配分した。
図 2-48 毛利式の符号筆記帯を示す線譜：「毛利式速記法詳解」1927,p15, 草書派では速記

符号の筆記位置を定義しており,図の「い・に内」に書くものを二階文字,「い・は内」に書くものを一階文字,「い・ろ内」に書くものを半階文字と呼び,符号サイズは二階文字の場合,4.5 ミリ(一分五厘)と定義した。

図 2-49 デーゲン式 1928 とシュトルツェ式 1841 の基礎符号　兼子次生整理：デーゲン式「新日本文字」では，シュトルツェ・デラ・シュパダ萬国発音速記法の基礎アルファベットと対応しながら速記符号を設定したとある。[K]とカ行,[S]とサ行,[T]とタ行,[N]とナ行,[H]とハ行,[M]とマ行,[R]とラ行,[W]とワに対応関係が認められるが,母音とＹ・ヤ行には対応関係がない。謄写版の私家版資料を用いた。

図 2-50 いろは順に罫線用紙に書かれたデーゲン式の基礎符号：私家版「新日本文字」p17,デーゲンは日本語に堪能でないため普及を第三者に任せたことや,日本に定住しなかったので普及しなかった。

図 2-51 国際速記のもととなったクノウスキー式速記法：LebendigeKurzschriftgesichte 1979,Moser-Erbach p76 基礎アルファベット符号。国際速記と呼ばれた日本語速記法は,クノウスキー兄弟のうち弟のフェリックス・フォン・クノウスキーが INTERSTENO の方式名で創案しエスペラント速記として普及した。「Kurzschrift geschichte」1979,Moser・Erbach から引用. クノウスキー兄弟が創案した草書派方式はドイツでナショナル・ステノグラフィ National Stenografie 1898 と呼ばれる。エスペランティストの大場格はクノウスキー式の日本語版方式をつくり,日本のエスペランティストの間で広めた。厳密には新方式の創案ではなく,日本語対応版である。21 世紀初頭,普及活動を担ってきた深堀義文が死去すると,自然消滅したと見られる。

図 2-52 大場格設定の日本語用音節符号とクノウスキー式の子音符号 兼子次生整理：子音部分を[K]→カ行,[S]→サ行,[T]→タ行,[N]→ナ行,[H]→ハ行,[M]→マ行,[J]→ヤ行,[R]→ラ行に対応させ,一方母音符号をつくり,両音を組み合わせて音節符号を生成するものであった。一音節が最大 4 画に上るため,既存方式に伍することには不向きであった。そのため省略理論,略語辞書が求められた。

図 2-53 国際速記法による「青い山脈」歌詞の文例：出典「インテルステノ国際速記入門」著者深堀義文 2000.10.10 から引用した。

図 2-54「日本語斜体速記法」1985. 顔廷超：下段の符号は第二符号。顔は，満州建国大学在学中に西川伍朔から田鎖式を学んで正円幾何派の中国語速記法を考案していたが,戦後ソ連から伝来した草書派ソコロフ式（ＧＥＳＳ）を参照して中国語の草書派を樹立した.堪能な語学力を活かして朝鮮語速記法,日本語速記法，英文速記法を創案した。「中国速記方式史」2004.9.16,主編蒋朝参 には「1984 年,顔廷超又将斜体式引進到日語,根拠他学習日語速記的経験，発明了((斜体式日本語速記))，併編成教材,」，また「速記人生回憶録」顔廷超著には「開創中文斜体速記学派」の中に「十，我的((日本語斜体速記))創案」の見出しのもと，複画の基礎符号と基本的な書法を説明している。図下段の符号は第二符号。田鎖源一は一時期満州国に居住し，戦後ソ連軍の捕虜となった経験がある。

図 2-55　日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎符号(日本語用)：平野明人は中速度を目標に草書派の方式を開発する目標を立て,2009 年創案した。
図 2-56　日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎符号（英語用)：草書派で音節対応と音素対応の基礎符号を設計した英語用の基礎符号。
図 2-57　大阪毎日新聞の中根式速記創案の報道記事：京都帝国大学理工科大学土木科一年生,中根正親が独創的な単画式を創案したことが紹介され,速記界に新風を吹き込んだ。
図 2-58　中根速記学校で指導された主要理論（池田正一)：字音語尾音法則性に基づくインツクキ法の例：近代速記理論では表音主義がとられるが,中根式では縮記法として字音語を中心に二文字語において尾音に出現する現象をインツクキ法理論として組み込んだことが,二音文字などの略記法を主要理論とする複画,折衷派に刺激を与えた。「日本の速記」1957 年 6 月号に掲載された「わが式の誇る省略法―中根式－」を参照した。
図 2-59　中根正親の直筆文例：中根正親は学校教育活動に専念するため,速記関係の蔵書,資料等をすべて処分したが,偶然速記符号の自筆ノートが発見された。「ところ」が熊崎式と思われる符号など,現存する唯一の創案者直筆の速記原本である。
図 2-60　中根式速記法の基礎符号の変遷：中根正親,弟正世(正雄), その次男,康雄の三代にわたる速記符号の改良が行われた。基礎符号では正親「中根式速記法講解」1916.2,p21 のサ行,タ,トが 60 度(300 度）であったのを正世「通俗中根式速記法」1927 の第 1 表（森卓明「超中根式速記法」1931,p14）で 30 度(330 度)に変更されている。
図 2-61　中根式速記法の基礎符号の決まり　中根正親　中根式速記法講解　1916：基礎符号を生成する源図はピットマン式を参照しているが, 曲線は 2 四分円, 線分符号は 5 方角を用い, 符号周囲の位置関係を「正側」,「負側」として定義している。山根式において「順」,「逆」と呼んで継承されている。
図 2-62　中根式系の基礎符号の多様化事例：岩村学「岩村式カナ早書法」1930,森卓明「超中根式速記法」1931,p14,古久保峯吉「国字速記講座(1)」1931,p1,土田利雄「土田式速記法」1934.6.1,p2,武部良明「学生速記」1940.6.25,p242-244,石村善左「石村式速記法」1952.8,速記研究会報,植田裕「カ行曲線なま行直線符号版」1957.4,受講ノート,などの改良符号が派生した。それらの中で, 森, 国字,土田,武部,石村,植田らが多様な符号論争の跡を残している。
図 2-63 ピットマン式の符号源図：PITMAN'S SHORTHAND INSTRUCTION NEW ERA EDITION,p1.
ピットマンの符号コンセプトは, グレイアムを通じて田鎖系初め, ガントレット, 武田, 中根へ大きな影響を与えた。
図 2-64　発話を文字化する速記の技術革新の進化：速記文明は普通文字の手書きから符号式へ進化して繁栄したが, 機械式速記へ広がり, さらに電子化や情報処理面の自動化, 人工知能（AI）へ進歩した。21 世紀に入り,人工知能技術が音声情報の処理, ビッグデータ処理, 機械学習の進歩によって, 人間に頼らない音声言語→文字言語への自動処理が可能になってきた。速記という技術体系は人間の介在を必要としないパラダイムへ広がってき

た。「速記」は“Speech to Text Technology”へ広がりを見せ，その象徴的なリアルタイム・生字幕が普及しつつある。

図 2-65 複画派からの単画化研究と純単画化の達成：森山式,大川式,北村式,四年式については武部良明「日本速記方式発達史」1942.11.25 の符号を引用した。山根式については山根祐之「山根式速記」1951.8.1,p17 から引用した。

図 2-66 Moat 1833 における母音位置表象法：トーマス・モート Thomas Moat は 1833 年,モート式を創案し,その母音を表す理論として五線譜を用いて 4 段に子音符号を置くことで母音を表す位置表象法を採用した。

図 2-67 ルフェーブルのポジション式の文例：Karl Faulmann“ HISORISCHE GRAMMATIK DES STENOGRAPHIE”1887.8,p.335 では,6 段の位置を用いて子音を表す方法をとり，母音には田鎖式のように小さなサイン符号を設定している。右図のように書かれる言葉は１個の符号であった。

図 2-68 クロス式における音表象法：クロス式では,速記符号のストローク,サインを置く位置を変えることによって前後に母音や子音,音節がつくことを表すシンボライゼーション（表象法）を巧みに整えた。符号処理の視点からは線表象,符号の周辺位置を利用する加点法や符号を置く位置の利用という視点からは位置表象,どの音を表すかという音表象がある。

図 2-69 クロス式の基礎符号：アメリカの J.G.Cross が創案したクロス式は正円幾何派の方式である。J.G.CROSS “ECLECTIC SHORTHAND 1902.p142.

図 2-70 同じ線長の符号における前音摘記法：「現代国語表象法」において例 1+1= 1 ，例えば符号「ケイザイ」の音列を一種線の「ケイ」に短綴したり,「ザイセイ」を同「ザイ」として省画化する規則。

図 2-71 ５方角でまとめた線分符号のグループ：「現代国語表象法」において線分符号を同じ角度のもので集めて 5 グループとする。A,B グループは上段,C,D グループなら中段,E グループは下段に符号を書く。

図 2-72 筆記位置：「現代国語表象法」における筆記位置(上,中,下)

図 2-73「現代国語表象法」におけるストロークとティック・サイン：線分符号はその置かれる段によって決まった母音とン,ク,ツ,〇イ尾音を伴うことを示す。

図 2-74「現代国語表象法」森卓明 の外国語用符号：英語などよくあらわれる母音,子音を表すサイン符号を定めた。

図 2-75 グレッグ式と早稲田式の運筆の違い：凹型の横曲線はラテン文字の筆法と日本語の筆法で,力を入れる位置が書き始めと書き終わりに分かれる。草書派,半草書派であっても文字の筆記習慣から筆記の好みが同じではない。

図 2-76 国字式の符号生成ダイヤグラム：古久保峯吉(国字)は自然円と呼ぶ手書きの楕円から基礎符号を割り当てたが，それらは自然な書字運動の要素であった。中根系の石村善左にも影響を与えて,単画派の成長に刺激を与えた。

図 2-77 国字式の基礎符号の花　兼子次生作成：国字式は純単画派として完成された。符号資源の配分はシンプルで,中根式の濃線符号,加点符号を基礎符号からなくした。符号の花は国字式が縦方向を好んだことを示す。
図 2-78 国字式寿光速記法の五段法：国字式は戦後,森卓明の影響を受けて,クロス式の理論をヒントにした五段法を採用し,寿光式と称した。図 2-78 から図 2-81 まで図は「日本の速記」1958 年 4 月号から引用した。
図 2-79 字音語速記符号の符省法（国字式寿光速記法の例）:「日本の速記」1958 年 4 月号から引用した。
図 2-80 国字式寿光速記法の五段法による文例　国字寿光：古久保峯吉（国字）は縦方向の筆写に努め，速記用紙が少なくてすむような符号綴りを好んだことが感じられる。「日本の速記」1958 年 4 月号から引用した。
図 2-81 国字式と山根式の基礎符号（注）両式の基礎符号は必ず中心線から書き始める
兼子次生整理：中根式から国字式が派生する際,古久保峯吉(国字)は新しい図形源を幾何的な楕円に求め,多曲線と命名した。弟子山根は山根式を成案する際に師の術語を継承した。山根はナ行,フ,マ行,ヤ行,ラ行(ルを除く)を説明する際,多曲文字と呼んだ。しかし,山根の基礎符号練習では楕円の一分を取り出した形を厳しく守らせて,実体は幾何的な楕円ダイヤグラムを併用する正円楕円幾何派として完成された。中根式の大丸かぎをつけた符号形(有鉤線)とは明確に異なるものであった。右小指を紙面にそえて書く正円幾何派と違って,幾何楕円を筆記するために右手を空に浮かせる懸腕の書法をとる点が特徴であった。
図 2-82 山根式の基礎符号の花 兼子次生作成：山根速記学孰では一時，国字式の一式二符号現象を生じていたが,国字の要求により国字式旧版の指導を打ち切り独立を目指して新方式山根式一本に切りかえた。そのとき,山根は国字式の問題点と感じていた線配分を横への流れに切りかえたことが,図 2－76 の国字の基礎符号の花とこの図を比較すればわかる。
図 2-83 山根式の速記理論概要図：山根式では基礎符号を変更したが，速記理論は国字式旧式をほぼ踏襲した。しかし，五段法など寿光式の理論は取り入れなかった。「日本の速記」1957 年 12 月号から引用した。
図 2-84 石村式の主な符号改訂表：中根式速記法を用いた速記者の中には正雄版の体系を守るものと，符号の改良を行うものがいたが，石村善左（禧行）は中根式改良を積極的に進める立場をとった。その始まりは中根 24 年式だとされてきたが，本研究中に中根 23 年式と呼ばれる体系があったことが発見された。改変回数がわからないほど変更は多く行われたことは驚異的なことである。しかしその足跡を正確にとらえることはできない。なお,石村は自式を日本速記協会推薦方式と称したが，1956 年協会の速記教育委員会で 11 推薦方式を決めたものの理事会はこれを承認せず廃案となってきた。
図 2-85 石村式の文例：数え切れないほど基礎符号を改変したものの，石村の書く速記符号はほぼ一定のイメージを持っていたことは不思議な現象である。鳥取県速記士会会報

1955 年 2 月 8 日発行 p7 を引用した。
図 2-86 長商式の基礎符号 1953 小西佐都志：石村の影響を受けた小西佐都志（旧制中学校の長崎商業学校, 長崎高等商業学校卒）は, 小西は中根式に,石村式,衆議院単画符号理論を重ねて,長商式を創案した。「日英同時速記法」（長商式速記一代）1996.6.1,p17 を参照して整理した。
図 2-87 長商式の加点法：小西は長商式に加点法を導入した。「日英同時速記法」（長商式速記一代）1996.6.1,p87 から引用した。
図 2-88 回転運動の効用を探究した実験：高速度の発話に対応する速記符号の筆記運動は参議院の畑田明は反発運動よりも回転運動にあると仮定し,立証を試みた。緻密なデータをもとに参議院式の高度化が図られた。1952.9.20, 京都速記士会編速記発表 70 周年記念文集「速記・研究と回顧」の「符字論」p1 から引用した。
図 2-89 ガベルスベルガーの美しい早書き書体：幾何派を追ったイギリスに対して,ドイツは自然な書きやすさを速記に求めた。草書派を完成したガベルスベルガーは早書きのために美しい筆記体符号をつくった。Lebendige Kurzschriftgeschichte Moser-Erbach 1979,p96-97 から引用した。
図 2-90 グレッグ式の筆記体要素からの符号生成法：グレッグの基礎符号を設定する考え方を側近が書き残した。”JOHN ROBERT GREGG” 1963, F.ADDINTON SYMONDS から引用した。
図 2-91 永字八法図：書道では「永字八法」だが,それは速記書きには適さない。「永字八法」の名で、書法伝授や手習いの初歩的段階の一方法として用いられてきた。各部の名称は筆順に従って(1)側(そく)（第一筆の点)、(2)勒(ろく)（第二筆の横画)、(3)努(ど)（第三筆の縦画)、(4)趯(てき)（第四筆の撥)、(5)策(さく)（第五筆、左から右上に引く画)、(6)掠(りゃく)（第六筆、続いて左下へ引く画)、(7)啄(たく)（第七筆、右から左下に引く画)、(8)磔(たく)（第八筆、左から右下に向かって引く画）の 8 法(コトバンクから引用した)。カットは「漢字百科大事典」1996.1.19 の佐藤喜代治編集「楷書処方の法則」から用いた。
図 2－92 スローン-デュプロワエ式の母音(1)：グレッグは母音の表記に主流のポジションを採用せず仏デュプロワエ式の英語版スローン・デュプロワエ（ＳＤ）式の連綴母音を採用した。これがグレッグ式に書きやすさをもたらした。ＳＤ式にはこの連綴母音のほか,加点母音もある。The Sloan-Duployan Phonographic Instructor 1913,James Matthew Sloan,p6 から引用した。
図 2-93 グレッグ式系統の日本語速記方式と基礎符号 兼子次生作成：グレッグ式(アニバーサリー版, 1929)は書きやすいことと簡単な理論であることが好まれて日本語へ翻案する動きが続いた。最も有名な酒井式(「酒井式速記法講義教材」1936)は既存方式のように単画式に近づこうとした。日本グレッグ式(P.H.Burdick, 岡村キクエ「日本グレッグ/ショートハンド」)は母式のように音素主義を採った。タクマ式(宅間清太郎「日英両用タク

マ式速記術」1935)は表音主義に忠実に子音＋母音体とした。かっこ内は参照した方式書。
図 2-94 母音を子音符号の中で表す,Mignon 1874,"Sténographie phonétique"に見られる同母音同方向の例：出典：A.Navarre,Stenographie,78p.1906,ミニョン式 1874 に見られる同母音同方向の例から引用した。
図 2-95 Ｖ式の基礎符号　小谷征勝　1975：同じ母音を持つ音節は同じ方向へ書く着想。
図 2-96 SVSD の文例　小谷征勝　Ｖ式：1975 年版理論。
図 2-97 幾何派方式に避けられないズリ現象：横一直線に続いたり,右下や左下へ連続するズリ現象は手書き速記では嫌われる。フランス語のロビー式はズリだけでなく，一文を一筆化するように書いている。符号は，K.ファウルマンの”HISTORISCHE GRAMMATIK DER STENOGRAPHIE”1887,P321 から引用した。
図 2-98 TIMACE の基礎符号と連綴例：岡村隆博は 1982 年,ノートの一行内に収まる一行速記を考案した。
図 2-99 毛筆で書いた俳画：日本人は文字とその書き方を中国から受け入れたが，それだけでなく，日本語らしい文字の書き方をつくり出した。それは続け字や仮名の書法にあらわれている。平仮名は縦書きで続け書きし，シャープペンシルで書くのに適している。図は,兼田幸苑の俳画集「四季の気韻」2010 発行，ｐ50 から引用した。
図 2-100 ヲコト点：村上雅孝「国語学研究事典」. 経文を日本語として読むためにつくられたヲコト点は速記ではない。しかし,速記理論には利用できると考えられる。
図 2-101 日下部式の基礎符号,「写言術」,1910,日下部忠次：カナ速記初期の日下部式は未完成ながらカナ速記研究を盛んにした。「日本速記方式発達史」1942.11.25,武部良明，図 27 を参照した。
図 2-102 中根正親の仮名からの符号説明図：教授法として正親は符号の成立を印象づける工夫を凝らした。「中根式速記法講解」1916.5，ｐ23 から引用した。
図 2-103 岩村式カナ速記の変遷（1）兼子次生作成：岩村式の主流版を中心に比較すると,少なくとも 4 段階の基礎符号の進歩があった。①創案時（1930）:「日本速記方式発達史」1942.11.25,武部良明②（1943）岩村学「最新カナ速記法講義」③（1949）岩村八重子「岩村式カナ速記（決定版)」③（1955）関根雪峰「立川速記者養成所版」―を参照して整理した。
図 2-104 中根式京都速記学校の記念写真：前列左端が中根正世，隣が中根正親。岩村學は前列左から 2 人目。
図 2-105 関根雪峰による岩村式カナ速記の文例：立川速記者養成所のパンフレットから引用した。
図 2-106 岩村式カナ速記における段階順で変化する速記符号：やさしく学んで,段階を経るにしたがって難しくなる学習法がとられた。立川速記者養成所のパンフレットから引用した。
図 2-107 岩村式カナ速記の変遷(2) 兼子次生作成：岩村式から派生した方式として深堀式,

相賀式,木村式,イトー式があった。イトー式は名古屋中心に普及活動が行われた。(深堀式は中田知の版による)

図 2-108 イトー式の(加点)助詞法：伊藤勝治(勝持)は加点助詞法などを研究した。「日本の速記」1957 年 11 月号「アスの速記のためにーイトー式―」イトー　カツジ　p14 を参照して整理した。

図 2-109 岡山大学速記研究会におけるカナ方式の相賀式と木村式：太平洋戦争ごろから戦後高度経済成長期に岡山県下に高鳥富士男を含めたカナ 3 方式が協調しながら活動した。

図 2-110 深堀カナ宇宙式速記法の文例　中田知：深堀義輝が指導した中田知は深堀の基礎符号体系を継承し,赤穂市議会の記録と普及につとめた。

図 2-111 岩村式カナ速記の変遷(3)兼子次生作成：岩村式から刺激を受けて,カナモジカイ式(1946),寺谷式(1949),三村式(1963),植岡式(1950)などがカナ速記をはなやかに彩った。同会の理事長を務めることになるマツサカタダノリも独自に速記分野に進出した。

図 2-112 カナモジカイ式の文例　田中佐智子：岩村学はカナモジカイ運動に加わっていた。国語速記発表 110 年記念事業「速記符号集」p37 から引用した。

図 2-113 寺谷式の速記文例（創案：寺谷武）：榊原守正は中日新聞社の電話速記に寺谷式を用いた。

図 2-114 西来路秀男による標準式速記文例(上がカナ式, 下が符号式)：衆議院の西来路秀男はカナ速記を考案した。「速記入門ハンドブック」1955.11.15,西来路秀男, p109 から引用した。

図 2-115 西来路秀男による単画標準符号とカナ速記の素音符号：衆議院式の高速度理論がカナ速記へ組み込まれた。「速記入門ハンドブック」1955.11.15,西来路秀男, ｐ69－114 から引用した。

図 2-116 カタカナ,ひらがな使用の簡易速記法のヒント：中根正雄　1958：中根は図のような合字的な着想から,普通文字を使った個人用仮名速記を考案した。2003.3.30「速記一筋」中根正雄自叙伝, ｐ217 から引用した。

図 2-117 「簡易速記法」の表記法体系　中根正雄, 1958：1972.9.10「簡易速記法入門」中根正雄, 口絵写真

図 2-118 自衛隊の「口達会報」：自衛隊で黒板の連絡版に簡易速記が用いられていた。「中根正雄先生を偲んで」1995.8.22,p48 から引用した。

図 2-119 幾何派, 草書派における符号の多様性：符号速記には幾何派,草書派,半草書派の 3 タイプがある。「速記研究」兼子次生 p89 から引用した。

図 2-120 実線の速記符号と送りの搬送線の関係：「搬送線原理」寺井美巳　1952. P25 から引用した。早稲田式では方式理論研究,技能形成,教材開発などに組織的に,科学的,合理的な取り組みが行われた。

図 2-121 平仮名の続け書きの動き：平仮名は日本人の筆法のベースであり,続け書きできる点で優れ, 早書きに適している。小林龍峰「たちまちうまくなる字の本」1979 で 3 文字

単位の続け書きを提案している。図は p149 から引用した，新古今和歌集，小野小町の「ふきむすぶ　かぜは　むかしの　秋ながら　ありしにもにぬ　そでのつゆかな」

図 2-122 泉式全音速記法の基礎符号 1969 乙部泉三郎：「泉式全音速記」1969.10.28,p1 から引用した。日本文字の筆記運動を分析研究して書きやすい符号改良が行われた。

図 2-123 泉式全音速記法の濁音,半濁音符号表:同上,p4 から引用した。: 乙部は濁音,半濁音を正確に書くことに力を注いだ。

図 2-124 泉式全音速記法による文例　乙部泉三郎　1940：鳥取県速記士会会報の特集記事「全国主要速記方式符号紹介」から p8 の速記文例を引用した。

図 2-125　伊東式ひらがな速記の基礎符号 1951 年ごろ根田良子による符号は，ひらがなの部分を取り出して基礎符号をつくる原理を示して設定された単画基礎符号を示している。兼子次生整理。

図 2-126 伊東式ひらがな速記の文例：伊東稔はひらがなと符号を調和させた。現代国語速記法における速記符号文例集 p10 から引用した。

図 2-127 カナ,かなを統合した三村式の文例：頭から読んでも後ろから読んでも同じになる回文歌の文例。「タテ書き速記」1964,三村侑弘：裏表紙「長き夜の十（遠トモイウ）の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな」を引用した。

図 2-128 三村式のいろは歌文例　三村侑弘：左から右へタテ書きで進む三村式は，文字のように読みやすいとする。「タテ書き速記」1964,三村侑弘の表紙裏から引用した。

図 2-129 「傳音快字」の縦書き文例　蔡錫勇　1896：蔡璋が父，蔡錫勇の筆記体系を改良して中国速記学を創始した。中国語最初の符号式速記法。傳音快字から引用した。

図 2-130 三村式タテ書き仮名速記法の基礎符号　三村侑弘　1964：一つの音に複数の符号があり，複雑になった。「タテ書き速記」から整理，引用した。

図 2-131 三村式における基礎符号の連綴練習課題例：基礎符号の練習法が工夫され，多種類の基礎符号を最適使用する技能が求められた。練習の始めと終わりに行うことによって,速記符号を続け書きがなめらかさを磨く。「タテ書き速記」から整理，引用した

図 2-132 同一文を符号式(左：衆議院単画符号)と仮名式(右：三村式タテ書き仮名速記法)で書いた文例：符号式は衆議院式で西来路秀男よるもので， 三村式タテ書き仮名速記は三村侑弘の筆。両文例は同じ文を書いている。

（注）

1　手書き速記が繁栄期にあった 1983 年に日本速記協会が発行した会員名簿を集計した橘孝幸によると,方式数は 59,速記者数は 6,174 名であった。ただ,速記方式名欄に指導者名を書いた者がいたり,また速記技能検定試験を受けないで日本速記協会に加盟した者が含まれているため正確な速記方式数，速記者数，速記士数はわからない。

2　武部良明著「国語速記史（上)」に，大学南校に学んだ田鎖綱紀が明治 5 年ごろから国

語速記法の創案に向けて活動を始めて,明治 15 年に田鎖式を公にするまでの間の経過を解説している。

3　英国ウェールズ出身のガントレットはカナダ経由で来日し,パイプオルガン奏者,英語教師として東京商科大学などで活動した。1890 年 8 月 14 日来日以来,日本語速記法の考案に取り組み,5 年を費やしてガントレット式を完成した。「新日本語速記術」発行に当たり,緒言に「主にサー・アイザック・ピットマン先生の発明せられたる英語速記法に基づきて編述せるものなれども,英語と日本語との異同あるにより余の発意に係るもの亦尠しとせず,例えば其記号の長さに由りて母音を表わし,又記号の位置の異なるに由りて意義を異にし,或は母音の重複を表わすには楕円又は鉤を用ふる方法の如きは其重なるものなり。余の既往 5 カ年間の研究によるに此等の方法は従来の日本語速記術に於ては未曽て見ざる処なりと信ず」とピットマン式系日本語速記法であると述べている。ガントレットはエスペラントを日本へ紹介した先導者で,草書派ではデーゲン J.A.Degen がデーゲン式を創案し,エスペラント語速記のクノウスキー式（国際速記）の日本語版が大場格によって出版されている。ガントレットは山田耕筰の姉と結婚し,日本に帰化した。

4　オーシック式 Orthic system は,ケンブリッジ式 Cambridge system とも呼ばれ,ケンブリッジ大学トリニティカレッジ・フェローのカレンダー Hugh L. Calender が 1890 年に創案した。アルファベットと筆記体の筆記原則を速記符号の正書法に適用した。(1)用いる線条は 2 種類の長さとし,(2)濃淡差を放棄し,(3)連綴母音を採用する点が特徴の英文速記方式である。

5　フランス国会の速記者,ナバール Albert Navarre は世界の速記事情を調査し，定期的に「ステノグラフィ」Stenographie を刊行し,1909 年版に日本の国会速記の始まり,方式発達について紹介し,ガントレット式の創案などについて記述した。国会速記の関係では田鎖式からガントレット式に転換して活躍した藤田直助の肖像写真を掲載した。

6　「日本速記五十年史」1934 年 10 月 28 日,編者浅川隼,日本速記協会発行,同書のｐ59,ｐ60 に武田千代三郎による武田式の記述がある。官選知事の武田は任地替えの休暇を利用して東京大学在学中に読んだピットマン式を参照して単画式速記法を創案した。赤根谷友三郎が実務に利用できるまでの技能に達し,朝鮮において改良,速記者養成に努めたとある。当時複画から折衷へ進む時代にあって,より簡単な単画へ進むべきだと武田は主張した。

7　熊﨑健一郎がどのような経過で折衷派の熊﨑式速記法を創案したかは,熊﨑自身が「新式簡明速記学教授書」（1906 年 3 月）に記述している。田鎖式を学んで，方式の改良に取り組み,田鎖式系と最新ガントレット式を折衷した符号とした。速記独習論を主張し,速記書は独学に対応する内容とした。熊﨑は新聞社の電話速記に従事していた関係で,熊﨑式は新聞通信社に普及した。その後,熊﨑式姓名学を創始し,速記界から退いたため,弟子たちが普及,改良活動を継承した。熊﨑は熊崎と書かれることが

あるが,戸籍名の熊﨑を本稿では用いた。また，除籍謄本で熊﨑は 1881 年 5 月 5 日生まれ，1961 年 8 月 25 日没であり，日本速記年表に書かれている 8 月 24 日没は誤り。

8　グレッグ式における基礎アルファベットの生成法は,シモンズ著“John Robert Gregg”,1963,by Addington Symonds によると,理想的な速記法の 5 つの本質と呼ぶ目標を掲げた。(1)速記の基礎符号には独立形の母音符号が含まれている必要がある。子音符号は子音同士の画線と続け書きできる必要がある,(2)速記符号はすべて勾配（スロープ）を持たせて書く必要がある,(3)速記符号は濃線と淡線とを書き分けてはならない,(4)速記符号は速記ノートの中央の一段（中心線）だけで書く必要がある,(5)速記の略語は確実に書き読みでき,包括的で,少数でなければならない。

そして固有の 7 点の基本原則を指標として決めた。

(1)速記符号の筆記は曲線運動をしている必要がある,(2)画線の自然な組み合わせから鈍角接続を排除する必要がある,(3) 鈍角接続を排除するために画線の自然な組み合わせを目指す必要がある,(4)速記符号を綴る場合,母音と子音とを接続できる必要がある,(5)速記符号に用いる画線は濃淡をなくす必要がある,(6)速記符号の筆記は,中心線に沿って,一段だけを用いて行うようにする必要がある,(7)全体として速記符号は一次元的に書かれる必要がある。つまり書き込みは直線の延長上に連続可能な流れで実行される必要がある。

9　日下部忠次は「写言術」1910.2.25 において「日本在来の片仮名文字を用い,速記術と同様に筆記するを得るなり」とカナ速記を創案したねらいを述べている。田鎖以降,国語速記方式は「これ本邦言語を欧州各国の言語と同一視し,適当せざる符号を以て記せんとするが故に正法を求むを得ざるなり」と考え,カナ速記では (1) 完全に筆記し,(2)翻訳を要せず,(3)心身を傷めず,(4)筆記原書は何人にても読み得,などとした。武部良明はここで日下部案がカナ速記の可能性を立証したと評価している。

10　岩村式系において,岡山県下で太平洋戦争前後から,相賀,木村,富士の 3 方式が共存関係で普及されていた。1983 年の速記者名鑑には,相賀庚の相賀式 3 名,高鳥富士男の富士式 4 名,木村嘉男の木村式 19 名の名がある。このころは木村が活躍期にあると思われ,カナ速記が吉備路で盛んであった。ちなみにカナ速記では岩村式が 12 名を擁し,カナ式（系統不詳）14 名,深堀式 5 名,イトウ(のちにイトーと改めた)式 4 名,三村式 3 名,カナモジカイ 2 名,ひらがな 1 名となっていた。

11　蔡錫勇説：“一声一韻,両筆相連,切成一音。” **这**就是拼音。可是《伝音快字》是要求直行筆写,而行序発展却又是従右到左。真到蔡璋改編後的《中国速記学》仍是如此。符号以位置分別四声,規定”写法須用直行格紙筆之,偏左而近者去声,偏右略遠者為入声。上平則声予韻連筆,下平則声予韻分筆“。由于採用位置法区別四声,因而一般複音詞便無法連写。後来蔡璋為了採用"連書法”以加快速度,不得不部分地廃除四声。即只是複音詞的第一符号分四声。

略由于採用位置法区別四声,因而一般複音詞便無法連書。(出典：「速記知識」北京市

速記協会編）

（著者）
1 兼子次生：INTERSTENO(International Federation for Information and Communication Processing),速記・言語科学研究会,速記科学研究会,(公社)日本速記協会,日本国際秘書学会,アメリカ法廷速記者協会（ＮＣＲＡ） tsuguo.kaneko@gmail.com
2 菅原登：速記科学研究会,(公社)日本速記協会 n.sugawara@bridge.ocn.ne.jp
3 下谷政弘：京都大学名誉教授,福井県立大学前学長,住友史料館館長， 速記科学研究会,(公社)日本速記協会， shimotani@shiryokan.jp

凡例
音声を意味するために//で文字を囲んだ。/a/はａの音を示す。
速記符号，文字を意味するために[]で囲んだ。[ア]はア，またはあの文字を示す。
言葉を意味するために「」で囲んだ。「意」は意の言葉を示す。